裁縫之極意

賜天覽

武田太郎吉著

裁縫之極意

東京　明治出版社藏版

美意延年

豎哉傳〻極老
養之首
楓閣千秋

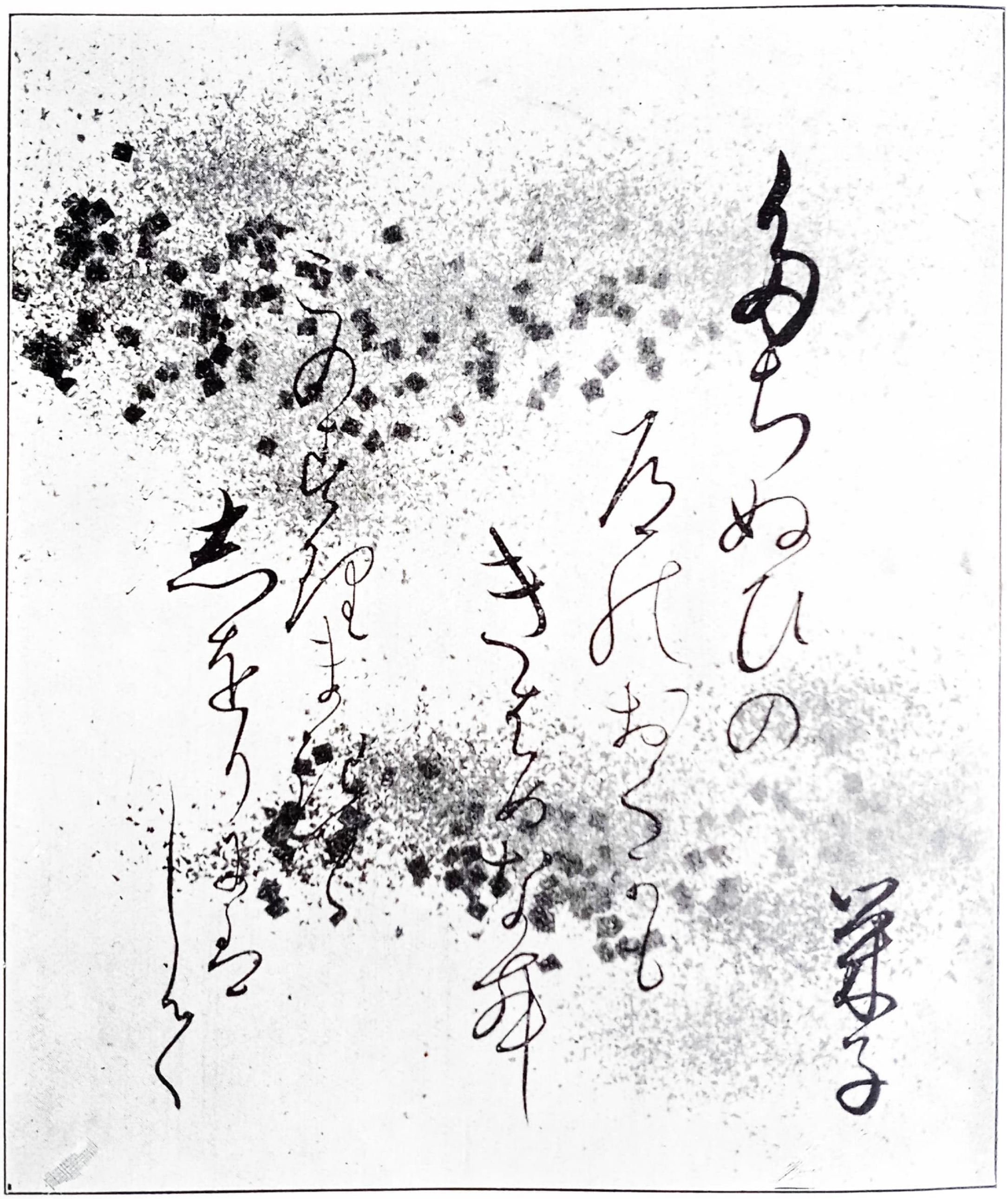
精不虧

尚敏書

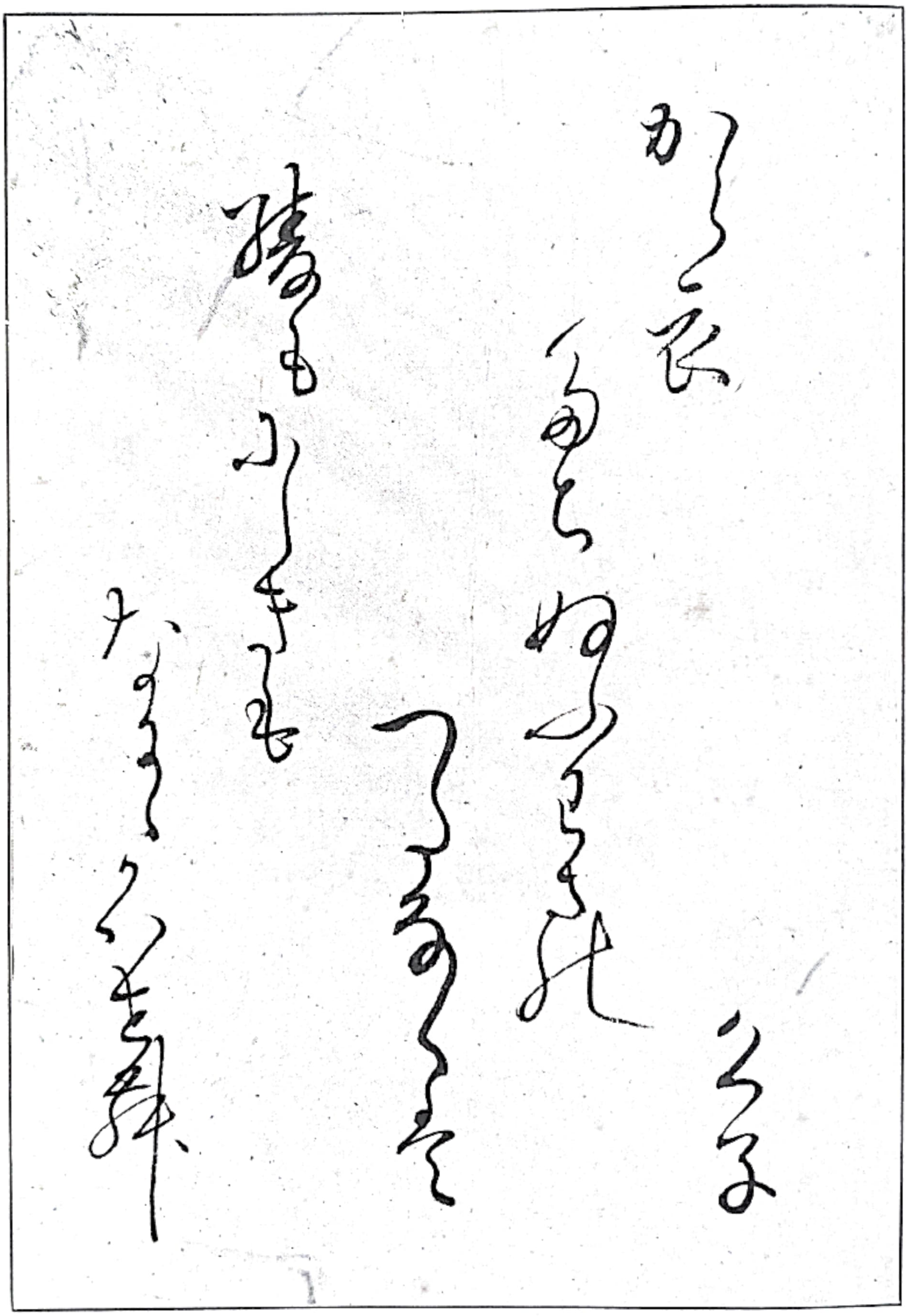
垂範於四方

大正二年五月

松本勝敬題



侯爵夫人　鍋島榮子



男爵夫人　本野久子

裁縫の極意序

音樂の藝、裁縫の彫、割烹の技等は、女子の為に特に神の授なりし、道の如くに思はるれど、猶其の蘊奥を窮むるには、男子、我なりむ、俟つべかりける。女のこゝのみを學ぶも、良妻賢母たるべき資格を備へむためにて、こゝ収ものこと備り秀でゝも、其中てなるべし。男にものせむ、こそめでたかるべけれ。武田ぬしの如きは、裁縫の技にありては統領とも元帥

ぞも仰ぐべき地位に登り、師に就きて学ばゞ
むねハいふともく好きはしき人となおおぬし
名ハ太郎吉、萬延元年六月廿四日、上野國伊
勢崎に生る。父ハ其の藩士石原柳助氏なり。
如しが九歳の時歿せられしかば、如しは
武田氏を継ぎ、東京に移り、十一歳まで西
上徳次郎に就き、武術を学び、十年の間
一意専心聊も他を顧みず、明治二十七年三
月九日、明治天皇大婚二十五年記念祝典

のちには、華族女學校の卒業生中有志者
此際まてより、献納の料として几帳を製して、
その妙技を学ばれ、三十年八月三十一日
華族女学校へ聘せられ、年をかさぬるまゝに、
報酬もつぎ〳〵にまさりぬ。三十二年五月七日より、
帝國婦人協會よりも、その所轄の學校の裁
縫主任教師を嘱せらる。三十三年五月今の
皇后宮陛下御成婚の御時、華族女学校職
員より、献納せむとせし御机掛を縫ひまゐら

伏見の姫宮禎子女王殿下の、山内侯爵家へ御入輿のをりも、同じ事務仕へまつられき。華族女学校の学習院へ併せられ、女学部となりての後も、続きて出仕せられしが、四十一年一月願ふよりてこれを解かれ、其のをりそこばくのこゞろ銭賜りき。この頃赤坂なる檜町に家を購ひ、裁縫講習所を開かれ、今まていとゞ盛になりもて来ぬ。婦人協會の擔當故乃如しが、かゝる實践女学校へも聘せられて、得意

乃術に教鞭を揮はれしを、卅二年四月より

之を辞し、更に學習院女學部裁縫講

師を命ぜられ、今も日々にぞ仕奉らる、かゝれ、

ばこそ此の書成あらはし、知る知らぬ世の人々

なる、その学修むる栞を与へまつるは、深き

なさけとたゝへつべし。正宣は華族女学校

の教授たりし時、同僚にてもありつりし、縁は

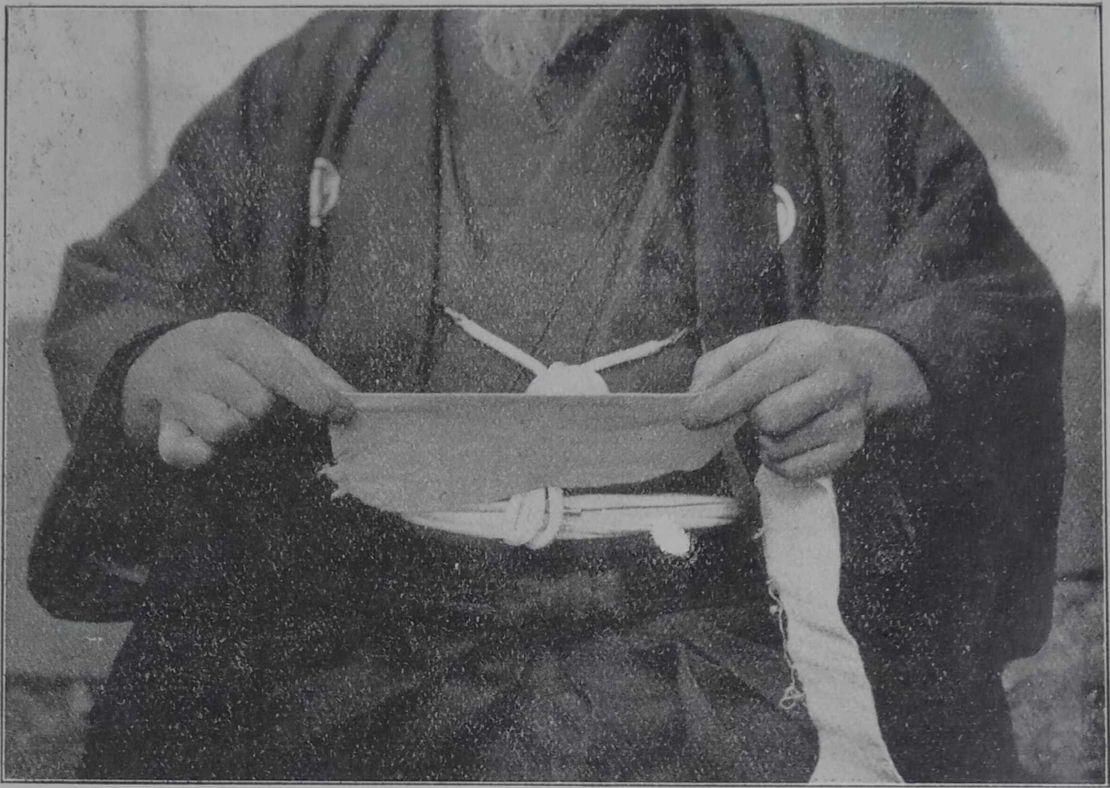
よりは、しばしば見せよとのたまふ、この技術は

固より露ばかりもえ知らぬ身なれども、なほ

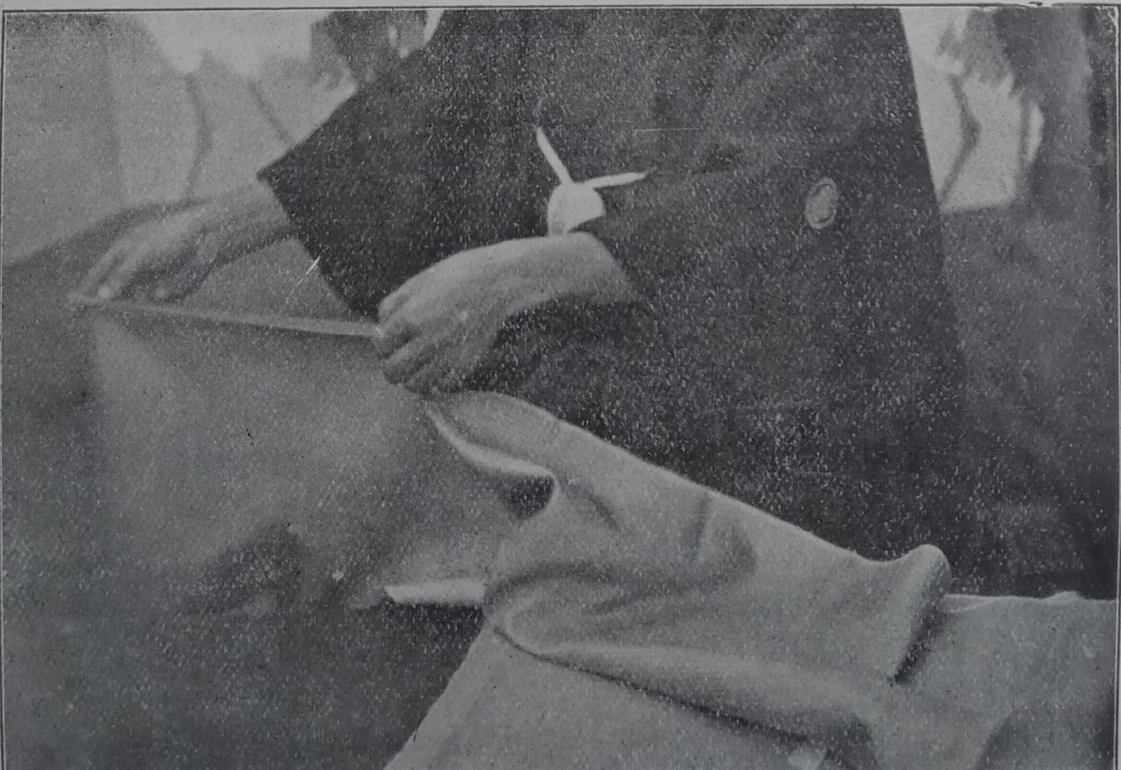
あぞしてやしの略履歴をしるしつけ
くゝそりしない
大正二年六月廿三日
御歌所寄人従四位勲五等阪正臣

著者　武田太郎吉

運針

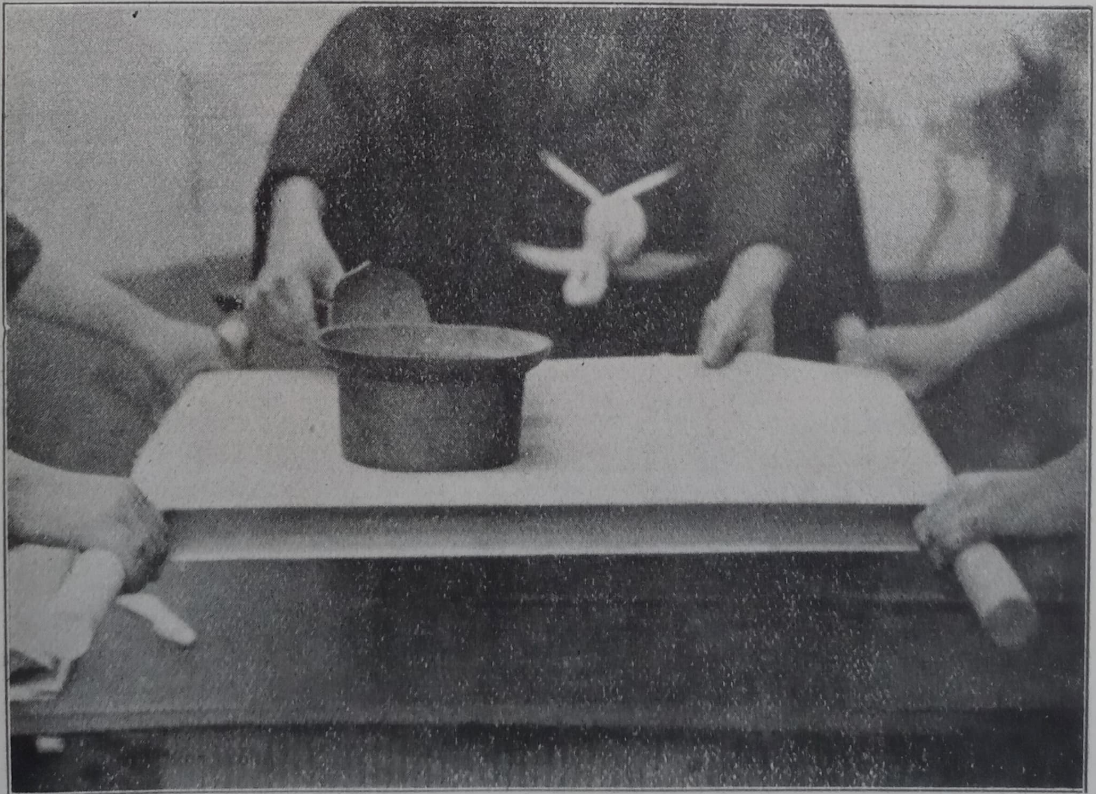


物差の遣ひ方

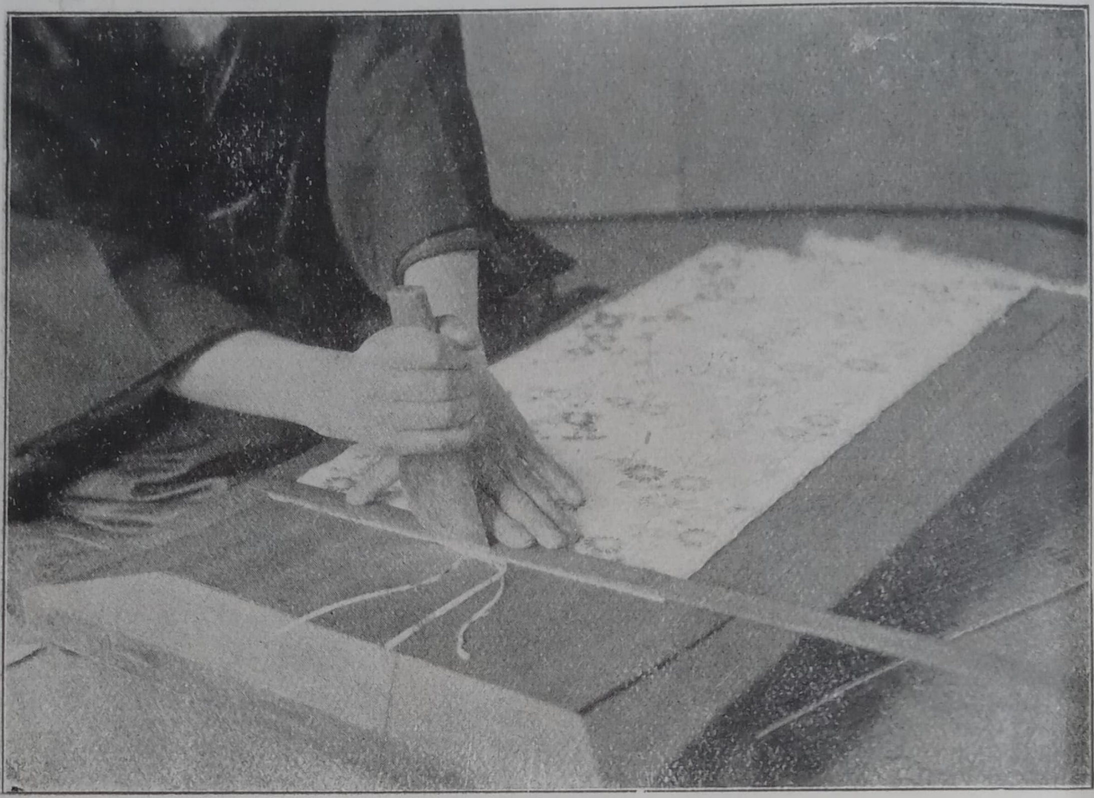


地伸しの仕方　第一

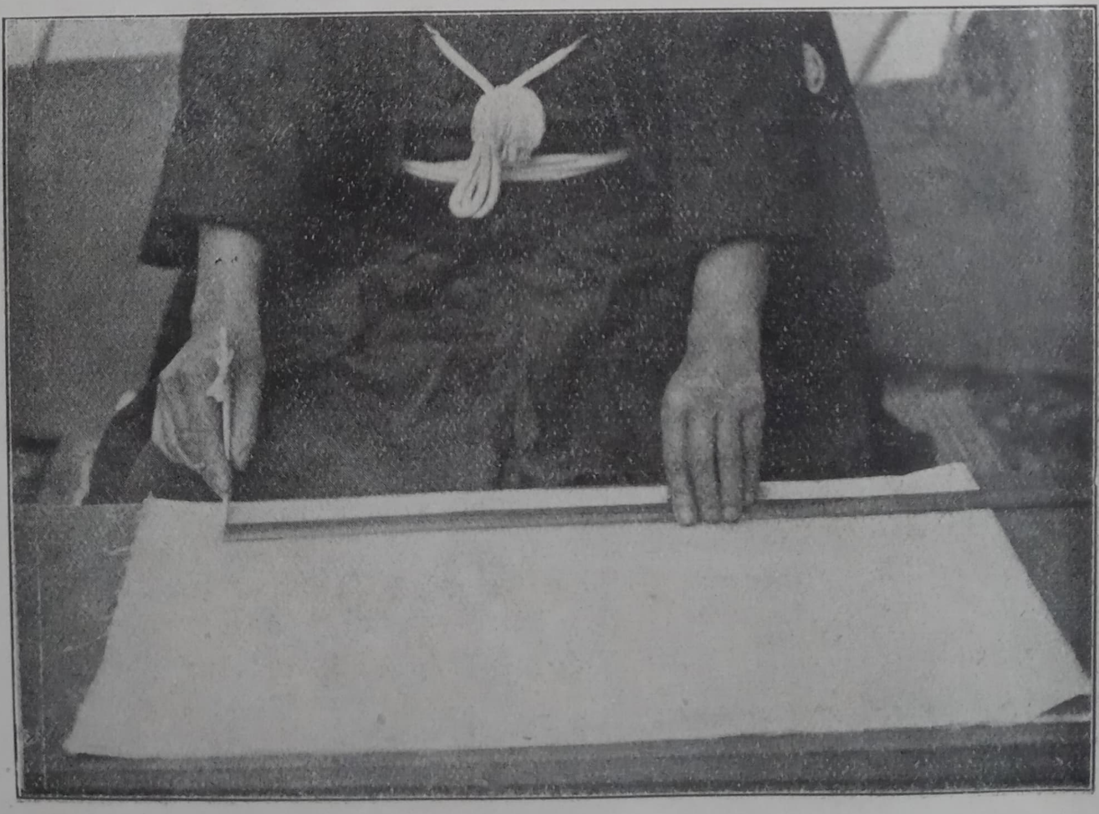
同　の　上　第二



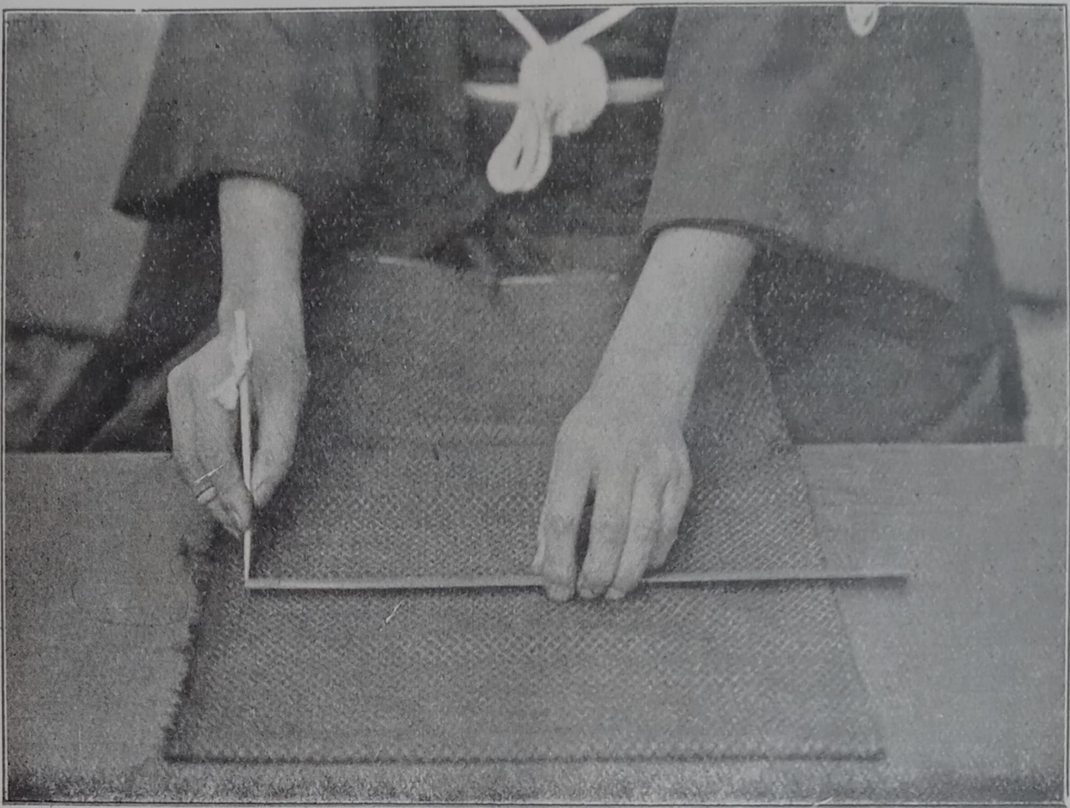
布の裁方



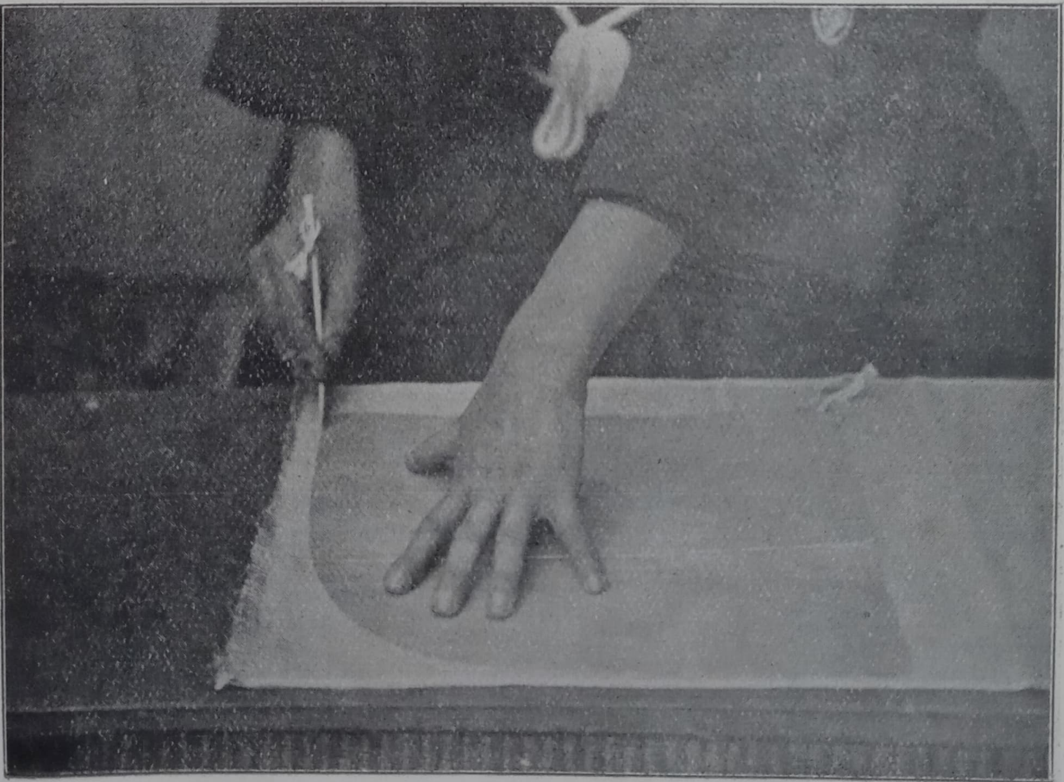
丈の篦附け方



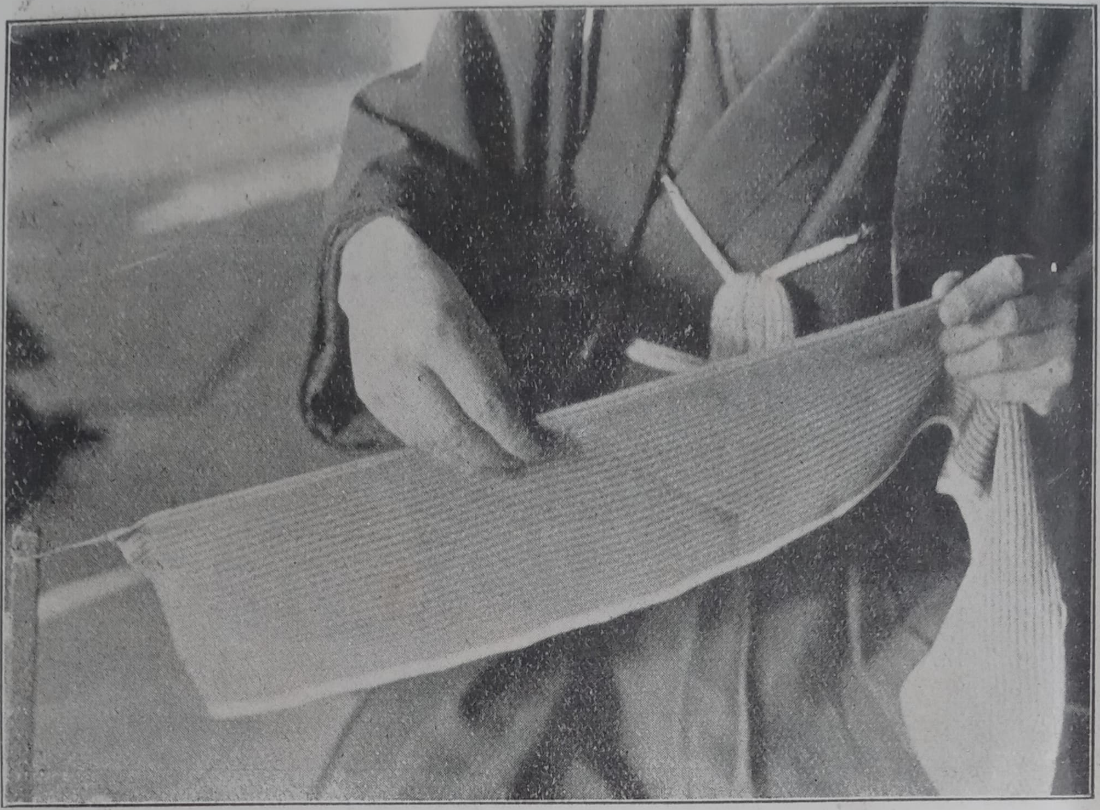
幅の篦附方



丸みの篦附方

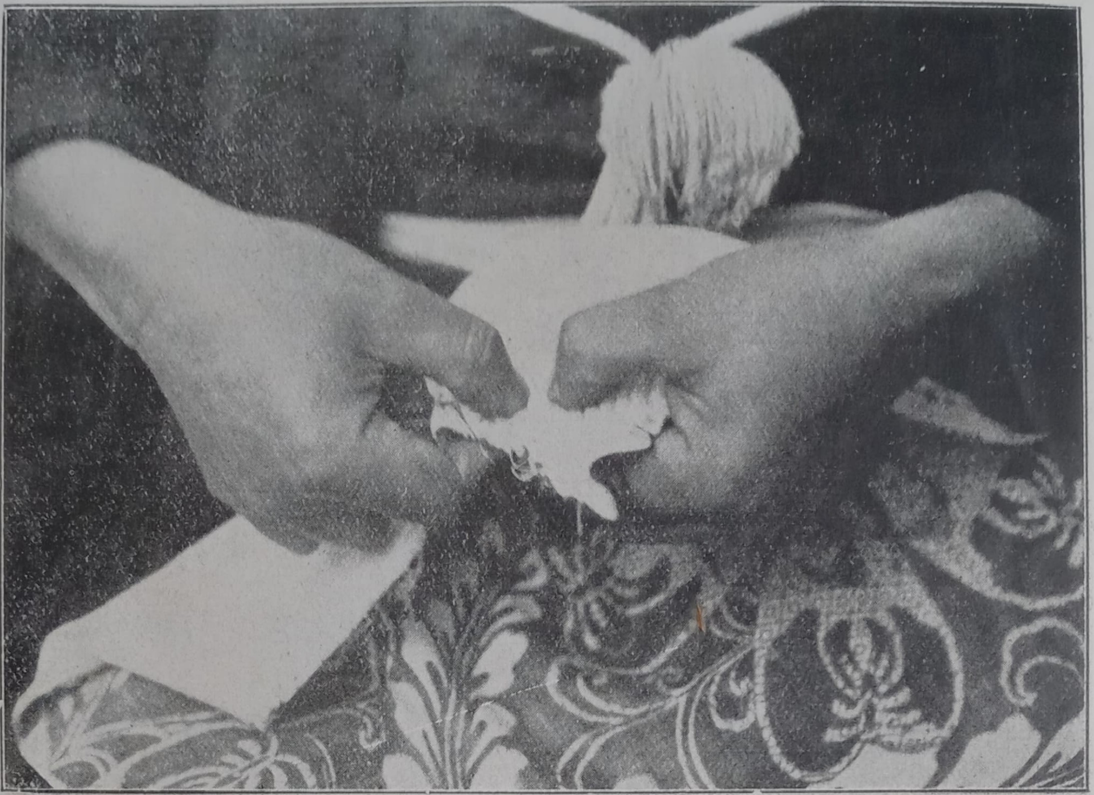


衽を折りの附け方



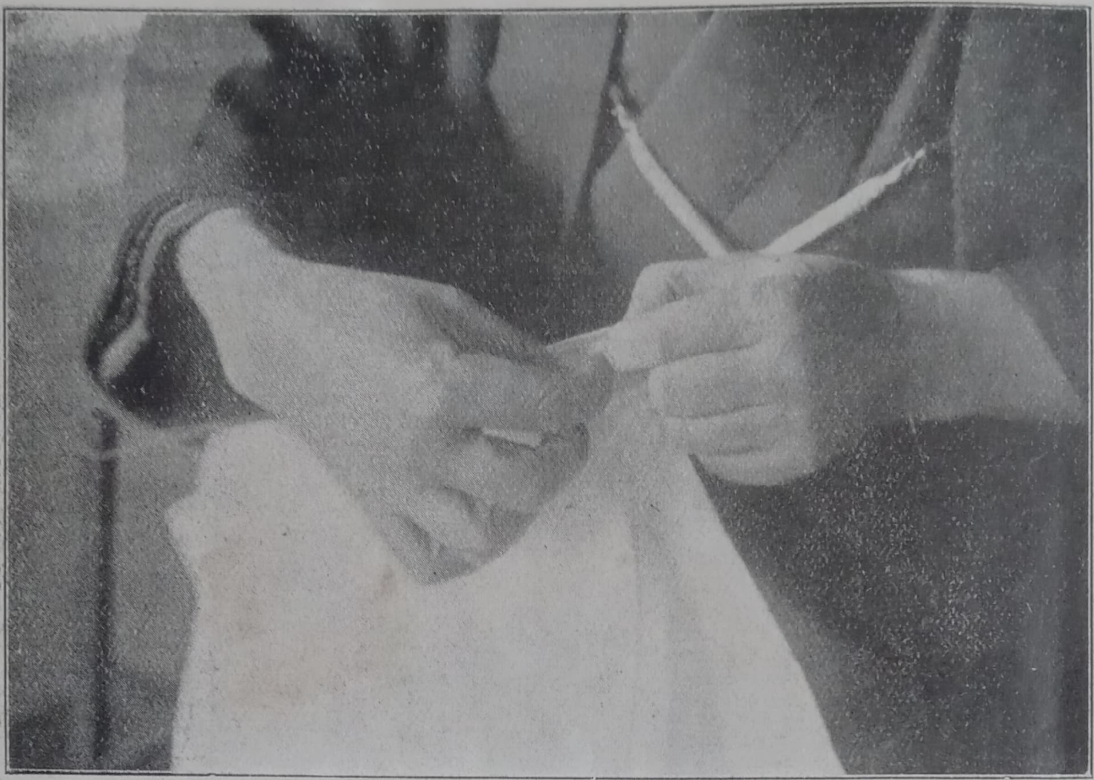
袖口の撚り絎

袂丸み襞の取り方

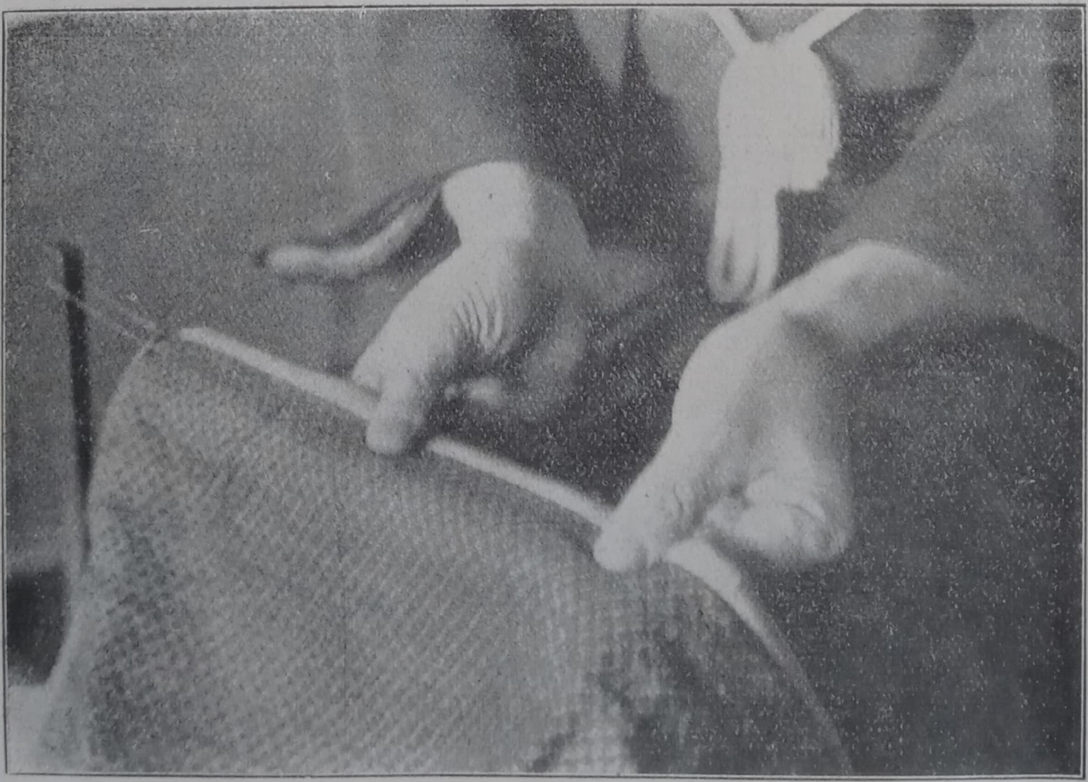


衿附け（衽先の縫ひ方）

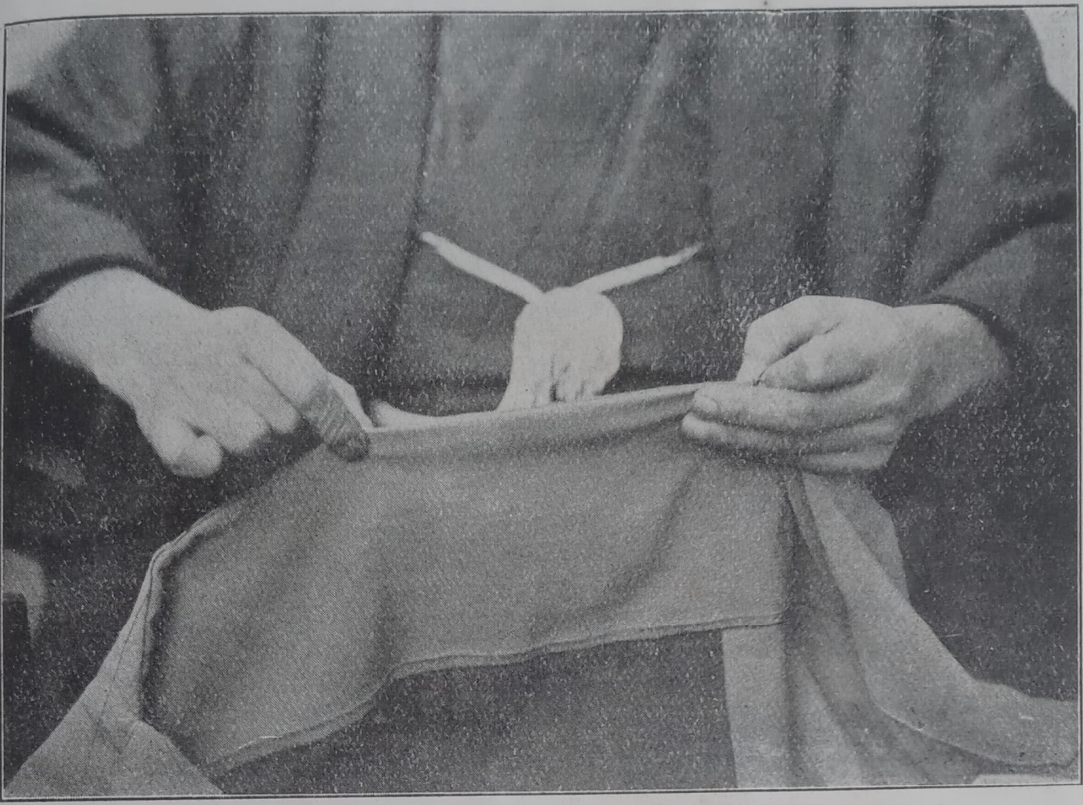
袷袖口四ツ留



裾綴

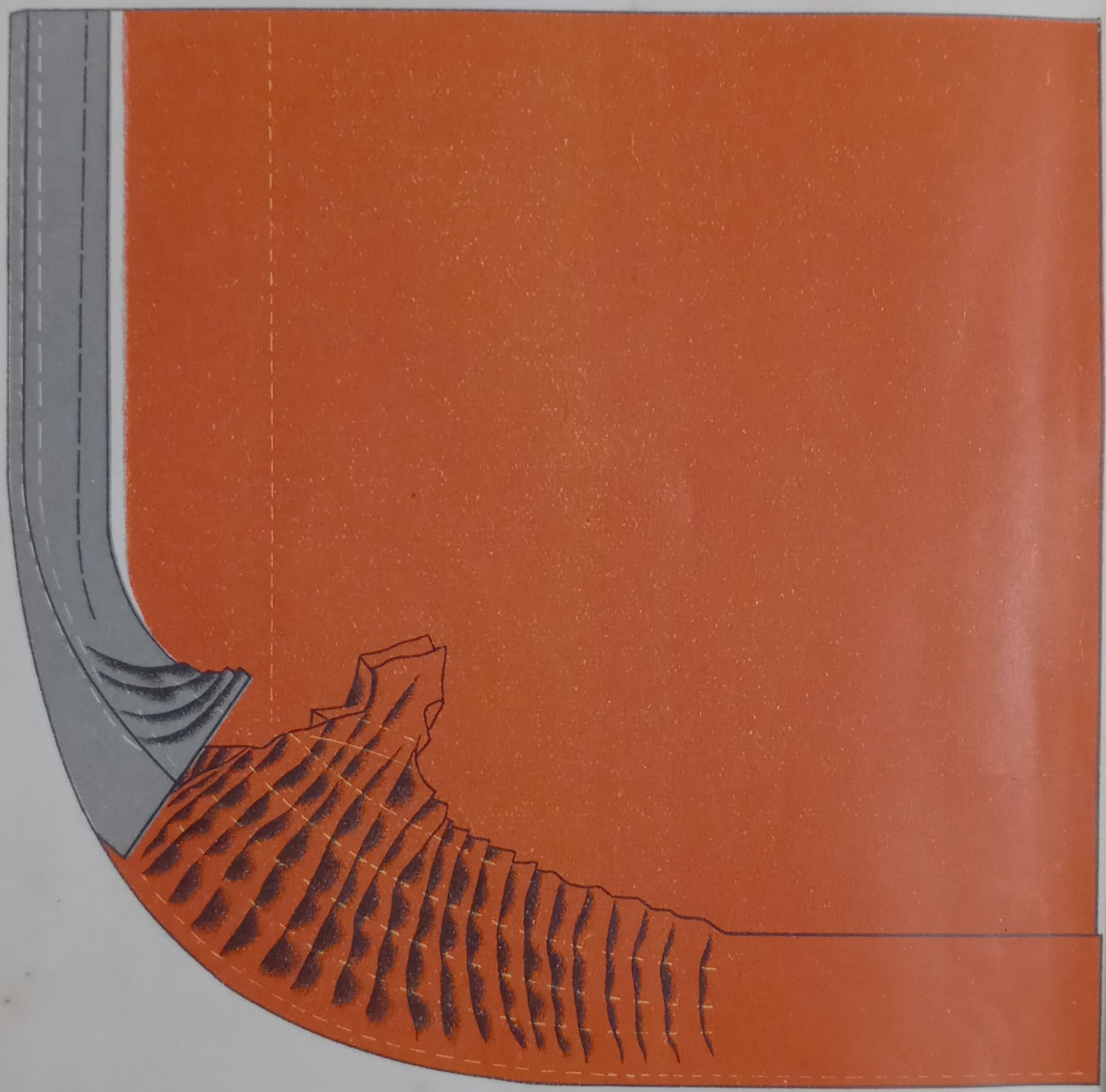


縫ひ絎



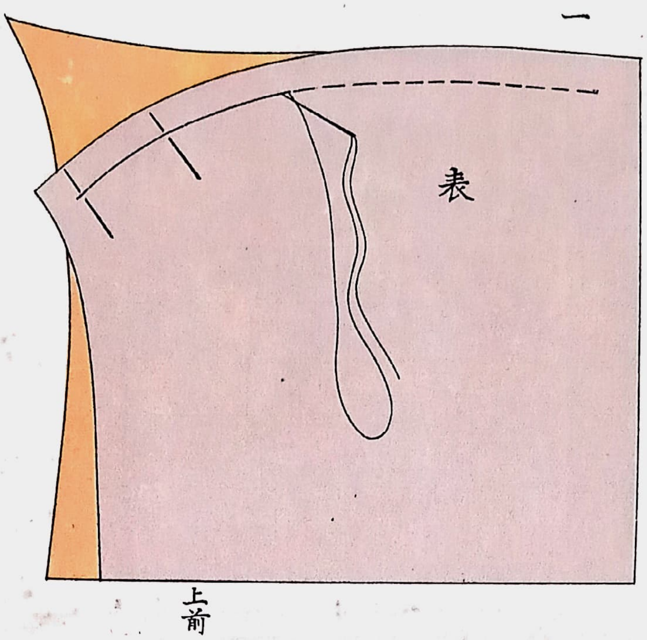
綿入袖口絎

元禄袖ひだのとりかた

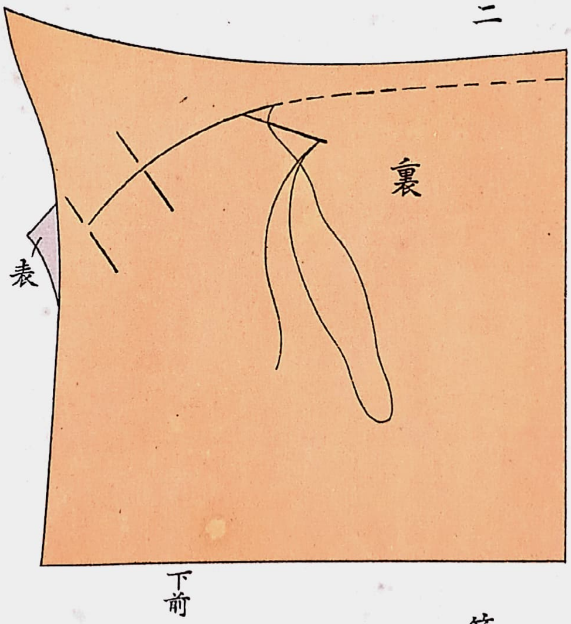


褄の縫方（待針の打ち方）

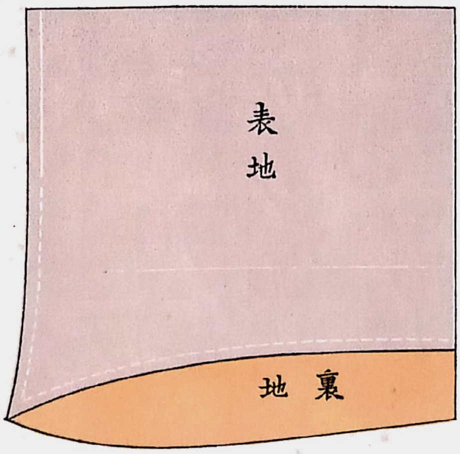
第一



第二



第三　褄のできあがり



裁縫之極意目次

第一章　總論……一
普通衣服地質につき注意の要件
(イ)木綿類　(ロ)麻布類　(ハ)絹布類　(ニ)交織類　(ホ)毛布類
第二章　用具に就ての注意……七
付糸の撰擇法
用具の種類品質
(イ)針箱　(ロ)針刺　(ハ)針　(ニ)糸巻　(ホ)篦　(ヘ)鋏　(ト)指貫　(チ)物差　(リ)定木　(ヌ)絎臺　(ル)裁物板　(ヲ)鏝　(ワ)鏝こすり　(カ)火熨斗　(ヨ)火熨斗臺　(タ)火熨蒲團　(レ)裁物庖丁　(ソ)目打　(ツ)糊板及び糊篦　(ネ)巻棒
絲の選撰法
(イ)縫ひ糸　(ロ)躾糸

第三章　基礎の縫ひ方……一八
運針法○縫ひ方各種につきての方法針の扱ひ方
(イ)三つ折縫　(ロ)二重縫　(ハ)伏せ縫　(ニ)袋縫　(ホ)重ね縫　(ヘ)つき合せ縫　(ト)一針貫
絎け方
(イ)串絎　(ロ)緣絎　(ハ)三つ折絎　(ニ)四つ折絎　(ホ)より絎　(ヘ)まつり絎
(ト)千鳥かけ　(チ)一針絎　(リ)二針絎
躾のかけ方
(イ)平躾　(ロ)一目おとし二目おとし三目おとし躾　(ハ)縫ひ躾
針の留め方
(イ)留め針　(ロ)抜き針抄ひ留　(ハ)打ち留　(ニ)四つ留
糸の接ぎ方
第四章　衣服寸法表……三四
各種襦袢の仕立寸法○各種衣服長着仕立寸法○男女長着抱き幅

割出し○男女裾廻積り方寸法○各種羽織仕立寸法○各種被布仕立寸法○各種重ね物下着つめ方寸法

第五章　裁方及び地伸の方法……四〇

各種の地伸法

(イ)火熨斗の懸け方　(ロ)反物織緣地伸に付鋏の入れ方　(ハ)木綿の地伸　(ニ)麻布の地伸　(ホ)絹布の地伸　(ヘ)絹綿交織の地伸　(ト)毛布類の地伸　(チ)山繭類の地伸

裁方及び標附地質に對する注意

第六章　單衣襦袢篦附及び縫ひ方……七四

縫ひ方注意の事○一つ身襦袢縫ひ方○三つ身四つ身本裁襦袢縫ひ方

第七章　單衣長着篦附及び縫ひ方……八三

單衣縫ひ方各部に就ての注意○袖縫の內袖口絎けに就きての注

意○一つ身單衣縫ひ方○三つ身單衣縫ひ方○四つ身單衣縫ひ方○本裁單衣女物縫ひ方○本裁單衣男物縫ひ方○單衣長襦袢女物縫ひ方

第八章　衣服仕上げ及び肩上腰上の方法……一二五

衣服の仕上げ方

(一)綿布、麻布、　(二)毛布　(三)絹布

小兒着物の疊み方○本裁着物の疊み方○一つ身、三つ身、四つ身肩揚げ腰揚げの仕方

(一)肩揚　(二)腰揚

附紐の寸法及び紐飾幷に背守

(一)附紐の寸法　(二)脊守

第九章　袷綿入篦附及び縫ひ方……一三七

袷綿入篦附に就ての注意

一つ身袷綿入　三つ身袷綿入　四つ身袷綿入　本裁女物袷綿入

本裁男物袷綿入

袷を仕立つるに就て各部要所の注意

(一)袖縫方　(二)褄縫方　(三)袖附方

一つ身袷(濶口)縫ひ方〇三つ身袷(筒袖)縫ひ方〇四つ身袷(元祿袖)縫ひ方〇本裁女物袷縫ひ方〇本裁男物袷縫ひ方〇男物袷襦袢縫ひ方〇女長襦袢縫ひ方

綿入を仕立つるに就て各部要所の注意

(イ)絎け方、綴方　(ロ)袖口切躧け出し方　(ハ)裾綿と袖口綿の作り方　(ニ)綿の入れ方　(ホ)絎け方順序

一つ身綿入(濶口)袖縫ひ方〇三つ身綿入(角袖)縫ひ方〇四つ身綿入(元祿袖縫ひ方〇本裁女物綿入縫ひ方〇本裁男物綿入縫ひ方

第十章　羽織の篦附及び縫ひ方……一九二

羽織縫ひ方に就ての注意

(イ)箆附　(ロ)寸法　(ハ)衿附　(ニ)前下り　(ホ)袖無羽織　(ヘ)乳の造り方
(ト)(チ)單衣羽織
本裁袷羽織男物縫ひ方○男物綿入羽織縫ひ方○一つ身袖無羽織縫ひ方○女物被布袷縫ひ方○本裁女物綿入被布の縫ひ方○男物單衣羽織の縫ひ方

第十一章　帶の縫ひ方及び仕上げ……………………………二二六
女帶縫ひ方に就ての注意
(イ)地伸　(ロ)待ち針　(ハ)幅印　(ニ)針の扱ひ方　(ホ)兩端縫ひ方
丸帶の縫ひ方○片側の帶縫ひ方

第十二章　洗濯及び張り物の方法……………………………二三三
洗濯の方法
張り物の方法
(イ)板張の仕方　(ロ)籏張　(ハ)つるし張　(ニ)糊の分量　(ホ)刷毛の寸法
(ヘ)仕上の寸法

裁縫之極意挿畫目次

縫ひ方各種(三五、三六、七九、八〇、八四、八五、九六、九九)　絎け方各種(二七、二八)躾のかけ方(三一)裁方各種（四三―六九、一四三―一四五　一九四―二二一）
篦附方各種(七二―七八、九四、九五、九七、九八、一〇〇―一〇三、一五七、一五八、一六四―一六八、一七〇、一七三、二二二、二二三)　棲先を額縁になす方及び出來上り(八六、八七)
脇縫の開き方(八八、八九)　衿の附け方(九〇)　袖の附け方(九一)　男物單衣腰揚及び衿の絎け方(九二)單物袖附四つ留針のかけ方(九三)袂丸み及び襞の取り方(一〇三)
附紐及び脊守の飾縫(一三一―一三六)袖口かけ方及び廻し掛け(一四六、一四七)
袖口明を裏表縫ひ合せ(一四八)女物袷綿入袖附留方(一四九)袖の縫ひ方手つき及び躾かけ方(一五三、一五四)
袖口及び八つ口綿の綴方(一七九、一八〇)羽織の乳の折方(一九三)女帯綴、躾かけ方出來上り(二三六)

目次終

裁縫之極意

學習院講師 武田太郎吉著

第一章 總論

凡そ世に女子と生れたるものは、何人といへども必ず裁縫の技を學ばざるべからず。裁縫は人間生存の三大要件の一たる、衣服の事を掌る、最も重んずべき技術たるのみならず、その巧拙は人の姿容、運動、衞生等に至大の關係を有すると共に、間接には人の品性をも左右するものなれば、あらゆる女子の技藝の中、これに超ゆるものはあらざるなり。たとへ其身貴くして、自らこれに手を下すことなき程の人

たりとも苟くも女たるものは、その仕立上げの巧拙如何を鑑識し得るまではこれを學ばざるべからず。

裁縫を行ふに缺くべからざる心掛は、忍耐、綿密、節約利用、審美的觀念の養成及び婦容を整ふることの五なり。裁縫はもとより時間と勞力を費すこと多く、最も根氣を要する技術なり。心忙しく氣短くてはこれを巧にすること難し。これ忍耐の徳の大切なる所以なり。裁縫はまた其の範圍、方法、材料等凡て甚だ多岐にして且つ一分一厘の差もこれを輕視すべからざる、極めて纖細微妙なる技術なれば、最も思慮と注意の綿密なるを要す。裁縫はまた家庭經濟上に至大の關係を有するのみならず、これに對する經濟的心掛の有無如何は、女子の日常一般の生活に於ける重大なる徳の一たる質素勤儉の心を左右すべし。されば女子たるものは常に節約利用の心掛を以て裁縫の事に當らざるべからず。衣服は單に寒暑を防ぐの具たるのみならず、また人の容姿を美にし、其の品格を備ふるの具なり。その形狀

具合、色彩、地質等の美的要素如何は、最も之を着するものゝ容姿の美醜を左右す。されば裁縫を行ふには、また審美的觀念の進步を必要とするなり。姿正しき時は心自ら正しく、姿亂るゝ時は心期せずして亂る。亂れたる姿と亂れたる心をもて裁縫の事に當らば、其の針目も自ら亂るべし。されば婦容を整ふることは、裁縫の初に當つて先づ心掛けざるべからざる重大事なり。凡そ以上の五條は、裁縫に最も大切なる德として、女子たるものゝ忘るべからざるところなり。

古より傳へられたる衣服はもとよりいふまでもなく、社會の進步に伴ひ、新奇なる裁縫品も出で來るは勿論、日常生活に必要なる種々の品物あり。これらは凡て綿密なる注意をもて研究せざるべからず。様々なる服地の品質、良否、眞贋を區別し、老若、身分、職業並に季節等其用途に應じてこれを選擇し、大幅、中幅、並幅、形付、模様、損じたる所を調べ、布地に對する注意をなすは裁縫の豫備として最も必要なり。然る後運針法、裁方、標付け方、縫ひ方と漸次に其方法を學び、熟練大成の域に達せざ

るべからず。これに次ぎては衣服の保存法、洗濯法、張り方の如き、また裁縫術の範圍に屬するものにして、これを學ぶと學ばざるとは、衣服の整否に最も深き關係あり。これら樣々の技術に關する注意は、すべて第二章以下に於てこれを詳述すべし。かくの如くにして裁縫に熟達する時は、他の樣々なる細工物の如きは、極めて容易にこれを習ひ得るなり。

凡ての技藝はその技術の巧なるのみを以て足れりとせず、これに對する基礎的知識と應用の方法を熟知する時は、その技術と相俟て一層良好なる成績を擧げ得べし。されば裁縫をなすに當りても、これが爲に他の樣々なる學科を活用することを忘るべからず。たとへば歷史によりて古代の風俗を知り、服裝の變遷のあとを尋ね、數學によりて積り方の便法を攷へ、理科によりて材料の性質、染料、洗濯の方法、原理等を學び、圖畫によりて其の形狀、模樣の如何を考へ、色彩の調和を計り、地理によりて織物の原產地を學び、何れの生產品が如何なる特質を有するやを知るが

如し。かくの如くなる時は、其の技術の妙もまた一層の光彩を發すべきなり。

以下章を逐ふて最も適切有利なる裁縫の方法を詳述せむ。

普通衣服地質につき注意の要件

(イ)木綿類　生木綿、晒木綿、眞岡木綿、木綿縞形附、絞、双子、小倉、紋羽、雲齋、飛白、金巾、寒冷紗、

木綿は、其の織方に依り地質の粗なるものと、密なるものとあり、粗なるものは、間に巾の弛みを來し、密なるものは之に反して縮を來すことあり、又糊氣あるものは、初め地質厚けれども、糊の去るに及びて、薄地になるを常とす、其用途に從ひて、地伸の法を行ひ、地質を整へて、後に裁方をなすべし。

(ロ)麻布類　生麻、晒麻、上布、縮、

麻は、地質の縮むを以て特質とす、故に其用途に隨ひて地伸の方を行ふべし。

(ハ)絹布類　絹は平絹(裏地の類)より紬、縮緬、絹縮、羽二重、甲斐絹、龜綾、斜子、龍門、綸子、緞子、絽、紗、天鵞絨、繻子、繻珍、綾、錦、金襴、糸織、八丈、博多、郡内縞、市樂、風通織、透谷、明石、琥珀織、精好、鹽瀨、仙臺平、五泉平、絹絞、鹿ノ子、山繭、ケンチウ、ケンドン等其の種類甚だ多し。

　絹織物を取扱ふ際に於ける注意は、表地、裏地、帶地、フクサ其他其の用途に依りて之を異にし、又其の織り方、並に織糸の匁目に、應じて之を異にす或は横糸の太きもの、或は縱糸の細きもの、地の平なるもの、綾のあるもの、地質の厚きもの、薄きもの等其性質さま〴〵に異なるを以て之が取扱方も亦甚だ多樣なり、こは地伸の章に於て詳しく述ぶべし。

(ニ)交織類　觀光縮緬、觀光繻子、綿御召(又は新縮緬)綿金襴、新繻珍、新紬、毛繻子、(木綿と毛織の交織)綿博多の類、

絹と木綿との、交織物また毛と木綿との、交織物は、總て絹織物同樣なる取扱ひにてよろし。

毛布類　唐縮緬(メリンス、又はモスリン)フランネル、カシミヤ、セル、ゴロー、フランケット、

毛布類は何品にても、水に入りて縮む性質のものなれば、地伸の方法に依りて、後に裁方をなすべし。

第二章　用具に就ての注意

糸の選擇法

裁縫をなすにつきて第一に注意選擇を要するは、器具の種類品質等なり、今其種類を擧ぐれば、左の如し。

針箱、針刺、針、糸巻、篦、鋏、指貫、物差、定木、絎臺、裁物板、鏝、鏝こすり、火熨斗、火熨斗臺、火熨斗蒲團、裁物庖丁、目打、糊板、糊篦、巻棒、

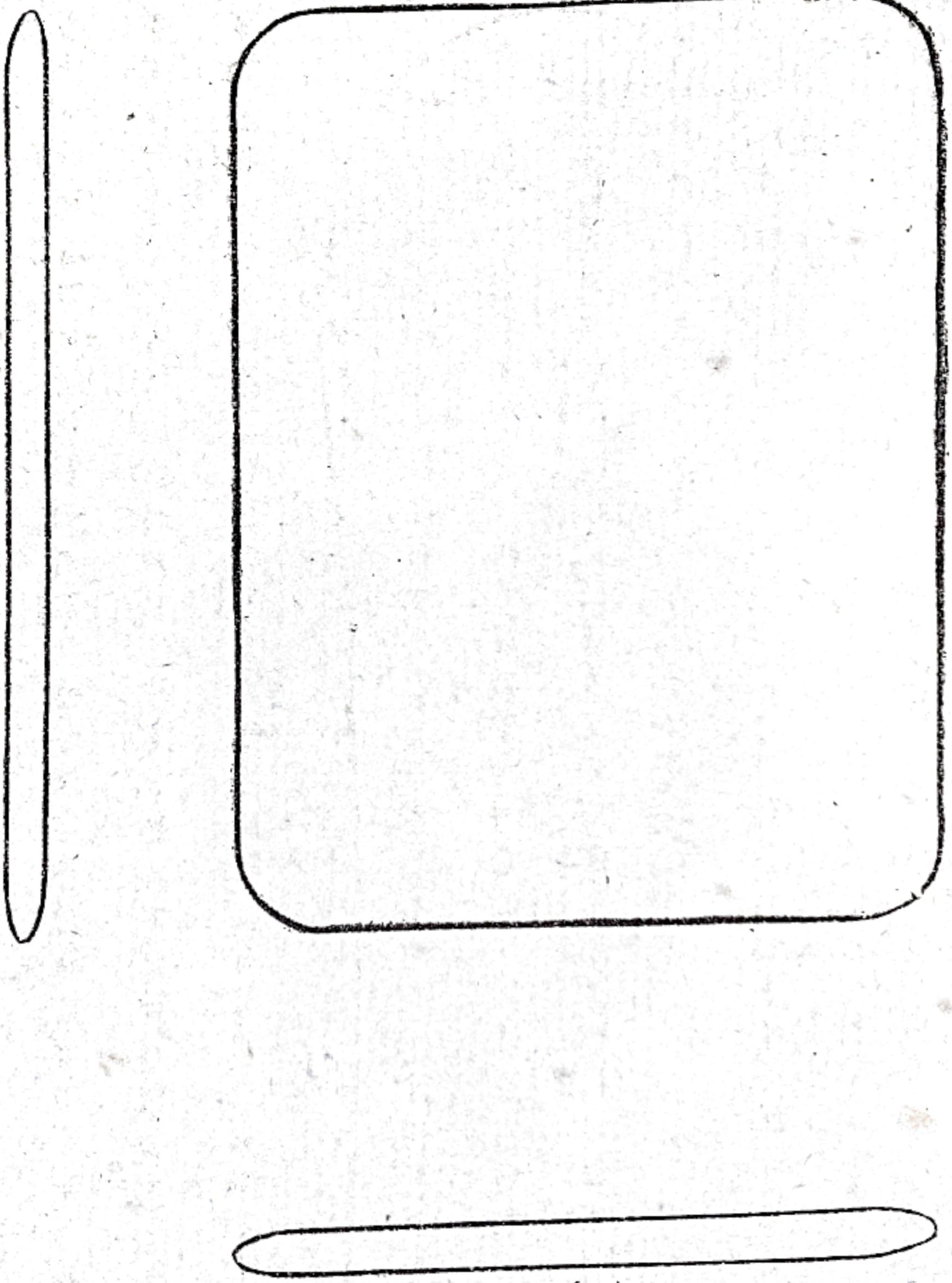
(イ)針箱　随意の物にて、可なれ共可成、其取扱方の、便利なるものを擇ぶを宜しとす。

(ロ)針刺　針刺(又は針山とも云ふ)鯨尺にて幅二寸三分、長さ三寸位の長方形のものを用ひ、心に毛を入れ、木綿綿にて包み、其上を「メリンス」の布にて覆ひ、疊紙にて包むべし、(縮緬及び絹布類は針の透り悪しければ、成る可く、之を避くべし又心の毛には、往々不潔物の附着せる爲に針の刺し傷より害を被る恐れあれば能く洗ひ清めたるものを、用ふる様注意すること肝要なり疊紙と、針刺との間には厚紙、又はボール紙の如きものを、入れて針の下に、透らぬ様に注意すべし。

(ハ)針　綿布を縫ふには印針「三の三」より「三の五」迄を用ふべし、絎針も同一の物たるべく一本の針にて、縫ひもし絎もするなり、即ち縫ひ初めは「三の三」を用ひ順次運針の熟練するに從ひて、「三の四」「三の五」と進むを宜しとす。　絹布は「四の三」より「四の四」迄とす、之れも「四の三」より、順次「四の四」迄に進むべし。

舶來針(俗にメリケン針と云ふ)は、毛布類即ち羅紗、フランネルの類に限りて、用ひ

糸巻



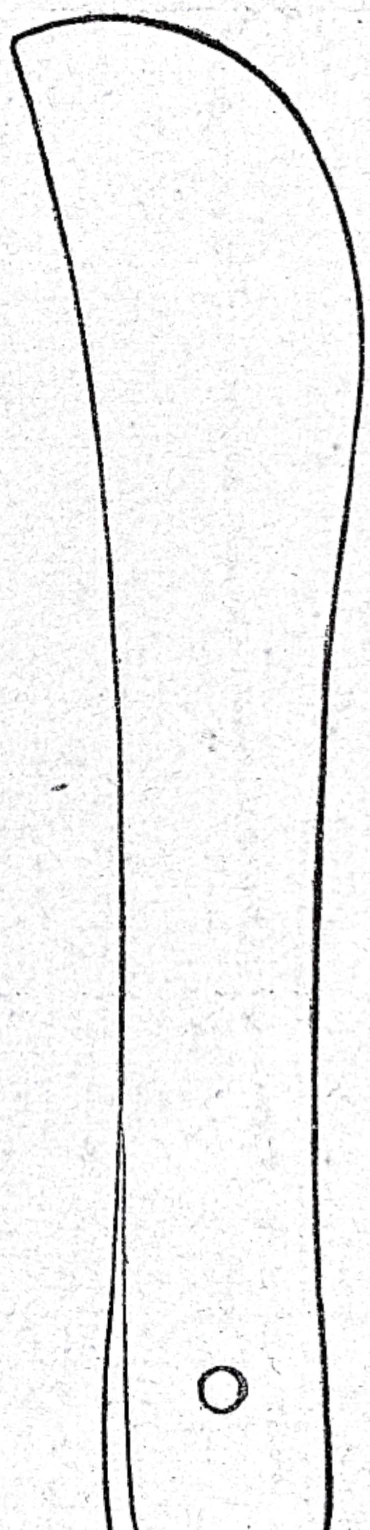
綿布、絹布等には用ひざるを宜しとす。

(二)糸巻　桐杉等の軟かなる木材を撰び、曲尺にて幅二寸五分、長さ三寸、長方形

にして面を取りたるものを用ふれば、糸の損する憂なかるへし、其形は圖の如し

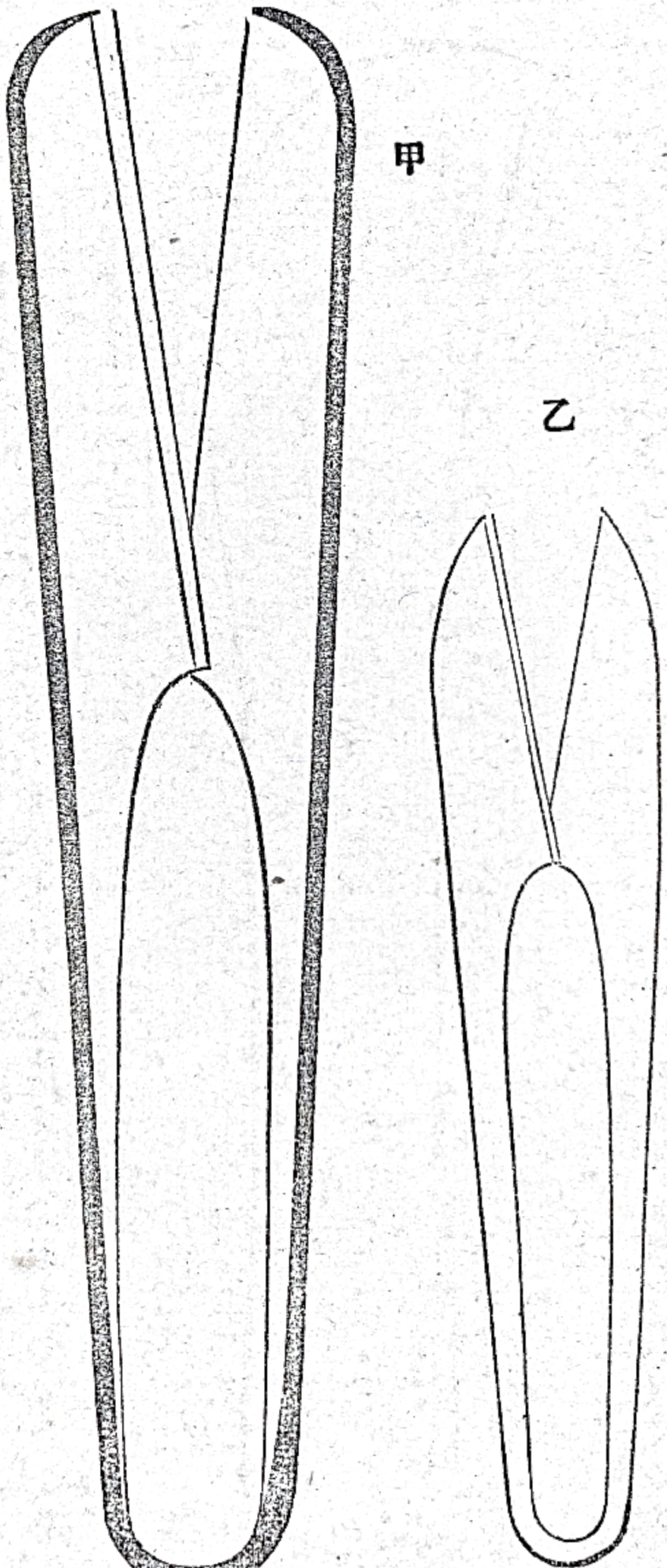
(ホ)篦　角、又は象牙にて、圖の如き、大さに造り、手に握りて上に一寸程出づるを宜しとす、丸みの所薄きものは、布帛を損するの恐れあるにより稍、厚くして滑かなるものを擇ぶべし。

ヘラ



(ヘ)鋏　近來は種々の舶來品もあれど普通和服裁縫に用ふるものは俗に、握り鋏と稱する圖の如きものを宜しとす而して甲圖は裁物をなす時に用ひ、乙圖は糸を切る時に、用ふるなり、

（ト）指貫　革を用ふるを宜しとす、金にて造りたるものは、針の滑ることあり、又縫糸の損する恐れあるを以て、革を三分程の幅に切り、中指の中の節に堅く動かぬ様に、箝まるやう寸法をはかりて、造るべし、緩き時は針の中心定まらざるを以て、確實なる運針をなすこと難し、



甲　乙

(チ)物差　普通用ふる所の鯨一尺及び、二尺にして、薄きものを宜しとす、二尺ざしには小中大の巾あれども、其中なるものを宜しとす、何れも、定木、の代用をなす事あれば、正しきものを擇ぶべし、尺度を片側に盛りたるものも、あれども、不便なれば、兩側にあるものを宜しとす、

(リ)定木　樫の能く枯れたるものを、擇ぶべし、生木は、時の經るに從ひ、木の狂ふ恐れあり、長さ曲尺二尺、幅一寸二分厚さ二分を適當とす、

(ヌ)絎臺　普通用ふるものにて宜し、(かけ針と稱し太き、針金の曲りたるものを、疊に刺し其先きに、紐をつけて用ふることあれども、不便にして、姿勢を害する恐れあれば、使用せざるを宜しとす)

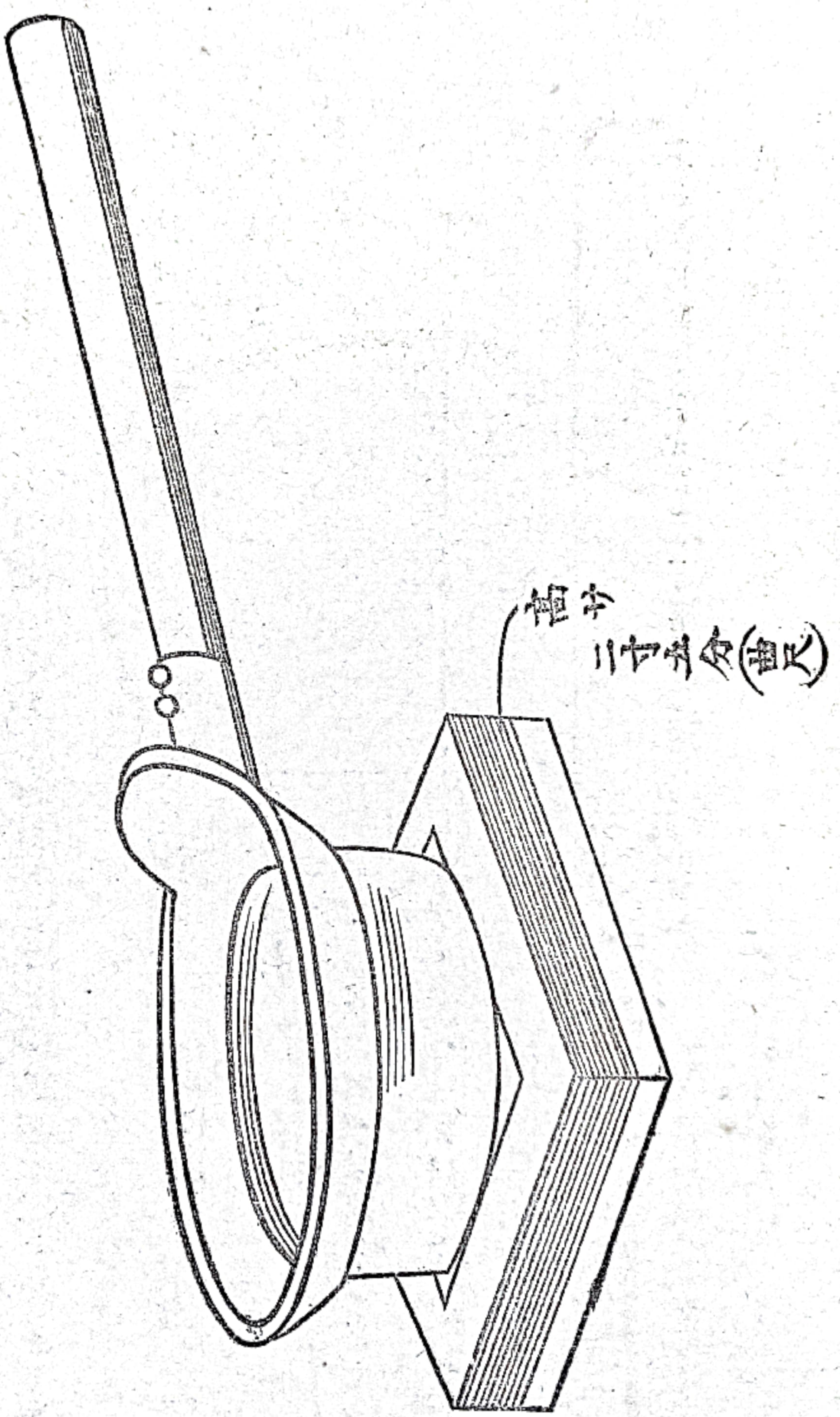
(ル)裁物板　朴木、桂、銀杏、の三種に限れども、朴木を以て、第一位とす、其材を採るにあたり、心を避くべし、心は其質堅き故に、裁物をなす際庖丁の滑べりて、齒の損する恐れあり、大さは長さ曲尺、六尺、幅一尺五寸厚さ二寸、又は一寸五分位にして、兩端

に脚を附す其高さは、八寸位とす、(裁物板は從來低きものを用ふるの習慣なりしが、姿勢を損し、衞生に害あるが爲に、近來は追々高きものを使用するに至れり、喜ぶべし。

(ヲ)鏝　普通裁縫用に供する燒鏝にて宜し、之れを用ふるに當りては、火の中に入れず、灰の中に入れ、鏝の甲の方より、漸次暖むべし、

(ワ)鏝こすり　幅鯨尺の三寸、長さ五寸位の長方形に「モンパ」又は「フランネル」を切りたるもの、五六枚重ね、其上の一枚に、胡麻油一滴を浸し、白「キャラコ」を以て、之れを覆ひ、薄き板或は厚き「ボール」紙を心になし、油氣の他の物品に移らざる樣、箱の中に箝め込み鏝を使用する際に、其面を「コスル」べし、之を使用せば鏝の面滑かに、光澤を生じ、俗に(鏝ズレ)など稱して、布帛を損する憂なく、鏝の使用上、大に便利ありとす、

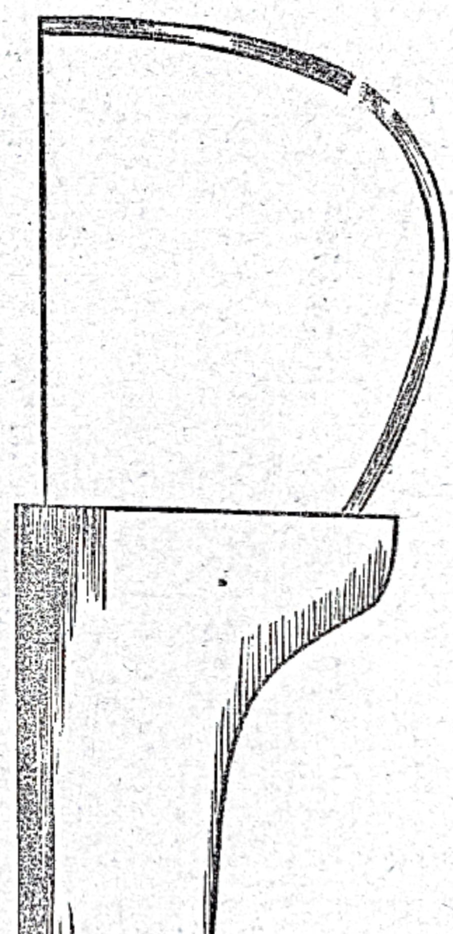
(カ)火熨斗　種々の形あれども、口の廣がりたるものを宜しとす、其形は圖の如くに



火熨斗及火熨斗臺

して、眞鍮製に、木の柄を附したるもの、其目方は家庭用としては、三百匁位を適當とす、之れを使用するに際して、炭火を入るゝには火を竪にして、火と火との間を

裁物庖丁



目打

すかし置かば、自然に炭火のおこりて、消ゆることなかるべし、

(ヨ)火熨斗臺　曲尺七寸、四方高さ、二寸五分位の、桝形のものにて火熨斗を置く所に

は、鐵板を張り置くべし、木材は何にても宜しけれども、其質堅きものを、擇ぶべし、其形及び寸法は圖の如し、

(タ)火熨斗蒲團　幅鯨尺二尺四寸、長さ三尺位のものにて、心に毛布の厚きもの、三枚重ね、其上を、白「キャラコ」にて、覆ひ置き汚れたる時は、折々取り外して、洗濯をなすべし、

(レ)裁物庖丁　圖の如き形にて、二番と稱するものを用ふべし、

(ソ)目打　袋物細工に使用するものを宜しとす其形は圖の如し、

(ツ)糊板及び糊箆　普通使用するものにて宜しとす、

(ネ)巻棒　布帛の地伸しに、使用する丸き棒にして、大幅物を巻くに適するものと並幅物を、巻くに適するものと大小二個を要す、絹布縮緬の類を巻くときには「ボール」製又は桐製の輕きものを用ひ生木綿(帶心)又は綿布類を霧を吹きて地伸なす時は、樫櫻等の如く、質堅く又重き棒を用ふるを宜しとす、丸さは直徑二寸位なり。

糸の選擇法

裁縫用に供する糸は、絹糸(繭より採りたるもの)小町糸(紡績糸)木綿糸(綿花より採りたるもの)、等ありて何れも縫ひ糸、躾糸の二種あり。

又外に「カタン」糸、羽二重糸(絹糸)あれども此二種は、みしん用の糸にて、羅紗「フランネル」「キャラコ」等の類を縫ふに用ひ普通和服の裁縫には、用ふることを好まず。

(イ)縫ひ糸　絹糸は銘仙より以上の絹布縮緬の類に用ひ、小町糸は絹綿交織「メリンス」等に用ひ、もめん糸は綿布類を縫ふに用ふ、又縫ひ糸に太きものと、細きものとありて、地質の厚きものには、太きを用ひ薄きものには細きを用ふ、絎糸は、縫ひ糸よりも稍々細きものを用ふるを宜しとす、凡て糸は撚りの能くかゝりたるもの、其品質善良なれば、用ふる時撚りを、戻しこきて使用すべし、木綿糸は油の少つきたる布にて、引伸してこきながら糸巻に堅く巻く時は使用するに便利なるべし。

(ロ)躾糸　綿布の地質厚きものには、木綿糸を用ひ、綿布にても地質の薄きもの及絹

つ、糸こきをなさゞるを要す、(糸こきの充分出來ざるものは、二寸位の間に一針づゝ、糸をゆるむるなり、尚ほ布地をもまぬ樣注意すべし。　縫代の深き時は、中指以下の三指にて、輕く布を持ち食指と拇指は延して縫代の所まて、運針をなすべし。

運針の練習法は五分間一丈二三尺迄縫ふことを程度とす、(但し運針は即ち串縫と云ふ)。

用布は、三河木綿二枚の厚さ位の物とす。

縫ひ方各種につきての方法、針の扱ひ方

三つ折縫、二重縫、伏せ縫、袋縫、重ね縫。

(イ)三つ折り縫は、布の端を、三つに折り、其の折り端を縫ふものにして、襦袢の裾の如き所に用ふ、此の縫ひ方は、絎けたるよりも、洗濯の時に、縫目の亂るゝ等の事なし、ふる敷、ふくさ(單ふくさ)等の縫ひ方に用ふるものなり。

(ロ)二重縫、單衣の背縫の如き所を一度串縫をなし(普通縫代二分五厘を縫ふ)其の上へ

の織縁の所より、一分位の所を、今一回縫ふ如きを二重縫と云ふ。

(ハ)伏せ縫とは、串縫をなし其縫目の亂れざる様に、右にても、左なりとも、片側に折り、或は兩方にひらき、使用の場合に應じ、何れにても縫ひ折をなし、表には小さき針を一つ出し、裏は二分位より三分位の間をあけて縫ふものなり、ふろしき、縫ひ合せ、ふとん類、其他種々なる所に用ふるものなり(蒲團は五分位になすべし)。

(ニ)袋縫とは、表より一分の縫代にて縫ひ、裏に返し普通縫代二分五厘位にて縫ふ、されど場所に依りては、異なる所もあり、(但し第一縫込は何れの所となすも一分なり。

(ホ)重ね縫は、布の兩端を、一分五厘より五分位にて用途に應じたる方法により、二布の端を、互に重ねて中央を縫ふものなり、是は洗濯、洗張、ゆのし等の時に用ゆるものなり。

(ヘ)つき合せ縫は斜に切りたる布を第一圖の如く五厘の深さ一分の針目に糸をか

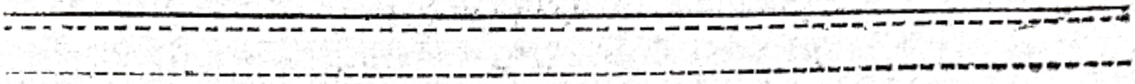
(ホ)より絎けは、縫代を細くよりつゝ、絎ける方法にて、縫代の折を正しくつけ、縫代を細き紙をよるが如く、左手の拇指と食指にて、正しくよりながら、右手は針を持ち、二三厘より五厘一分位に一針づゝ絎るなり、此法は袖口絎けの最も正しき方法なり、四つ折絎けと異なる點は、單衣袖口絎けに用ひて直に皮膚に觸れざることにして、最も着心地よき方法なり。

(ヘ)まつり絎けは、「ふらんねる、せる、かしみや、らしや」等の衣服を仕立るに當り、縫代を伏せる時、又は絎ける時に用ふるものにて、其方法斜なると眞直なると二法あり、先づ單衣の裾をまつり縫をなすとすれば何分と折を定めて三つ折にして、絎けもの同樣に、針を通し、三つ折にしたる所に圖の如く、針を出すに斜にするとも、眞直にするとも、用途に應じて、五厘或は一分位にまつり絎けをなす、然し眞直に針をかける方法が、最も確實なるものなり。

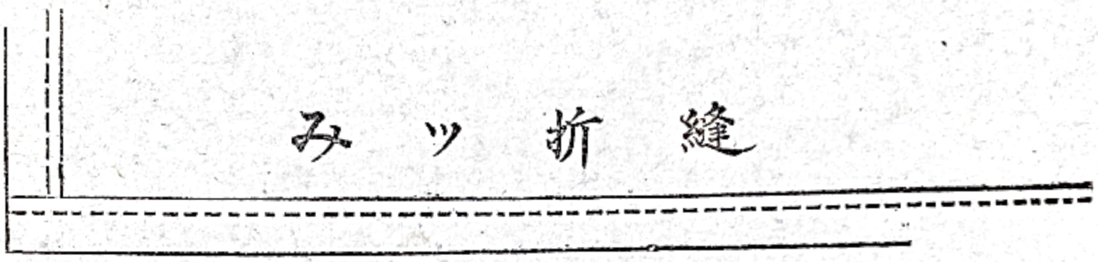
(ト)千鳥がけは、まつり絎け同樣なる用法なり、圖の如く、表に針目を一つ出し、裏を千

縫ひ方各種(一)

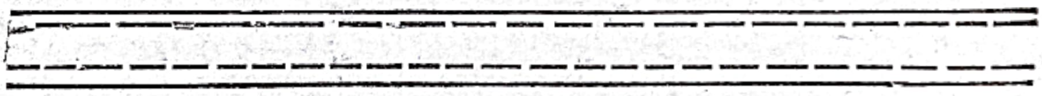
二重縫



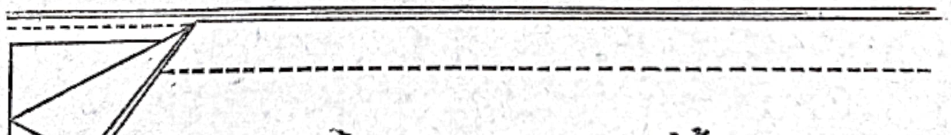
みツ折縫



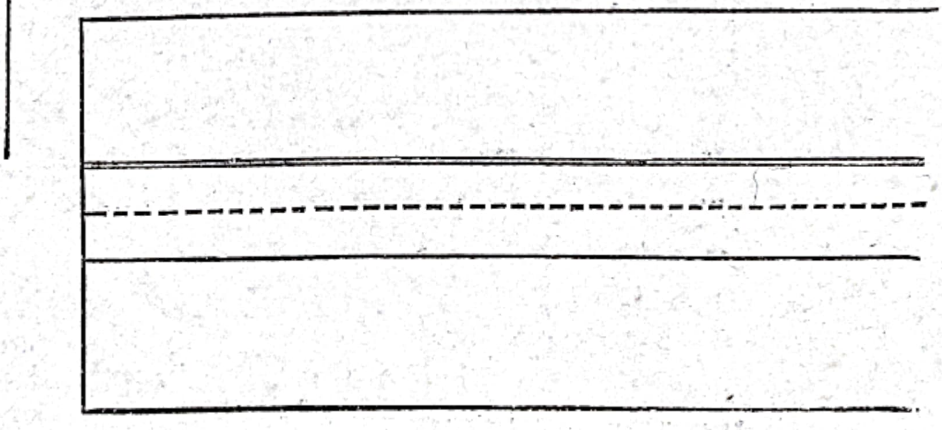
伏セ縫



袋縫



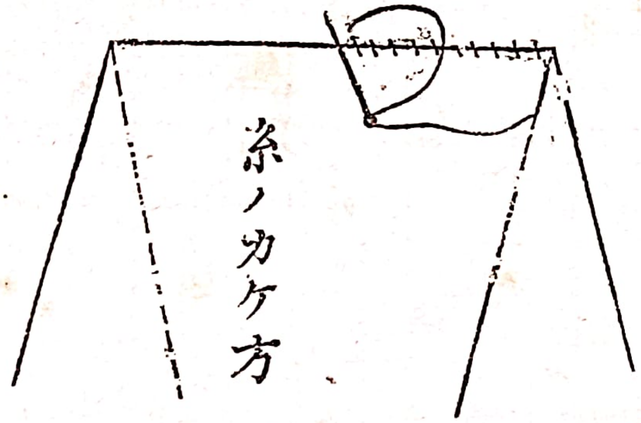
重ネ縫



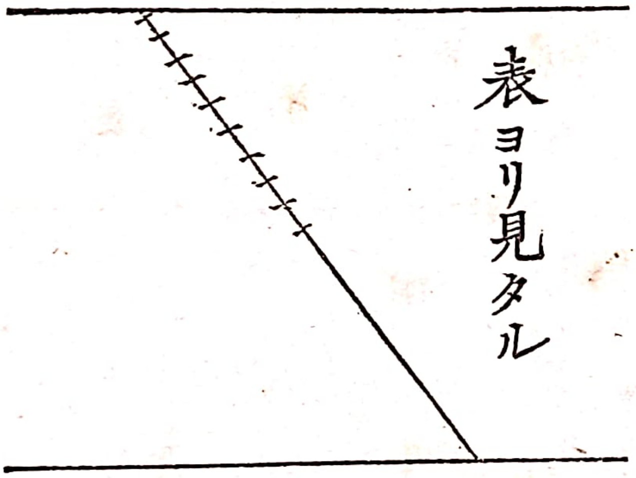
縫ひ方各種(二)

つり合せ縫

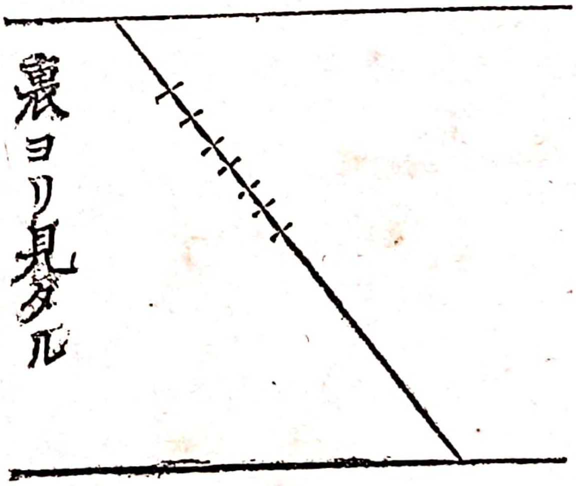
第一圖



第二圖の一

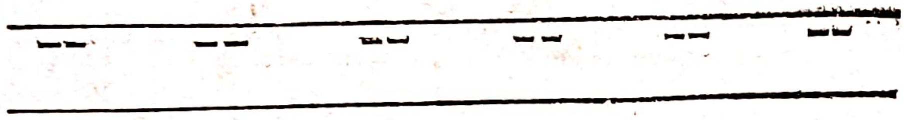


第二圖の二

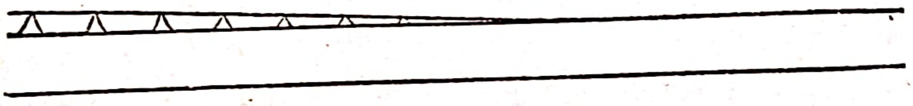


絎け方各種(一)

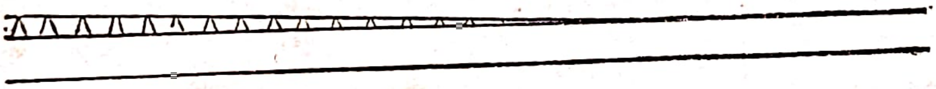
絎絎



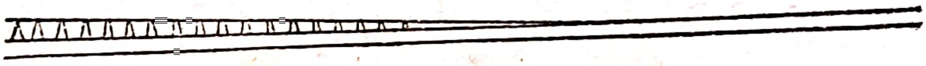
三つ折絎



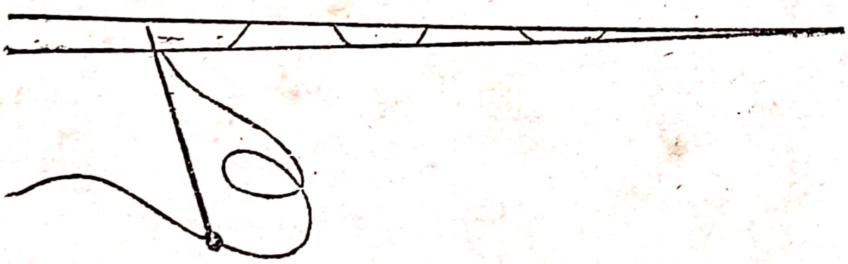
四つ折絎



より絎

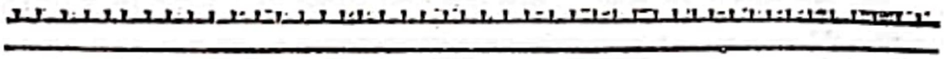


普通の絎方

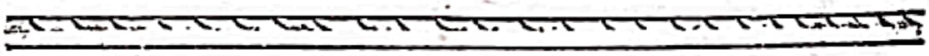


絎縫ひ方各種(二)

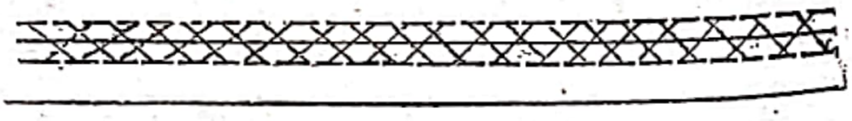
第一まつり絎



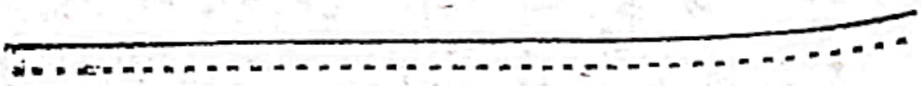
第二まつり絎



千鳥がけ裏



千鳥がけ表



鳥にかけるなり。

(チ)一針絎けは、地質の硬きものにて、普通の絎け方にて出來ざるもの、又は貴重なる品にて、織模樣、其他地質を大切にする場合等に用ひ又衣服の縫ひ箇所によりても用ふることあり、一針絎と云ふ如く一針づゝ眞直に絎けるものなり、串絎とも云ふ。

(リ)二針絎け三針絎けは、一針絎けの次に用ゆるものにて、普通衣服の絎け方に用ふ、二針絎けて糸をしめ、又更に二針絎けて糸をしむると云ふ如くして、正しく絎けるなり、三針絎けもこれに同じ、長き針を用ひて、七針八針も絎ける人あれども、これは決してよろしき方法にあらず、されば縫ひ方に用ふる木綿針は三の三絹は四の四にて絎け方もなすべきことと忘る可からず、此外に帶の端などの所に用ふる一針返し縫と云ふものもあり。

襟のかけ方

平躾、一目おとし、二目おとし、三つ目おとし、ふくさ躾、縫ひ躾。

(イ) 平躾けは綿入袖ふり、羽織衿躾、背とじ、脇とじ、其他種々なる所に用ふ、地質の硬きもの、厚きもの、又は數枚重ねたる所等に用ふるものにて、針目も普通は表に一寸二三分、裏に四分位より、場所に依り、表一寸裏四分位にすべし。

(ロ) 一目おとし、二目おとし、三目おとし躾。

一目おとしは圖の如く、大針一寸二分にして、表に出し、二分位の針目を裏に出し、表に一分位の針目を一つ出し、裏に二分出し、又大針を表に出す樣にして、順次に躾をなすものにて針目を正しくなすべし、二目おとし、三つ目おとしは表に出る小針の數が多くなりたるものなり。

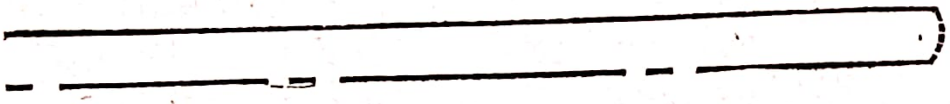
一目おとしは木綿類の躾に用ふ。

二目おとし、三つ目おとしは絹布類の躾に用ふ。

(ハ) 縫ひ躾は、躾の内にて最も亂れざる躾にて、縫ふ如く表五厘裏一分の針目にて糸

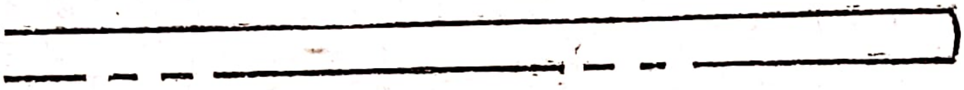
躾のかけ方

一目おとし



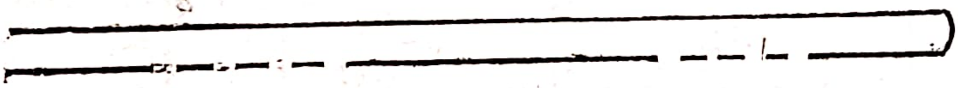
此の間一分五リン

二目おとし



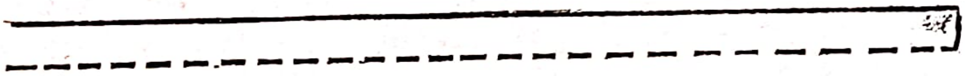
同上

三目おとし



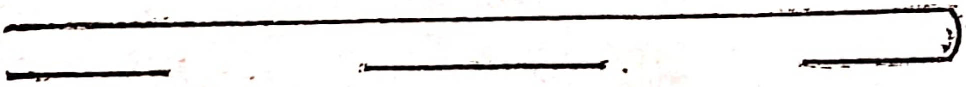
同上

縫躾



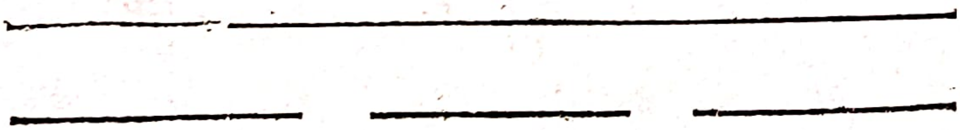
同上

伏紗躾



同上

平躾



三分

第四章 衣服寸法表

襦袢の仕立寸法

	身丈	身幅	袖丈	袖幅	袖附	小八つ口	衿明	衿幅	馬乘	行	衿下	裾絎け幅	前下り
一ツ身	一尺位	イッパイ	五寸	四寸	三寸 三寸五分	三寸五分	八分ヨリ九分	八分ヨリ九分	二寸ヨリ二寸五分			二分内	
三ツ身	一尺三四寸	五寸五分	上着ヨリ三分ツメル	上着ニ仝シ	上着ヨリ二分引ク	二寸五分	上着ニ仝シ	一寸一分	二寸二分二寸五分		三寸内外	二分内	
四ツ身	一尺五六寸	五六寸	六寸五分内外	上着ヨリ三分ツメル	上着ヨリ二分引ク	二寸五分	上着ニ仝シ	一寸二三分	二寸三分二寸五分		三寸五分内外	二分内	
本裁男半襦袢	二尺三寸内外	後八寸 前七寸	上着ヨリ一寸ツメル	上着ヨリ人形ニテ三分ツメル	上着ヨリ七分ツメル	二寸五分	上着ニ仝シ	一寸五分	三寸内外	上着ヨリツメルヿ縮緬ニテ三分引ク普通ニテ二分	四寸内外	單衣ナレハ二分内	
女物袷襦袢	三尺三四寸	後着物仝寸前六寸五分ヨリ七寸	上着ヨリ三分ツメル	着物仝寸	上着ヨリ二分ツメル	三寸	上着ニ仝シ	普通衿明ダケ一寸五分下一寸八分ヨリ二寸 合羽衿通シ三寸		男物仝様			五分ヨリ一寸
女物單衣襦袢	三尺三四寸	後着物仝寸前六寸五分ヨリ七寸迄	上着ヨリ二分ツメル	着物ト仝寸	上着ヨリ一分ツメル	三寸	上着ニ仝シ			仝上		五分ヨリ八分迄	五分ヨリ一寸

但し男物長襦袢の時は身丈を着物より一寸ツメル其他の寸法は半襦袢仝様なり

衣服長着仕立寸法

	身丈	後幅	前幅	袖丈	袖口	袖附	袖幅	行き	衿幅	合褄幅	衿下	衽下り	衽幅	小口	衿八つ明	腰揚げ
一ツ身	一尺八寸ヨリ二尺五寸	九寸	三寸八分ヨリ四寸二分迄	元祿袖六寸平袖一尺	三寸 四寸	三寸 四寸	四寸三分ヨリ五寸八分迄		八分ヨリ 一寸	衽幅ヨリ二分ツメル	四寸 五寸	二寸五分	二寸五分 三寸五分	二寸五分	八分ヨリ 一寸迄	
三ツ身	二尺 八寸	イッパイ	イッパイ	元祿七寸五分平袖 一尺三寸五分	三寸九分 四寸五分	四寸 四寸五分	五寸八分 六寸五分		一寸ヨリ一寸一分	仝上	六寸 七寸	三寸五分	三寸 三寸二分	三寸	一寸五分	
四ツ身	二尺八寸ヨリ三尺五寸	イッパイ	イッパイ	元祿八寸五分 一尺四寸五分 一尺六寸	四寸五分 五寸	四寸五分 五寸	七寸五分 八寸		一寸二分ヨリ一寸三分	仝上	八寸 一尺一寸	四寸 四寸五分	三寸三分三寸五分	三寸	一寸八分 二寸	
本裁女	四尺	七寸 五分	六寸	一尺五寸	六寸 六寸五分	六寸 六寸五分	八寸五分	一尺六寸五分	三寸	三寸五分	二尺	六寸	四寸	三寸	二寸五分	
仝男	三尺六寸五分	八寸	六寸 五分	一尺 四寸 人形二寸	七寸五分 八寸	一尺一寸 一尺二寸	八寸五分 八寸八分	一尺七寸五分	一寸五分	三寸五分	一尺七寸五分	五寸	四寸	三寸	二寸三分	後肩山ヨリ一尺三寸五分前肩山ヨリ一尺四寸五分但シ人形ナシノモノヘ後一尺五寸前一尺六寸

長着抱き幅割出し

	後幅	前幅	中幅	抱き幅	前幅の出り	衿明
本裁男	八寸	六寸五分	六寸三分	六寸一分	五分	二寸三分
本裁女	七寸五分	六寸	五寸七分五厘	五寸五分	七分	二寸五分

此ノ表ノ通リニ抱キ巾ノ割出シヲナスモノニシテ茲ニ男物ニテ後八寸前幅七寸衿明二寸三分ノモノアリトスレバ前幅ノ出リハ一寸トナル是ヲ抱キ幅（脇明下二寸ヨリ肩迄ヲ抱キ幅ト云フ）中幅（抱キ幅ト前幅ノ間）前幅（中幅ト前幅ノ間）ノ三ケ所ニ平均ニ割リテ印ヲナス一ツ身ノ割出シモ寸法ノ異ナルノミナリ何ノ考モナク前幅折ヲナス可ラズ

裾廻し積り方寸法

		立褄	四裾廻	衿先	袖口	裏衿
裾廻切女物寸法	壹反三ツ切九尺ニテ	二尺五寸	一尺五寸	五寸	一尺五寸	
仝男物	壹反二ツ切一丈三尺五寸	二尺五寸	一尺八寸 二尺迄		一尺八寸	五尺

此裾廻地寸法ハ本裁男物ナレバ小裁ハ此寸法ヲ標準ニシテ切地ヲ積リ裁方ヲナスベシ

羽織仕立寸法

	身丈	後幅	前幅	前下り	紐附	衿幅	袖丈	袖幅	袖口	袖附	衿明	小八つ口	襠幅	脇明
一ツ身	一尺三寸 一尺七寸	イッパイ	イッパイ	五分	肩ヨリ五寸 五寸五分	一寸一分 一寸二分	済物ヨリ二分長ク	済物仝寸	済物仝寸	済物ヨリ一分多ク	八分ヨリ一寸 廻シ三分		上八分 下一寸	六寸
三ツ身	一尺五六寸	済物ト仝寸	眞直	六七分	六寸	一寸六分 一寸四分	仝上	仝上	仝上	仝上	一寸三分、五分 廻シ三分	三寸	上六七分 下一寸二分 四分迄	
四ツ身	一尺九寸	六寸五分 七寸	四寸三分	七八分	六寸五分	一寸四分	仝上	仝上	仝上	仝上	一寸八分、二寸 二分廻シ四分	仝上	上六分 下一寸五六分	
本裁女	二尺五六寸	済物仝寸	四寸七分 五寸	一寸	八寸五分 九寸	書生一寸九分 一寸七分 一寸八分	上済ヨリ三分多ク	仝上	仝上	仝上	二寸五分 廻シ五分	仝上	上五分 下一寸七分	
本裁男	二尺七寸	済物仝寸	五寸二分	一寸	七寸五分 八寸	一寸八分 二寸	仝上	仝上	仝上	仝上	二寸三分 廻シ六分	仝上	襠幅ハ衿幅ト仝寸ノモノナレトモ形ヲ見テ衿ヨリ二分ツメル	
備考	但シ羽織ハ紋附ノ時ハ衿幅ヲ二寸位ニス其他縞物ハ一寸八分トス行キハ済物仝寸或ハ二分多クス衿幅ノ所ニテ書生トアルハ青年者ノ長羽織ノ事ナリ													

被布仕立寸法

	一ツ身	三ツ身	四ツ身	本裁女	備考
身丈	一尺三寸一尺七寸	一尺五、六寸	一尺九寸	二尺六寸	被布ノ丈ハ羽織ヨリ一寸長キナ良シトス
後幅	イッパイ	着物仝寸	六寸五分　七寸	着物仝寸	袖丈、袖附、羽織仝寸ナリ
前幅	イッパイ	真直	仝上	五寸五分	
前下り	五分	五分	五分	五分	
立衿下り	三寸　三寸五分	三寸五分　四寸	四寸五分　五寸迄	五寸五分　七寸	
立衿と小衿の間	一寸　一寸三分	一寸三分　一寸五分	一寸六分　一寸七分	二寸　二寸五分	小八ツロハ四ツ身ヨリ本裁ハ三寸ニナスベシ
小衿幅	二寸三分	二寸八分	二寸八分	三寸八分	
衿明	八分　一寸　廻シ三分	一寸三分、五分　廻シ四分	一寸八分、二寸　廻シ四分	二寸五分　廻シ五分	行キハ着物ト仝寸トス或ハ二分多クナスコトモアリ
褄幅	上八分　一寸　下一寸二分三分	上六七分　下一寸二分四分迄	上六分　下一寸五六分	上五分　下一寸七分	
袖丈	着物ヨリ三分多ク	仝上	仝上	仝上	袖口及ビ袖巾ハ着物仝様ニナスベシ
袖附	着物ヨリ一分多ク	仝上	仝上	仝上	
立衿幅	上二寸七分　三寸　下三寸ヨリ三寸五分	上三寸　三寸三分　下三寸五分	上三寸　三寸三分　下三寸　三寸七分	上三寸六分　三寸八分　下四寸　四寸三分	

重ね物下着つめ方寸法

小衿丈を計るには立衿下り寸法より立衿の間の寸法を引きて残り寸法に衿明の寸法を加へての半数と定め之に一分加へたるものを二倍したるものが丈と云ふ

一ッ身重ね物	下着寸法つめ方	三ッ身四ッ身	下着のつめ方
身丈	表全寸	身丈	表全寸
後幅	全寸又ハ二分つめ	後幅	一分五厘
前幅	全寸又ハ二分つめ	前幅	一分五厘
衽幅	表全寸	衽幅	表全寸
衿下	表全寸	衿下	表全寸
袖丈	表袖ヨリ三分つめ	袖丈	三分つめ
袖口	並袖ニテ全寸	袖口	表全寸
袖幅	表全寸	袖幅	表全寸
廻口袖口	表ヨリ四分つめ	袖附	表袖附ヨリ一分つめ
肩行き	表全寸	筒袖口	表ヨリ四分つめ
抱き幅	表全寸		
衿明	表全寸		

本裁男物重ね	下着つめ方	本裁女物重ね	下着つめ方
身丈	三枚重ね一分五厘宛	身丈	表全寸
後幅	表ヨリ一分つめ	後幅	表ヨリ一分つめ
前幅	表ヨリ二分つめ	前幅	表ヨリ二分つめ
抱き幅	表全寸	抱き幅	表全寸
衽幅	表全寸	衽幅	表全様
衿下	表全寸	衿下	表全
袖丈	表ヨリ三分つめ	袖丈	表ヨリ三分つめ
袖口	表全寸	袖附	表ヨリ一分つめ
袖附	表ヨリ二分つめ	袖口	表ヨリ全寸
行き	表全寸	袖幅	表ヨリ全寸
衿丈	三枚重ね一分五厘宛	肩行	全寸

第五章　裁方及び地伸の方法

裁方をなす際は、裁縫臺、及び尺度、鋏、篦、定木等必要なる物品を清潔にして、切地を損ぜざる樣注意すべし。

(イ)反物の產地を知り、其性質を見分、表裏と、反物の尺、又は傷み破れたる箇所等を、丁寧に調べ、地伸の方法を施し、其用途に從ひ裁損じ、或は小裂等出ざる樣に、裁方をなすべし。

注意　織地、染模樣、縫箔、などのあるものは齟齬のなき樣注意すべし。

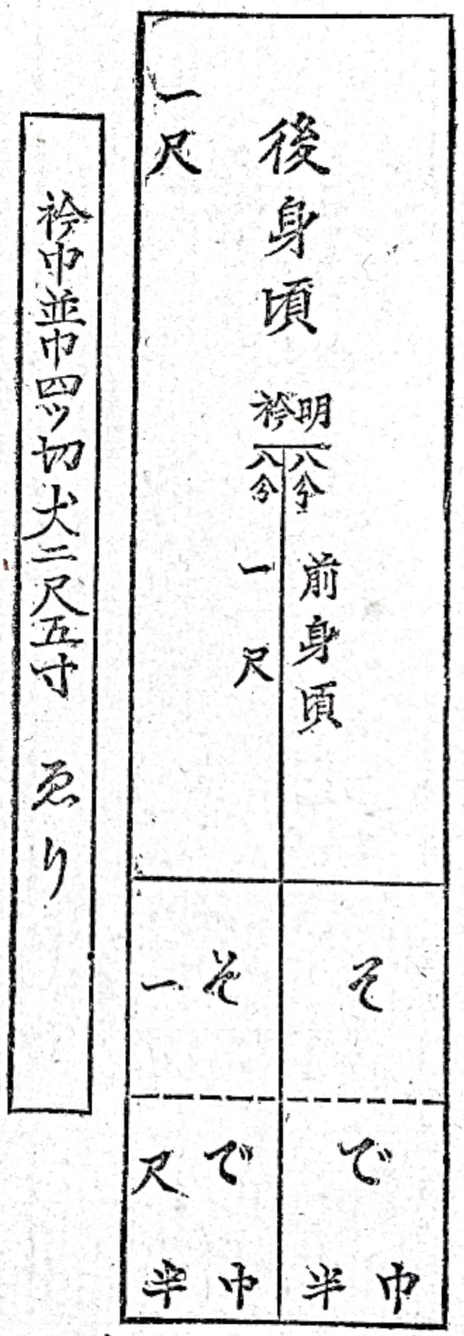
(ロ)火熨斗の懸け方　地伸をなすには火熨斗を用ふること多ければ、用具の所にて述べたる如き、火熨斗蒲團と火熨斗臺を取り揃へ、(火熨斗の火の入れ方は、用具に述べたる通にして、火加減をよく見たる上に)、其種類に應じ其かけ方の強弱の加

減をよく定め、地質を損ぜぬ樣に切れの裏の方よりかけ、品に依りて巻き棒を定めて、(用具にて述べるもの)漸時巻きて後に裁方をなすべし。

(ロ)反物織縁地伸に付鋏の入れ方　反物は、織縁の張りたる物と弛みたるもの、其他種々なるものあり、何れも地を平にする爲に第一に火熨斗を用ひて地伸をなす、然し火熨斗にても織縁の伸び難きものは、圖の如く布の左右に一寸五分位の間を正しくあけて、織縁二分なれば一分九りん位に鋏を眞直に入れて、中央の長さと全じ位に、火熨斗をなす可し、これにて尙地伸の出來ざる物は、次の方法に依りて地伸を施すべし。

一、先づ切の兩端を縫ひ合せて二つ折にし、兩方に輪を作り、其輪に巻き棒を通し、兩人にて互に力を協せ、巻き棒を左右の手にて握り强く引き張りて、他の一人の者が、火熨斗を織縁の張りたる方にかけ、兩縁の長さ全じくなる迄丁寧に地伸をなすべし。(口繪地伸の寫眞圖參照)

並幅三尺の用布にて一つ身襦袢の裁方（但し衿は別切なり）



裁切寸法

一　身丈　一尺

一　袖丈　五寸

一　衿明　八分

袖丈　袖

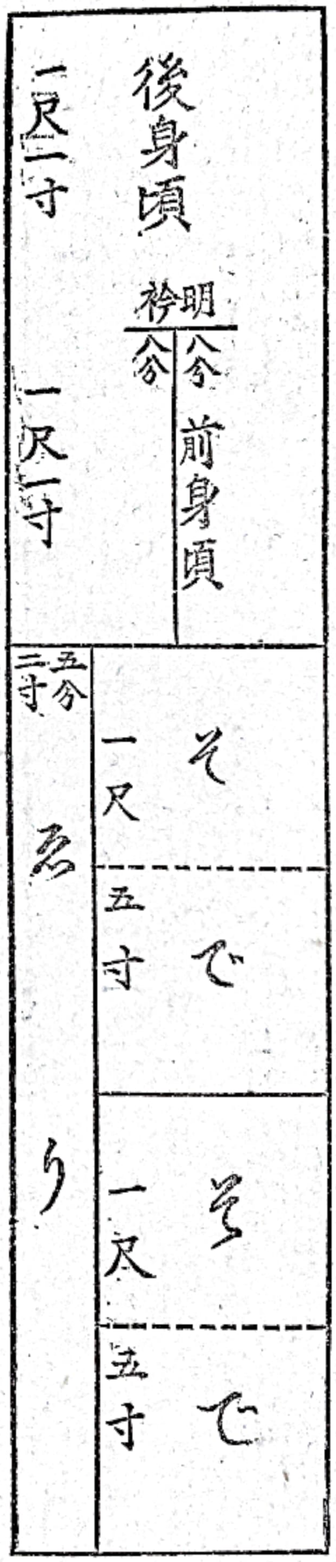
5×2=10

身丈　身頃

10×2=20

10＋20＝30‥‥用布

並幅五尺二寸の用布にて一つ身襦袢の裁方



裁切寸法

一　身頃　一尺一寸

一　袖丈　七寸五分

一　衿明　八分

一　衿幅　二寸五分

袖丈　袖

75〔寸分〕×4=30〔寸〕

身丈　身頃

11〔寸〕×2=22〔寸〕

袖　身頃

30〔寸〕+22〔寸〕=52〔寸〕……用布

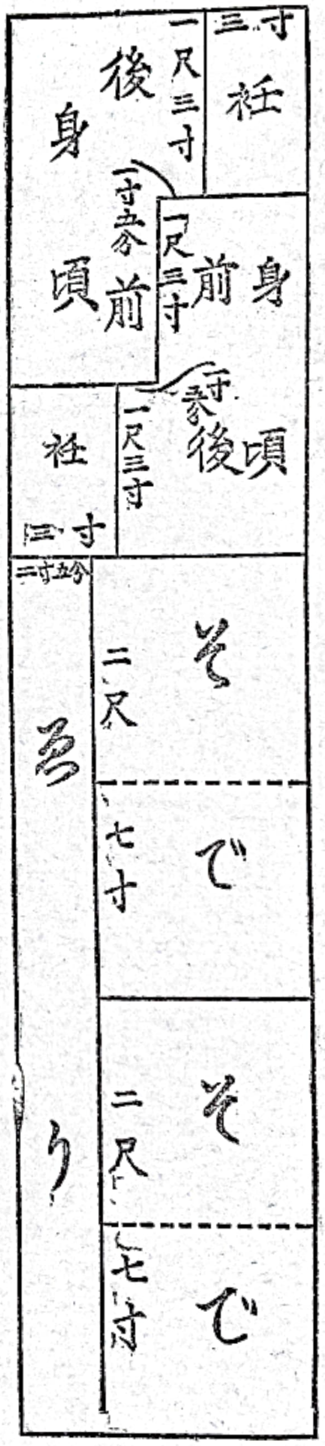
並幅壹丈二尺にて四つ身襦袢の裁方

袖丈　袖
15×4=60
身丈　身頃
15×4=60
60+60=120…用布

裁切寸法

一　身丈　一尺五寸
一　袖丈　一尺五寸
一　衿明　二寸
一　衿幅　二寸

並幅九尺三寸にて衽入れ三つ身襦袢の裁方



裁切寸法

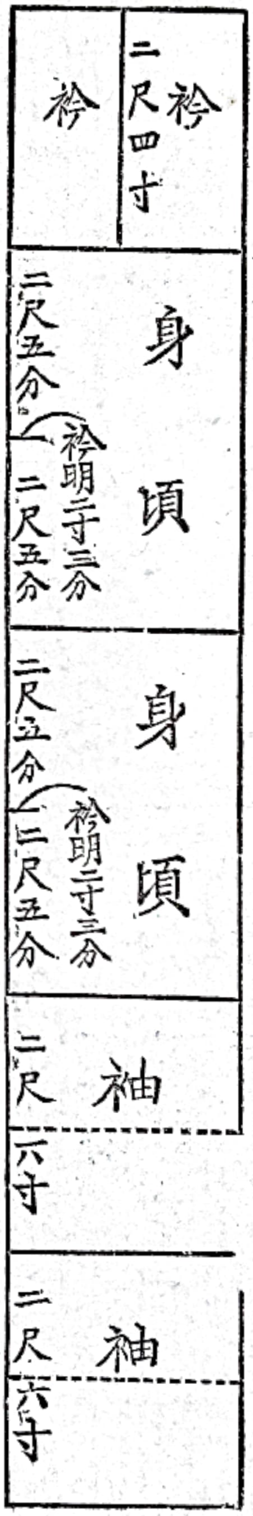
一　身丈　一尺三寸
一　袖丈　一尺三寸五分
一　衽幅　三寸
一　衿幅　三寸五分
一　衿明　一寸五分

袖丈　袖
135×4=54

身丈　身頃
13×3=39

袖　身頃
54+39=93‥‥用布

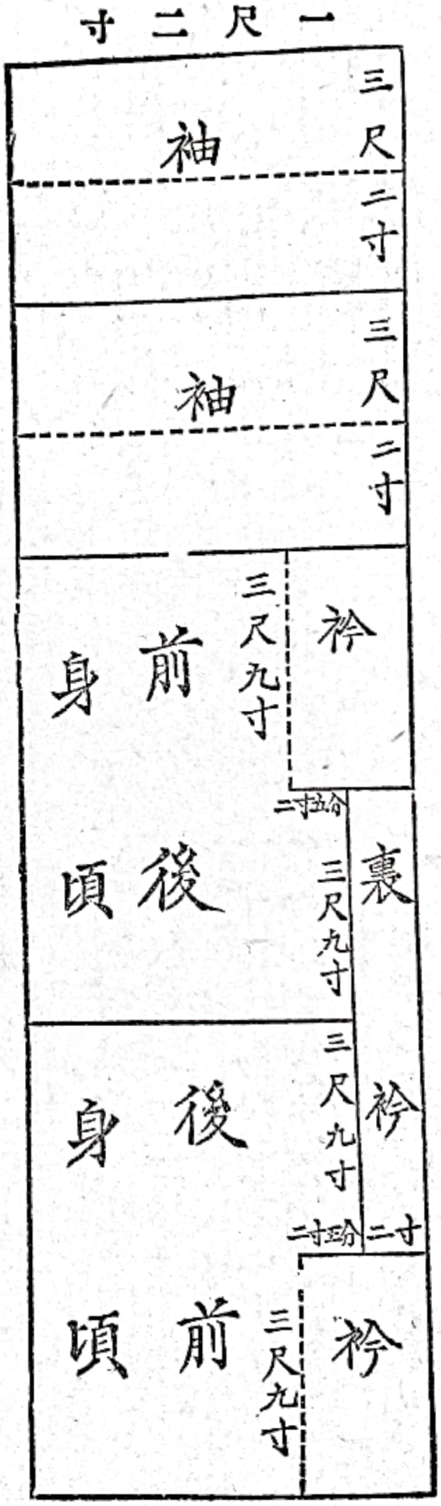
並幅壹丈五尺四寸にて本裁襦袢の裁方(男物)



袖丈　袖
13寸×4=52寸
身丈　身頃
205寸分×4=82寸
衿　身頃　袖
24寸+82寸+52寸=158寸‥‥用布

裁切寸法
一 袖丈　一尺三寸
一 身丈　二尺五分
一 衿明　二寸三分
(注意) 女物なれば袖を別切にして衿明二寸五分とす

中幅(一尺二寸)二丈二尺にて摘み衿長襦袢の裁方

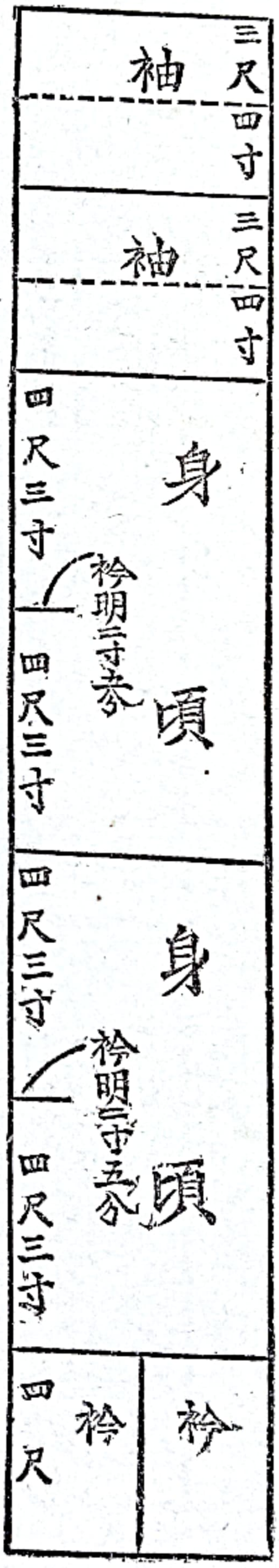


袖丈 袖
16×4=64
身丈 身頃
39×4=156
身頃 袖
156+64=220‥用布

裁切寸法

一 袖丈 一尺六寸
一 身丈 三尺九寸
一 衿明 二寸五分
一 裏衿幅 二寸

並幅二丈八尺にて長襦袢共裾の裁方



裁切寸法

一　袖丈　一尺七寸

一　身丈　四尺三寸

一　衿丈　四尺

一　衿明　二寸五分

但し此裁方にて身丈及び衿丈を三尺六寸となして袖裏半幅を取る方法もあり

袖丈　袖

17×4=68

用布　袖　身頃と衿

280−68=212

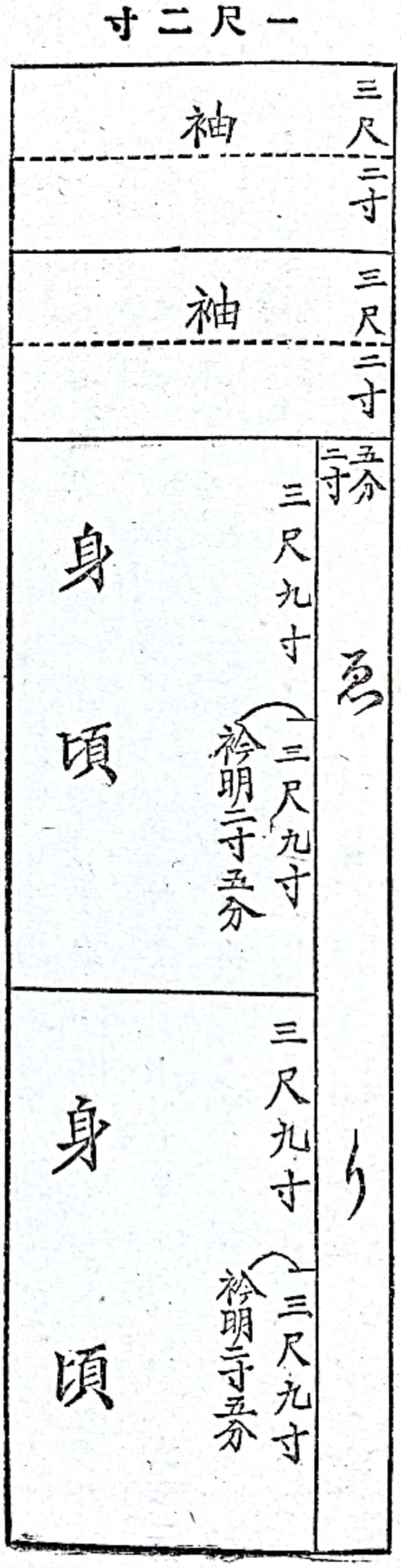
衿　身頃

212−40=172

身丈

172÷4=43

中幅(一尺二寸)二丈二尺にて車裁長襦袢裁方



袖丈　袖

$16 \times 4 = 64$

用布袖身頃及び衿

$220 - 64 = 156$

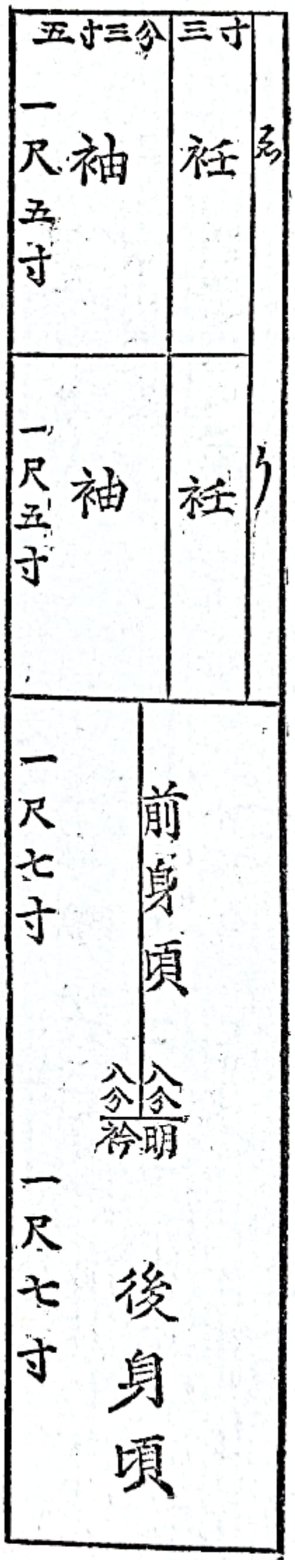
身丈

$156 \div 4 = 39$

裁切寸法

一	袖丈	一尺六寸
一	身丈	三尺九寸
一	衿明	二寸五分

並幅六尺四寸を以て一つ身裁方

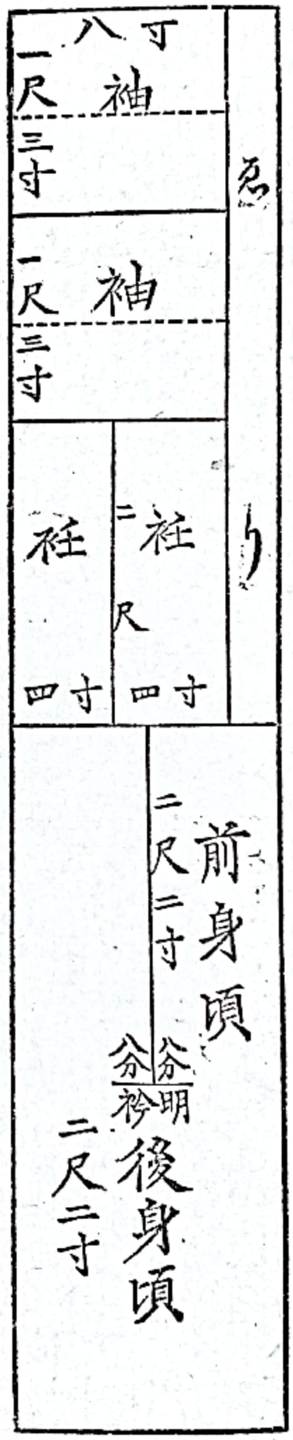


裁切寸法

一 袖丈　七寸五分　一 袖幅　五寸三分
一 身丈　一尺七寸　一 衿明　八分
一 衽丈　一尺五寸　一 衽幅　三寸
一 衿丈　三尺　一 衿幅　一寸二分

袖丈　袖,衽,衿
7寸5分×4=30寸
用布　身頃
64寸−30寸=34寸
身丈
34寸÷2=17寸

並幅九尺を以て一つ身別衽元祿袖の裁方



裁方寸法

一　袖丈　六寸五分　一　袖幅　八寸

一　身丈　二尺二寸　一　衿明　八分

一　衽丈　二尺　一　衽幅　四寸

一　衿幅　一寸五分

袖丈　袖

6寸5分×4=26寸

用布　衽身頃

90寸−26寸=64寸

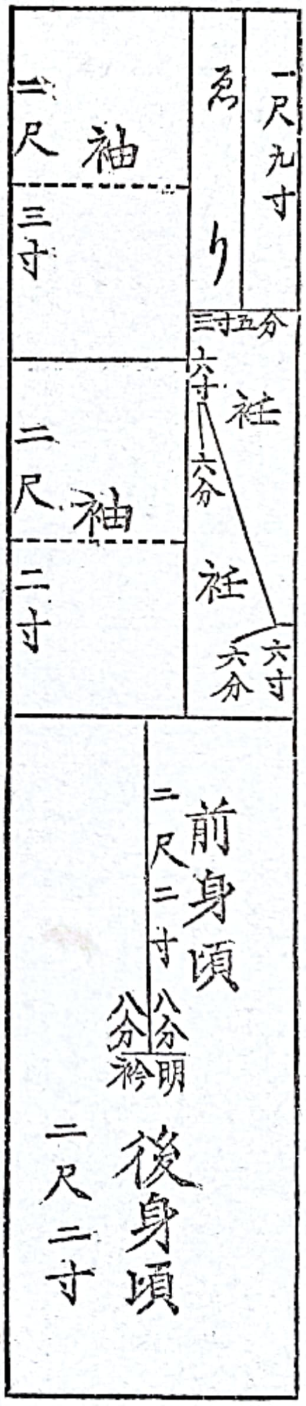
衽下り　身丈

(64寸+2寸)÷3=22寸

衽丈

22寸−2寸=20寸

並幅九尺を以て鈎衽の一つ身裁方

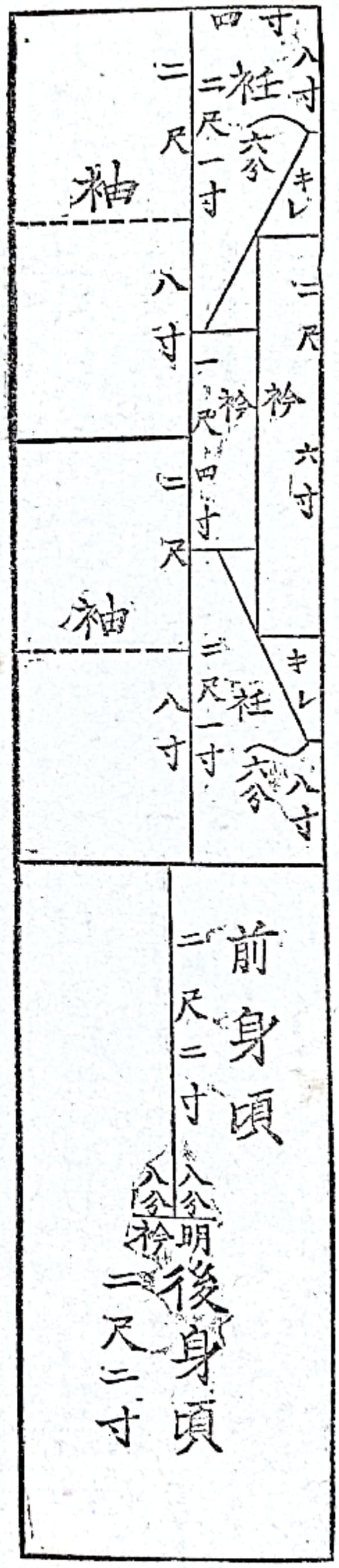


袖丈　袖、衽、衿
11寸,5分×4=46寸
用布　身頃
90寸—46寸=44寸
身丈
44寸÷2=22寸

裁切寸法

一 袖丈　一尺一寸五分　一 袖幅　六寸
一 身丈　二尺二寸　一 衿明　八分
一 衽丈　二尺一寸　一 衽幅　三寸五分
一 衿下　六寸　一 鉤の切り込み　六分
一 衿幅　一寸七分五分

片面物壹尺幅壹丈にて鈎衽一つ身裁方

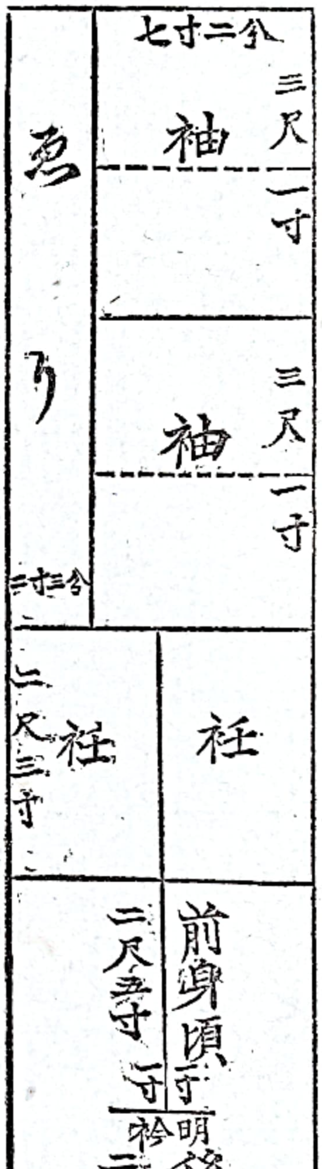


裁切寸法

一　袖丈　一尺四寸　一　袖幅　六寸、
一　身丈　二尺二寸　一　衿明　八分
一　衽丈　二尺一寸　一　衽幅　四寸
一　衿下　八寸　一　鈎の切り込み　六分
一　衿幅　二寸

袖丈　袖、衽、衿
14寸×4=56寸
用布　身頃
100寸—56寸=44寸
身丈
44寸÷2=22寸

並幅壹丈三尺五寸を以て別衽の一つ身裁方



裁切寸法

一袖丈　一尺五寸五分　一袖幅　七寸二分

一身丈　二尺五寸　一衿明　一寸

一衽丈　二尺三寸　一衿幅　二寸三分

一衽下り　二寸

袖丈　袖、衿

15,5×4=62

用布　袖、身頃

135—62=73

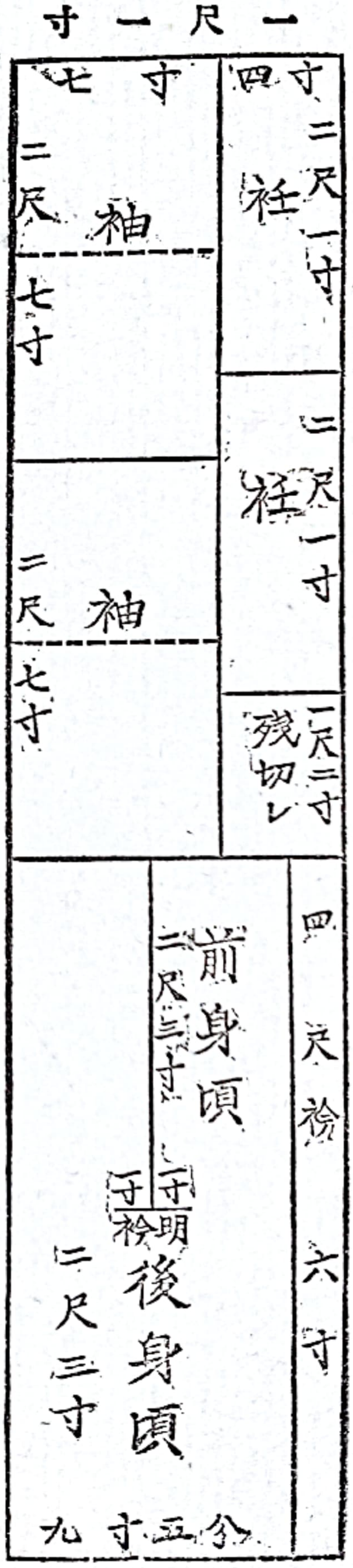
衽下り　身丈

(73+2)÷3=25

身丈、衽下り、衽丈

25—2=23

壹尺壹寸幅壹丈を以て一つ身裁方

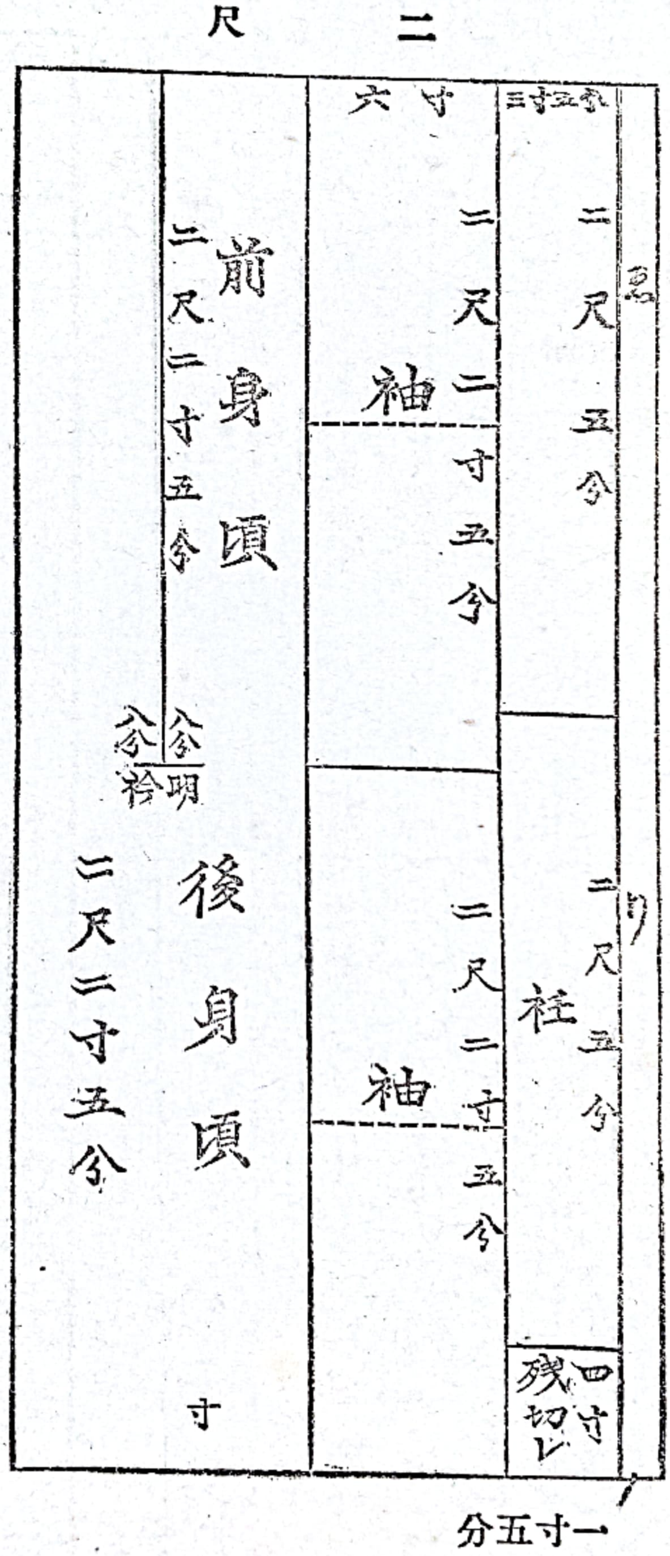


裁切寸法

一 袖丈 一尺三寸五分　一 袖幅 七寸
一 身丈 二尺三寸　一 身幅 九寸五分
一 衽丈 二尺一寸　一 衽幅 四寸
一 衿幅 一寸五分　一 衿明 一寸

袖丈　袖、衿
13,5 ×4＝54
用布　衿、身頃
100—54＝46
　身丈
46÷2＝23

二尺幅四尺五寸を以て一つ身裁方



裁切寸法

一 袖丈 一尺一寸二分五厘　一 袖幅 六寸

一 身丈 二尺二寸五分　一 身幅 九寸

一 衿明 八分　一 衽丈 二尺五分

一 衽幅 三寸五分　一 衿幅 一寸五分

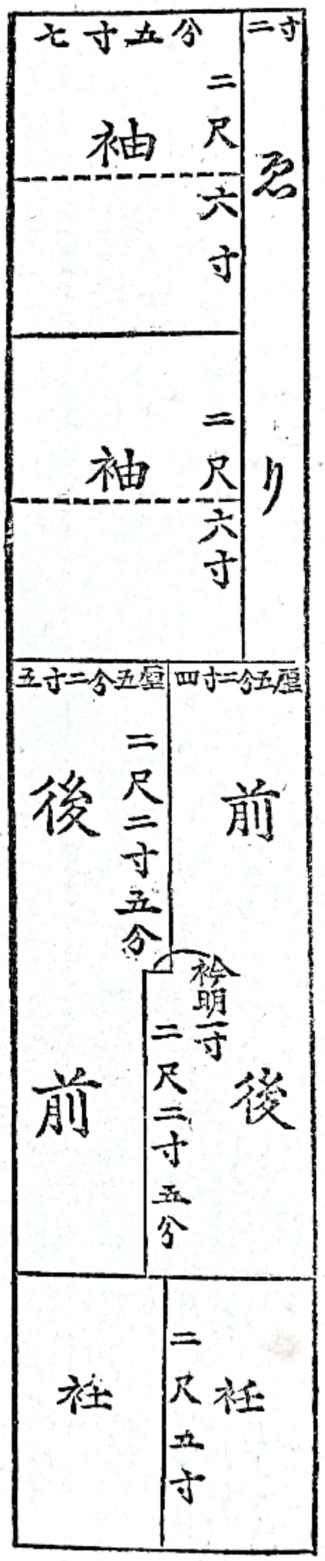
用布　袖丈

45÷4=11,25

用布

45÷2=22,5

並幅壹丈壹尺七寸五分を以て二つ身裁方



裁方寸法

一 袖丈 一尺三寸　一 袖幅 七寸五分

一 身丈 二尺二寸五分　一 衿明 一寸

一 衽丈 二尺五分　一 後幅 五寸二分五厘

一 前幅 四寸二分五厘　一 衿幅 二寸

袖丈　袖

13×4=52

衽,身頃

117,5—52=65,5

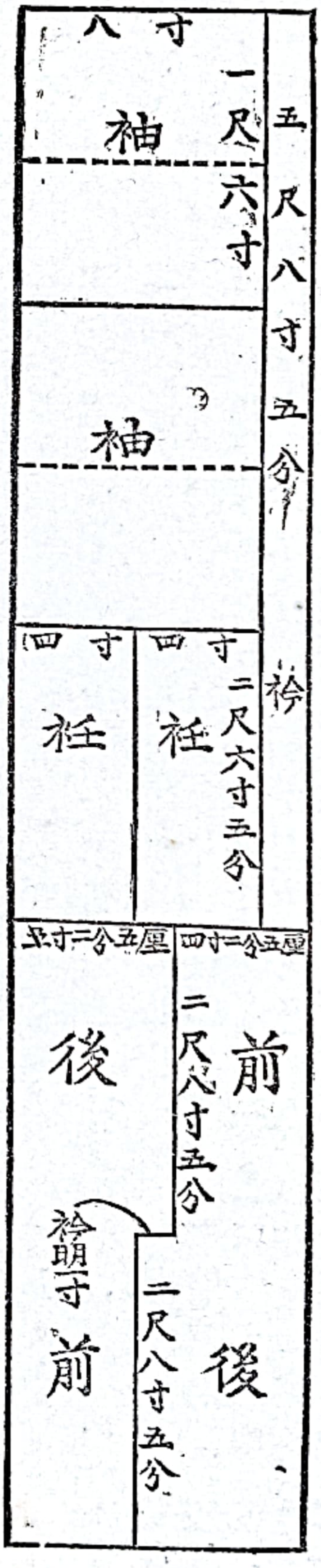
衽下り　身丈

(65,5+2)÷3=22,5

衽下り　衽丈

22,5—2=20,5

並幅壹丈壹尺五寸五分の布を以て元祿袖二つ身裁方



裁切寸法

一袖丈　八寸　一袖幅　八寸
一身丈　二尺八寸五分　一衿明　一寸
一衽丈　二尺六寸五分　一衽幅　四寸
一後幅　五寸二分五厘　一前幅四寸二寸五厘
一衿幅　一寸五分

袖丈　袖

$\frac{8}{4}\times 4=\frac{32}{4}$

$\frac{115,5}{4}-\frac{32}{4}=\frac{83,5}{4}$

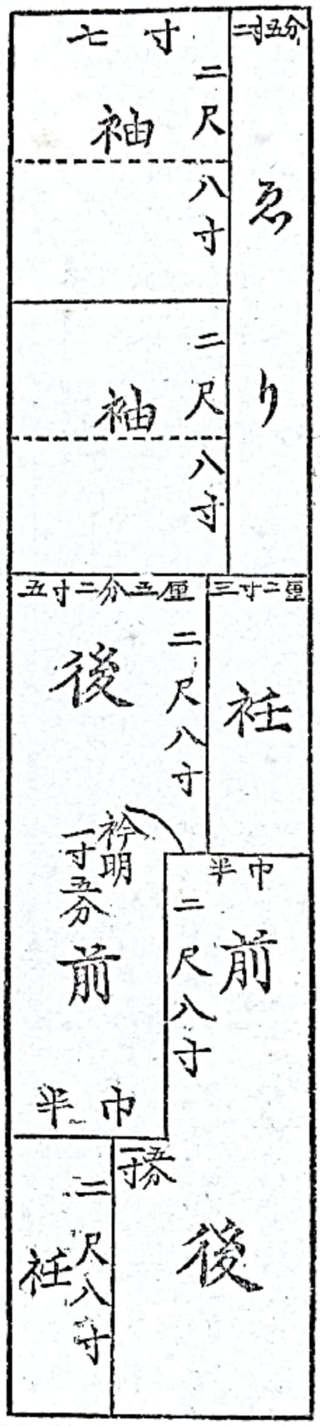
衽下り　身丈

$\left(\frac{83,5}{4}+\frac{2}{4}\right)\div 3=\frac{28,5}{4}$

身丈　衽下り　衽丈

$\frac{28,5}{4}-\frac{2}{4}=\frac{26,5}{4}$

並幅壹丈四尺を以て三つ身裁方



裁切寸法

一 袖丈 一尺四寸　一 袖幅 七寸

一 身丈 二尺八寸　一 衿明 一寸五分

一 後幅 六寸二分五厘　一 前幅 四寸七分五厘

一 衽幅 三寸二分五厘　一 衿幅 二寸五分

袖丈　袖,衿

14×4=56

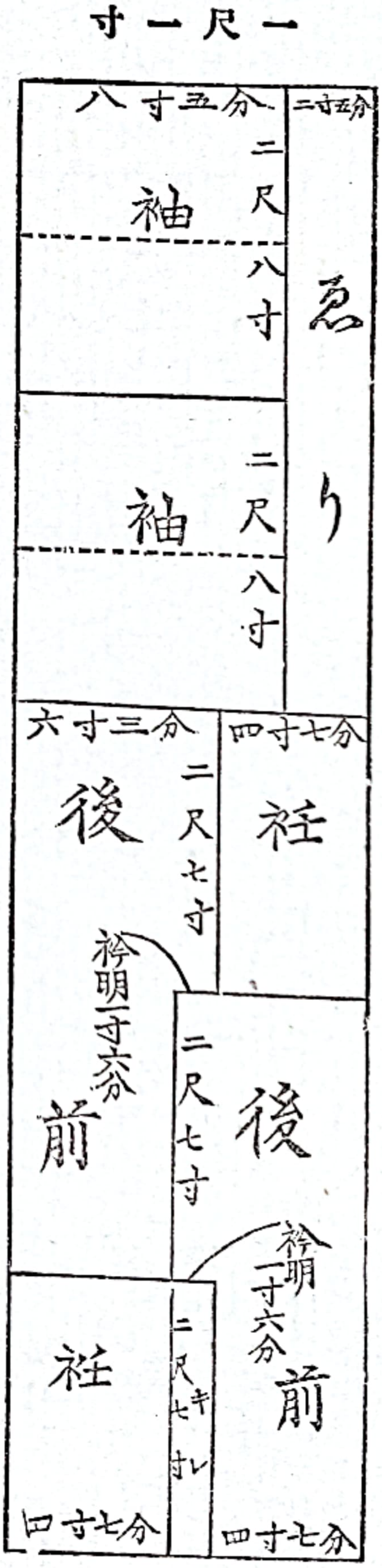
用布　衽,身頃

140—56=84

身丈

84÷3=28

片面物(壹尺壹寸幅)壹丈三尺七寸にて三つ身裁方



袖丈　袖衿
14×4=56
用布　衽身頃
137—56=81
身丈
81÷3=27

裁切寸法

一　袖丈　一尺四寸　一　袖幅　八寸五分
一　身丈　二尺七寸　一　衿明　一寸六分
一　後幅　六寸三分　一　前幅　四寸七分
一　衽幅　四寸七分　一　衽幅　二寸五分

並幅壹丈八尺を以て四つ身裁方

裁切寸法

一袖丈　一尺五寸　一身丈　三尺

一衿明　一寸八分　一後幅　七寸五分

一前幅　五寸七分　一衽幅　三寸八分

一衿幅　二寸

（四ッ身は摘衽なれば裁切らずして前身頃と續け置くべし）

袖丈　袖

15×4=60

用布　衿、衽、身頃

180−60=120

身丈

120÷4=30

並幅壹丈八尺の布を以て四つ身元祿袖逆衽の裁方

裁切寸法

一 袖丈 九寸五分　一 身丈 三尺五寸五分

一 衿明 二寸　一 後幅 七寸五分

一 前幅 六寸五分　一 衽幅 (上三寸 下四寸)

一 衿幅 二寸

袖丈　袖

9,5×4=38

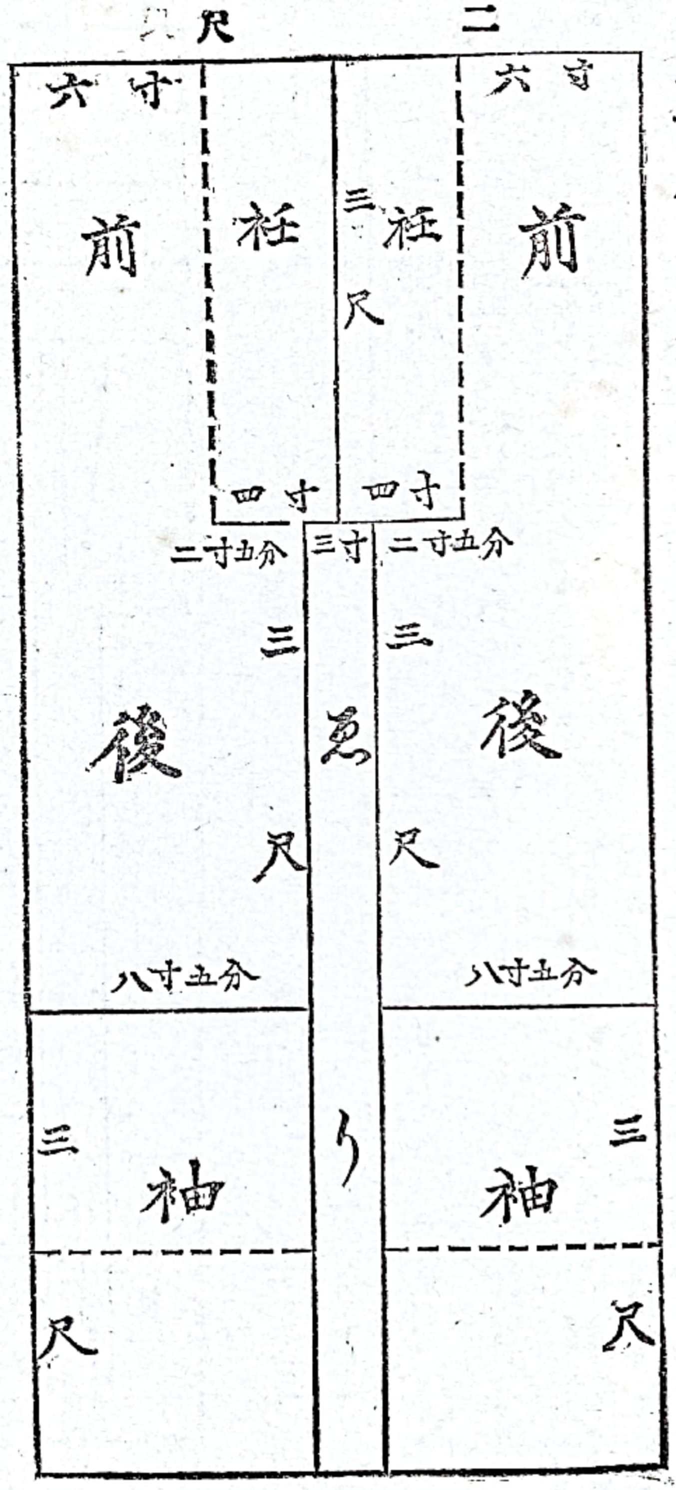
用布　衿,衽,身頃

180―38=142

身丈

142÷4=35,5

二尺幅九尺を以て四つ身裁方



裁切寸法

一　袖丈　一尺五寸　　一　袖　八寸五分

一　身丈　三尺　　一　後幅　八寸五分

一　前幅　六寸　　一　衽幅　四寸

一　衿幅　二寸　　一　衿幅　二寸

袖丈　袖

15×4=30　身頃

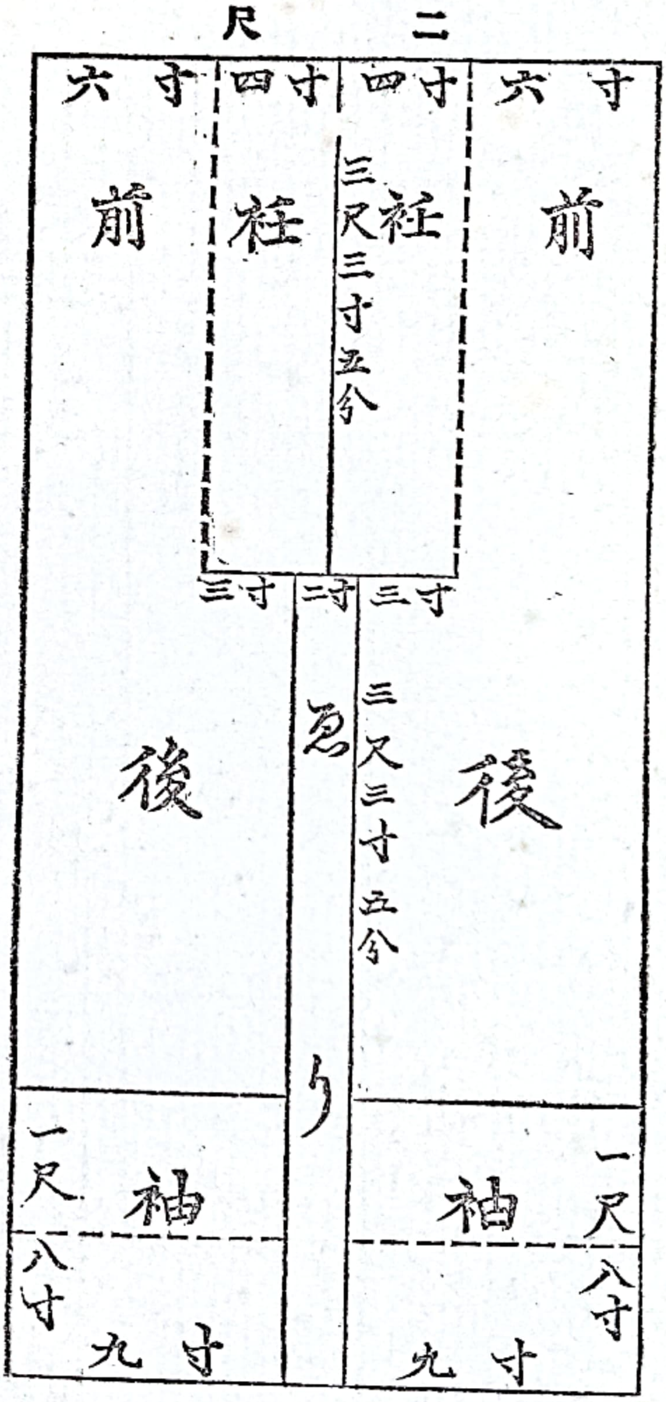
用布

90−30=60

身丈

60÷2=30

二尺幅八尺五寸を以て元祿袖四つ身裁方

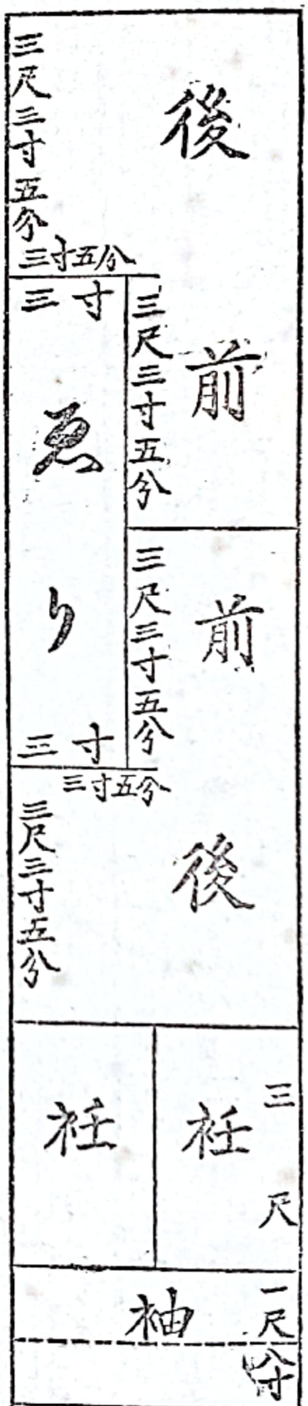


裁切寸法

一 袖丈 九寸
一 身丈 三尺三寸五分
一 前幅 六寸
一 衿幅 二寸
一 袖幅 九寸
一 後幅 九寸
一 衽幅 四寸

袖丈　袖
9×2=18
布用衿,衽,身頃
85−18=67　身丈
67÷2=33,5

並幅二丈の布を以て前衿元祿袖の裁方



裁切寸法

一 袖丈 九寸 一 身丈 三尺三寸五分

一 衽丈 三尺 一 前幅 六寸五分

一 衿幅 三寸

袖丈 袖

9寸×4=36寸

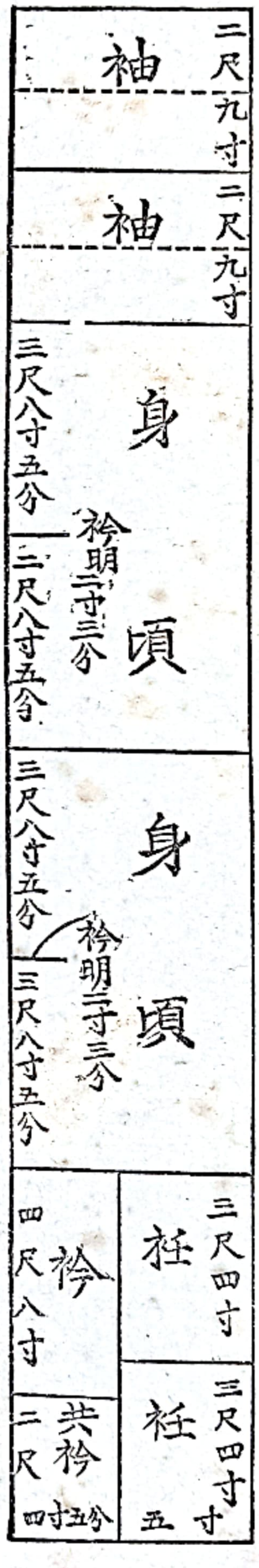
用布 衿、衽、身頃

200寸—36寸=164寸

衽下り 身丈

(164寸+3寸5分)÷5=33寸5分

並幅二丈八尺の布を以て男物棒衽の裁方



裁切寸法

一 袖丈 一尺四寸五分　一 身丈 三尺八寸五分

一 衽丈 三尺四寸　一 衿丈 四尺八寸

一 共衿丈 二尺　一 衿明 二寸三分

袖丈　袖

14,5×4=58

用布　衿,衽,身頃

280—58=222

衽下り二倍

222+9=231

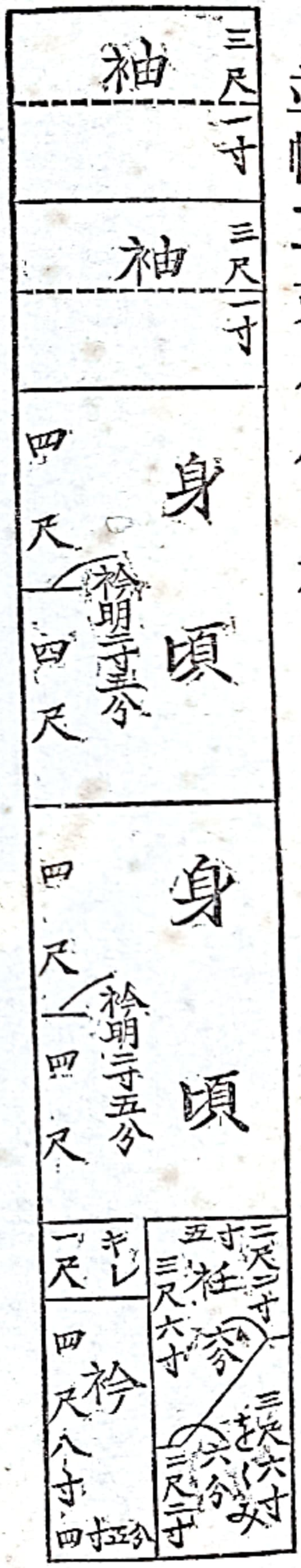
身丈

231÷6=38,5

衽下り　衽丈

38,5—4,5=34

並幅二丈八尺の布を以て女物鈎衽の裁方



裁切寸法

一 袖丈 一尺五寸五分　一 身丈 四尺
一 衽丈 三尺六寸　一 衿下 二尺二寸
一 衿丈 四尺八寸　一 衿明 二寸五分

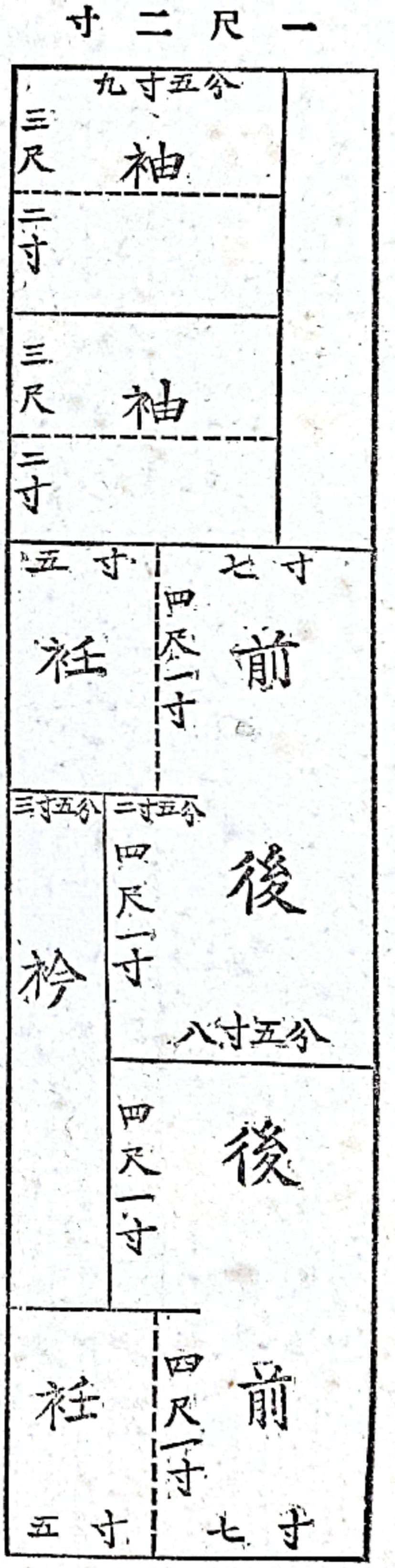
袖丈　袖
15,5×4=62

用布　衿,衽,身頃
280−62=218

衿下　衽下り
(218−22)+4=200
身丈

200÷5=40
衽下り　衽丈
40−4=36

(壹尺二寸幅)二丈二尺八寸を以て女物裁方



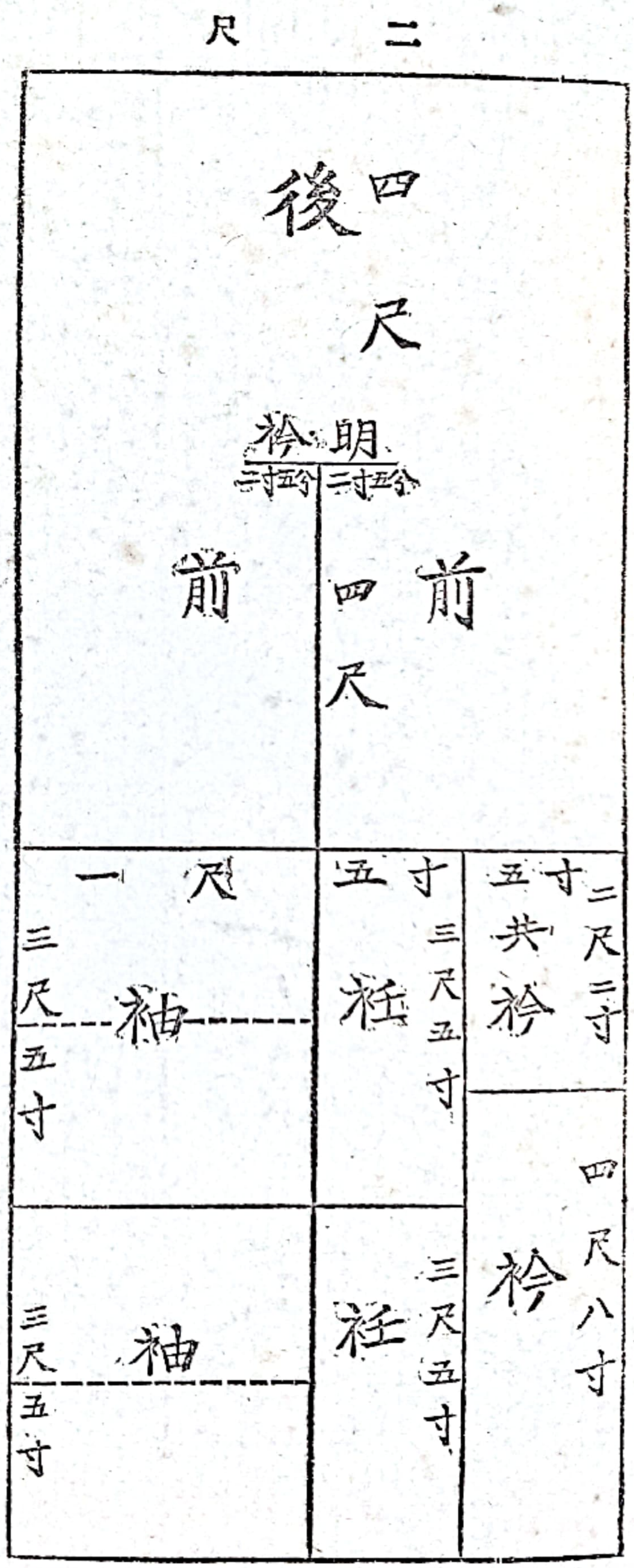
裁切寸法

一袖丈　一尺六寸　　一身丈　四尺一寸
一衿明　二寸五分　　一後幅　八寸五分
一前幅　七寸　　　　一衽幅　五寸
一衿幅　三寸五分

(衽は四つ身同様摘衽なり)

袖丈　袖
16×4=64
用布　衿衽身頃
228−64=164
身丈
164÷4=41

（二尺幅）壹丈五尺にて女物裁方



裁切寸法

一 袖丈 一尺七寸五分　一 身丈 四尺

一 衿明 二寸五分　一 袖幅 一尺

一 衿丈 四尺八寸

袖丈　袖
17,5×4=70
用布　身頃
150—70=80
身丈
80÷2=40

(ハ)木綿の地伸　木綿類は尺と幅を調べ、兩手にて尺と幅とを平になる樣引き伸し地質を整へ、巻き棒にまきて後裁方をなす、然し織緣の餘り弛みたる如きものは霧をかけ、巻き棒に堅く巻き置く可し、木綿は普通には火熨斗を用ひずして、水にて地伸をなす可し。

一、木綿類は生木綿、晒木綿、眞岡木綿、木綿縞、形付、双子、絞、小倉、紋羽、雲齋、金巾、寒冷紗等何れも地伸の方法全じ。

(ニ)麻布の地伸　生麻、晒麻、上布、縮。

麻布も木綿同樣に霧をかけ、丈及び幅を整へ、木綿同樣なる堅き質の巻き棒に半日位巻きて地伸をなし、然る後に裁合せをなす。

(ホ)絹布の地伸　絹布は其の性質區々くなれば無地、形附、模樣、染色、等を調べ、織緣の張りたるものは、前の法に依りて緣を伸し、反物のあだ織を火熨斗にて消し、皺の寄らざる樣に棒に巻きて後に裁合をなす(但し巻き棒は用具に述べたる桐製のも

の)

甲斐絹、龜綾、斜子、龍紋、綸子、絽、襦子、糸織、八丈、郡内縞、市樂、風通、透綾、明石、縮、琥珀、精好、鹽瀨、山繭、仙臺平、五泉平。

何れの品も火熨斗をかけて卷き棒に卷き、後に裁合をなす可し、火熨斗の際は裏よりなす樣注意すべし(貴重なる品は白紙の上より火熨斗をなす可し)

一、縮緬物は殊に織むら、染色、模樣、形附の點をよく調べ火熨斗にて地伸をなし、前同樣輕く棒に卷きて後に裁合をなす可し。

かのこ、絹しぼりは、火熨斗を用ずして裏打切をなすべし。

一、博多織は、天氣の惡しき時は地質の縮むものなれは、天氣の快晴なる日に地伸をなすこと最も良し。

(へ)絹綿交織　絹と同樣に火熨斗をなす。

(ト)毛布類メリンスは裏より火熨斗にて地質を平にす、其他、フランネル、セル、カシミ

ヤ、ゴロー等は、湯伸又は霧をふきあいろん及び火熨斗にて地を伸し、巻き棒にかけて後裁合をなす。

(チ)けんちう、けんとん等山繭の類は地質の縮むものなれば、地伸の時に充分火熨斗を懸けて後裁方をなす可し。

裁方及び襟附地質に對する注意

地伸の法を施して後、衣服仕立寸法に應じ、表切裏切の性質を見分け、仕立上りて着したる時に、寸法の亂るゝ等のことあらざる襟裏、地と表地の割合を定むる事肝要なり、次に各地質により異る表裏の割合を述ぶべし、

一、市樂、風通、大島紬、紋織、　（表四尺なれば裏四尺一分表裏共同じ位の地質の時は表裏同尺にてよろし）

一、縮緬類、　表四尺二分　裏四尺三分五厘　（最も地質の厚きもの濱縮緬の如きものを云ふ）

一、御召縮緬、　表四尺　裏四尺一分　（縮緬普通の品）

一、銘仙、糸織、八丈、　表四尺　裏四尺五厘　（木綿の總裏の時は裏四尺一分とす）

一、木綿　表四尺裏四尺一分（地質の都合にて多少加減をなすべし然かし裏は一分長くする迄とす）

一、絹縮、きんしゃ縮緬

一、うづら縮緬、ゑぼしちりめん

（何れの品も表四尺裏四尺一分とす）

一、鹽瀬、羽二重、斜子、（表四尺裏四尺一分五厘迄とす此種類地質の厚きものとす）

一、琥珀、精好、（表四尺裏四尺一分五厘迄とす此種類の内地質の厚きものとす）

一、羽二重、紋羽二重、（表四尺裏四尺一分）

一、龜綾、龍門、（表四尺裏四尺一分）

一、透綾、明石、縮絽紗、（表四尺裏四尺）

一、繻子、（表四尺裏四尺）

一、金襴緞子、綾錦、（表四尺裏四尺一分）

一、觀光縮緬、觀光繻子、錦金襴、新繻珍、新紬縮緬、（新縮緬）毛繻子

（此等の品は普通絹の割合にて良し表四尺裏四尺一分迄とす）

毛布類

一、めりんす・ふらんねる・せる・かしみや・ごろ〻・らしや、（表四尺 裏四尺五厘）

以上述べたるは現今最も普通の物なれども將來織物業進歩するに從ひ種々なる新意匠新工夫のもの出て來たるは明なれば其地質の厚薄及び其性質を見分て裏と表との割合を定むること肝要なり、

第六章　單衣襦袢篦附及び縫ひ方

縫ひ方注意の事

一、ふくろ縫の縫込は總て一分とす、

ふくろ縫をなすには、布兩端を殘すべし、其寸法は、背の縫込即ち衿附の所、裾、袖の端、何れの箇所も縫込内一分位奥迄とす。

二、普通の縫代は二分五厘と心得べし。

三、幅を定むるには、篦附に於て述べたる通り、何れの所も縫目より定む、例へば脊縫をして、後幅を附け、脇縫をして、前幅を附ける如くなさゞる時は、單衣の如きはよろしきも、重ね物の時に、寸法の同じからざる等のことあり、殊に男重ね物になれば、五厘の幅も大切なるものなり、されば幅の篦附は、普通篦附の如く度になさずして、前述の如く縫ひては、其縫ひ目より順次なすべし。

一ツ身襦袢縫ひ方

一 縫方順序

(一) 袖縫

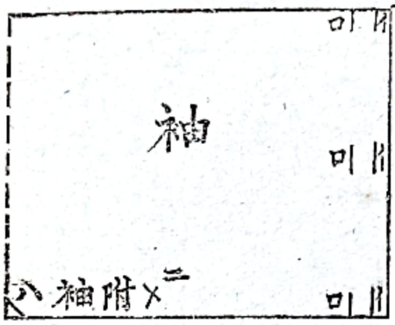
(二) 身頃（兩・脇）

(三) 馬乘（前身頃、後身頃）

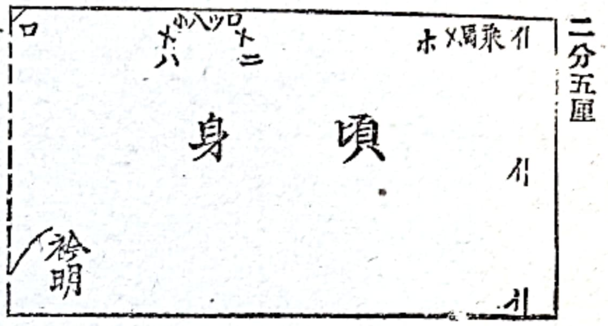
(四) 裾縫（前身頃、後身頃）

一つ身襦袢の篦附方(單衣)(一)

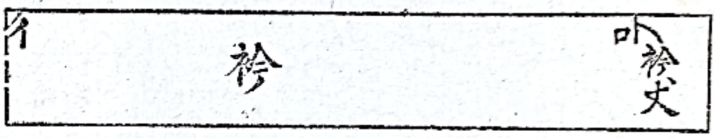
(1)



(2)



(3)



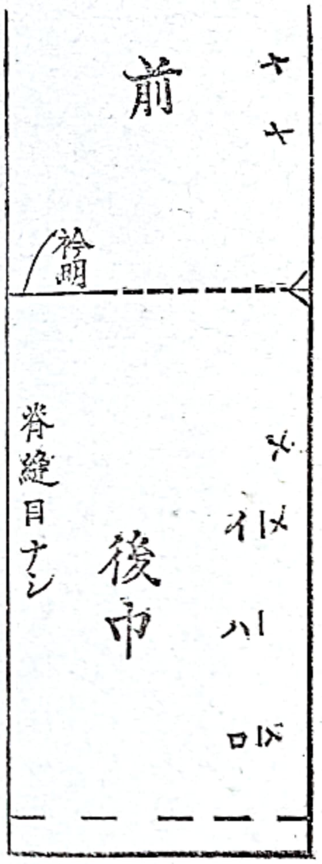
(1) 袖は二枚共中を表に重ねて此の圖の如く二つ折にす(左を輪にして)左より丈を計りて不揃ひの所は裁庖刀にて裁ち落し第一に袋縫代一分として(イ)印の通りにす第二袖丈寸法を(ロ)印の如くして(ハ)印袖山、(ニ)袖附印をなす。

(2) 身頃も袖篦仝様に中を表にして圖の如く衿明を手前に置きて左輪の方より丈を定めて裾を切り揃へて裾口縫代ゝ二分五リンと定めて(イ)印通りになす次に(ロ)の山印をして(ハ)(ニ)と篦印をなす。

(3) 衿丈は左を輪に中表にして(イ)山印をなし衿丈け(ロ)の如く丈の印をなす。

一つ身襦袢の箆附方(單衣)(二)

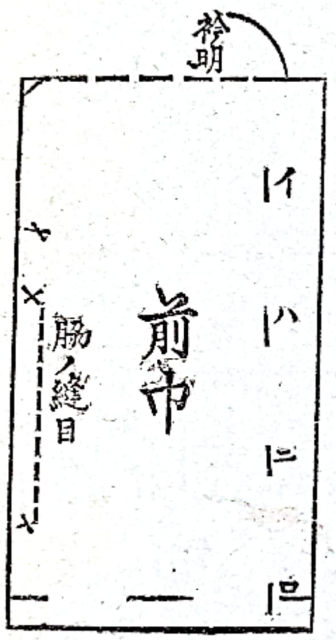
(4)



後幅の箆附は(2)圖の如く丈の箆の附きたるものを臺の上に置きて後幅の箆をなす。

脇縫の終りたるものを臺の上に置きて脇縫より幅を定めて前幅の箆をなす。

(5)



して臺の上に置き脊縫より正しく(イ)(ロ)(ハ)と印をして脇縫をなす。

(後幅箆印としては此方法最もよきものなれば圖の如く臺の上に置くと忘る可らず)

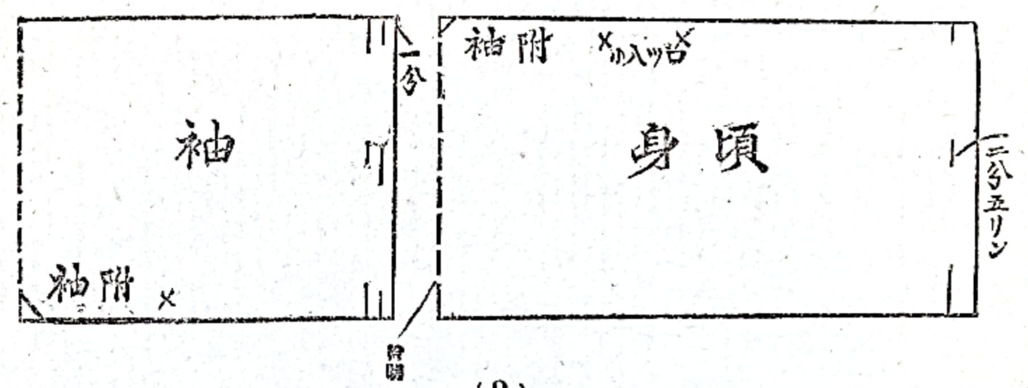
(5)

前幅は脇縫をして脇縫目より正しく前幅を計り衿明より前幅を圖の如く(イ)(ロ)(ハ)(ニ)と曲り方を平均に箆印をなす。

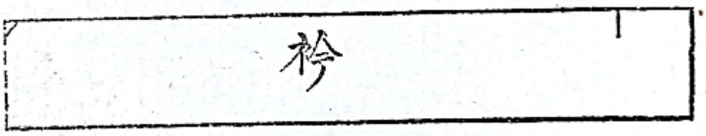
注意　後幅全條臺の上に布を置きて箆印をなすべし、此所の箆附不完全なる爲に上着下着の寸法齟齬することありされば襦袢なりとても決して不注意なることある可らず何事も始と云ふものは大切なれば注意せられたし。

本裁并に四つ身襦袢の篦附方

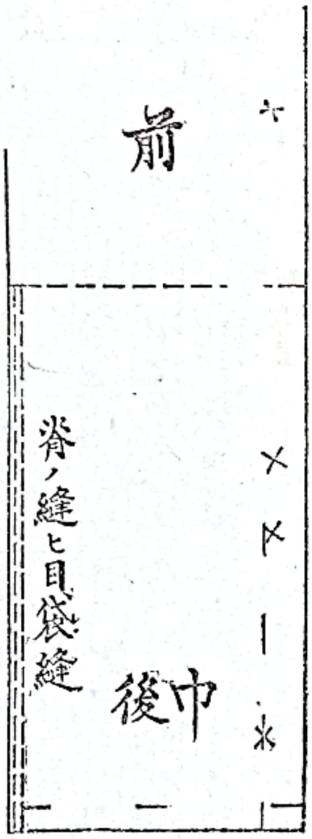
(1) (2)



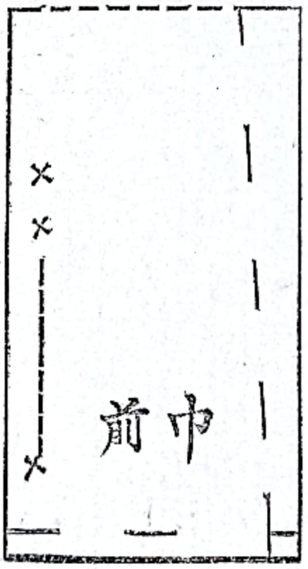
(3)



(4)



(5)

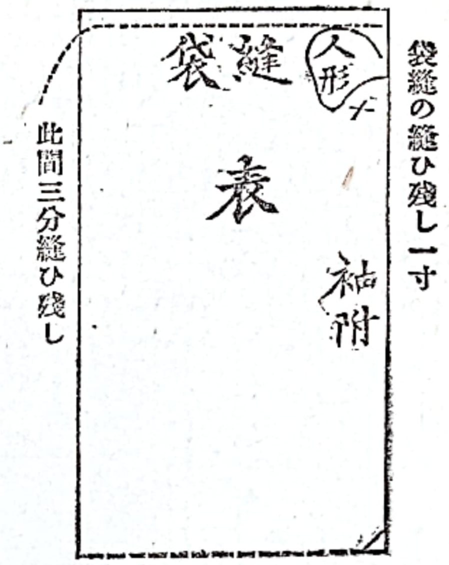


本裁、四つ身、車裁、篦附は(2)圖の丈篦を終り脊縫をして(4)の如く後幅の寸法を定めて篦附をなす。

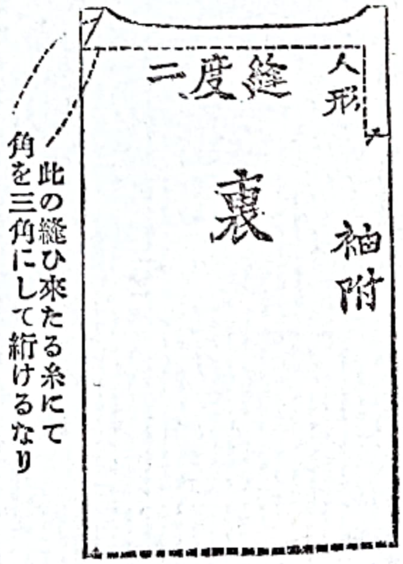
三つ身は前幅衿明より眞直なるのみ他は本裁四つ身同様なり。

襦袢の縫ひ方

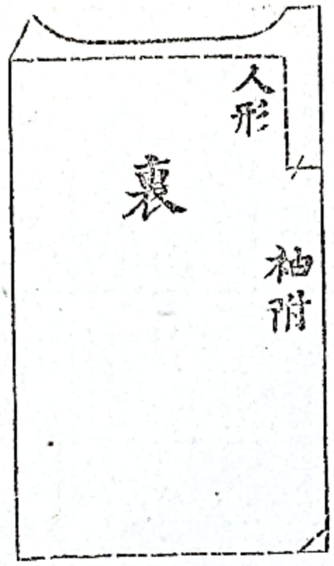
(1)



(2)



(3)

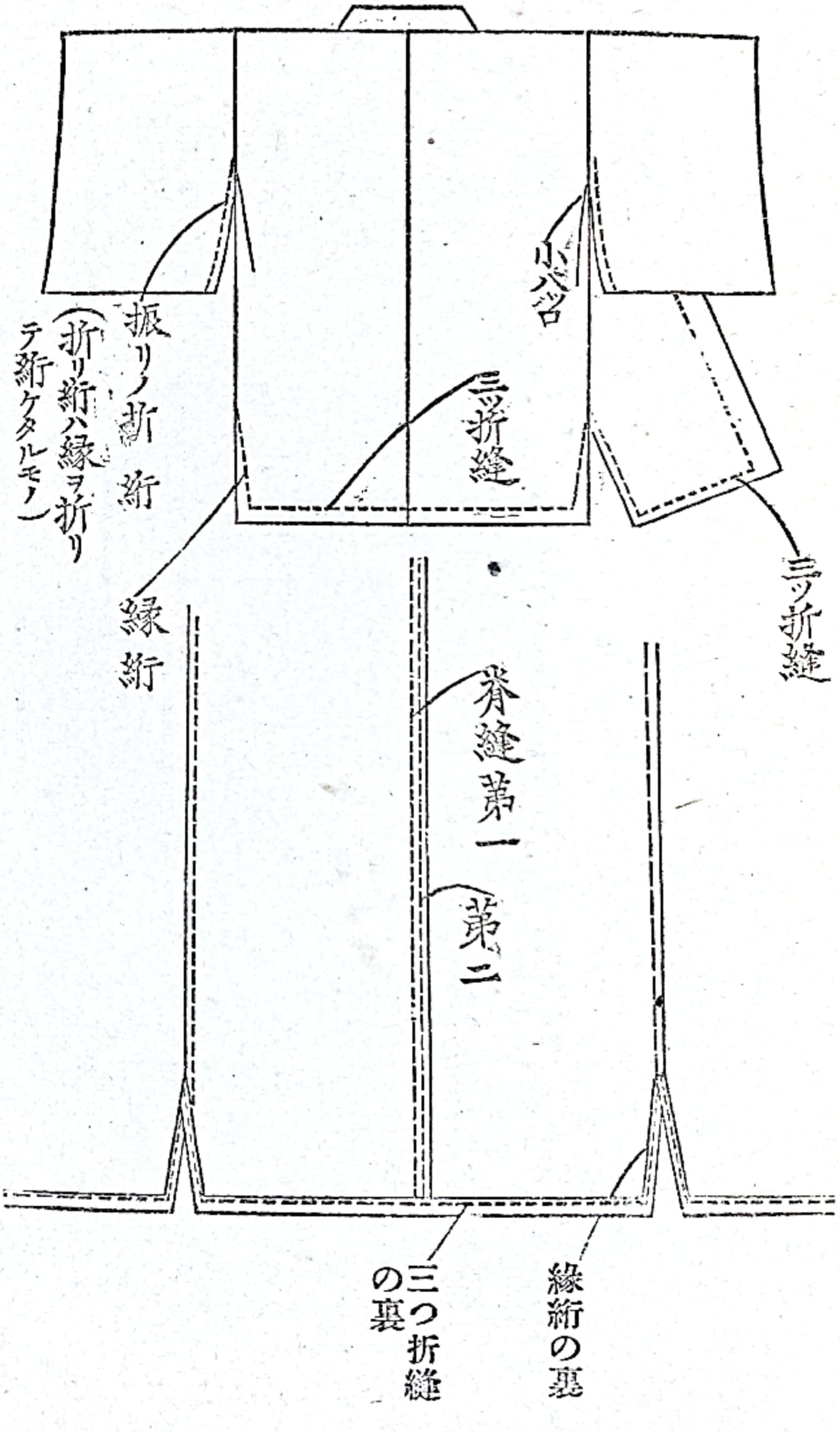


(1) 袋縫は一分にして必ず兩端を殘すべし。

(2) 袋縫をなし裏に返し二度縫をして角を三角に折り絎るなり。

(3) 角を三角に絎けたる所

襦袢の縫ひ上り



脊縫第一は二分五りんの縫ひ代第二は縁の端を縫ふなり但し一つ身は脊縫のなきのみにて他は本裁、四つ身、三つ身も縫ひ方に變りなし

(五)衿附(前身頃、後身頃)

(六)袖附(左　右)

(一)袖縫

袖は第一に袋縫の箆印の通り表より一分の縫代にて兩端を(縫込の折返るたけ)殘して細かに縫ひ、折をつけ、きせをかけず表に返し、第二箆印即ち袖丈印を見て、二分三針四針位の針目に、袂先き迄縫ひ、糸留をして、其糸にて第一圖の如く、縫込の端を、三角に折りてくけ置き、袖幅印をなす、袖口の方は木綿なれば、縁のまゝ他の品は、三つ折り絎をなすべし、絎ける針目は三分以下の針目になすを要す、然らざれば、針目に指先のかゝる如きこともあり、注意して細針になすべし。

(二)身頃脇縫

脇縫の箆印通り、左右共に後身頃を上に見て、上前下より馬乘印の所にて、抄ひ留をなし、小八つ口迄縫ひ、又抄ひ留をなす、下前は、小八つ口箆印の通りに縫ひて、一

針留め、馬乘印迄縫ふ可し、馬乘の抄ひ留をなしたる所及び、小八つ口抄ひ留めの所は、後身頃縫込の圖の如く、前身頃の上に斜にひらき、脇縫をしたる所を、今一度少しく縫ひ、其糸にて馬乘を緣絎するなり、小八つ口も同樣に緣絎をなすべし、裾は二分五りんの縫代を、一分五りん幅に、三つ折にして、縫ひ方に說明したる樣に、折縫をなすなり、此所は絎けてもよき所なれども、單衣木綿襦袢の如きは、再三洗濯するものなれば、縫ひ方も自然に、保存上よろしき、三つ折縫をなすべし、次に、前幅を、裾口の所にて計り、衿肩明迄、斜に折を附けて、衿附をなす。

(三)**衿附**は、下前より縫ひ始めて、抄ひ留をして縫ひ、衿肩廻にて、細かく縫ひ、上前縫ひ終りに於ても抄ひ留をなし、衿幅を定めて、衿先縫込一分內を縫ひ、其縫込を衿の縫ひ來りし所、即ち表衿の附根の所に、よく返し針にて綴をして、表に返し、三つ衿(肩明)に切れを綴附け、衿絎けを下前より、衿先の極く端の所に、一針出して留め、始めは一分位に一寸程くけ、後は三分位の針目に、衿附縫込にかゝる位の加減に絎

けるなり、終りも始め同様に、一寸位一分にくけ、留をして絎け返し糸を切るべし。

(四)袖附は、袖を内側に、身頃を外側にして、袖附印、袖山肩山印を、合せ待ち針をなし、袖附にて、抄ひ留をして、五分或は一寸、返し縫をなし、夫より普通の針目に縫ひ、袖山の所にて、五分位返し縫をして、並に縫ひ袖附終りは、始の時同様に、返し縫をして抄ひ留をなし、折を袖の方に附け表に返すなり。

三ッ身襦袢、四ッ身襦袢は脊縫を袋縫になすのみにて其他の縫ひ方は一ッ身同様なり、本裁襦袢も脊縫を、二度縫ひするだけにて他に變りなし。

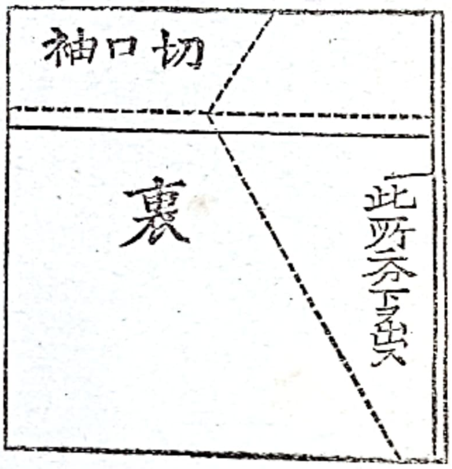
衿丈の不足の時は、衿下を附け三つ折縫をなすなり。

第七章　單衣長着篦附及び縫ひ方

單衣縫ひ方各部に就ての注意

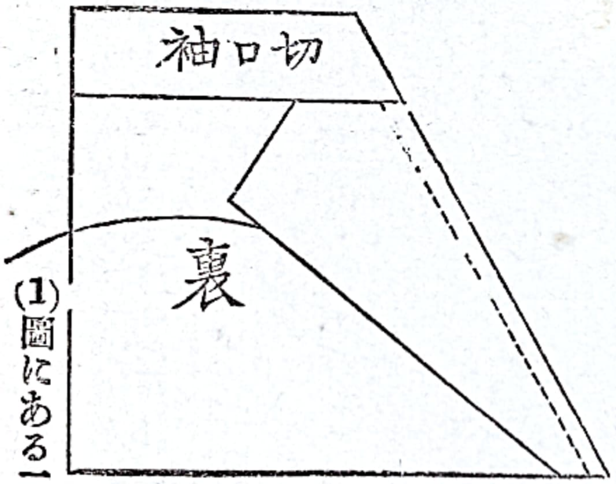
筒袖の縫ひ方(單衣)

(1)



(1)袖下を縫ふ所

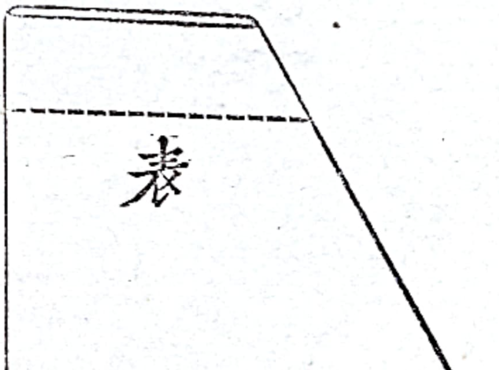
(2)



(2)袖口切を裏に絎け附ける所

(1)圖にある二分を折りて絎け附けたる所

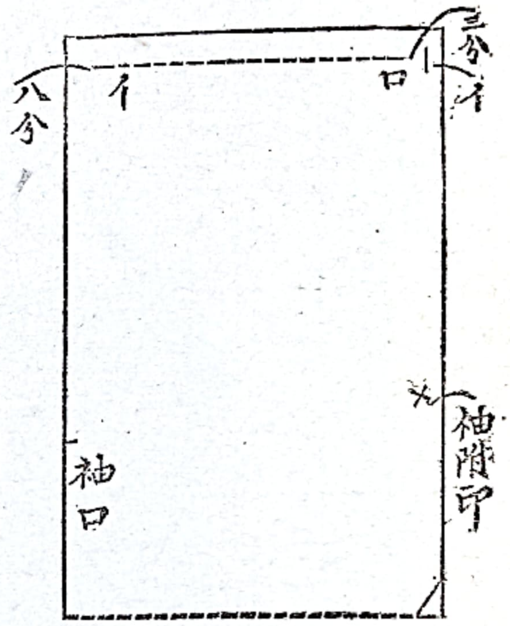
(3)



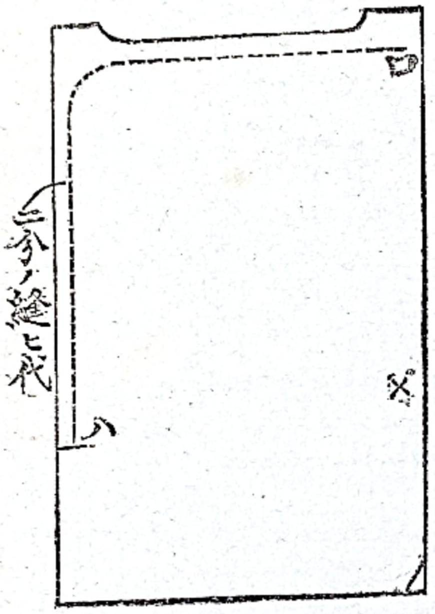
(3)袖の出來上り但し袖口切のなきものは袖下を縫ひ直に袖口の絎をなす

袖の縫ひ方

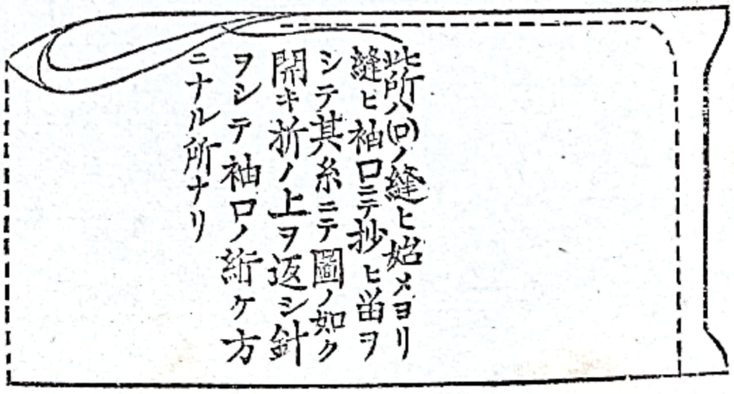
(1)



(2)

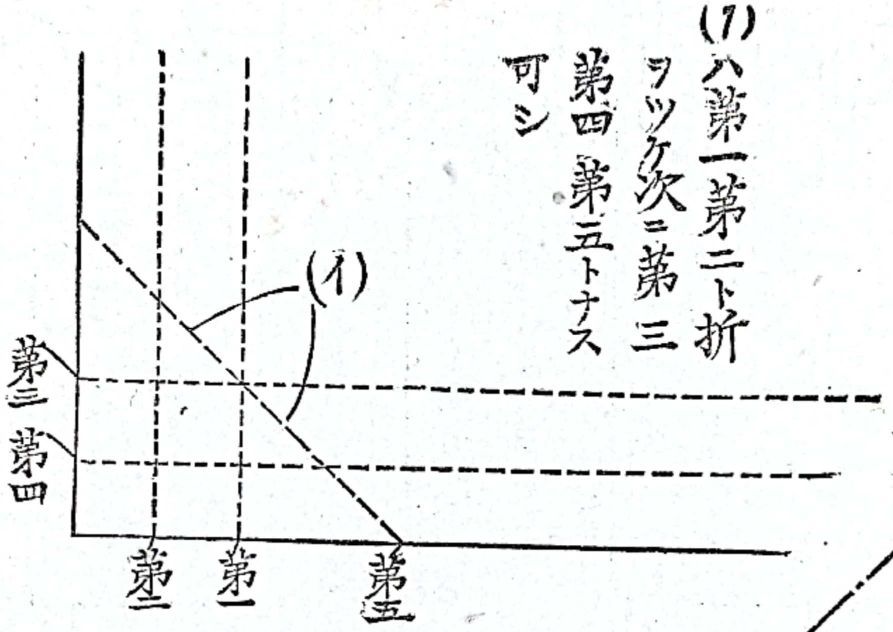


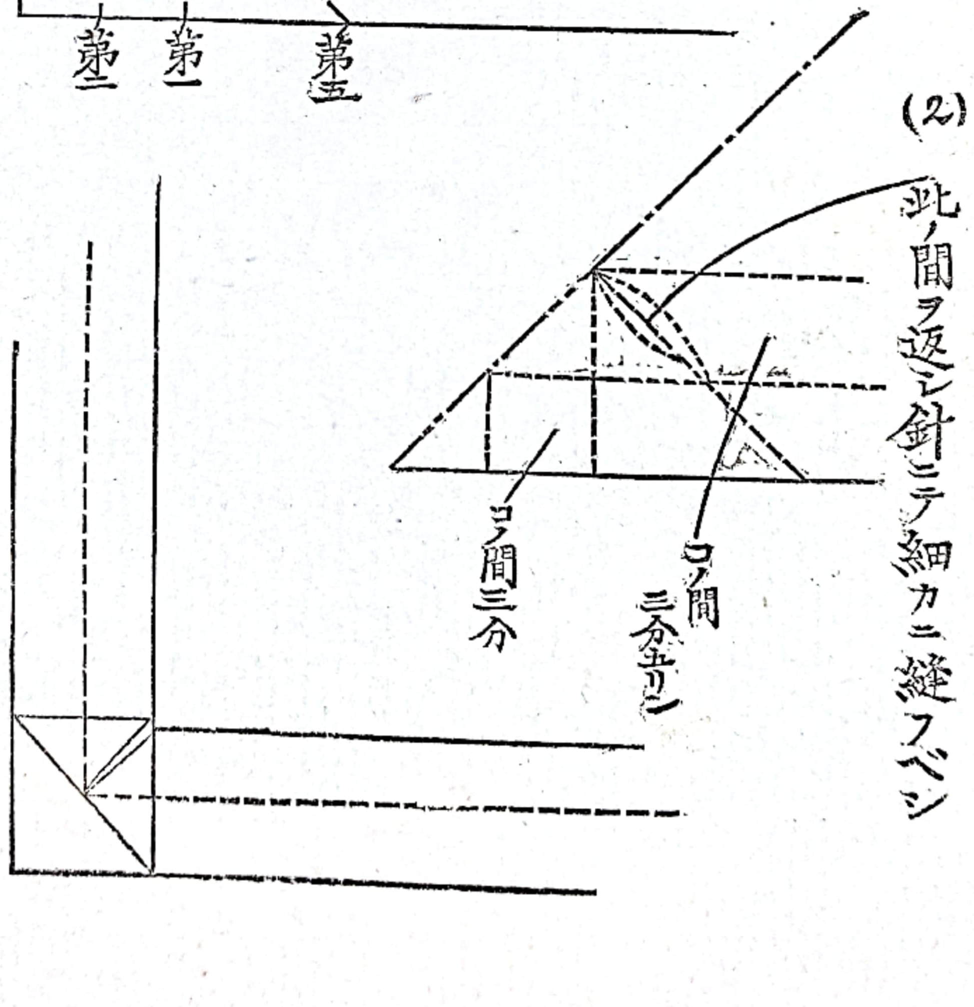
(3)



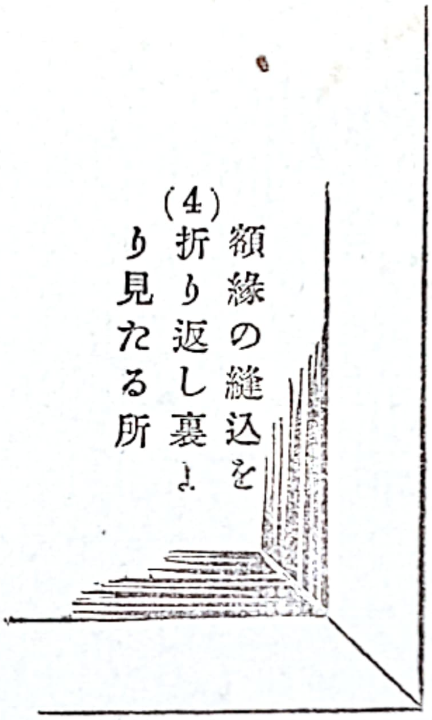
(イ)は袖巾印
(ロ)は縫ひ始め
(ハ)は縫ひ終り

褄先を額縁になす方法

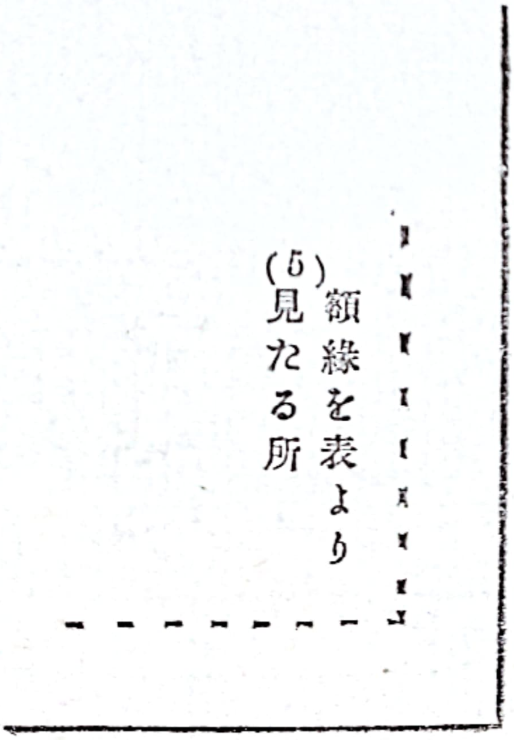

(1)ハ第一第二ト折
ヲツケ次ニ第三
第四第五トナス
可シ
(イ)
第三
第四
第二
第一
第五


(2)
此ノ間ヲ返シ針ニテ細カニ縫フベシ
コノ間三分
コノ間三分五リン

褄先出來上り



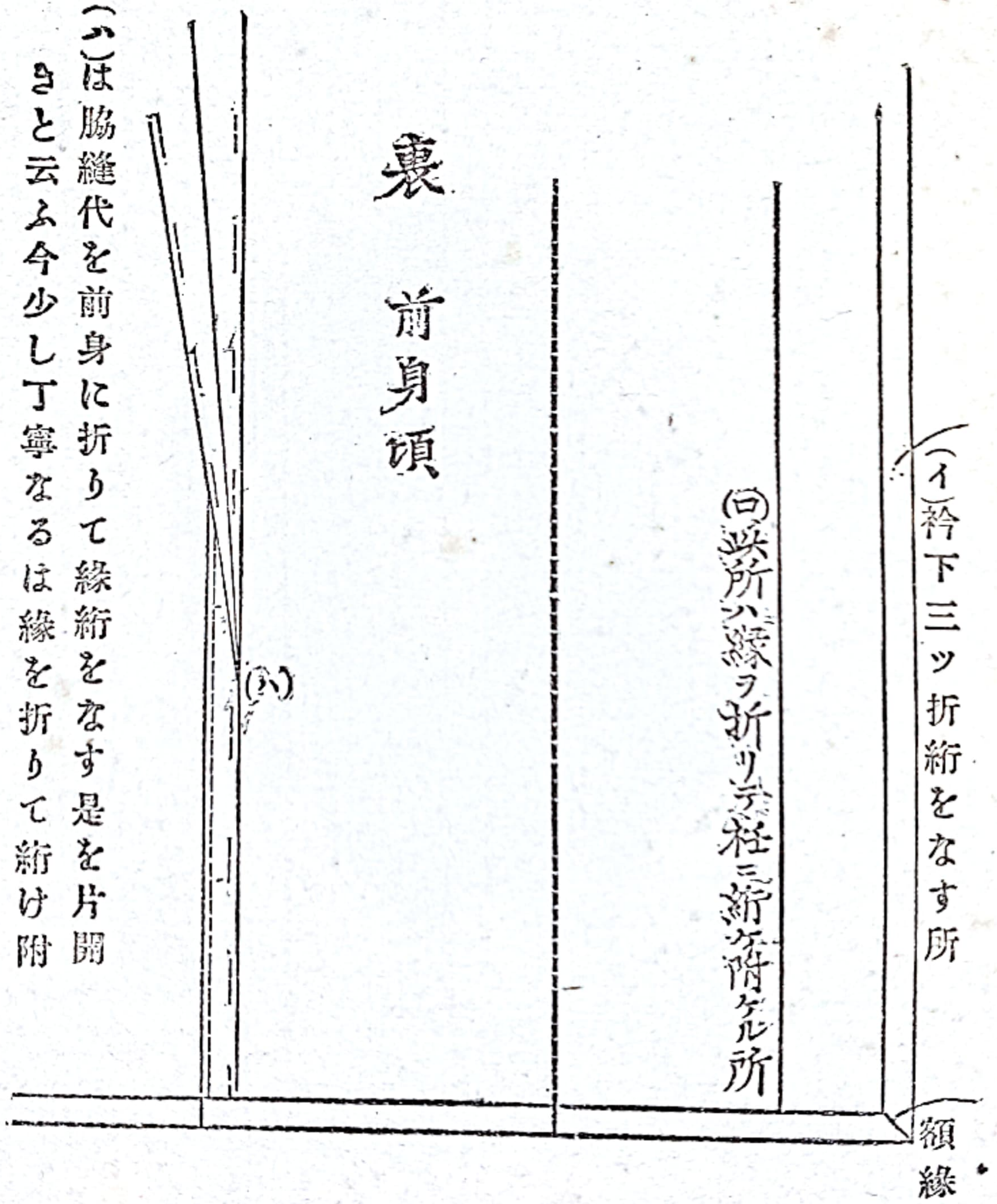
(4) 額縁の縫込を折り返し裏より見たる所



(5) 額縁を表より見たる所

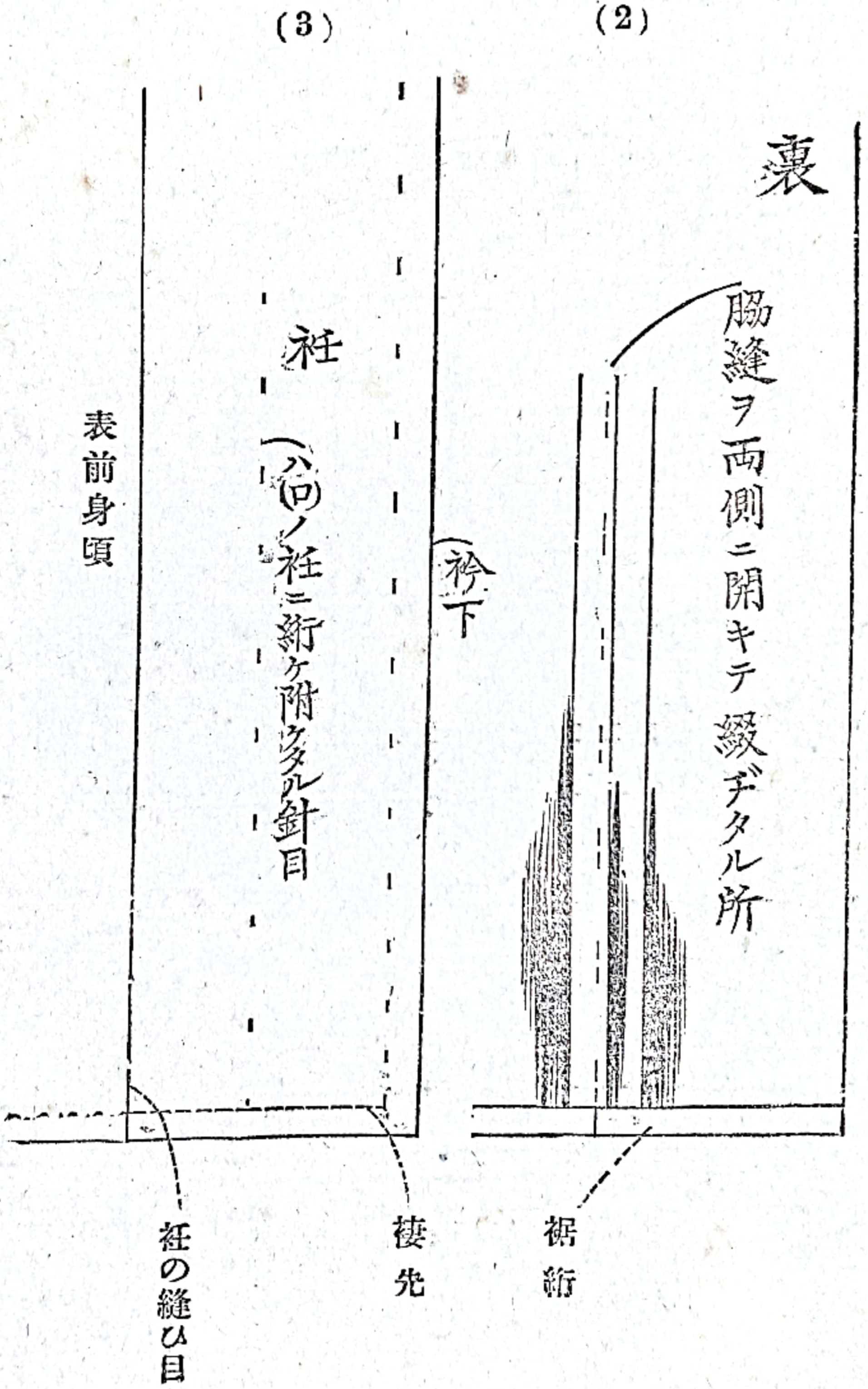
脇縫の開き方（一）

（1）

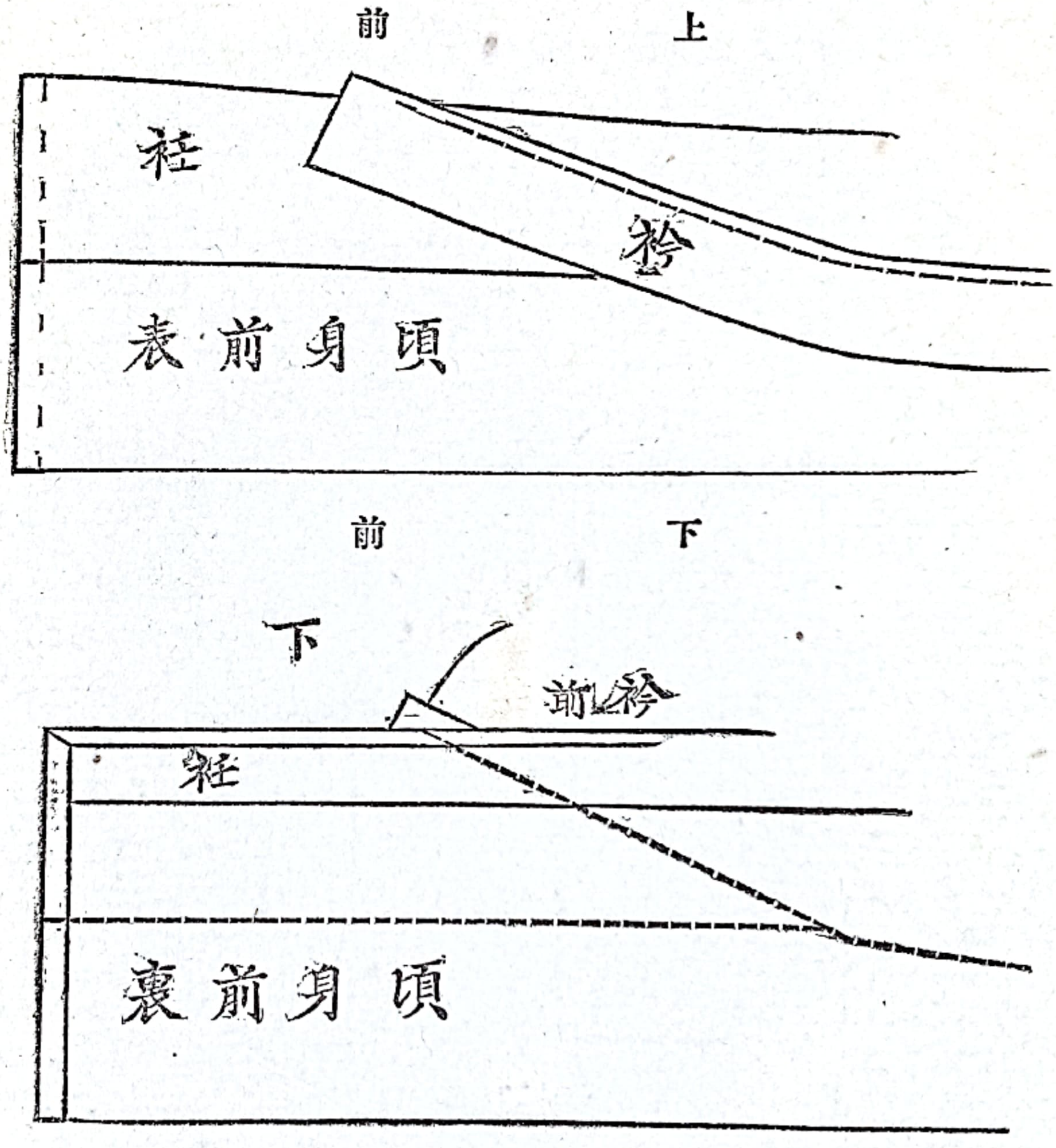


（ハ）は脇縫代を前身に折りて縁絎をなす是を片開きと云ふ今少し丁寧なるは縁を折りて絎け附なり

脇縫の開き方（二）



衿の附け方

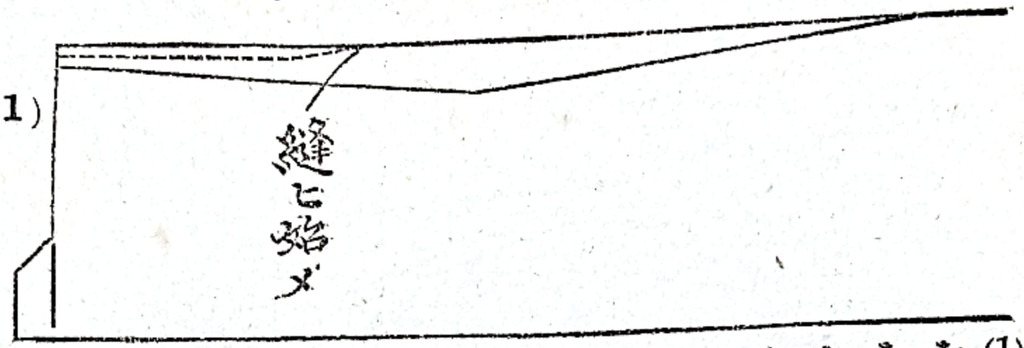


上前は脊縫より衿を見て附け下る所なり。

下前は脊縫より身頃を見て衿を附け下げる所なり。

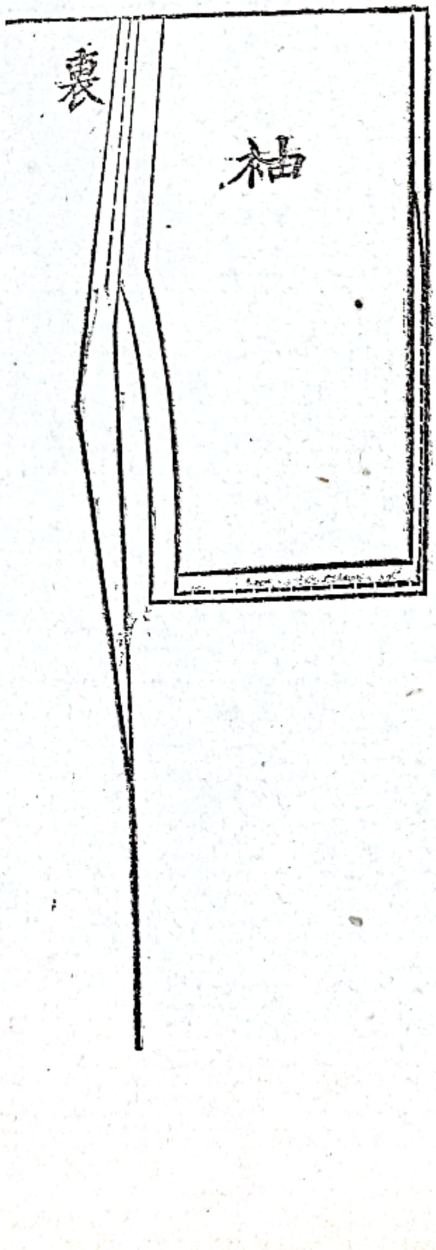
袖の附け方

(1)

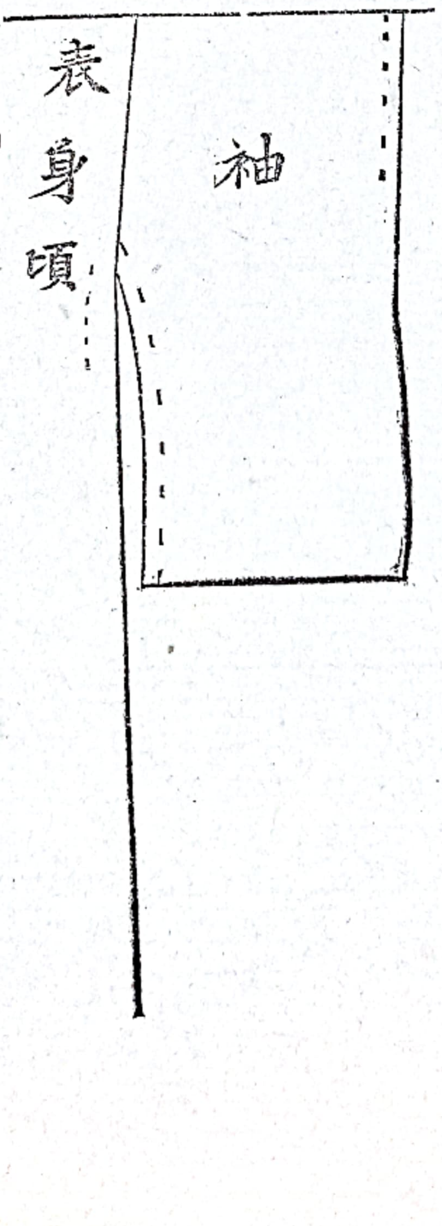


(1)は身頃を上に袖を内側にして圖の如く身頃を折りて縫ひ始め二三度貫き針をなし次に一寸位細かに返針をなしそれより普通に縫ふなり。

(2)



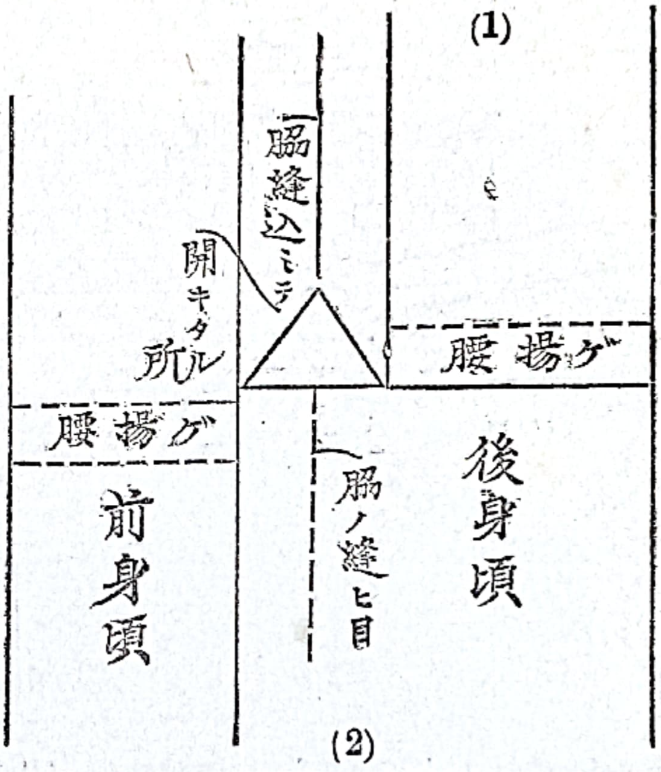
(3)



(3)は表より見たる所なり

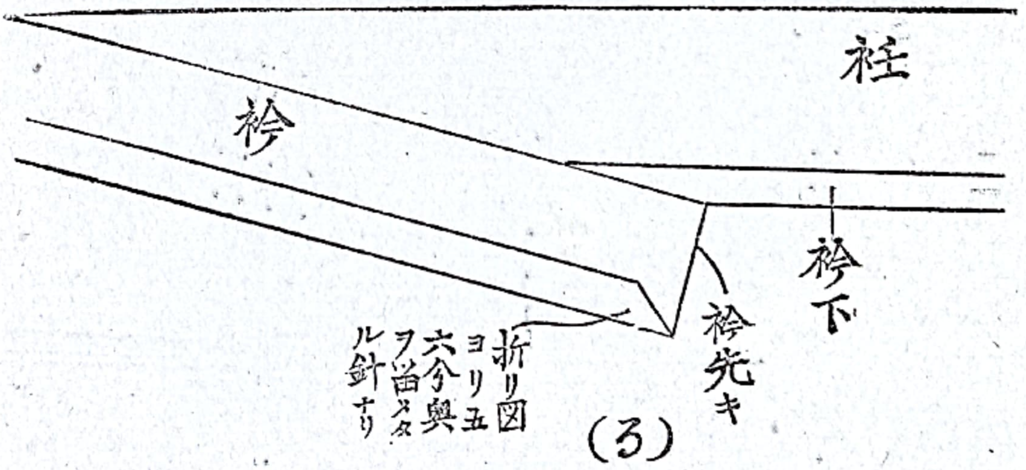
男物單衣腰揚及び衿の絎け方

(1)單衣男物の腰揚げの下前にて上前は此反對なり

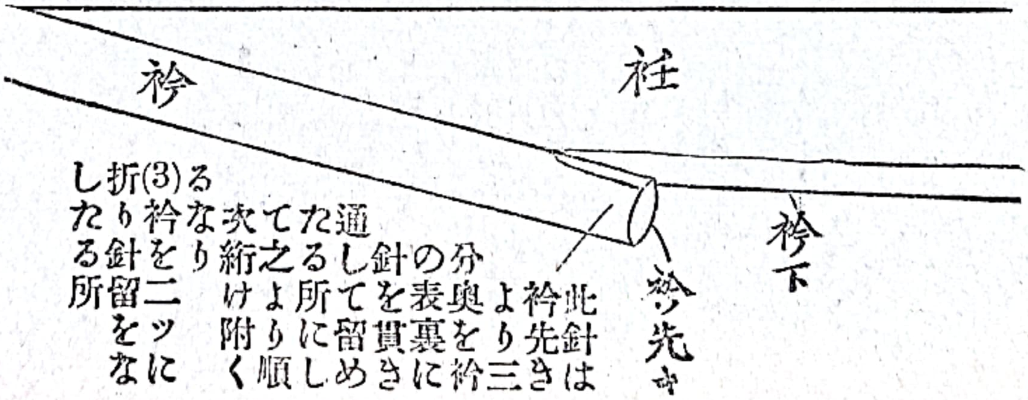


(2)單衣男物衿の折方始めの圖

(2)



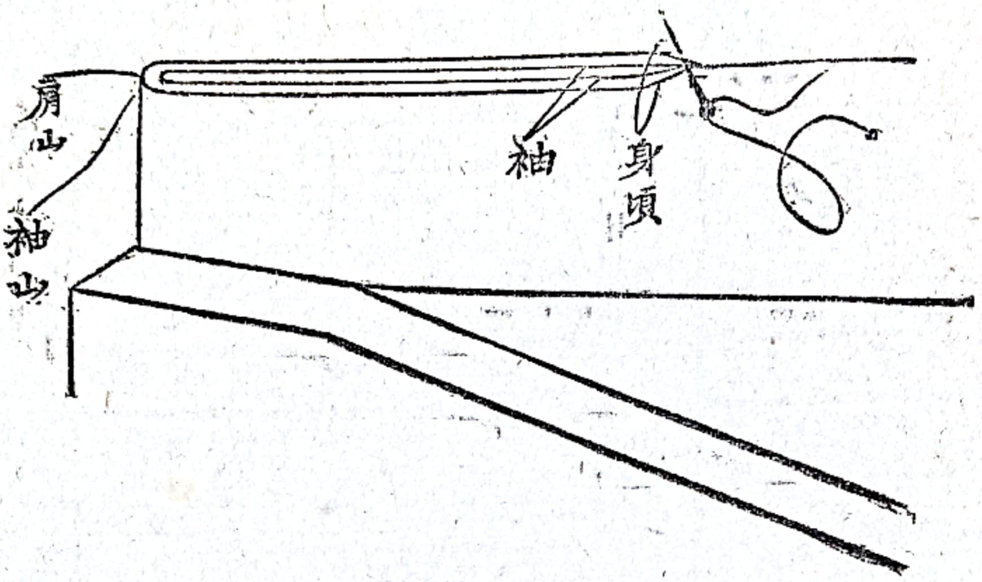
(ろ)



此針は衿先きより三分奥を衿の表裏に針を貫き通して留めたる所にして之より順次絎け附くるなり

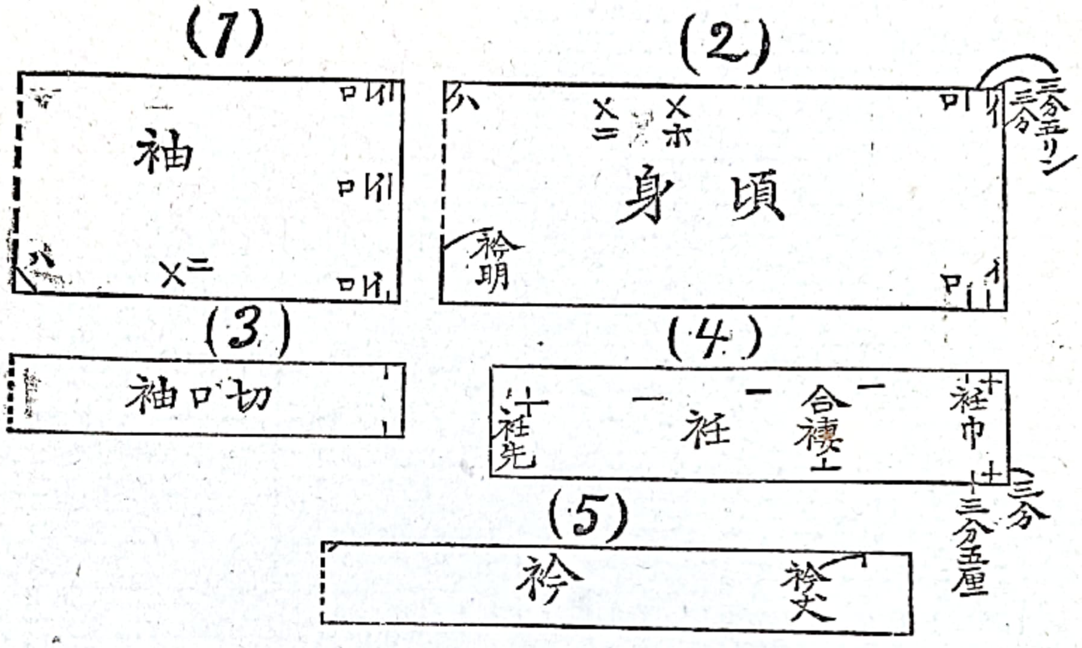
(3)衿を二ッに折り針留をなしたる所

單衣男物袖附四つ留針のかけ方



男物袖附の四ッ留は身頃にて袖を挾むと圖の如くにして手前より身頃、袖、又身頃と順に極めて淺く四枚の切に針を刺し食指と母指との指先にて堅く其の針の際を持ちたる後其針を貫き又更に同じ所に針を刺し糸にて留め其糸にて袖附をなすなり。

一つ身單衣の篦附方(濶口)(一)



(1) 袖は中表にして袋縫の篦(イ)の如くして次に(ロ)の袖丈縫込をなす(ハ)(ニ)の通りに袖山印と袖附の篦印をなす

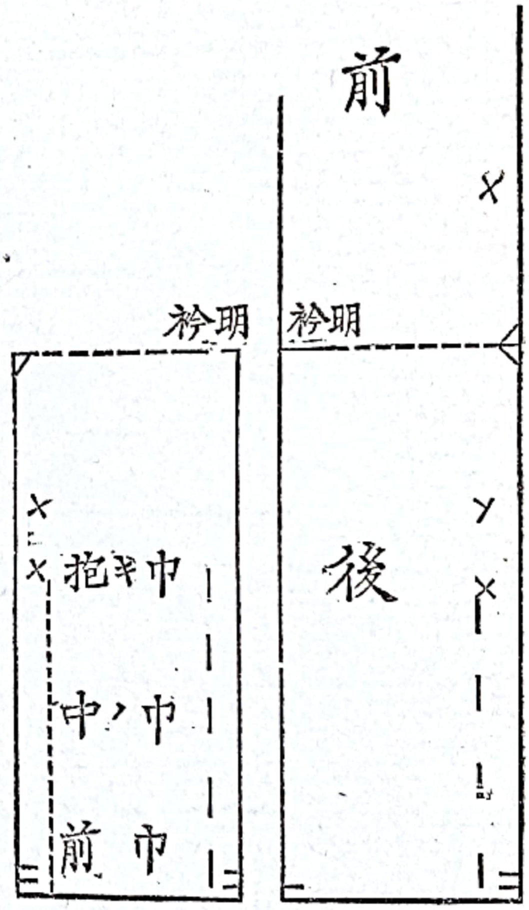
(2) 身頃篦は中表にして二枚重ね丈を揃へて(ロ)の丈の篦六分五りんをして巾三分(イ)の篦をなす 次に 袖山(ハ)篦をなし(小ハツロ)(ニ)(ホ)の印をなすものなり

(3) 袖口切は中表にして袖口丈(イ)印をなす

(4) 衽下りより裾口迄の寸法を計り衽丈とす圖の如く捧衽の時は衿下の方より縫込を取り衽幅を定め合褄にて二分幅をつめ合褄の縫込より五分衽先の縫込を多く篦をして圖の如く篦をなすものなり。衽に衿附の篦をなすなれども衽附の加減にて多少の寸法の異ることもあれば衽を附けたる後に篦をなす可し一ッ身より三ッ身四ッ身本裁皆此方法なり

(5) 衿は二ッ折にして山印をなし衿丈の篦をなすなり

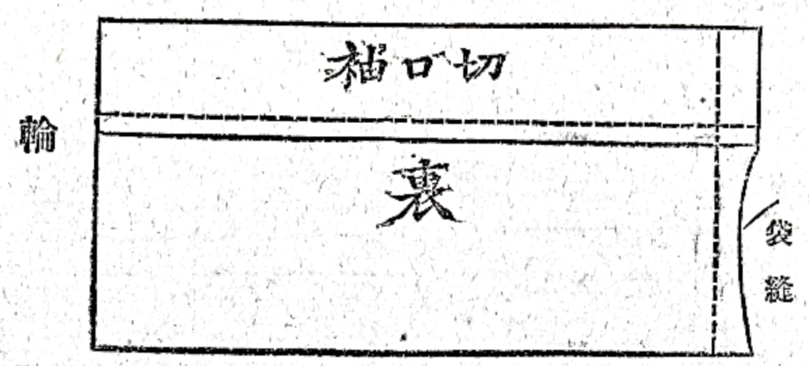
一つ身單衣の篦附方(二)



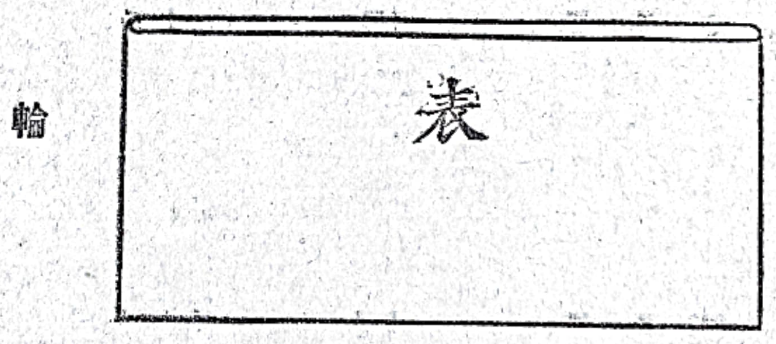
(6) は(3)の身丈篦附出來たるものを襦袢の時の通りに臺の上に圖の如く置き正しく後幅を附け脇縫をなすなり

(7) は(6)圖の脇縫出來上りたるものに前幅を附ける方法にて衿肩より前幅の曲りを抱き幅中前幅にて平約に篦をなすものなり

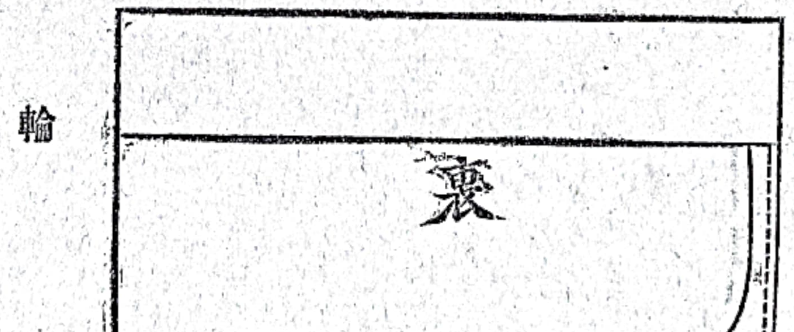
一つ身袖口の縫ひ方(單衣)



(1)は袖口切を縫ひ合せて圖の如くし袖下を縫ふ所

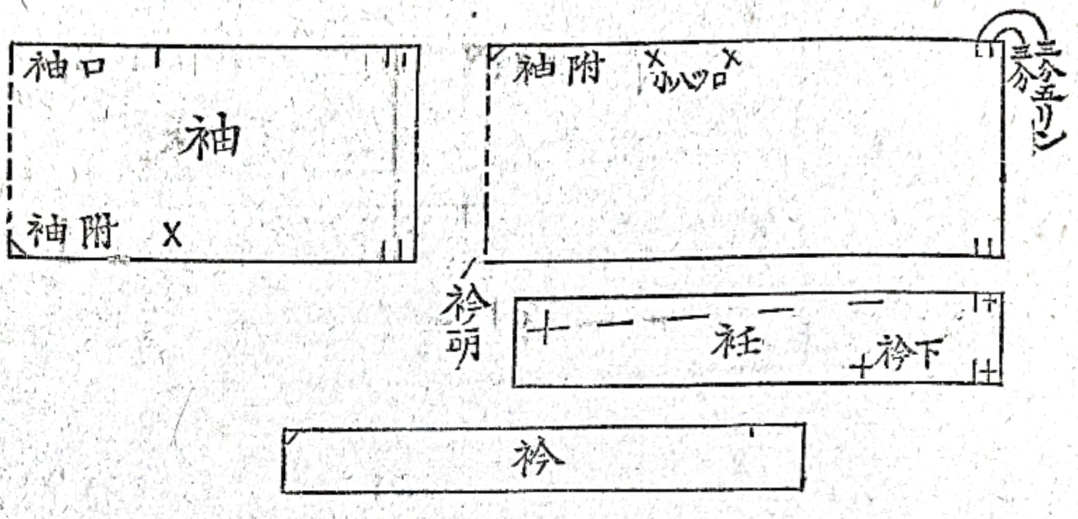


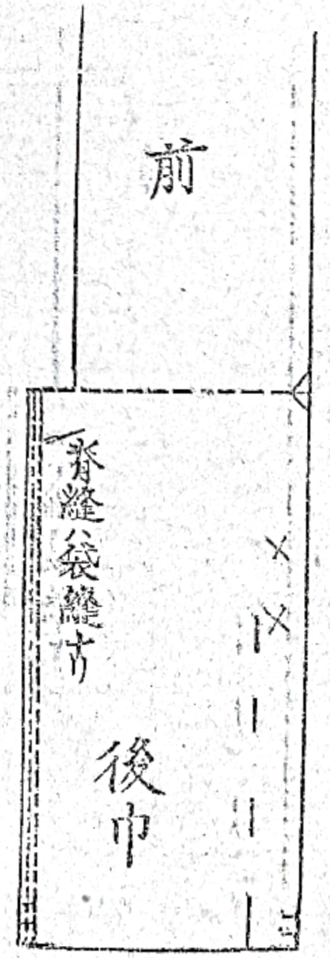
(2)は袖下を縫ひ袖口切を絎け附くる所



(3)袖の出來上りたる所

三つ身單衣箆附方

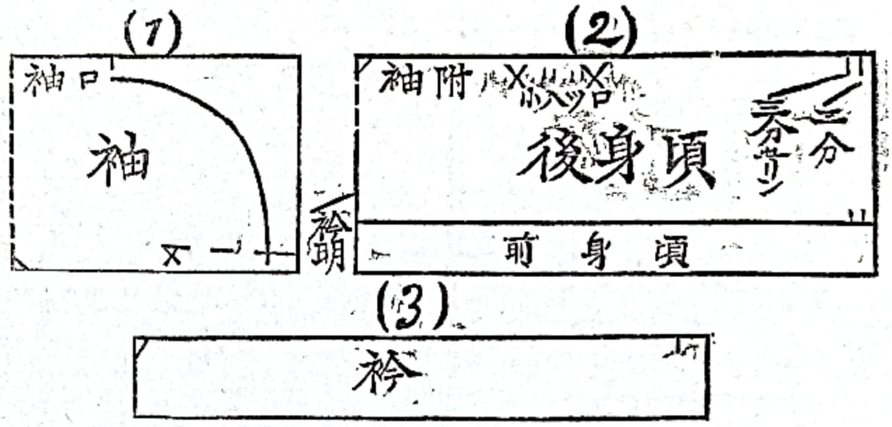


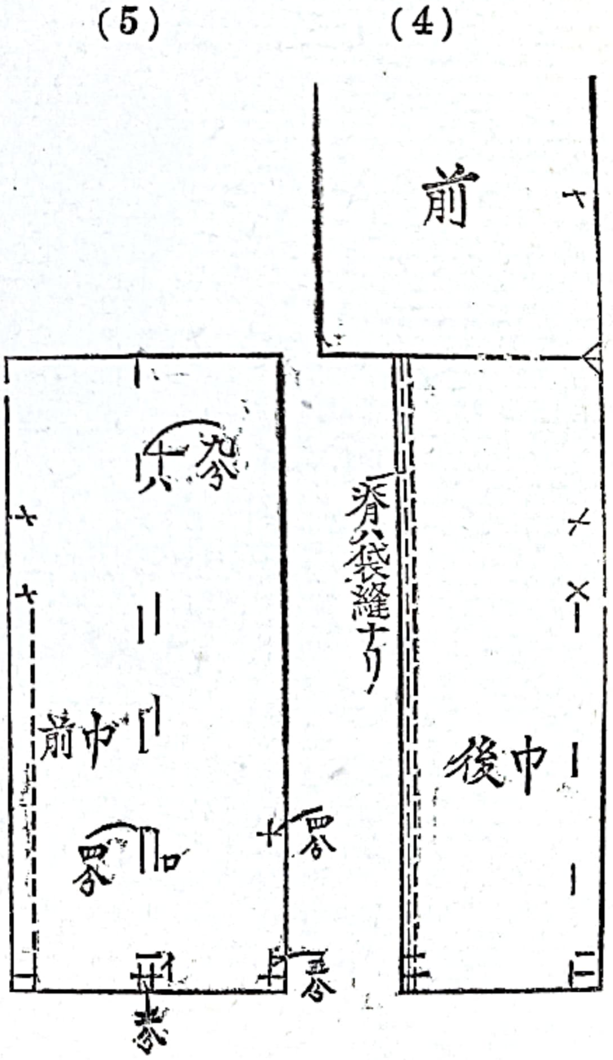


後幅は脊縫絡り後幅を定めて圖の如く形をなすなり

前幅は脇縫を絡り衿明より眞直に脇の縫目より幅を定めて印をなす

四つ身單衣元祿袖の篦附方





(1) 袖元祿形中表にして左を輪に二枚重ね袖形を置きて袖丈篦印と袋縫の篦印、袖附袖、山等一ッ身仝様にす

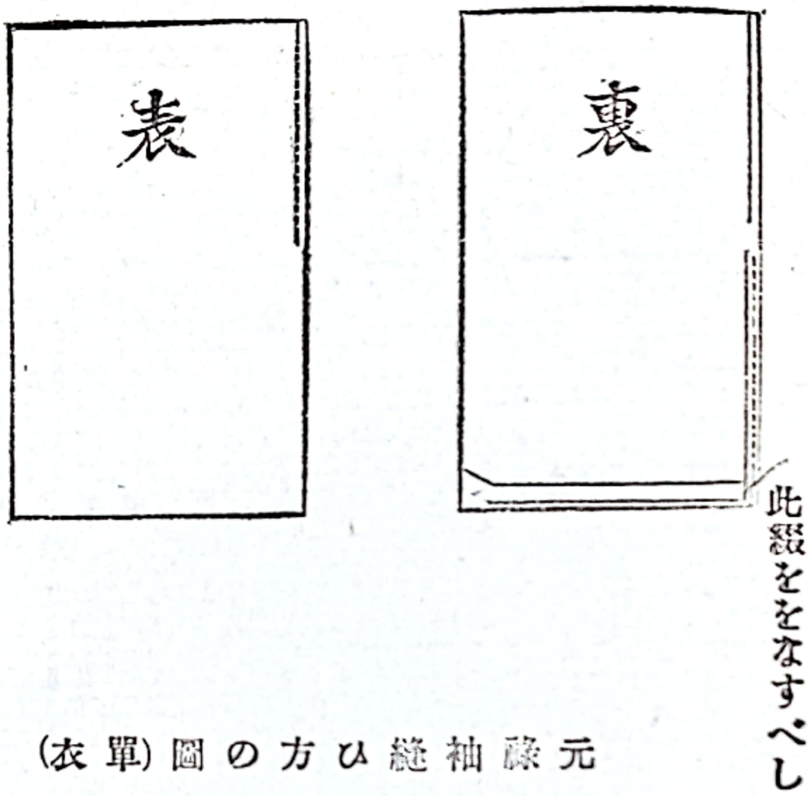
(2) 身頃は一ッ身仝様に丈篦、袖、山袖附の篦をなす

(3) 衿丈は丈の異なるのみにて他は一ッ身仝様なり

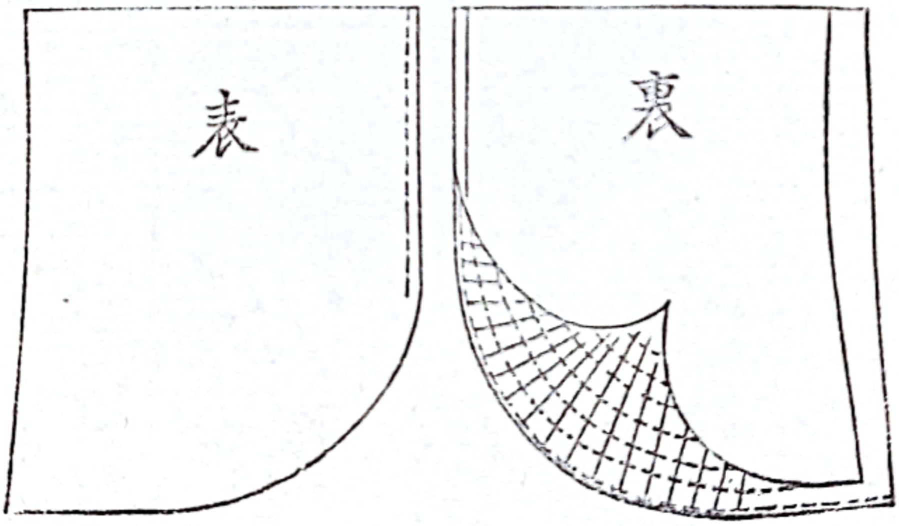
(4) 後幅は脊縫をして圖の如く巾の篦印をなす

(5) 四ッ身前幅は圖の如く衿明より眞直に篦をなし衽の篦をなす前幅印より衽に三分入りて(イ)印をなし衿下印の所にて四分(ロ)印をなし衽下りにて九分の(ハ)印をなす(ハ)(ロ)の間にて二ケ所位に篦印をなす衿附篦は衿附の時に説明をなす

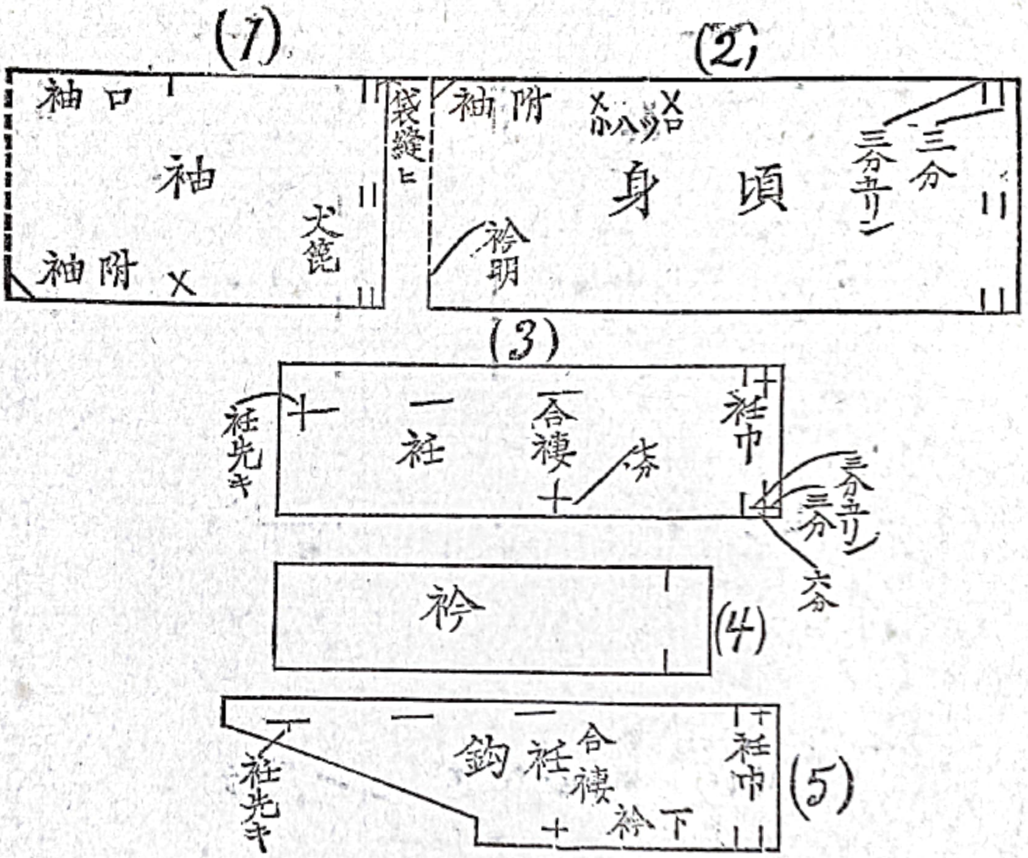
角袖縫ひ方(單衣)



元祿袖縫ひ方の圖(單衣)



本裁單衣の篦附方（女物）（一）



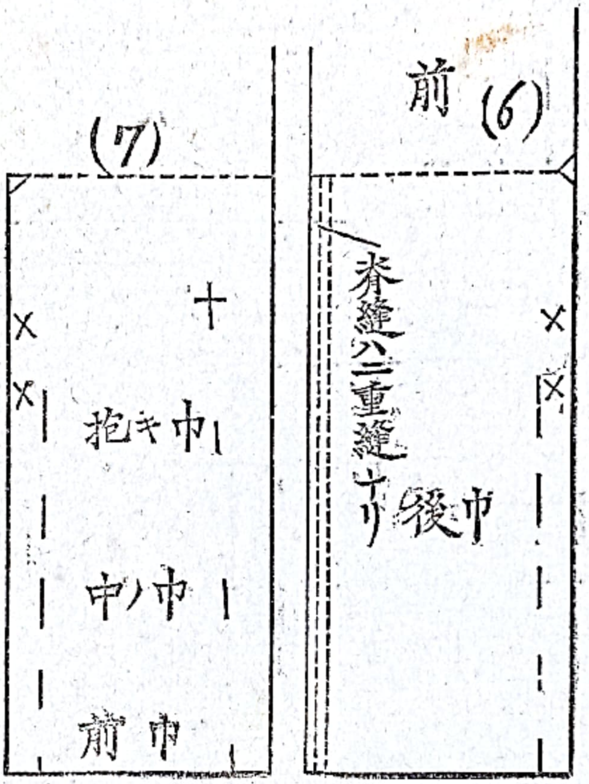
(1) 袖篦は三ッ身仝様なり袋縫印、丈篦、袖口、袖附、袖山圖の通りになすべし

(2) 身頃も丈の寸法異なるのみにて篦附は四ッ身仝様なり

(3) 衽は身頃の衽下りより裾迄の丈の篦をなし衿下の絎け代を定めて衽幅をとり合褄幅を定めて殘り縫代に八分加へたるものを衽先の縫代に定む

(4) 衿は前仝様

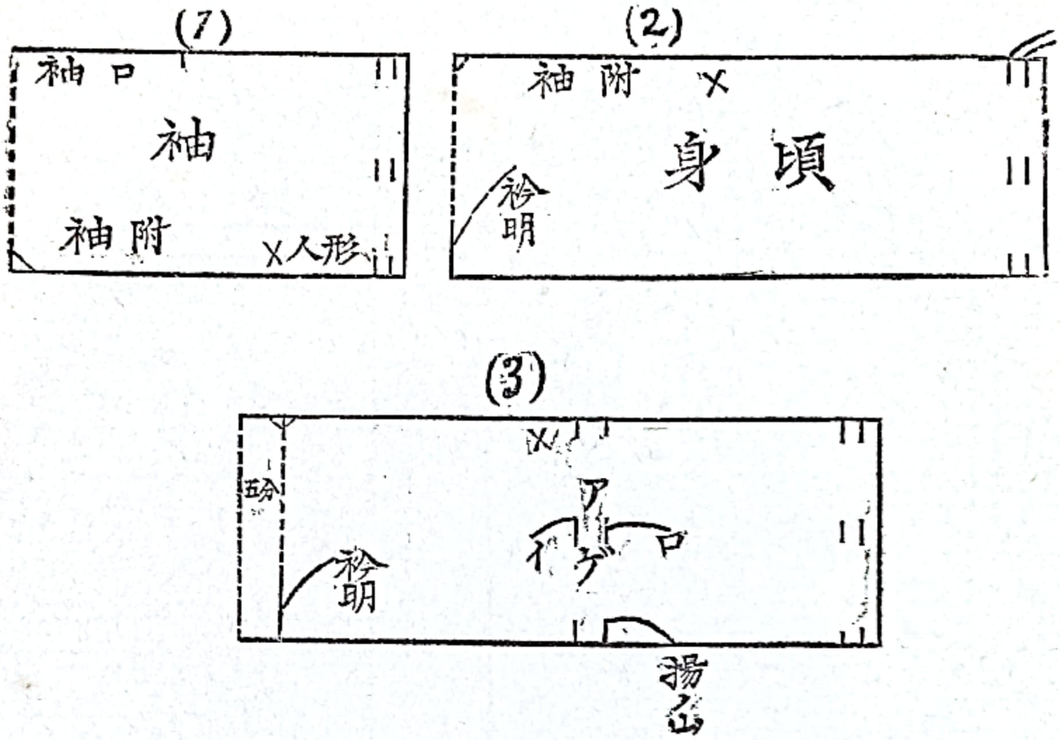
本裁單衣の篦附方（二）



(5)鈎衽は本裁三つ身一つ身にあるものにして篦の附け方は衽附縫代より定め合褄幅より衽先き迄の間出來る限り曲げるなり裁方の都合により仕立方に餘程關係するものなり反物の都合上なれども衽先の縫込み二寸五分位ある樣にすれば仕立上り最も良し

(6)(7)後幅前幅篦は一つ身同樣なり

本裁單衣の篦附方（男物）



袖は人形の篦をなすのみにて他は女物同様なり

身頃(2)圖は女物同様とす(3)圖になりて前身頃を後身頃に五分繰り越し衿肩の印より一尺三寸五分位の所に(イ)の腰揚篦をなす(ロ)は出來上り身丈に一寸加へたるものゝ殘り即ち揚の半分を山としたるものなり

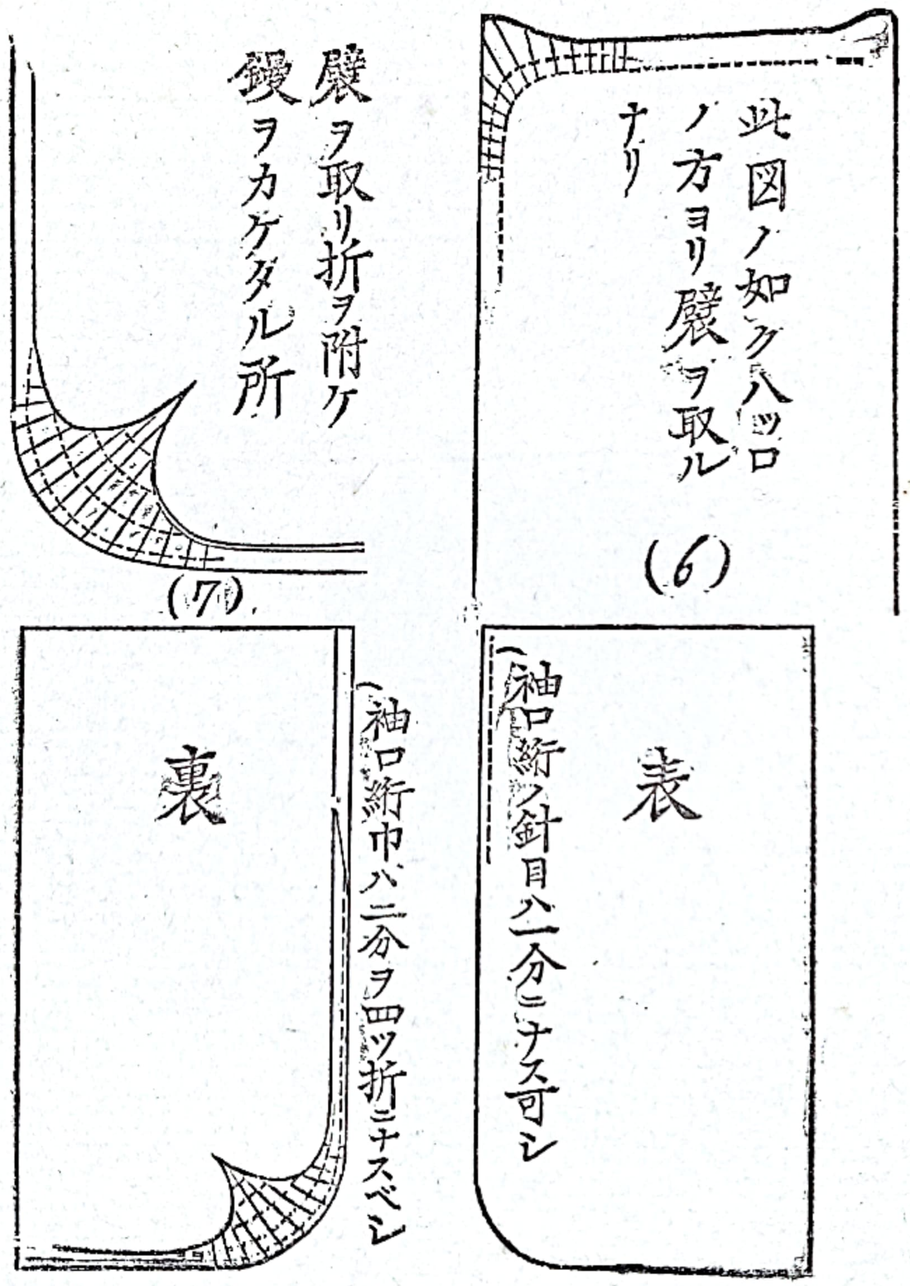
丈の計り方は出來上り寸法に一寸加へたるもの即ち衿附縫ひ込み三分裾絎六分五厘、五厘のきせにて一寸となる

後幅は脊縫をしたる後に四つ身通りに臺の上に置きて篦印をなすなり

前幅は後腰あげ、前腰あげをして脇縫の出來たる上に一つ身同様前幅、中の幅抱の幅に平均に篦をなすべし

袂丸み及び襞の取り方

（4）　（5）



單衣は、浴衣地より、木綿織絹織、總て品を一重に仕立るものなり、各種類に應じて仕立方も異るものなれば、各要所に就ての注意を述ぶ可し。

袖縫の内袖口絎けにつきての注意。

一、木綿類は、浴衣より、木綿縞位は(三つ折絎け)をなす可し。

一、絹布類は、四ッ折絎け、より絎けをなすべし。

一、脊縫は、一度二分五厘の所を縫ひ、縁より一分位の所を今一度縫ふべし。

一、衿下の絎け方は、普通は相褄幅と褄先の幅を三ッ折して絎けるなり、絹物類の仕立方としては、額縁を用ふ、額縁の縫ひ方は、絹物單衣縫ひ方の時に述ぶべし。

一、脇縫は、縫代の開き方品に依りて四通りあり。

第一法、は後身頃の縫込を上に斜にして、前身頃の縫込脇の縫目のある所を、二目おとしにして一寸位の針目に綴ぢ縫代は、前身頃の片側に折り、一寸位の針目に絎けをなすなり。

第二は、第一の如くして、終りの縁絎けを縁を少し折りて絎け附けるなり、(若し縫込の多き時は下迄縫込をひらき綴をなす。)

第三は、最も仕立の丁重なるものにして脇縫小八ツ口の所より裾口迄脇縫の上を今一度縫ひて、兩方に縫込をひらく方法なり、其縫ひ方は、小八ツ口脇縫の留より針を出し、裾口は脇縫の上三分位の所を自然に斜に縫ひて脇縫の折を前身頃に折りて後身頃を上に二目おとしに綴をして兩方にひらき縁を折り、三分位の針目に身頃に綴ぢ附くるなり。

第四は、最も地質硬きものを第一脇縫を返し、針にて縫ひ直に兩方にひらきて綴るなり。

第一法は、浴衣地及び木綿縞位に用ふべし。

第二法は、名仙等の品に用ふべし。

第三法は、絹物名仙類より極めて大切になす仕立に用ふべし。

第四法は、絹物、木綿物、毛織物、總て地質硬きものに用ふべし。

一、衽附は、特に衿附に大關係ある所なれば、衽先の七八寸と云ふ所は、決して運針の曲らざる樣に注意すべし。

一、裾絎は、何品に依らず、端より六分五厘の所に印をして折り次に三分折りて三分五厘幅に出來得る樣にして絎け其の針目は三分位にすべし。(衽附の縫合の所)(脇縫)(脊縫の縫合の所)には必ず貫き針をなすべし。此裾絎幅を五分を二分五りん位幅に折ることもあれども着したる上に於て良しからず此點は必ず實驗せられたし。

一、衿附には裏衿附、裏衿なしの二種類あり。何れも衿の山印と脊の縫目と合せ衿を見て脊縫より一寸手前より身頃衿ともに(二分五厘)の縫代にて衿方廻しの一寸手前迄縫ひそれより身頃は衿廻し縫ひ込みを一分とし衿は二分五りんの縫代にて少しゆるめに細かく縫ひ下り衽先より一寸程手前にて、衽先(け

ん先)に刺したる待針を立て縫ひ待針の一針手前にて、針の先きを向側に出し、待針をぬき、直に其ぬきたる所の針穴に針先を出し置きて、衿先と、相棲の印に待針をさし、布を据へて、附下げに、縫ひ行くべし、普通は衽先にて返し、針をなすことあれども、殊更に針のあらたまるは良しからず。

衽先より下衿附をなす時は、只縫ひ行く所のみ持たずして、衽の附に手をかけること、肝要なり。(衿附の持ち方は寫眞圖參照)

下前は前と反對に、身頃を見て同じく脊縫より附下げに、縫ふこと上前に同じ。

次に三ツ衿の切を入れ、前の縫込(衽先の所)をよく引下げ、(絹は鏝を用ひて、衿を据へて、衿絎をなす、衿の据へ方に依りて、着する上に、良きも、惡きも、分るものなれば、充分なる注意を要す。

一、衿裏のあるものは、身頃を挾みて、前の衿附の如く、上前は表衿を見て、脊縫より附け下げ、下前は裏衿を見て、脊縫より附け下にす、子供にて衿幅の不足のもの

は表衿幅と裏衿を始め縫ひ合す可し。

一、衿絎は、總べて縫込を表衿につゝみ、裏衿幅を二分減じ、衿先角より一寸位の所褄形になして絎ける、此裏衿絎は縫絎をなすこと。

一、共衿のかけ方は兩端は一分位、奥を絎け衿附の方は三厘位、奥を衿のしんに針のかゝる樣に絎ること、最も肝要なり、只上側のみ絎る時は、必ず着崩のするものなり本衿より共衿の方を幅少し廣くなすべし。こは二ッ折にして、衿幅のづれぬ爲なり。

一、袖附は身頃を、手前に袖を向側にして、身頃は肩幅より先に、一分縫代を出して折り置き夫れを縫代になし、袖附印の所を合せて袖附より一寸位迄返し針をなし、夫より壹分の縫代を目當に斜に正しく縫ひ、袖山を返し針にして縫ひ、又絡りの所も、始め同樣に一寸位返し針をなして留めるなり。

次に八ッ口、袖附一寸位上の所より折ぐけになすべし、針目は三分位にて良し。

一、針目は、單衣は裏より見ゆるものなれば、細かに丁寧に縫ふべし。

一、肩當は切の兩端を一度折り、一目おとしに縫ひ、脊縫をなし、次に單衣脊縫の所に綴附けて肩幅の所も綴ぢ附けて、後に身幅、肩幅を當たるべし。

一、いしき當も、下前折り一目おとしに縫ひ、中央を脊縫に綴ぢ附け、兩脇及び上の方を絎け附くるなり

いしき當も肩當も、一目おとしに縫ふは、切れの据り良しき爲になす、普通に細かに縫ふ事も良しからず、又針目をあらくすれば、抑へがきかず布の据り惡く、爲に一目おとしとす、是も實驗するを要す。

一ツ身單衣(濶口袖)縫ひ方

一、縫ひ方順序　(一)袖縫　(二)身頃　(三)衽附　(四)袴下　(五)裾絎　(六)衿附　(七)袖附　(八)附紐

(一)袖縫(濶口袖)は、箆印通り袖口切と、表袖口と、縫ひ合せて、袖口切の返る所の幅迄袖口下を縫ひ、それより袖幅殘り縫込の返る所(振の方)迄表より袋縫をなし、丈の印

の通りに縫ひ、左右の折を定め、袖口切を裏に返し三分位の針目に絎る袖口、及び袖下に一目おとしの躾をかける、夫より袖幅印をなす。

但し袖口の躾をして、後袖口切を裏に絎るなり。

(二)身頃の脇縫は、脇縫は篦印の通りに、左右共に後身頃を見て、始め終りは普通の針目の三倍位の細かく縫ひ、小八ッ口にて抄ひ留めをして留め、前身頃に折を附け小八ッ口の所より下に縫込に、應じて斜に折り前身頃に片方或は兩方にひらくべし小八ッ口(品に應じ縁ぐけ折りくけをなすべし)。

(注意の所にて述べたる如く、脇縫代のひらき方は、地質に應じたる方法をなすべし、然し一つ身は縫込の多きものなし。)

(三)衽附けは、脇縫をひらき絎附け表に返し、前幅を當り折を附け、衽の篦附の出來たるものを、前幅の折りたる端と、衽附縫代の端を表より一分の縫代にて、袋縫をして裏に返し前幅の篦衽の篦印を合せて縫ひ、折を衽に附け表に返し、地質に依りて躾をなす、注意の所にて述べたる通り、衽先七八寸を最も大切に、殊に針目を丁

寧に二分三針四針に縫ふべし。

(四)衿下は、衽附の前に篦印の通り、三ツ折にして相褄上一寸五分位絎け置くべし。

(五)裾絎けは、褄先を普通の三角に折りて、其角より針を通し、三分位の針目に絎けるなり、前に述べたる通り衽附縫合、脇縫合の所は必ず、針を貫きて絎けることを忘る可からず。

(六)衿附は、寫眞圖の如き手向きにて衽と前の縫込を衿附の所だけ綴を躾糸にてなし、(衿丈は衿先より衽先)衽下り、衿明の寸法即ち、二分引きて衿丈の半數と定む、衿丈切を二ツ折にして、衿丈篦印をなし、衿丈山印と脊縫と、待ち針をなして、先に說明したる通り、衿明縫ひ、衿肩廻し、衽先に、充分注意して運針の曲らざる樣に縫ひ終りは極く、細かに縫ひ抄ひ留めをして、衿幅を定め、衿先一分內を縫ひ、表に返し縫込を折り入れ前に述べたる如く、下前より丁寧に絎けるなり、上前は衿を見て縫ひ、下前は脊縫を見て縫ふべし。慣れざる間、此の縫ひ方は、無理なる樣に思は

るれども、熟練すれば誠に容易く且つ出來上りも良しきものなれば、勉めて實地につきて研究すべし。

(七)袖附は、身頃袖附け、山と袖山を合せて、身頃を手前に、袖を向側にして縫ふこと、注意の所に述べたるが如くし、八ッ口を、折り絎けになすべし。

(八)附紐は、脇明の留の所を、紐幅の中央と定む、(紐幅の廣き時)紐幅が四ッ割位なれば脇明留の下より紐附をなし、衿幅だけ紙の心を入れ、堅く絎け附け飾り縫をなり。

脊紋は、守り縫及び、糸懸、細工物各種を用ふ、然し儀式用としては守縫なり。

三ツ身單衣縫ひ方

一、縫ひ方順序　一ッ身に同じ

(一)袖縫ひ(角袖)　角袖は、袋縫を表より兩端三分位殘して縫ひ、裏に返し縫代を二分と定め振りの方より袖丈印通り袖口印を見て針目を正しく縫ひ袖口にて抄ひ留をなし折をつけ袖口下縫代を極めて淺くなぞへに折り、袖口より五分下に袖

口にて留めたる針を一度針を戻し、再び袖口迄細かに縫ひ、返し針にし、其糸にて袖口を絎けるべし袖口の幅は前に述べたる通り、品に應じて三ッ折四ッ折何れの方法によるも可なり絎ける針目は一分とす。

(二)身頃は、脊縫を表より袋縫をなす、此時は注意の項に述べたる通り、衿附縫込と、裙絎け幅は袋縫をなさず、裏に返し脊縫をして、後幅を附け、脇縫をなし前幅を當り衽下り迄、衽の衿下の絎けたる篦印のあるものを、表より一分の縫代にて、細かに袋縫をなし、表に返し、衽及び、前幅の縫込を縫ふこと、一つ身の場合と同じ、夫より衿附のかり綴をなし衿附をなす。

(三)衿附は、一ッ身同様衿丈を定め、衿附の方法も同じ。

(四)裾絎けは、一ッ身に同じ。

(五)袖附は、一ッ身に同じ。

四ッ身單衣縫ひ方

一、縫ひ方順序　一ッ身に同じ。

(一)袖縫元祿袖は、元祿袖を縫ふ時は、袖丈と、袖幅を定め、袖丸形を附篦印通り袋縫をして、袖丈を振りの方より縫ひ、袖口にて抄ひ留をなし、袖口を前に述べたる通り、品に依りて、三ッ折、四ッ折、よりぐけを用ふべし袖丸みの所は襞を取るなり。

(二)袖丸み襞の取り方は、圖にある如く、袖の振りの方を右になし、左の食指の上に布を載せ、左右の拇指の爪にて、襞を寄せながら、袖下の縫目より壹分五厘あがりし所に、裏表の襞の端に針をかけ順次に袖口明の方へとり終りに針を始めて貫き取り、糸をゆるやかになして、襞を平にをさむ可し、襞の取り始めは、二分手前より始め、五六分の丸みにて、十一位の數に取らざれば、丸みの所角立て見苦しくもあり、又其角より切地の破るゝものなれば、注意して最も丁寧に、殊に大丸のもの、振り袖の丸み、元祿袖等は襞の數三十位となす可し。

但し普通に袖の丸みの襞は、縫ひしめなれども一寸外見はよろ

しく出來、又方法も至つて容易なれども、洗濯を度々なす場合等に於て直に襞の亂るゝものなり、洗濯せずしても、毎日着する場合にもひだの亂るゝものなれば前の方法を數回練習せられ、良法を施さる可し。

(三) 身頃。

(四) 丈篦印の終りたるものを表より、一分の縫代にて、脊縫を袋縫をなし、裏に返し、脊縫を今一度縫ひ、後幅を附け脇縫をなし、品に應じて前に述べたる第一、第四の方法の脇ひらきをして、前幅及び衽幅の篦を附け、篦印通りに、つまみ縫をして衿下を絎け、裾を絎け、衿附、衿絎をなす。

但し衿裏は、始に縫ひ附け置く可し、裏衿の方に伏せ縫、又は縫ひ躾をなす可し。

(五) 袖附は、寸法の變るのみにて、三つ身袖附同様なり。

本裁單衣女物縫ひ方

一、縫ひ方順序

(一)袖縫、(二)褄下ぐけ、(三)脊縫、(四)脇縫、(五)衽附、(六)裾ぐけ、(七)衿附、(八)袖附、

(一)袖縫は(單衣丸袖縫ひ方)第一にある如く、表より八ツ口振りの所を、袖幅より三分奥より縫ひ、始め袂丸みの所、八分を縫ひ殘し裏に返し、又振りの方より、第二圖の如く、袖口印、所迄二分の縫代にして縫ひ、抄ひ留をし一針返し留めて、其糸にて第三圖の如く、袖口の縫込を極く淺くなぞへに折り口明より三分程下へ、一度針を戻し、再び口明迄細かく返し針をなし、其糸にて袖口を絎けるなり、注意に述べたる通り、單衣の地質に應じ、袖口の絎け方をなす可し。(袖の縫方圖參照)

但し袖口絎けは丁寧になすべし。　袂丸みの襞は、四つ身、元祿袖に述べたる通りになすべし。

(二)衽下絎けは褄下を絎るには、立褄の幅印と褄先き幅の印を先に折り、次に是を三つ折にして、下前は裾より絎けあげ、相褄幅より二三寸上迄絎けるなり、絎ける針目は三分とす。(三つ折絎け)

額縁になすには、先づ立褄の折を付け、次に裾の折りを付け、圖の如く順に折り、相印を合せ、褄先きの角よりなるべく、細き糸にて返し針に縫ひ、よく糸留をなし、縫目を割りて、三角の形になし縫込は再び折り返し、表に返す、此の縫込を切り取ることあれども、後の爲に良しからず。

額縁衽下の絎け方、下前は衽幅の中央より絎け始め、額縁の角に至りて、極く細かく、一針裏の額縁の角の中を抄ひ、直に其針を表に出し、表には細かく一針出し、又裏に貫き、又布の中を通し針の見へざる樣に、確ときめつゝ、立褄の方に絎けるなり上前は額縁を縫ひ、立褄の方より絎け額縁角にて、下前通りに針を通し、衽幅中央迄絎けるなり。

(三)**脊縫**は、始め二分五りの縫代にして、衿明より裾迄縫ひ下り、次に端縫を再び、一分の縫代にて衿明より裾へ縫ひ下り、直に肩幅、身幅を附るなり。

(四)**脇縫**左右の脇縫は、後身頃を見て縫ひ、縫込多き時は、脇縫の縫ひ目より三分位離れて、一度荒く縫ひ小八ツ口の所は、なぞへに五寸程消ゆる様になして、縫ひ次に後身頃の方を今縫ひたる所より折り返し又脇縫の際を一目おとしに荒く縫ひ肩より裾迄両側を折絎をなし、前幅肩幅を附けるなり、肩幅は寸法より袖附縫代一分多く出し置くべし。

　但し肩幅の所縫込を折り絎けをなすは良しきなれどもあまり針の見へるものは絎けるに及ばず。

脇縫のひらき方は、前に注意の所に、委しく述べたれば茲に略す、然し單衣の地質に應じ、適當なる方法を以て縫ふこと肝要なり。

(五)**衽附**の注意衽附をなす時は脇縫の終りたるものを前幅割出しに述べたる通り

前幅の寸法に應じて抱き幅、中幅前幅の印をなし衽附をなす。衽附は左右共に裾より付上るなり、殊に衽先(けんさき)七八寸の所は、運針のまがらざる様に注意すべし、此衽附に依りて、衿附の良し惡しも定まるものなり、前幅の縫込を凡そ衿附の所迄折りぐけをなすなり。

(六)裾ぐけは、始め端より六分五厘の印の所を折り、次に三分の印の所を折りて、三分五厘幅に絎る針目は三分とす、兩衽、兩脇、脊縫、の縫目を必ず貫き針をなす可し。

注意の所にて述べたれども裾幅は三分五厘よりせまくなす可からず絹織物など決して三分五厘より細くなさぬ様に注意すべし

(七)衿附は、(裏衿附)衿山印の所を脊の縫目を合せ、裏衿を向ふになし身頃を挾み、表衿を見て脊縫より一寸手前迄身頃、衿共に二分五厘の縫代にて衿肩廻しの一寸手前迄、縫ひ夫より身頃はなぞへ衿廻しのかどを縫込一分とし衿は二分五厘の縫

代にて細かく衿肩の所を自然にまはる様になしつゝ縫ひ、衽先(けん先とも云ふ)の一寸計り上の所に至りて、けん先に、さしたる待針を立て縫ひ、一針待針の手前にて、向側に針先を出し、待針をぬき直に其ぬきたる所の針穴に、針先を出し置きて、衿先と相褄の印に待針をさし、布を据へて、附け下に縫ふべし。

(下前は脊縫より裏衿を見て縫ひ下になす
上前は脊縫より表衿を見て縫ひ下になす)

三つ衿を入れ、衿の縫込の布を据へて、絎け方をなすなり、注意の所の衿附を見らる可し。

衿絎けは、縫込を表衿にくるみ、裏衿幅を表衿幅より、二分減じ、幅を附け躾をかけ衿先きは、褄形にして縫ひ絎けをなす、其衿は、壹分位奥を極く細かく絎け、衿附の方は、三厘位の奥を衿の心に、かゝる様に確と絎るなり。委敷は注意の所に述べたれば就て見る可し。

(八)袖゜附゜は、圖の如く、身頃を手前に、袖を向側にして、肩幅縫代を一分とし折り置き、夫

れを縫代として、袖附印の所を合て、袖附の所にて抄ひ留をなし一寸位迄返し針をなし、肩幅の壹分縫代を目當に、斜に正しく縫ひ、袖山も返し針をして縫ひ、又終りの所も、始め同様に返し、針をなし抄ひ留をなすなり、振りは袖附一寸上より折り絎けをなす(折りくけとは縁を折りたるなり)絎ける針目は五分位とす。

いしき當肩當は注意に述べたる通りになすべし。

注意　單衣は縫目、絎け目共に充分細かく丁寧になすべし

本裁單衣男物縫ひ方

一、縫ひ方順序　女物同様なれば略す。

(一)袖縫は、女物の時と同様に、表より袋縫をなし、裏に返し、人形より縫ひ始め、袖口明も女物と同様にして、袂の丸、襞も丸みの形に應じて、前に説明したる通り丁寧になす可し。

(二)裾絎は、女物同様なれば略す。

(三)脊縫は、女物同様に二重縫をなし、肩幅後幅を附け、次に後の腰揚をなす、其仕様は衿肩の方を手前に裾になる方を向側になし、腰揚の印の裾に倚りし下の印の方を山とし、衿肩に倚りし方、即ち上の印のところを、きせだけ淺く見て、脊の縫目をよく合せ、兩脇の後幅印迄、縫ひて前の腰揚を、後腰揚げと同様に、下の方の印を山とし、上の印を縫ふ幅は、端より端迄縫ふ、後前腰揚の縫込の折りは、下の方になす。

注意　後腰揚げを縫ふ時に、脊の縫目を合せて一針貫き針をなすこと、後前腰揚をなし、折を返しなば、木綿位は、よろしきも絹類等は、必ず絹の躾をなして、着する時は其糸を取ること、

(四)脇縫は、幅印通りに、一度縫ひて、前身頃に、折をして(前に說明なしたる脇縫片ひらき)後腰揚の處を、圖の如く下の方に三角に折りて、脇の縫込を地質に應じて、緣絎け折り絎けなす。

(五)袵附、(六)裙絎けは、女物同様なり。

(七)衿附も、女物同様なれども、衿先に於て異なるなり、先づ衿先を、女物同様に衿幅だけ縫ひて、三つ衿を入れ、衿附の所の縫込をよく伸して、衿幅三寸を附け、殘り縫込を夫より斜に中に折り込み、五六分の所にて、確と留めて、其糸を續け置き、衿を二つ折にして、衿先より四分奥を表へ一針出し、二三回針を、抜き返し、其糸にて衿を絎けるなり。

(八)袖附 袖附は、女物の時と同じ、併し男物は、人形あれば、始めの留め方異なれども、其四つ留は左の如し。

袖附は、總て身頃を外側にして、袖を内側にするといふことを忘る可からず、其留め方は、圖に示せる如く、身頃にて袖を挾み、極く淺く四枚いつしよに、針を通して、四つ留をなし、其糸にて前に述べたる通り、袖附の始終りと、袖山の所を返し針をし縫ふこと、女物同様なり。

單衣長襦袢女物縫ひ方

一、縫ひ方順序

(一)袖縫、(二)脇縫、(三)裾絎、(四)衿附、(五)袖附、

單衣襦袢を仕立つるには、衣服寸法表にある通り、各部の寸法を定めて、箆をなしたる後縫ひ方をなす。

(一)袖縫は、單衣袖縫の通りになす、袖口は、濶口なれば、袖口の方に、幅の折返し三分にても、五分にても、返るだけ返し折ぐけをなすべし。

(二)脇縫は、脇明より一寸下りたる所に、前身頃だけ、五分つまみをして縫ふ、脇縫のひらき方は、單衣に述べたる通りに、品質と縫込の都合に依り、兩びらき、或は、片びらきになす。

但し前下りの縫ひ方種々あれども此方法を良とす

(三)裾絎けは、一寸に折を附け、次に七八分位の幅に折を附け、絎け方は、前幅より、三分

位に絎けて、兩脇、脊縫の縫目を單衣の時と同樣に、貫き針をなすなり。

(四)◦◦衿附は、前幅を定め衿肩よりなぞへに幅を附け、下前より衿附をなす、衿肩廻し、及び、衿明の所は、細かに縫ひ、上前に縫ひ下りて、終りに抄ひ留をなし、一針返し留をなし絲を切り、衿幅を定め、衿先縫込、内一分の所を縫ひて、衿附の方に、縫込を返し、綴ぢ附けること、上前下前衿先きと同樣なり、下前衿先を正しくして、内側より針を出し、一寸位の間は、細かく絎け、後は三分位に絎ける、終りの上前、衿先も同樣なり。

第八章　衣服仕上及び肩上腰上の方法

袖附けは、上着に合せて、寸法を定め、單衣袖附の如くなして振りは折くけをなす。

衣服の仕上げ方

衣服の縫ひ上りたるものを、仕上ぐるにつきては、第一章、地質につきての注意に於て述べし如く、綿布、麻布、毛布、絹布等、其品質によりて、其方法各々異なれり、即ち左の如し。

(一) 綿布麻布　綿布麻布を仕上ぐるには、霧を細かに吹きつゝ、布の小皺を、掌にて引き伸ばし、特に縫ひ目に、正しく折りを附て疊み(疊み方は次に述ぶ)押板の間に挾みて、上より押を置くべし。

(二) 毛布　毛布(セル、フランネル)は、霧を吹きつゝ、烙熳をかけて疊み置くべし。

(三) 絹布　絹布には、火熨斗を用ふべし。

總べて、何品にても、烙熳及び火熨斗をかくるには、先づ第一章に述べし如く、火熨斗の火加減を試み、縫ひ上りたる着物の肩を、左手に裾を右手に、下前の裏を手前にして、下前の裏衽より、順次に、衿先きより裏衿の山の所迄、かけ裏の脊縫を平らに据へ、脊縫を一尺程かけ、次に、上前の裏衿より、上前裏衽に、次に裾衽をかけ、前に

かけ殘りたる脊縫を、次に兩脇をかけ終らば、表に引き返して、上前の衽より、前同樣の順序にてかけ、次に袖疊となし、左に肩を置き、身頃を向に、袖を手前に置きて、右袖の前即ち內袖八つ口より、袖下、袖口と順次にかけ、其袖を身頃の方へ折り、下の左袖の後(即ち外袖)をかけ、次に、又前の通りに、袖を二枚重ねて引返し右の方に、袖の山を置き。左袖の前を前同樣の順序にてかけ、其袖を向へ折り、下にある右袖の後をかけ、裾を向に、衿肩を手前に、前身頃を上に据へて、肩の山及び袖の山を平らに開きて、山の折りを消ゆる樣にかけ、最後に袖裏の八つ口にかけるなり。

◎小兒着物の疊み方◎　左の方に、衿肩を、右の方に裾を向けて、平らに据へ、下前の脇の縫ひ目を正しく折り、次に上前の脇縫を折りて、前身頃を重ね、次に右袖を袖附の縫ひ目より折りて、前身頃の上と重ね、次に左袖を前の如く爲し、裾口を先に衿肩を、次に身丈を三つ折りとす。

◎本裁着物の疊み方◎　前述の如く、右の方に衿肩を、左の方に裾を置き、平らに据へ

下前の脇の縫ひ目を正しく折り、次に衽の縫ひ目を脇縫の方に折り返し(其折り方は裾口を、衽附より前幅に三分、相褄の所にて、前幅を四分に折りを附けるなり)上前の衽及衿先きを、前に折りたる下前の衽及衿先きの上に、揃へて載せ、衿肩の衿附を中に折り、上前の脇を下前の上に載せて、脊の縫ひ目を正しく折り、左りの袖を身頃の上に折り(男物は袖附の縫ひ目より五分袖幅を折り女物は袖附の所より折る)左の手にて、裾の揃ひたる所を持ちて、右の手は、身丈を二つに折りたる間に入れて、折り目の皺にならざる樣注意し、次に左りの手にて、裾と肩の山とを一つに持ち、右手に袖の八つ口と、身頃とを持ちて、向へ返し、右袖を其上に載せるなり。

一つ身、三つ身、四つ身、肩揚げ腰揚げの仕方

總べて、子供の衣服は、肩揚げ腰揚げの仕方に依りて、其容姿の可愛らしくも、亦醜くもなるものなれば、其格好を取ること、極めて肝要にして其縫ひ方如何に巧なる

も、肩揚げ腰揚げの格好悪しきときは、身體に附かずして、着心地悪しき故、能くよく注意すべきことなり。

(一)肩揚　肩幅(脊縫より袖附縫ひ目迄の間)を二つに、折りたる所を揚の山となし、後は袖附まで、同じ寸法に、眞直に、前は揚の山を袖付の方へ斜に二三分寄せ、三分乃至五分減じて、後と同じく袖附の所まで揚げるなり、縫ひ目は一目落しにて、肩山の所へ、必ず一針小針を出して縫ふべく、糸は縫ひ糸を二重になすべし。

但し揚げの多少により、其揚の仕方を斟酌すべし、即ち揚げの多きときは、衿附に寄せて縫ひ、少なきときは、衿附より離すなり。

(二)腰揚　男兒は、出來上り身丈を眞二つに折り、其折りより、二寸上を揚の山となし針目は肩揚と同様、一目落しになし、脊脇衽の縫ひ目は必ず一針返して縫ふべし。

女兒は、出來上り身丈を二つに折り、其折りより一寸五分上を揚げの山とし、前身頃は、順次に、三分乃至五分、裾の方に下りて山を取り、前同様、一目落しにて縫ふな

り。

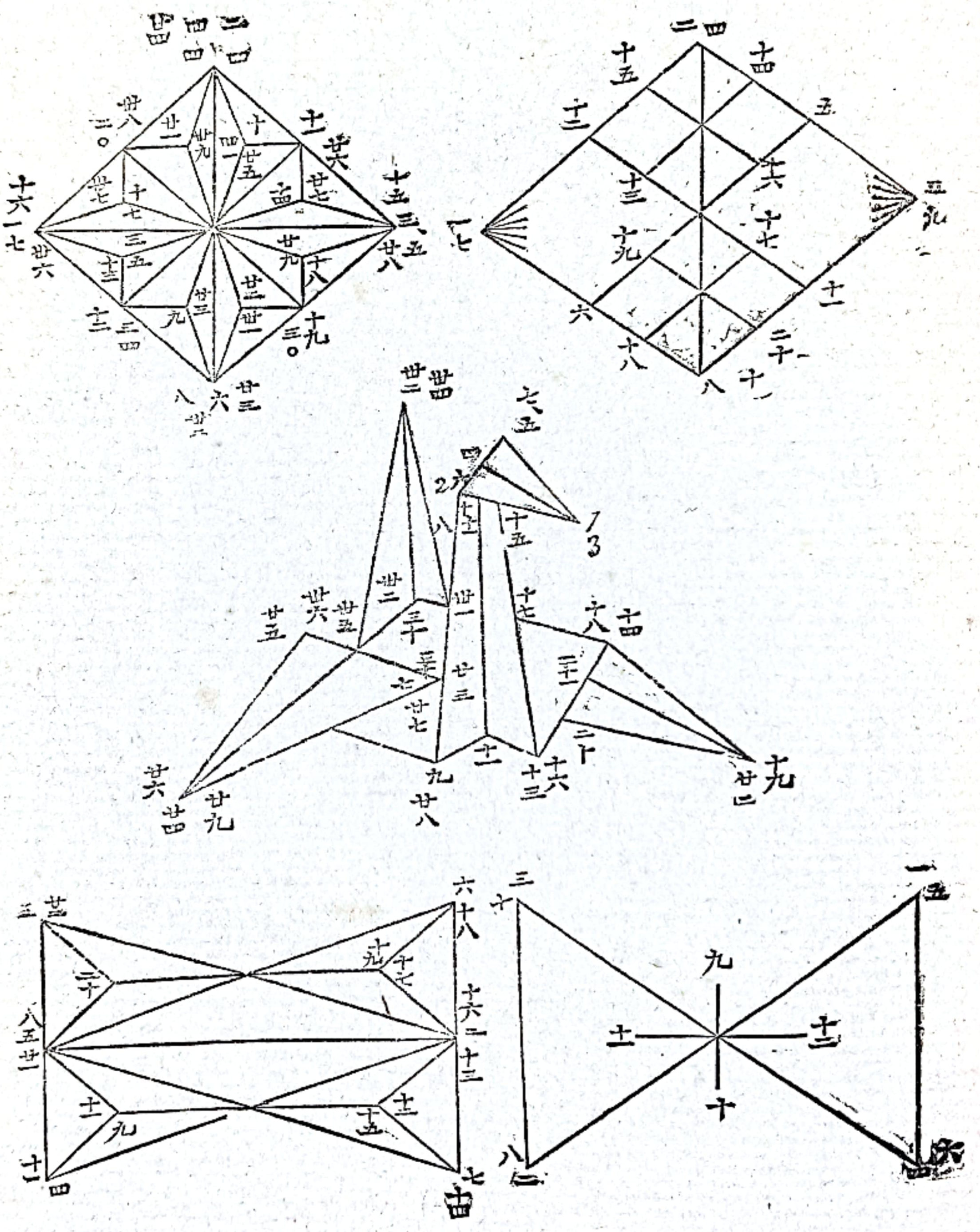
腰揚げ縫込寸法例へば五寸の時は脊脇五寸衿先は四寸七分五厘にすべし總べて此割合になすべし是は女兒に對しての衣紋心得のことなり。

附紐の寸法及び紐飾幷に背守

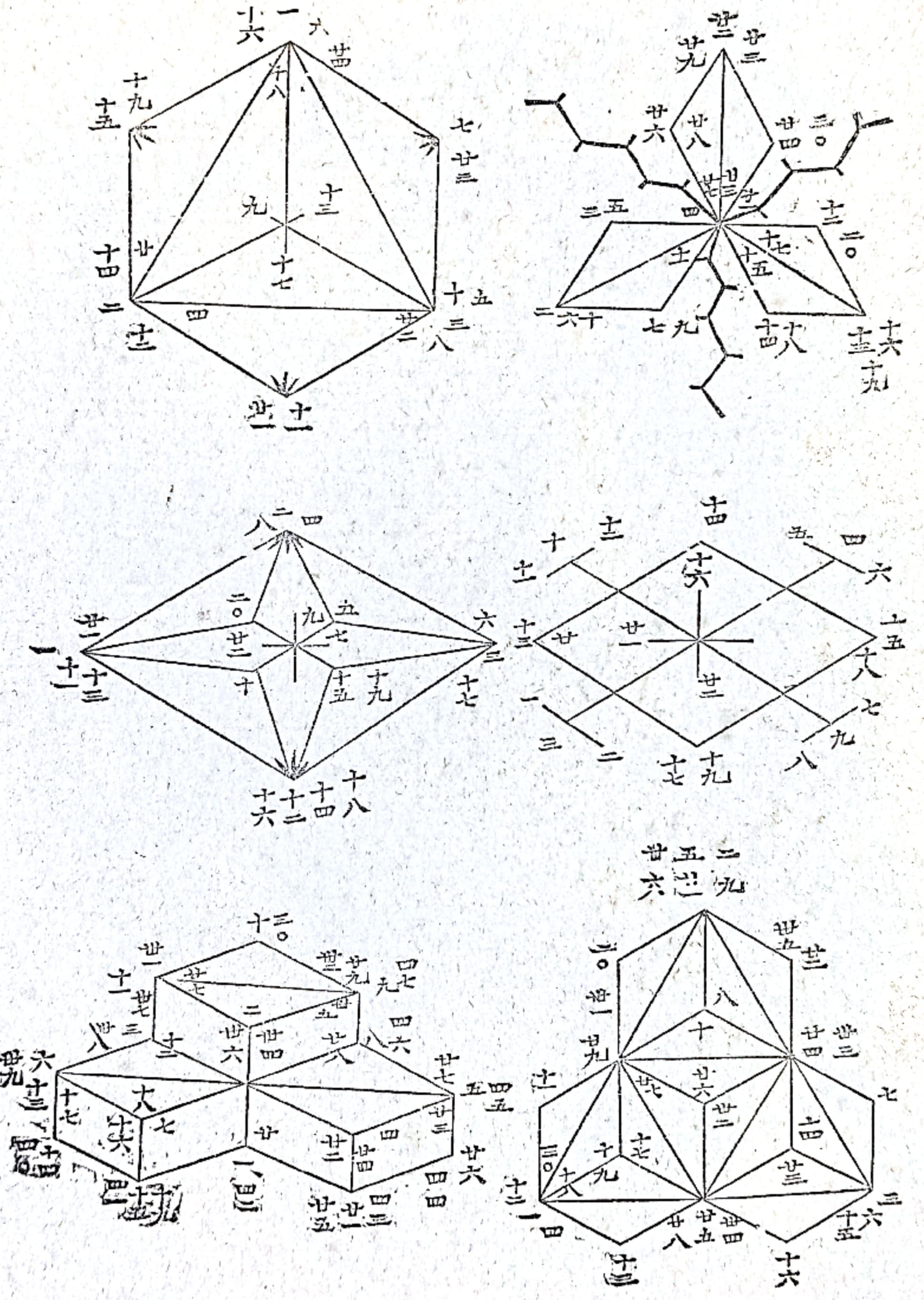
(一)附紐の寸法　附紐の寸法は、丈二尺より二尺五寸迄、幅は並幅の二つ割、又は、四つ割の切を、竪に二つに折りて、其一端を殘し、他の二方を縫ひ、縫ひ殘りたる一端より表に引き返し、縫ひ躾をなす、(即ち幅狹き時は丈短く幅廣き時は丈長くすべし)紐の附け方は幅狹きものは脇明の印と同じ寸法に、幅廣きものは、紐幅の中央と脇明の印と同寸になる樣に衿附に縫ひ附け、他の三方を絎け附くるなり、而して男兒は紐の縫ひ目を下に向け、女兒は上に向けて縫ひ附けるべし、紐の飾は、心紙を入れ、圖に示せる如く、色糸にて繡ふなり。

(二)脊守　脊守は、衿肩より五分下げて圖の如く縫ひ五色の絹糸を以て縫ふなり

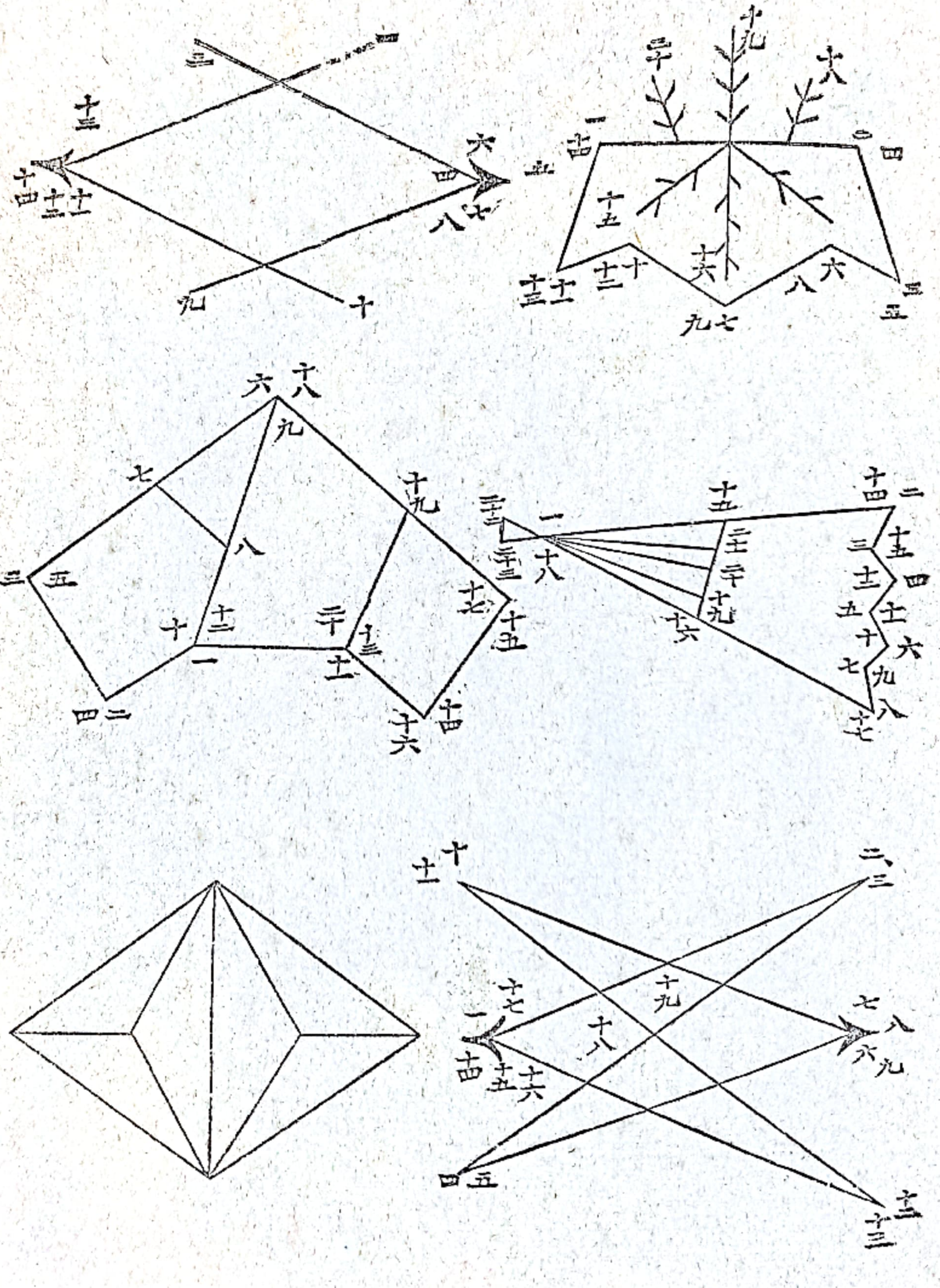
附紐及び脊文守の飾縫（一）



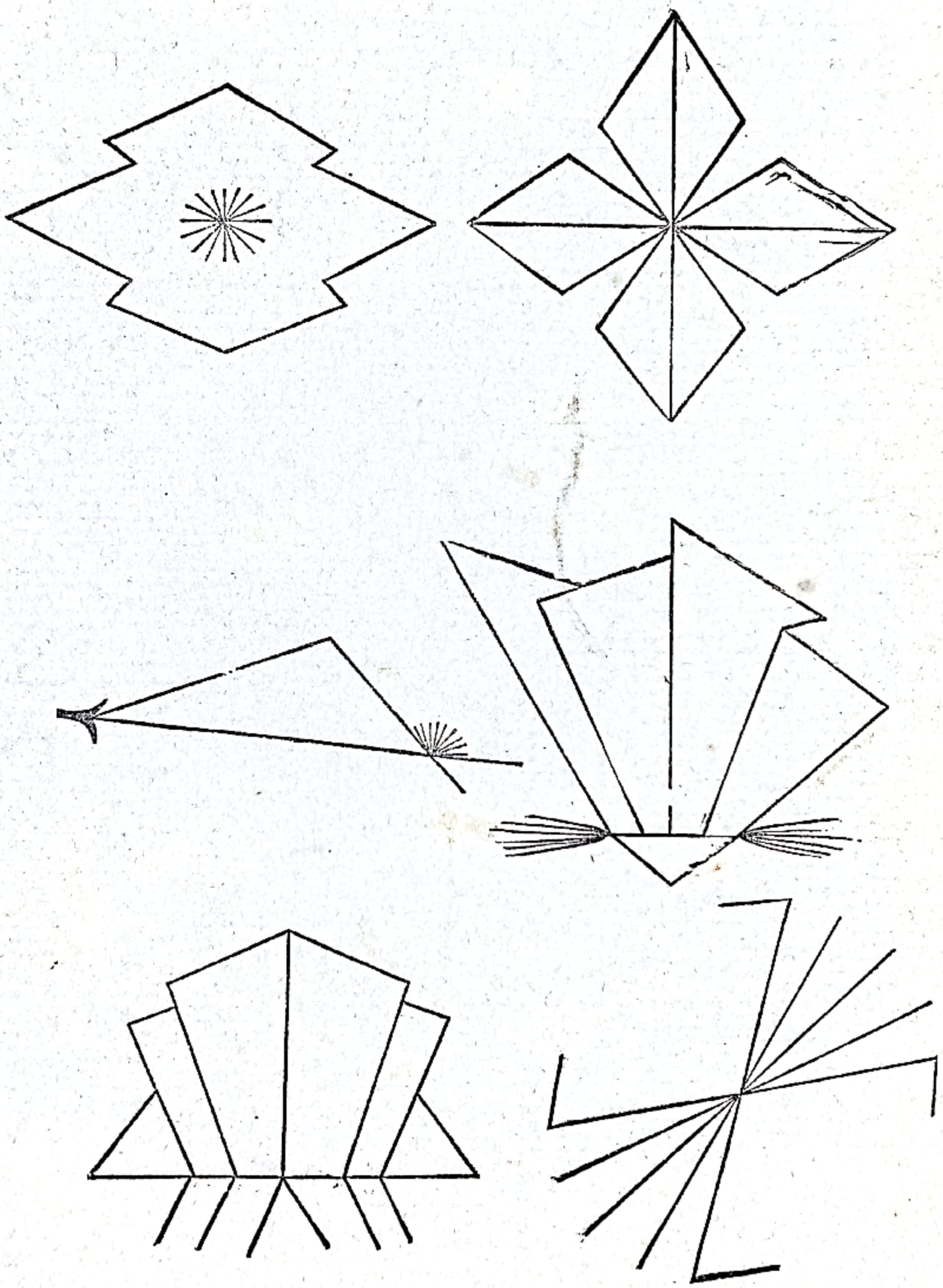
附紐及び背文守の飾縫（二）



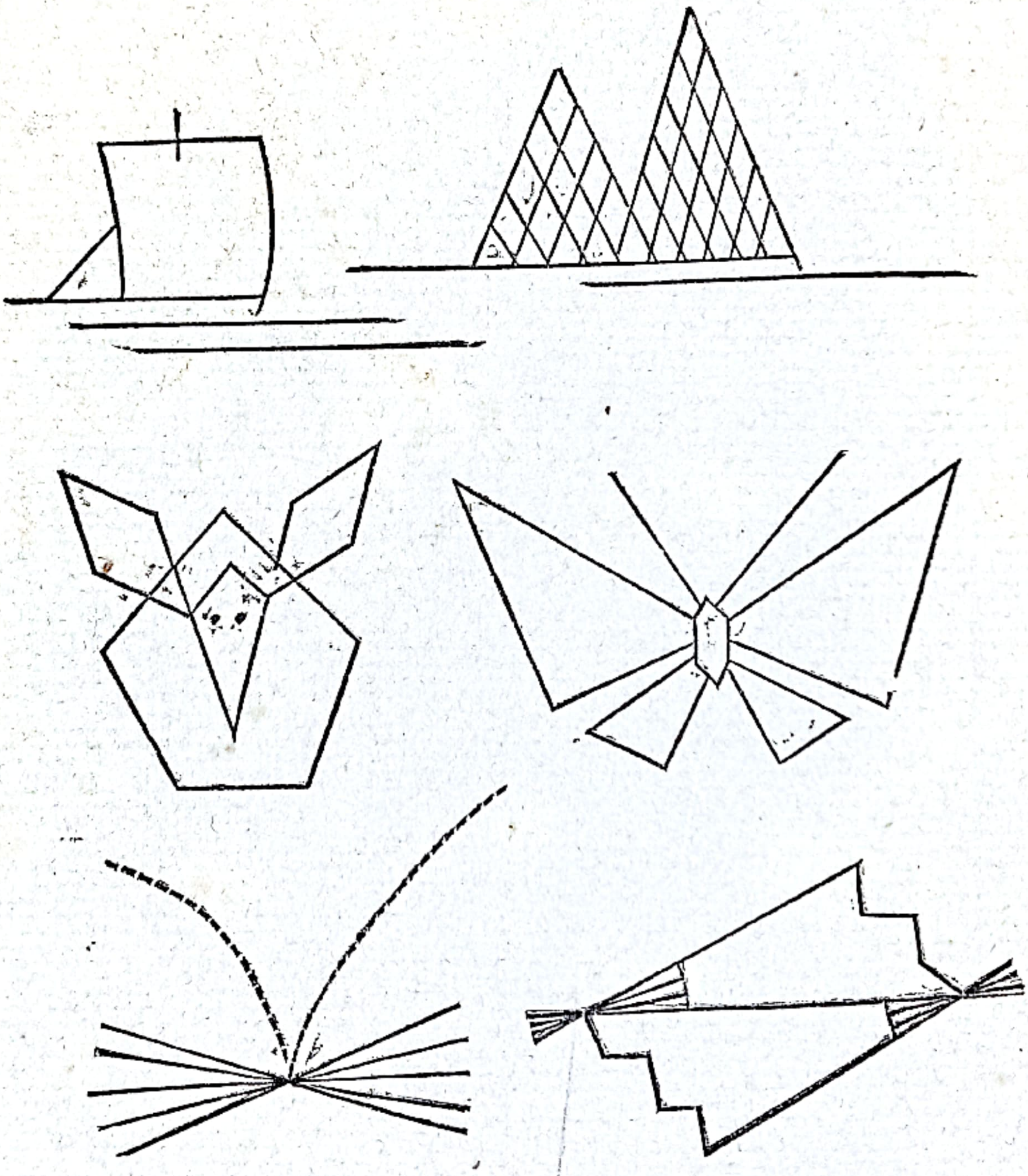
附紐及び脊文守の飾縫（三）

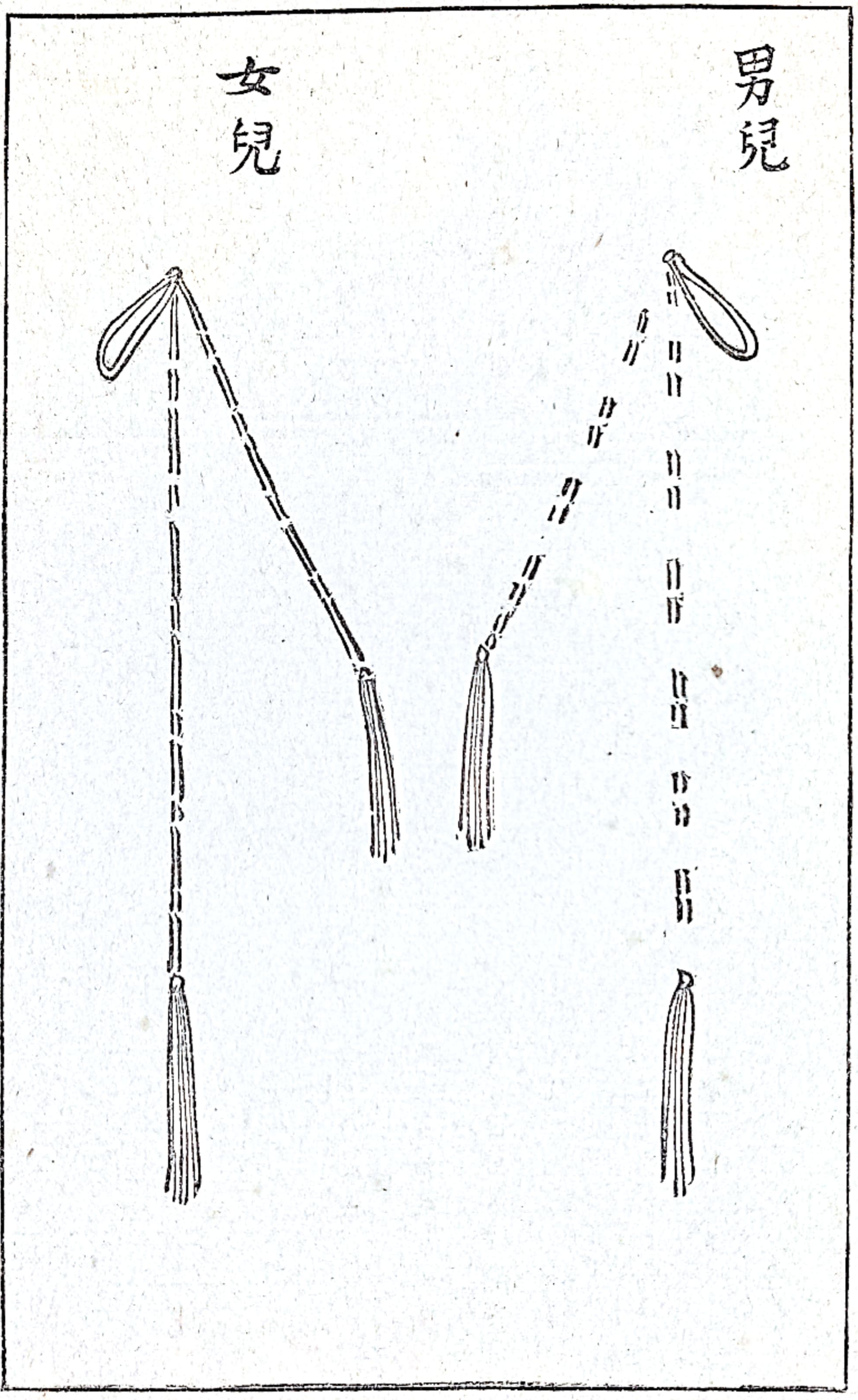


附紐及び脊文守の飾縫(四)



附紐及び背文守の飾縫（五）





（六）附紐及び脊文守の飾縫

第九章　袷綿入箆附及び縫ひ方

袷綿入箆附に就ての注意

袷綿入を仕立つるに付て、注意を要する點は、表布と、裏布との、丈の工合を見ると肝要なり、假令ば、同じ性質の布を裏表に用ふるときは、表身丈よりも裏身丈は𢌞代のみ長くすれば、事足れども表縮緬の類にて、裏の薄き絹などのときには、俗にたれるといひて、表は、布の横糸の目方の重量によりて、自然に裏の絹よりも長くなるものなれば、其たれ代、即ち其布の地質によりて多少の差はあれども、一分乃至二分位迄の寸法を加へて、裏身頃の丈を計りて、後、箆附をなす可し。

一つ身袷綿入

(一)表袖は、兩袖を中表にして、二枚重ね、二つ折り、輪を左にして、置くこと、單衣の時と同様、第一に、袖丈、袖附の印をなす、袖丈、袖口は、出來上り寸法より一分多くすべし。
(出來上り寸法より一分多くするはきせ又は縫ひ縮みを加へたるものなり)

(二)裏袖は、表袖同様に印を附け、次に袖口切れを中表に、二枚重ねて置き口先を一分出して、裏袖の上へ袖口幅の印を附けるなり。
但し袖丈は袖口の方を表と同寸にして八つ口の方を一分つめるなり袖口のかけ出し綿入の時は圖の如く篦印をなす

(三)表身頃は、竪に二つに折りたるものを中表にして篦をなすこと單衣の通り。

(四)裏身頃は、總裏の時は、表身頃に袵丈長くなしたるものなり。
但し裏身頃が裾廻し付の時は裾廻し切れを揃へて裾口を左の方に置き切口より丈印をなす胴裏を表身頃同様に置き表身頃

より裾廻しの丈を引きそれに袘代を加へて印をなす

(五)表衽は、篦附圖の通りになすべし。

(六)裏衽は、圖の如く、袘だけ加へたるものなり。

(七)衿丈の計り方、單衣同樣なり。

三つ身袷綿入は、脊縫あるのみにて、他は一つ身同樣なれば、丈印をなし脊縫をして、後幅の印を附けるなり他の所は一つ身と同樣に、印をなすべし。

四つ身袷綿入

(一)表袖は、單衣の時と同じく、袋縫印をせずして、直に袖丈、袖口、袖附の印をなす。

(二)裏袖は、表袖同樣にす、袷なれば、表袖篦(2)圖の如くなすべし、綿入の時は男物袖口の如く、かけ出しを、下四分上五分となすこと、濶口袖の時は(1)圖のごとくなすべし。

(三)表身頃は、單衣篦附の通り中表にして、裾口を切り揃へて印をなす。

(四) 裏身頃は、表同様なり裾袘だけ、丈を長くす、裾廻しの時は、一つ身に述べたる通りに箆をなすなり。

(五) 表衽は、前幅を計りて、單衣同様に箆をなす。

(六) 裏衽は、裾廻しと、胴裏とを縫ひ合せて、表同様に箆印をなす。

(七) 衿は、一つ身同様にして、丈を定め箆をなす。

本裁女物袷綿入

(一) 袖は、四つ身同様にして、袖丈、袖口、袖附の印をなす、袷の時は袖口一分かけたし、綿入の時は、男物袖口の如くなすべし。

(二) 表身頃は、單衣の時と同様にして、丈を切り揃へ箆印をなす。

(三) 裏身頃は、中表にして、總裏のものは、袘だけ長くす、胴裏及び裾廻しのあるものは、本裁女物箆圖の如くなす可し。

(四) 表衽は、中表として、丈を計り、褄先き三分、衿下中央にて四分、相褄にて五分になす

他は單衣同様なり。

(五)裏衽は、表衽より袵だけ長きものなり、裾廻し切のあるものは、本裁女物袷、及び綿入篦附(3)圖裏衽篦附の如くなす可し。

(六)衿は、單衣の時同様に丈を定め、衿先切を附篦をなす。

本裁男物袷綿入

(一)表袖は、單衣の通りに中表にして、直に袖丈袖口、人形の印をなす。

(二)裏袖は、表袖通りにして、丈印袖口印袖附印をなし、袖口切は上五分下を四分として、篦をなすなり。

但し袷の時は袖口一分出すこと女物同様なり

(三)表身頃は、單衣通りに中表にし、丈を切り揃へ、丈を定めて、肩山袖附腰上げの印をなす。

但し身丈の定め方は着丈に六分加へるなり其六分は脊縫の上

下縫代ときせの二倍なり

(四)裏身頃は、男物篦の圖の通り、腰上げを肩にて造るなり。

(五)裏袖附袖附は、肩上げの印より計るなり。

(六)衽衿の篦は、本裁女物同樣なり。

袷を仕立つるに就て、各部要所の注意

(一)袖縫

袖口かけ　袖口の縫ひ方

袖口の留め方

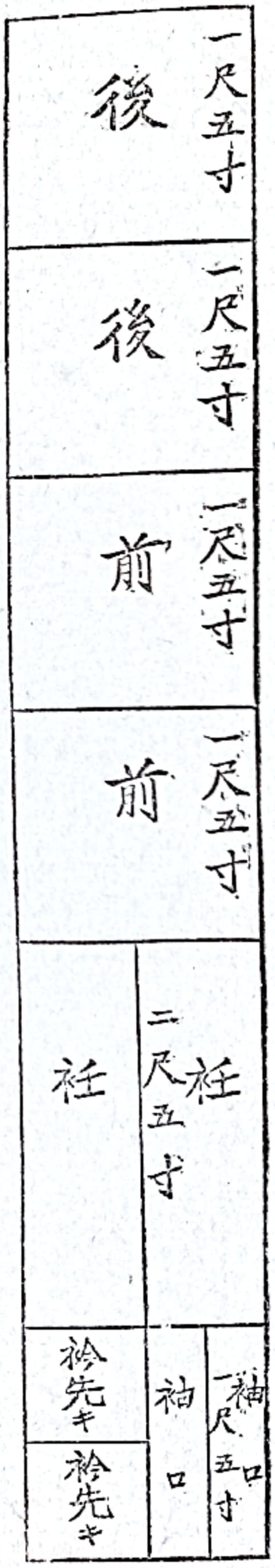
(二)褄縫

(三)袖附

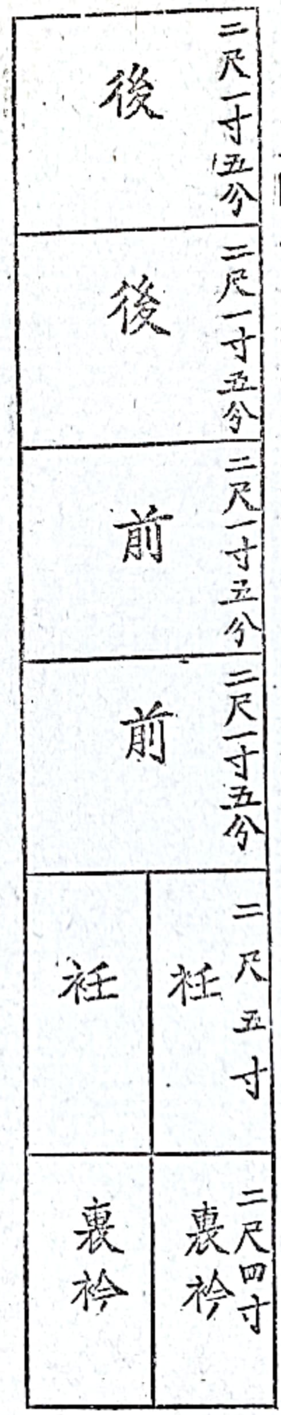
(一)袖縫濶口の袖口かけ　袖口切の縫代の印、及び裏袖袖口かけの印の折をなし、裏袖と袖口切の折と折とを合せて第一圖の如く縫ひ、袖口切の方へ、折をつけ、袖口

裾廻し及び胴裏の裁方

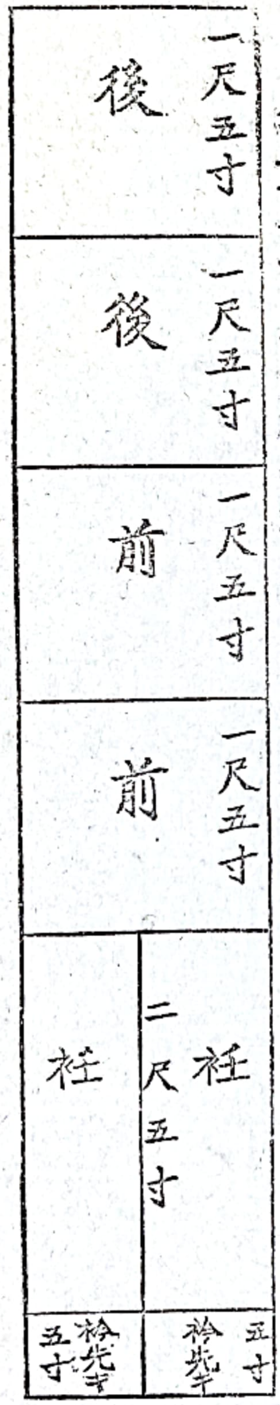
(三丈物)壹反三つ切並幅一丈の裁方(女物)



並幅一丈三尺五寸にて男物裾廻しの裁方

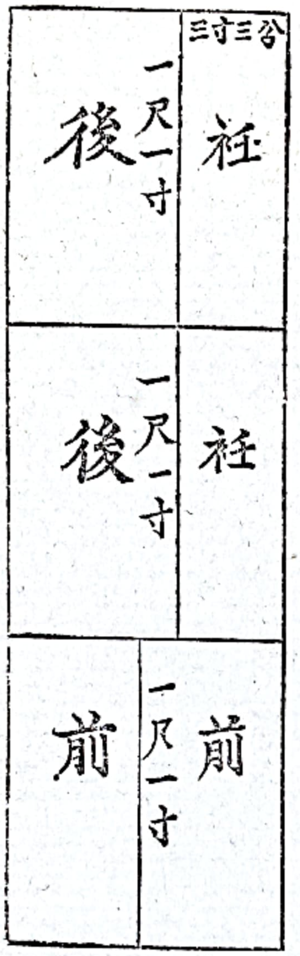


(二丈七尺物)壹反三つ切並幅九尺の裁方(女物)



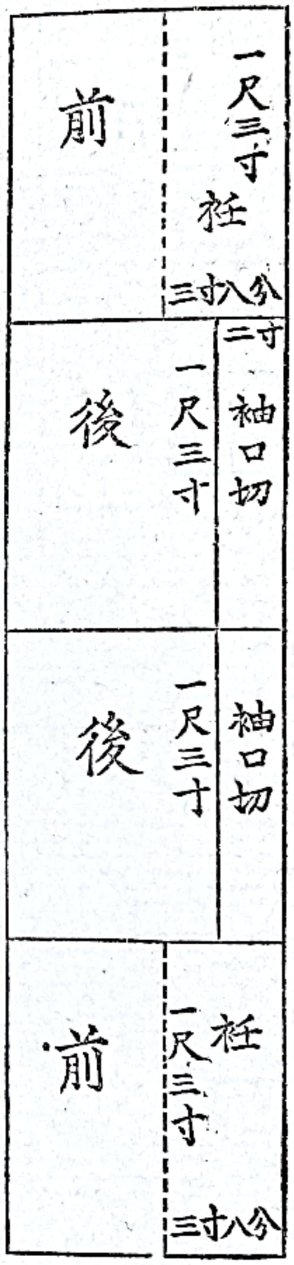
並幅三尺にて一つ身裾廻しの裁方

並幅三尺三寸にて三つ身裾廻しの裁方

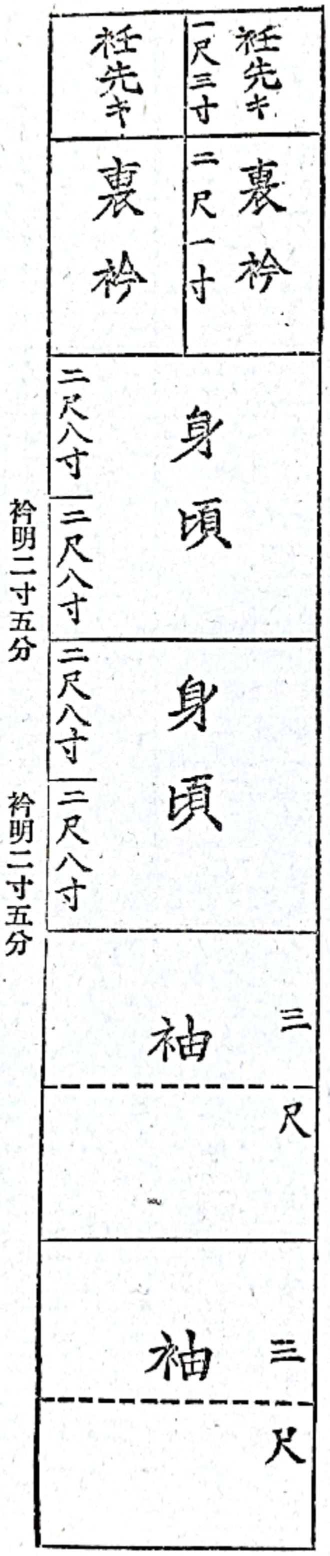


但し用布の此寸法不足なるときは二つ身三つ身四つ身共に布を横に用ふるも可なり

並幅五尺二寸にて四つ身裾廻しの裁方



並幅二丈六寸にて胴裏の裁方



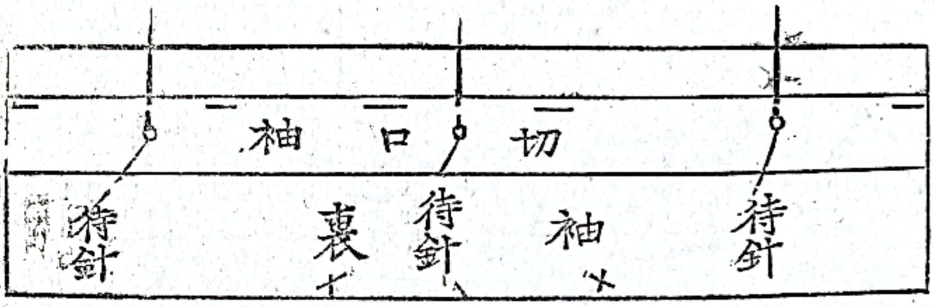
袖丈　袖　　身頃　袖　身頃　裏衿　衽先き

15×4=60　28×4=112　60+112+21+13=206……用布

◎一つ身、三つ身、四つ身の胴裏裁方は表地の裁方と寸法の異なるのみなれば略す

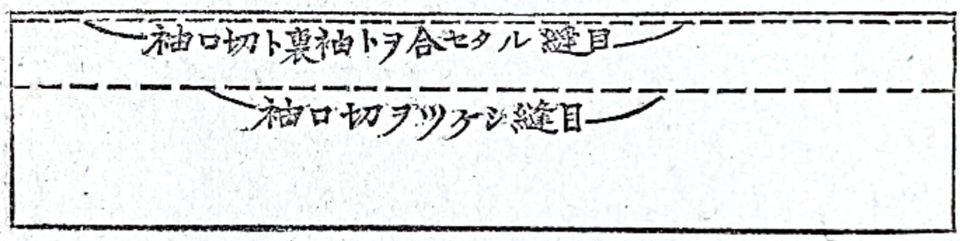
袖口かけ方

(1)



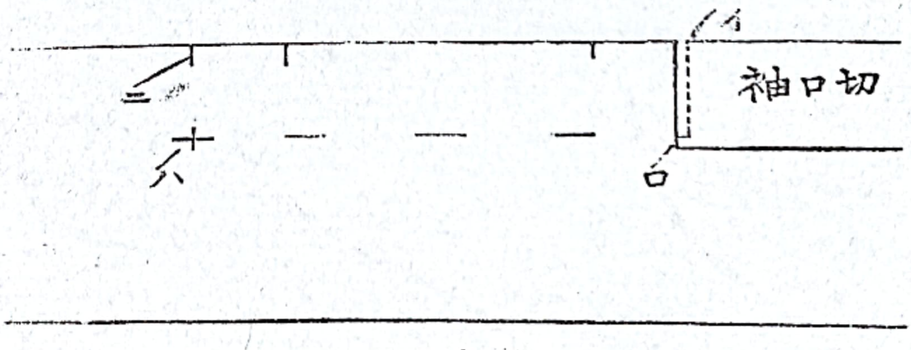
(1) 袖口切の待針をなしたる圖

(2)



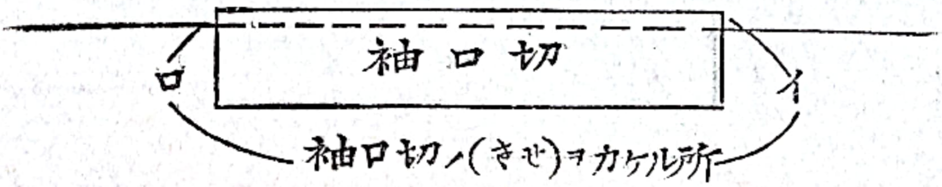
(2) 袖口切をかけ終り裏を見たる圖

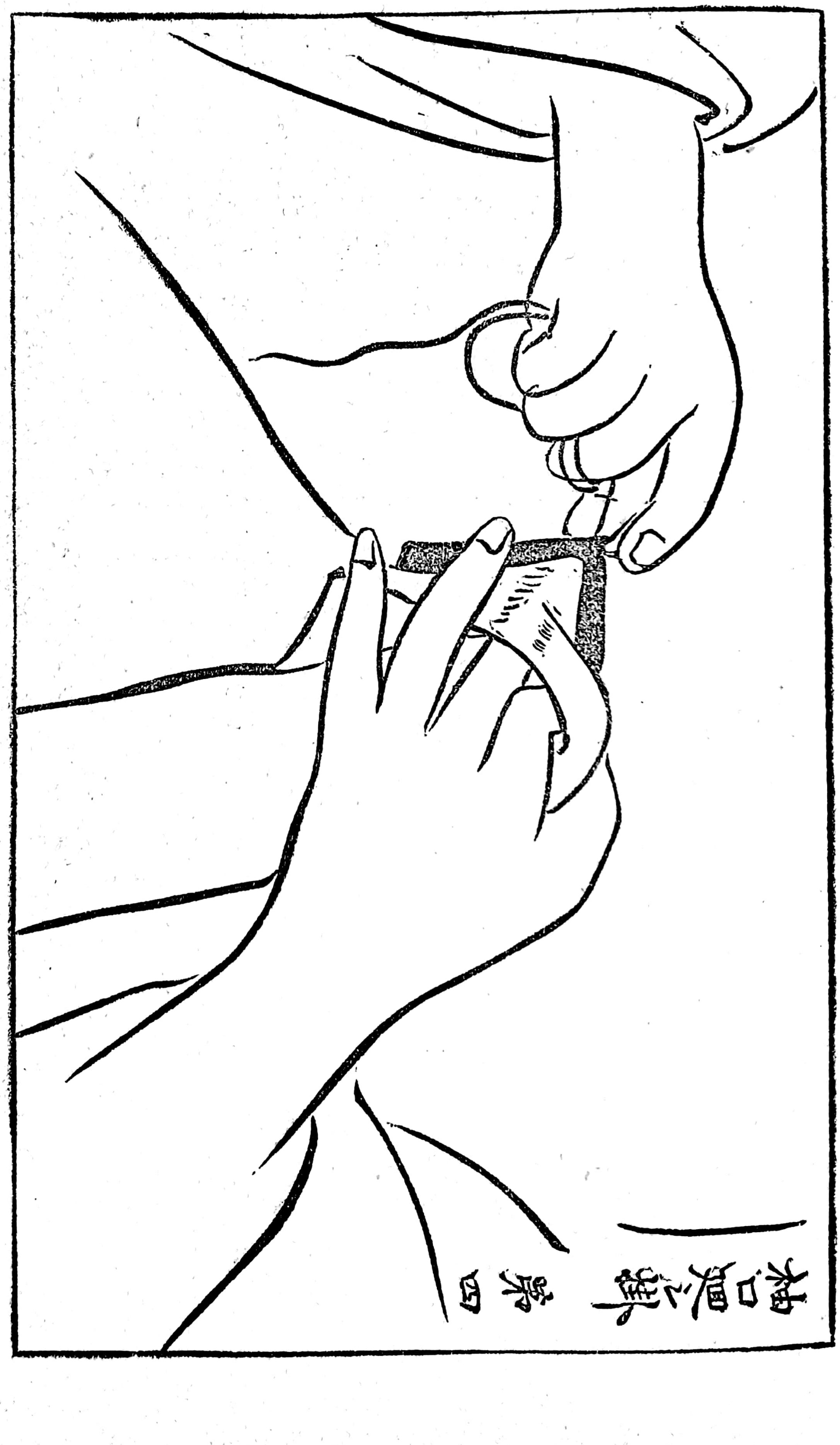
(3)



(4)

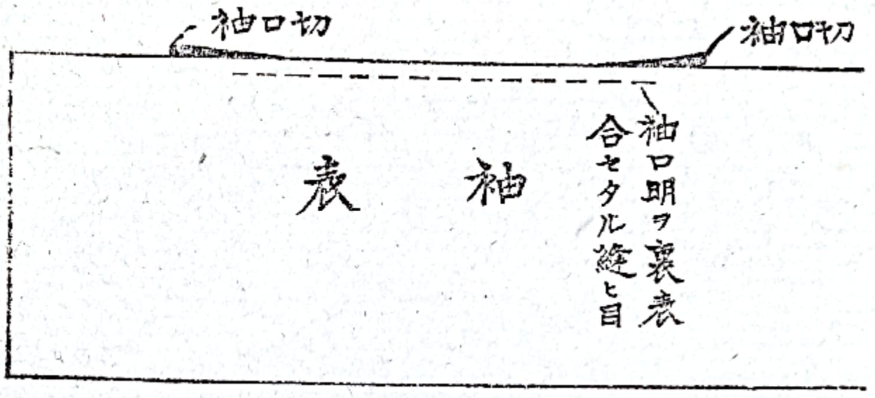
(5)



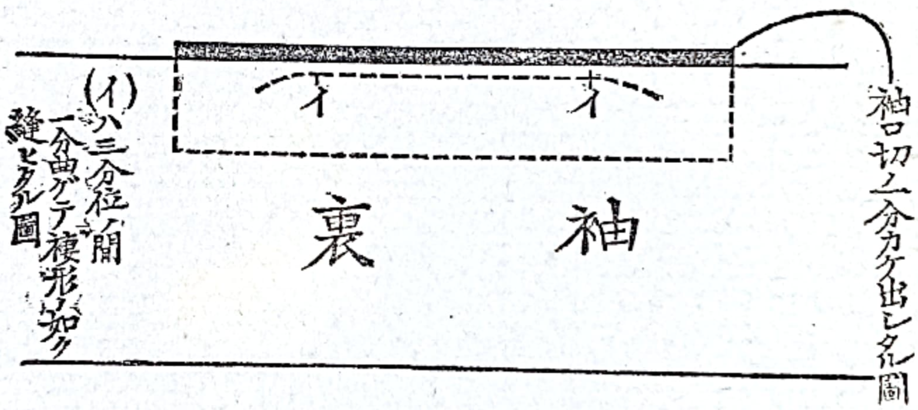

第四

袖口明を裏表縫ひ合せ

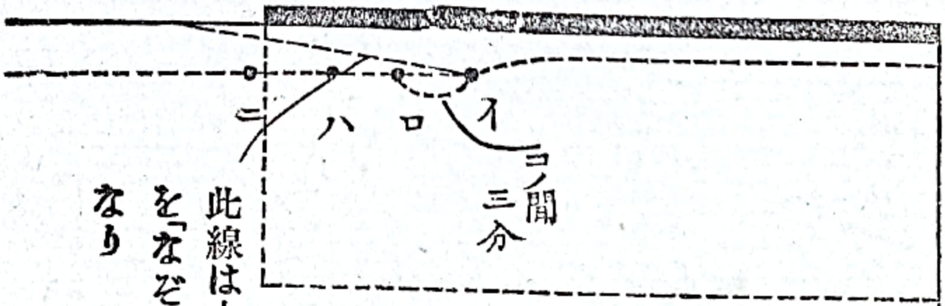
(1)



(2)



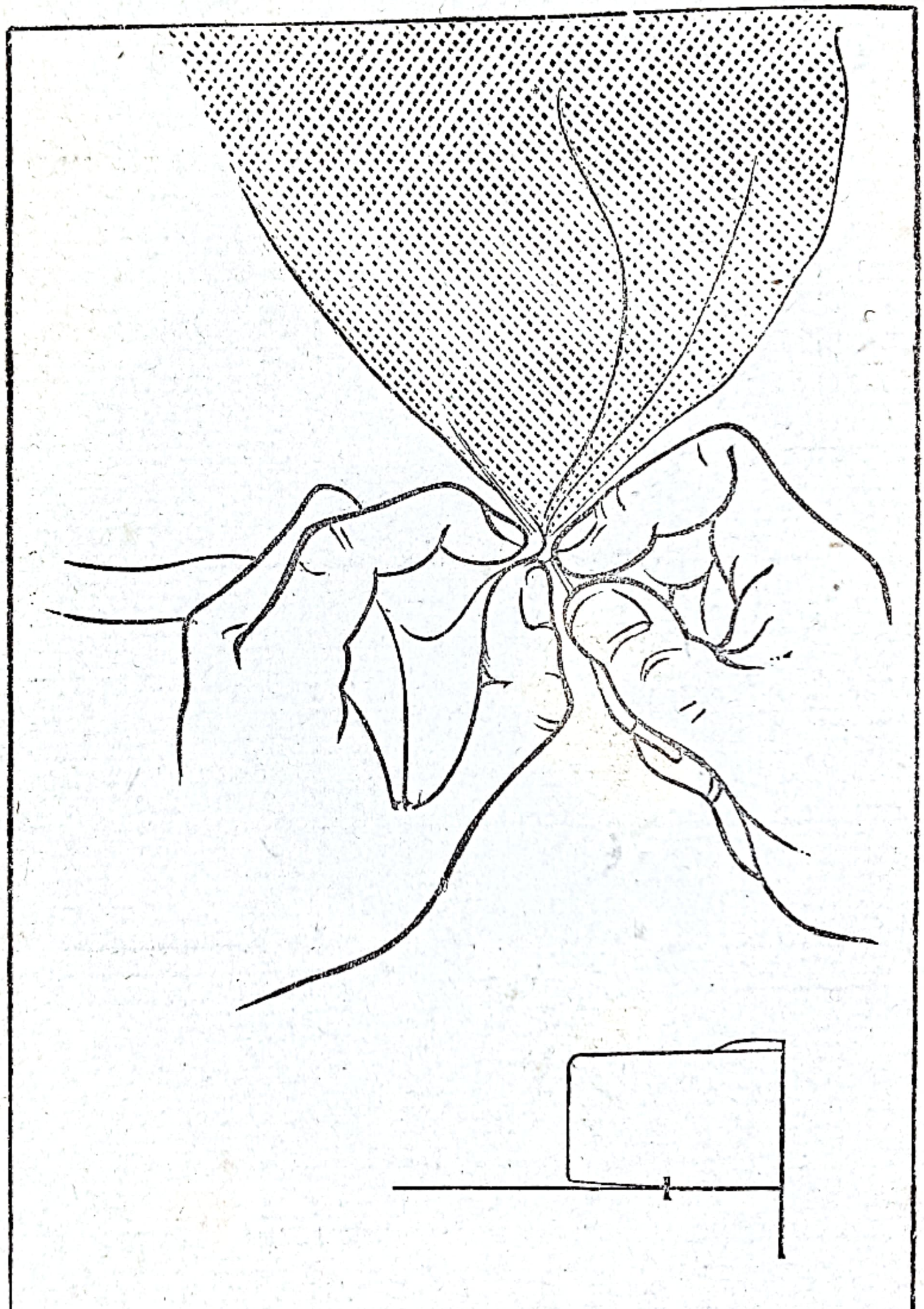
(3)



裏袖を見て四ッ留をなし三分の針目の間を又更に細かく返し針にて縫ひ潰したる圖

イロ、ハ、ニ、の間は各三分づゝ離すなり

此線は中に挾みたる切を「なぞへに」折りたるなり



女物袷綿入袖附留方

先きを揃へ二分位の針目にて縫ふなり。

但し袖口先きを縫ふには、山より左右に五厘づゝ袖口切を詰めて縫ふこと

元祿袖及び袂袖の袖口かけ　袖口切を掛るには、第三圖(イ)より(ロ)までの袖口切の横を縫ひ(ロ)にて一針淺く抄ひ留をなし、其糸を右の中指にからげ、其糸を引きつゝ、左の母指食指中指の三本にて袖口切を廻し、裏袖の印と、袖口切の縫代とを合せ(ロ)より凡そ一寸離れたる所に待針をなし、其針を母指と、食指とにて持ち、中指を(ロ)に裏より當て、細かに待針のところまで、袖口切の縫代よりも、稍々淺く縫ひ、(ロ)に當てたる中指は、縫ひ針の進むに從ひ、其針先きに連れて動くものとす、次に(ハ)迄縫ひ進み此所にて、又(ロ)の如く一針抄ひ留をなし、袖口切を引き廻して(ニ)まで縫ひて糸を留め、(ロ)と(ハ)の角を、正しく四角に袖口切の方に、折をつけて引返し、鏝をかけ、袖口の兩方の横即ち(イ)と(ニ)に少し「きせ」をかけ、袖山と袖口切の山と

に待針をなし、袖口切を少し詰めて、躾をかけるなり。

　但し袖口切は裏よりも、一分かけ出すものとす圖の如し）

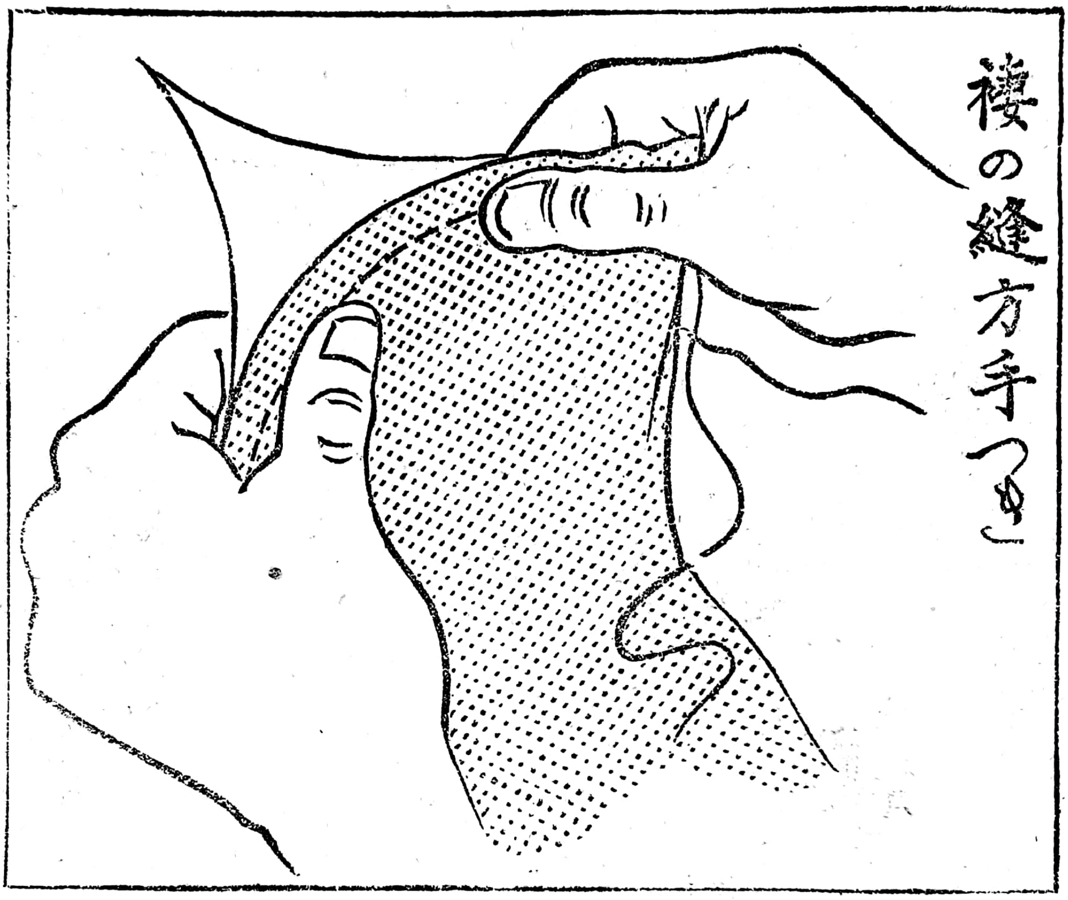
總べて袖口切をかける時は、其口先きを縫ふ時に、袖裏を緩め、袖口切をつらして口先きにあらく縫躾をかけるものとす、斯く爲さゞる時は、出來上りて後に、袖口切の縮れて、見苦しきものなれば、能く注意をなすべし。

袖口縫方　袖口切をかけ終らば、表袖と、裏袖と、袖口の縫代を揃へて、袖山に待針をなし、表袖を見て、袖口の明を縫ふ、其縫ひ始め終りは、圖の如く、口明の印より、三分位の間一分曲げて(褄形の如く縫ひ、表袖は裏袖よりも、少し緩く縫ふ事、袖口かけの時、袖口を詰め、裏袖を緩めたるものと同樣になす(即ち表袖と裏袖の口明は同寸にて袖口切のみを詰るなり)縫ひ終らば、能く糸こきをなして、其縫目に平鏝をかけるなり。

一つ身濶口の袖口、縫方も同樣、裏表の袖は、同寸にて、袖口切れのみ詰るものとす。

袖口留め方　袖口の留め方は、左袖は表袖を見て、袖口を縫ひその糸にて、縫ひ始めの口明を、中に挾みて、極て淺く、表より裏と、次に裏より表、四枚重ねて針を貫き通し、其針を刺したる所を、左右の母指と、食指とにて、確と摘み(寫眞參照)厚き所をこなし、左の指は、其儘摘み居り、右の手にて針を二三度、拔き返して能く口明の部を留め、次に中に挾みたる切を、裏表共に、一寸五分程などへに、第三圖の如くに折り、四枚平に据へ、三分位の針目に、一針拔き、其れより、又細かき返し針にて、前の三分の針目を縫ひ潰し、又下に三分一針を布を平らに据へて縫ひ、前の如く、其針目を縫ひ潰すべし、而して袖口切の有る間は、幾度も繰り返して斯の如くなすべし即ち表を見て縫ひたるは左袖裏を見て縫ひたるは右袖と知るべし元祿袖の袖口も、同樣の留め方なり。

(二) 褄の縫方　褄は着物縫ひ方要所の中にて、最も人の注目するものなれば、其縫ひ方に於ても、亦大に苦心を要するものなり、即ち圖に示せるは、上前にして、何れも

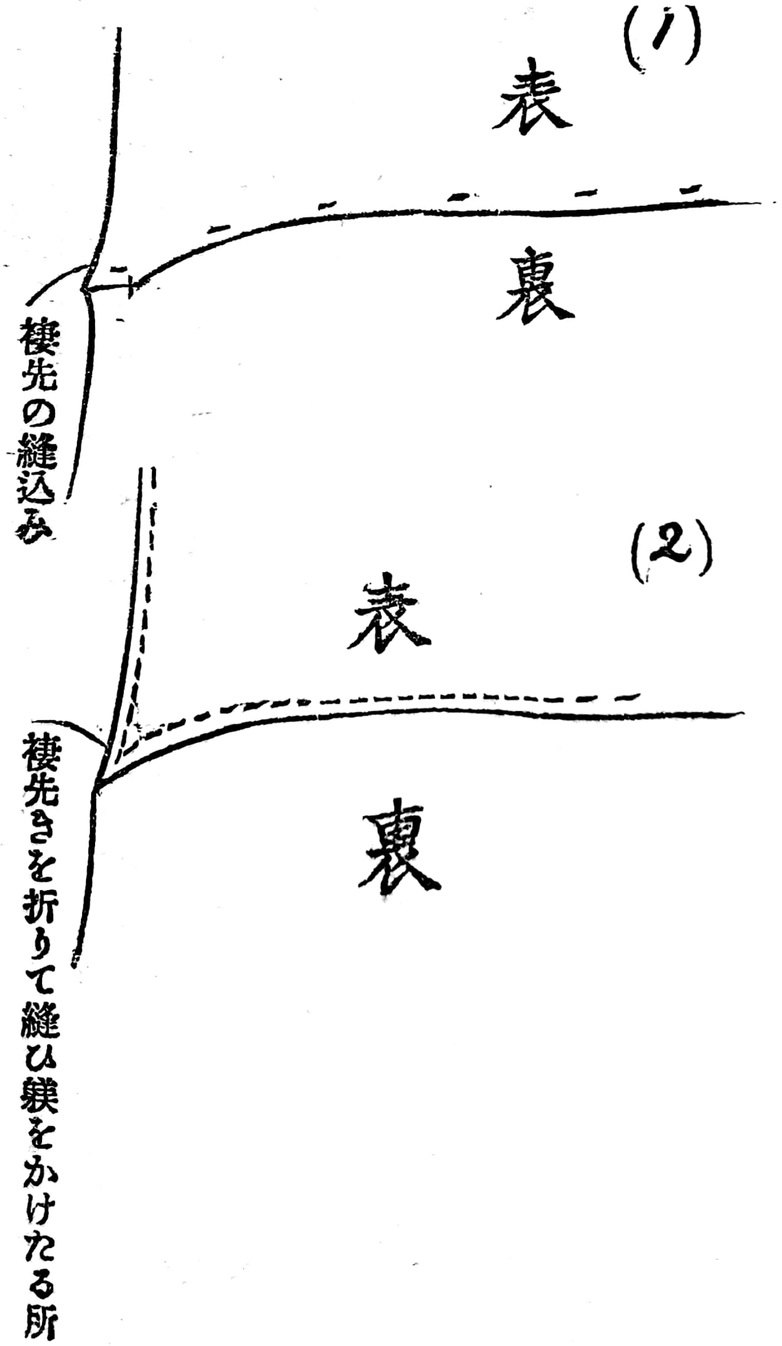

褄の縫方手つき

衽附より縫ふべし、其理由は裏布の丸みたる所、褄先の角を斜に引き詰めて、表布と合せ据へて縫ふものなれば、褄先きより縫ふ時は、自然に其「いせ」の褄先きに納まらず、衽附の方に寄りて、褄の据はり工合悪しく袘に皺の出づることあれば必ず兩方共に衽附より、上前は表を見、下前は裏を見て縫ふなり、縫ひ終らば、褄先きにて抄ひ留をなし、糸を切り、前の褄先きにて「いせ」たる裏の縫ひ込みの切に

褄ノ躾カケ方ノ圖

(1)は袷褄にかくし綴をなしたる所

(2)は綿入褄に縫ひ躾をかけたる所



鏝をかけ、他の縫目に平鏝をかけ、表へ引き返し、五厘の「ひ
り二分程上に、縫ひ躾をなし、其躾の際に、衽附より一寸離
なすこと圖の如し。
褄縫は形を用ふるの方法と用ひざるの二法あり然し用
減にて縫ふことを練習すれば其法は自然の趣味ありて

(三) 袖附　袖附は、肩幅の印よりも、一分多く出して折りをつ
待針をなし、身頃を見て、袖附の四ッ留をなす、其留め方は
く抄ひ、次に表袖の八ッ口を縫ひたる際を一針淺く、次に

山と袖の山とを合せ、山を少し返し針をなして、袖付の一寸手前迄縫ひ、又前の如く「なぞへ」に折りて、返し針をなし、前同様に四ッ留をなす折は、五厘「きせ」をかけて袖の方へ折る。次に、裏袖附は、裏袖を袖幅よりも一分出して折り、身頃を開き、身頃の山と袖の山とを合せ、裏袖を見て、袖附の際を一針抄ひ留をなし、其糸にて、一分の縫代にて縫ひ、終りも亦前同様に、留め折は身頃の方へ折るなり。

一ッ身袷(濶口)縫ひ方

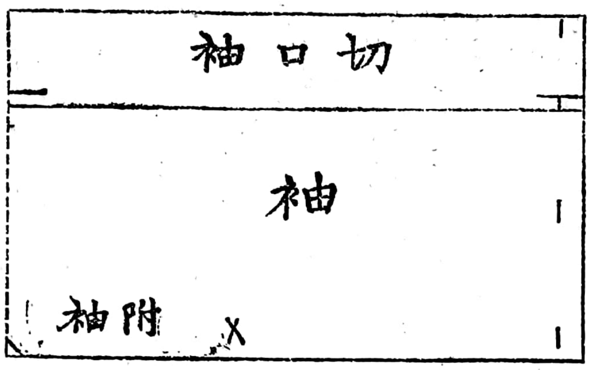
一、縫ひ方順序

(一)袖　(二)表身頃　(三)裏身頃　(四)裾合せ　(五)衹綴　(六)脇綴　(七)身八ッ口縫ひ
(八)袖附　(九)衽綴　(十)褄下　(十一)衿附

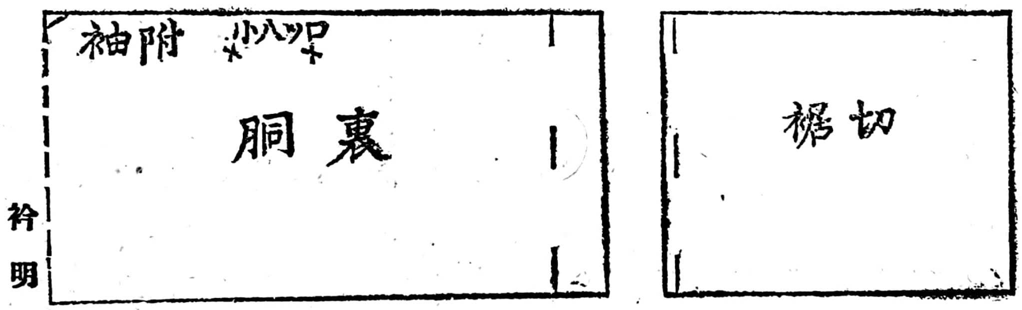
(一)袖は前に述べたる如く、裏袖に袖口をかけ表袖と合せて、袖口を縫ひ、平鏝をかけ、表に折を付け裏表の袖下を縫ひ、左右の袖を定めて、袖下に折をつけ、表に返し袖口を五厘出して躾をかけ、袖幅の印をつけ、又裏に返し、八ッ口を縫ふなり、八ッ口

一つ身袷及び綿入の篦附方（潤口）

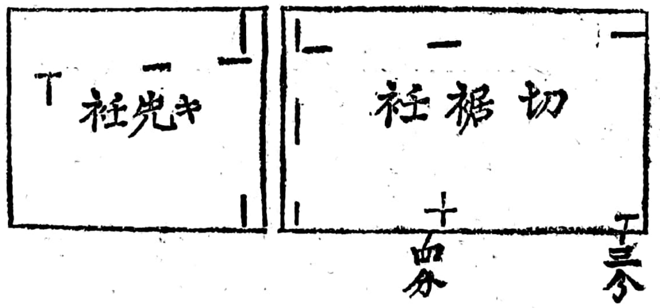
(1)



(3)　(2)



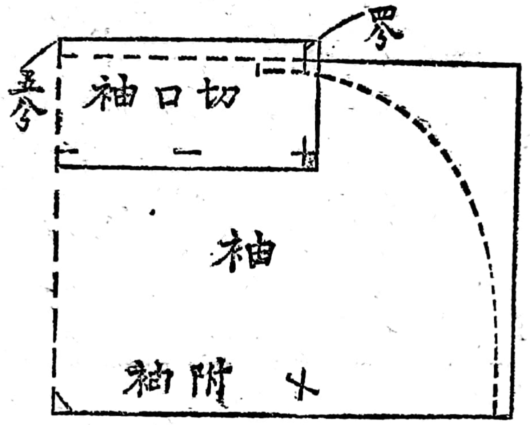
(4)



一、三つ身篦附は一つ身同様なれば略す

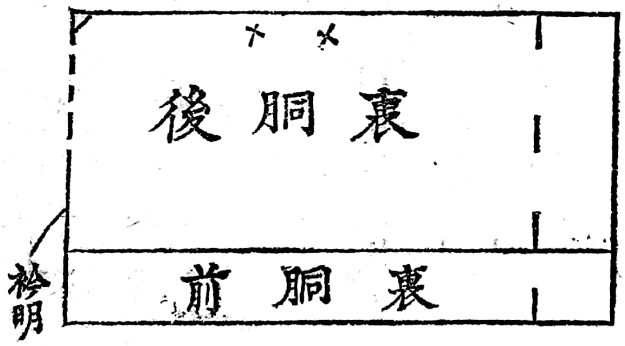
四つ身袷及び綿入の篦附方（元祿袖）

(1)

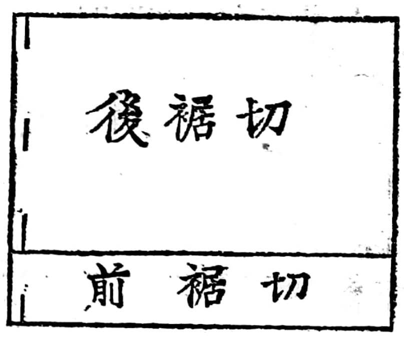


(1)袖口切のかけ方裏袖幅の端よりも上五分下四分かけ出して篦をなすなり之は綿入の袖口にて袷は上下共に一分なり

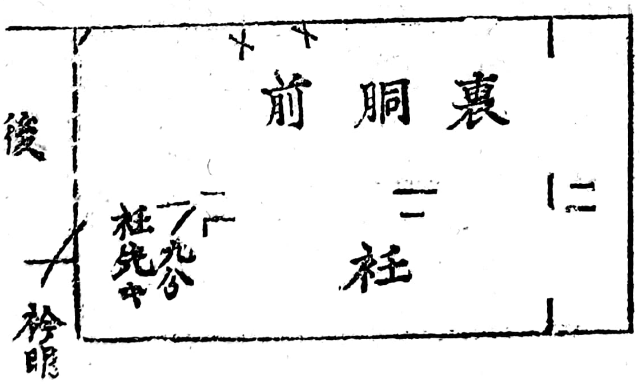
(3)



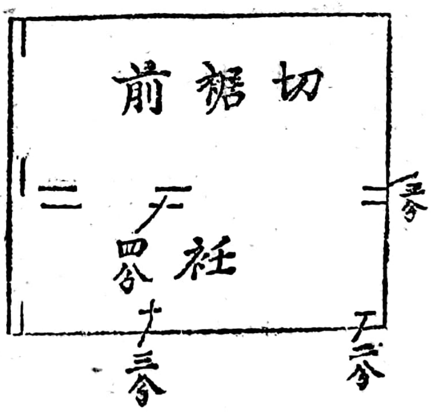
(2)



(5)



(4)



を縫ふには、表は袖幅の印を、裏は印よりも少し内側を、裏を少しつらし、表を綴めて、袖付より袖付まで、表を見て縫ひ、其縫ひ目に、平鏝をかけ、袖下の縫ひ込みを裏表綴ぢつけ、表に引き返して八ッ口に五厘「きせ」をかけて躾をなすなり。

（二）表○身○頃○は、一ッ身單衣と同様なり。

（三）裏○身○頃○は、裾廻しなき時は、表と同様裾廻し有れば、胴裏の丈の印と、裾廻しの印とを合せて、胴接ぎをなし、胴裏の方へ折をつけて縫ひ躾をなす、衽も同様に、接ぎ合せ、次に表と同じく縫ふなり。

（四）裾○合○せ○は、表身頃を見て、裾口を裏表揃へ、二分五厘の縫代にて、下前の衽付より縫ひ始め、脇の縫目は、一針返して縫ひ、上前の褄を縫ひ、次に下前の褄は裏を見て衽付より縫ふ、次に裾の縫ひ目に平鏝をかけ（折鏝は決してかける可からず）表に返し五厘の「きせ」にて裾口に躾をかけるなり。

（五）袘○綴○は、袘の出る寸法を定め、下前への衽附、縫目のところを、裾の折より二分上り

て表より裏へ、裏より又表へと表へ二度裏へ一度針を拔き出し、次に針を紕の中を通して表へ一針細かく出し、又其針を紕の中を通して裏に出し、裏より表に抄ひ上げ、又紕の中を通して、表に次に裏に、裏より又表に抄ひ上げ、又表に次に裏より表にと、順次に針目を出し、上前の衽付、縫目にて針を留めるなり、而して、其針目の數は、衽脇の縫目の針を除き、前身頃は、裏二ッ、表五ッ、後身頃は裏五ッ、表に十一針出すべし、（衽脇の縫目は、必ず表に二度裏一度の針目にて、留め縫ひ込みの有る方にて留め針目を縫目の兩方にかけるべからず。

(六)脇綴は、裾口と脇明の印とを能く引き合せて、裾より下前は表身頃を見上前は裏身頃を見て、脇縫の縫目の際を綴ぢつけるなり。

(七)身八ッ口は、肩幅の印と、脇明の身幅の印とを持ちて、裏表に折りをつけ、前身頃にて後身頃を挾み、極めて淺く、四枚抄ひ、四ッ留をなし、其糸にて前身頃を折よりも、五厘程縫ひ込みの方によりて、裏表を合せ、袖附の印まで縫ひ、表に引き返し躾を

なす、次に後身頃をも、前身頃同様に縫ふ可し。

(八)袖附は、前に述べたる如し。

(九)衽綴は、裾口より、衽先までを能く引き合せ、脇綴と同様に裾より綴ぢるなり。

(十)衿下は、衿下を縫ふには、相褄の幅と、褄先の衽幅との間に折をつけ、次に裁板の上に平らに据へ置き、表の折と同じ幅に裏の方にも印を付け、左右共に、褄先より縫ひ始め、相褄にて縫ひ終る、褄先の針の出し方は、表の褄先を、極めて浅く一針抜き、次に裏も同様一針抜きて、糸を引き出し、右の中指に其糸を巻きて引きながら、二度目の針を刺して褄先を定め、次に折よりも五厘程縫込みの方を一寸位細かに縫ひ其れより先は普通に相褄迄縫ふなり。

但し裾に綿を入る時は裏の方に、其綿を軽く縫ひ付け引返し、表を見て躾をかけるなり。)

(十一)衿附は、衿下の躾かけ終らば、裁板の上に置き、能く衽の切を据へて、裏表綴付単衣

の衿附と同様に、衿を縫ひ次に絎るなり。

三ツ身袷(筒袖)縫ひ方

一、縫ひ方順序　一つ身同様なり

(一)袖は、裏袖に、袖口切をかけ、袖口を裏表縫ひ合せ、五厘「きせ」をかけて、表に折をつけ口明の所を能く合せて二三度針を抜き返し、其糸にて表袖を袖幅迄縫ひ、裏も同様に、次に八ッ口を縫ひ、表袖の方へ折をつけ、袖下の裏表の縫目を綴ぢ付け、引き返して躾をかけるなり、其綴方は、袖口を右に表を見て綴ぢる時は、左袖となり裏を見れば右袖となるなり。

(二)表身頃は、三ッ身單衣と同様なり(但し脊縫は袋縫にせずして二分五厘の縫ひ代一筋にてよろし)

(三)裏身頃は、一ッ身袷同様裾と胴とを接ぎ合せ脊脇衽等は表同様に縫ふなり

(四)裾合せは、一ッ身同様なり

(五)袵綴は、前身頃は、一ッ身同様に、後身頃は脊脇の縫目を除き、裏は三針、表は七針出

して、一ッ身同樣の順序に爲す可し。

四ツ身袷(元祿袖)縫ひ方

一、縫ひ方順序　前に同じ

(一) 袖は、裏袖に袖口切をかけ、次に袖口明を裏表縫ひ合せ袖口留をなし、袖口切の有る間、袖口の留め方にて說明したる如くに返し針をなし、順次袖形の通り、八ッ口より三寸位手前まで四ッ縫をなし、其れより先きは、表裏を別々に縫ひ、次に八ッ口を縫ひ、前に示したる如く、丸みの襞を取り、表へ引き返して、躾をかけるなり而して表を見て縫ひたるは、左袖裏を見て縫ひたるは、右袖と知るべし、袖下は八ッ口の方より縫ふべし)

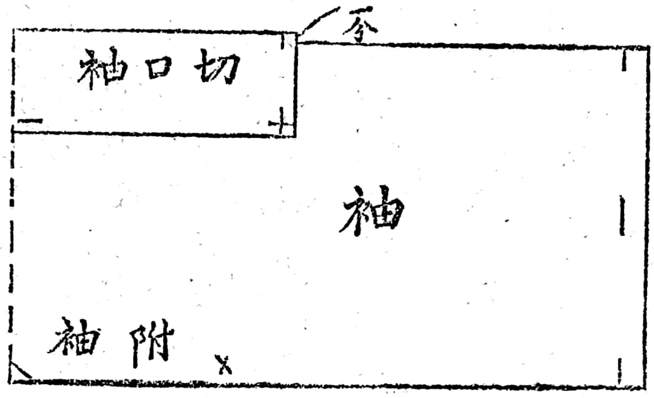
(二) 表身頃は、四ッ身單衣と、同樣の、縫ひ方なり

但し袋縫にせず二分五厘の縫代一筋なり

(三) 裏身頃は、一ッ身、三ッ身同樣、胴と、裾とを接ぎ合せ、表身頃同樣に縫ふ可し。

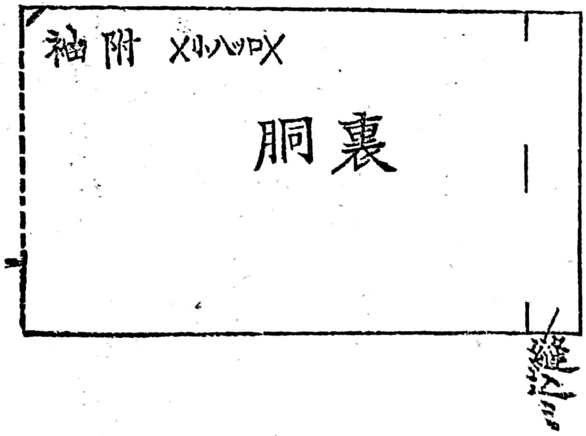
本裁袷及び綿入裏の篦附方（女物）

(1)

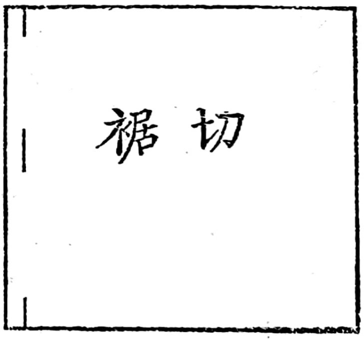


(1)袖口切かけ出し一分なる時は男女共に袷なり綿入のかけ出しは次に示す

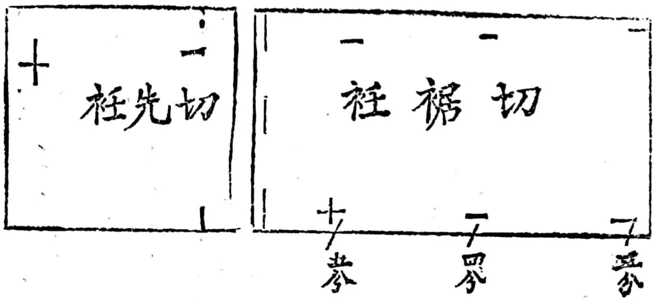
(3)

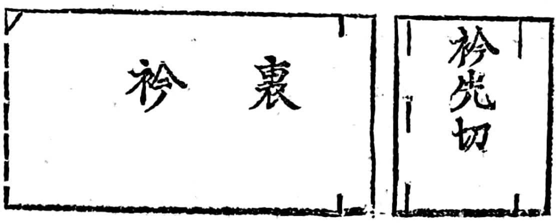


(2)



(4)





(2)裾切の篦
(3)胴裏の篦
(4)裏衽の篦
(5)裏衿の篦

一表の篦は單衣同様なり

(四)裾合は、一ッ身、三ッ身同様なり。
(五)衽綴は、前身頃は、衽脇の縫目を除きて、裏は三針表は七針、後身頃は脊脇の縫目を除きて、裏は四針、表は九針を出し、針の順序は、前同様に爲す可し。
(六)脊脇綴。(七)身八ッ口。(八)袖附。(九)衽綴。(十)棲下。(十一)衿附等。
何れも一ッ身三ッ身同様なり。

本裁女物袷縫ひ方

一、縫ひ方順序　前に同じ

一)袖は、前に述べたる如く、裏袖に袖口切をかけ、次に袖口を、裏表縫ひ合せ、袖口を留め、四枚揃へて、眞直に袂先き迄、縫ひ、糸を留め、次に其縫目より、四枚一度に袖幅の印をなす、袖幅は、出來上り寸法よりも、一分多く印をなすべし、次に裏表共、別々に八ッ口より三寸程、袖下を縫ひ、次に八ッ口を裏表合せて、袖附より袖附まで縫ふなり、八ッ口を縫ふときは裏の袖幅を印よりも少し内側を縫ふ可し、次に袖下の

殘りたる所を八ツ口の方より丸み迄、四枚揃へて四ツ縫になし、丸みの襞を取ること前述の如し、但し單衣の丸みとは異なり、四枚一度に襞を取るが故に、地質の硬きものなどは、餘程困難なれば、大に熟練を要するものなり(而して袖口を留めたる糸にて、袖下まで縫ひ、次に八ツ口を縫ふ方手順宜しき樣なれども、八ツ口を縫ひ合す時、困難なれば、袂先きにて、一先づ糸を留め八ツ口を先きに縫ふ方却つて早く出來上るなり)八ツ口を合せたる縫目には、平鏝をかけ、表に引き返して、第一に八つ口に躾をかけ、次に右袖は袖口より、順次袖下の八ツ口迄左の袖は反對に袖下より躾をかけ、袖山の袖幅を折りて置く可し。

(二)表身頃は、脊脇衽を單衣同樣に縫ふなり

但し脊縫は二分五厘縫代一筋にてよろし

(三)裏身頃は、前述の如く、胴と裾とを合せ、衽も同樣接ぎ合せ、表身頃の如くに縫ふなり。

(四)裾合せは、一ッ身、三ッ身、四ッ身同樣なり。

(五)紕綴は、四ッ身と同樣の針數に出す可し。

(六)脊脇綴。(七)身八ッ口。(八)袖附。(九)衽綴。(十)衿下等は、三ッ身四ッ身同樣なり。

(十一)衿附は、衽を裁板の上に置き、能く据へて、裏表を綴ぢ付け本裁女物單衣と同樣に、縫ひ衿先衿絎も、亦同樣に爲す可し。

本裁男物袷縫ひ方

一、縫ひ方順序

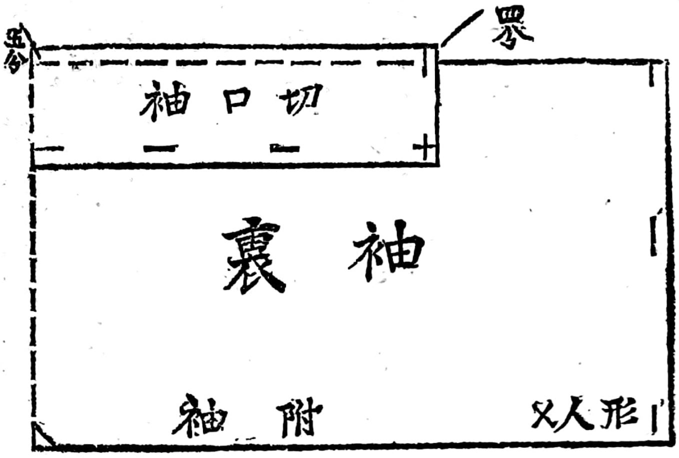
(一)袖。(二)表身頃。(三)裏身頃。(四)裾袷。(五)紕綴。(六)脊脇綴。(七)袖附。(八)衽綴。
(九)衿下。(十)衿附。

(一)袖は、裏袖に、袖口切れかけ、袖口明を裏表縫合せ、袖口を留め、袖口下を袂先き迄四ッ縫をなし、糸を留め、其儘四枚一度に袖幅の印をなし、人形より袖下三寸位迄裏表別々に縫ひ次に袖下の殘りたる所を、丸み迄四ッ縫になし、女物同樣丸みの襞

本裁袷及び綿入裏の箆附方（男物）

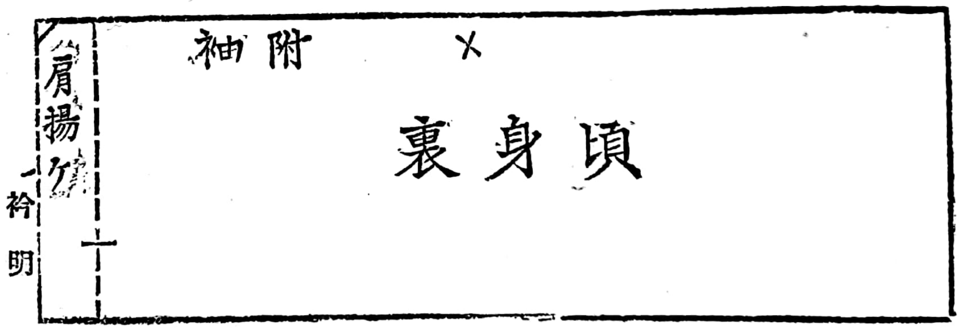
一、表は單衣と同樣にして身の丈を出來上りよりも六分長くするなり

（1）

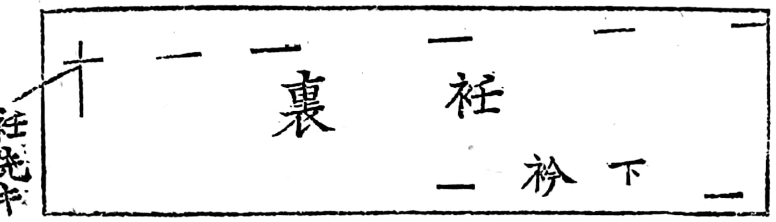


(1)袖口切のかけ出しは綿入の寸法にして女物も之れと同様なり

（2）

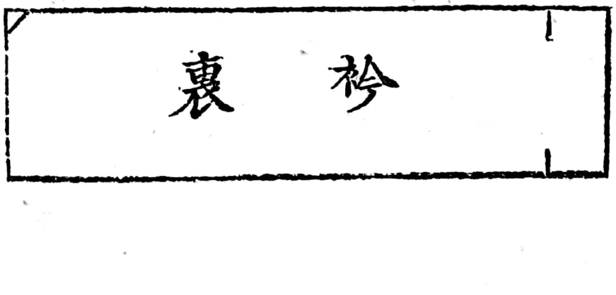


（3）



(2)裏身頃の揚げは肩にてなすなり

（4）



を取り、人形は表袖を男物單衣の人形の如く、角を造り、表に引き返し、次に裏を表同樣になして、表袖の人形の中に差込むなり、躾は女物同樣なり。

(二)表身頃は、男物單衣と同樣なれども、脊縫は二分五厘の縫代一筋にてよろし。

(三)裏身頃は、男物は大凡そ通し裏なれば、第一に、肩の山に揚をなし、之れを前後に割りて、躾をかけ、次に脊脇衽は、表同樣に縫ひ、又裾廻しの付くものは、女物裏身頃と同樣なり。

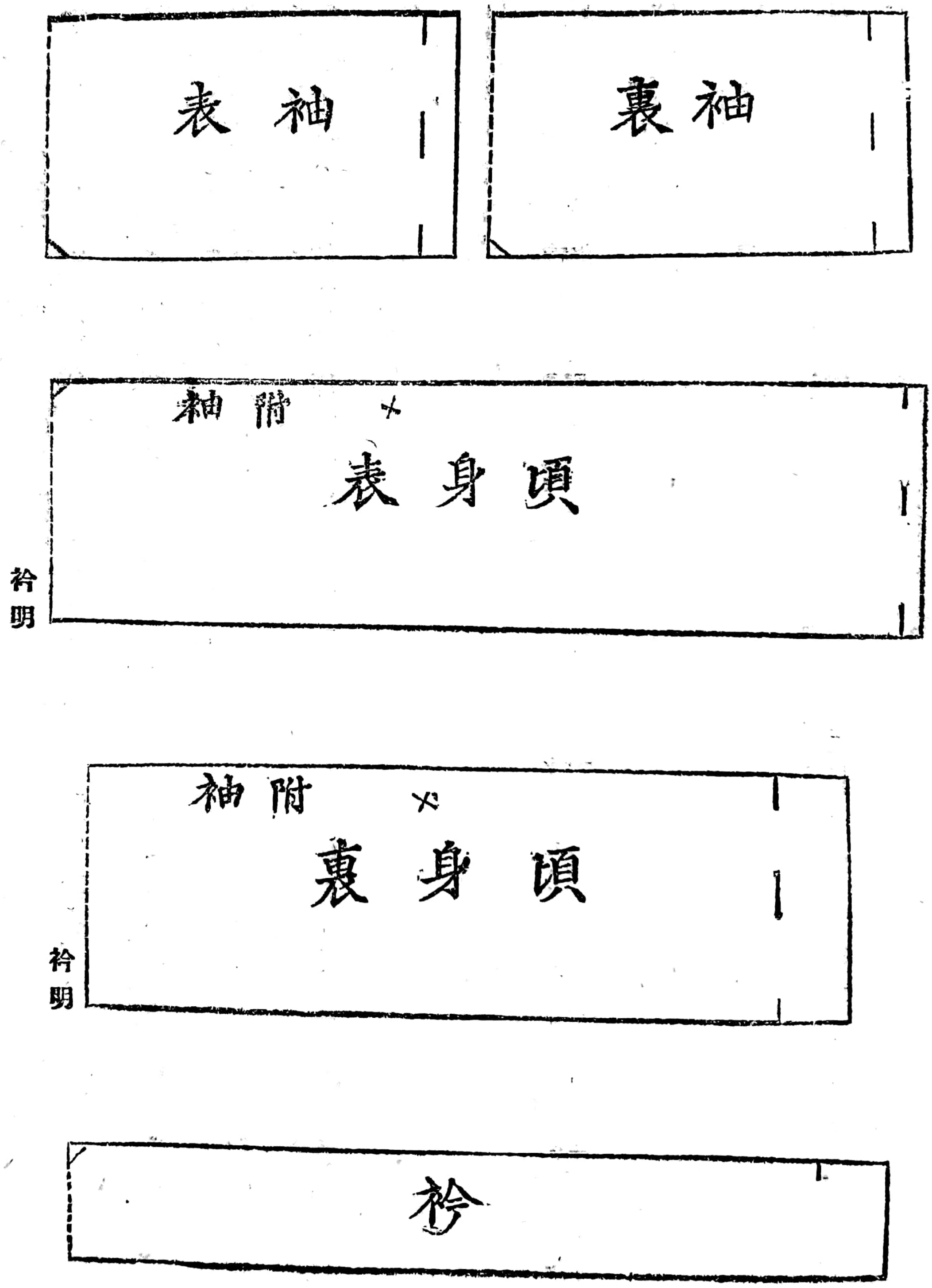
(四)裾合は、前同樣なり。

(五)衹綴は、前身頃は、衽脇の縫目を除きて、裏は四針、表は九針、後身頃は裏五針表十一針を出す可し。

(六)脊脇綴は、女物同樣なり。

(七)袖附は、表は、男物單衣と同樣に爲し、裏は表と反對に袖にて身頃を挾み四ッ留をなし、袖を見て縫ふことと女物と同樣なり。

袷襦袢篦附方(男物)



(八)衽綴。(九)褄下。(十)衿附等は、女物と同様なれども、衿の絎け方は、男物單衣と同様なり。

男物袷襦袢縫ひ方

一縫ひ方順序 (一)袖縫、(二)身頃、(三)袖附、(四)衿附。

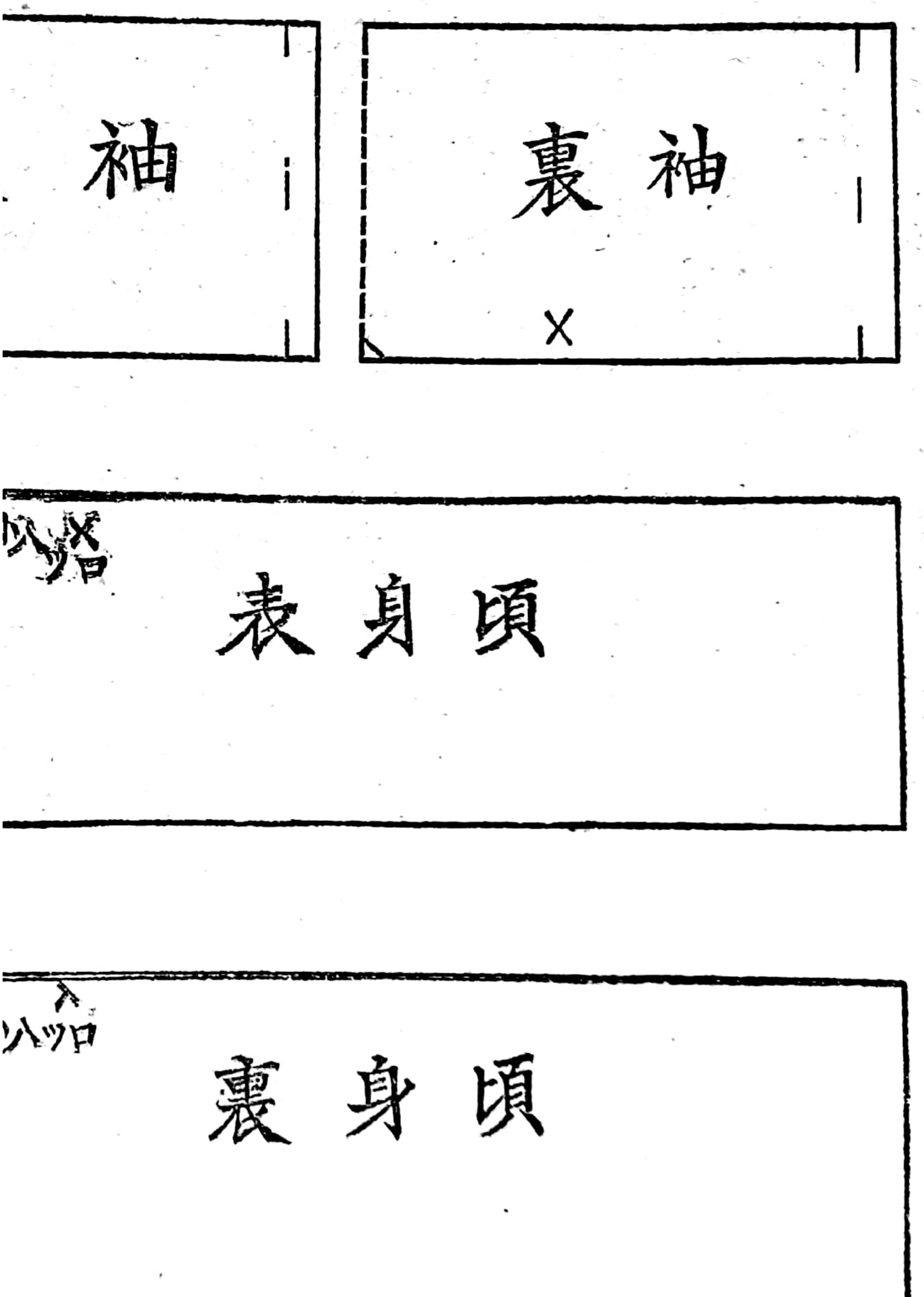
(一)袖縫は、箆印通りに、袖口の方を表と裏を縫ひ合せ、裏に折りを附け、縫躾をかけ、或はかくし躾をして、表裏袖口の縫ひ合せの所を正しく合せ、抜き針をして、其糸にて、袖下表袖を縫ひ、又裏袖八ッ口より縫ひ合せの所迄縫ひ糸を切り左右の袖を定め、縫込折を附け次に袖下表裏綴をなし、袖幅を計るなり。

但し袖幅のなき時は身頃肩幅にて出し袖幅の方は袖口の返しを一分又は二分にても裏に表切を返すものなり

(二)身頃縫ひ方

表後身頃裏後身頃を箆印通りに裾口を縫ひ合せ、裏身頃に折を返し、縫躾をかけ、

袷長襦袢の箆附方）



又は伏せ縫をなし、表前身頃と裏前身頃の裾口を合せて、裏身頃の方に折を附け、後身頃同様に躾をかけ脊縫を綴次に兩脇縫を表裏共に縫ひ後身頃馬乘を縫ひ前身頃馬乘を縫ひ、其糸にて身頃脇縫と馬乘と分るゝ所を二回拔き針をなして、四ッ留をして、又其糸にて、脇の縫目を綴をなす。

但し男物なれば身八ッ口縫ひなし

(三)、袖附は、袷男物同様に始め、四ッ留をして、表袖より附け、裏袖を附けること袷同樣なり、襦袢なれば、人形の所なし。

(四)、衿附。

表前身頃と、裏前身頃衿附の所を、三分位の針目に縫ひ、表身頃下前より衿附をし衿幅を定め、衿先を單衣の時同樣に縫ひ、衿先の縫込は、衿の附けたる表縫目の所に折返し綴をなして衿絎けをなす。

女長襦袢の縫ひ方

一、縫ひ方順序

(一)袖縫　(二)身頃　(三)裾綴　(四)脊綴、脇綴　(五)身八ツ口　(六)袖附　(七)衿附

(一)袖縫は、男物襦袢同様に、濶口袖にして、寸法は上着より三分位短く篦印をなし、袖口を合せ、裏に返し、縫ひ躾をかけ表袖の裏に返す、寸法を定めて、袖幅を計り袖下表裏を縫ひ合せ、左右の袖の折を定めて八ツ口を縫ひ、表に返し、袖下を綴ぢ袖下及び袖口の所に一目おとしの躾をかけるなり。

(二)身頃の縫ひ方

身頃は、篦印通り表裏脊縫を縫ひ「後幅を計り、脇縫をなす、脇縫の時、脇明下一寸の所に前身頃を五分摘みをして縫ふこと表裏同様なり、裾口を袘一分或は二分に定め、裾を表裏合せて縫ひ、表に返し五厘の「させ」をかけ、縫躾或は一目おとしの躾をかけるなり、袘二分より裾綿を用ふ可し。

(三)裾綴は袷同様なり

(四)脊縫脇縫は、袷同様

(五)身八ツ口は、脇縫をして、前身頃表裏にて、後身頃身八ツ口を折り、中に挾みて抜き針をして、四ツ留をなし、其糸にて、前身頃身八ツ口を縫ひ、又後身八ツ口を縫ひ、表に返し一目おとしの躾をかけること上前下前同様なり。

(六)袖附は、袷同様なり。

(七)衿附は、男物同様に、衿附を三分位にあらく縫ひ、前幅を定め、衿丈を計り、下前より衿を附ける、衿附の始め終り、一寸位は返し針をなす、衿先の所、衿幅を一寸七八分衿明は一寸五分幅に定め、衿先縫ひ、縫込は、男物同様にして、衿絎けをなす、始め終りは極く丁寧になすべし。

但し男物女物共に地質に依りて表裏の割合に最も注意すべし

綿入縫ひ方に就ての注意

表裏の寸法を正しく縫ひ合せ、各部の形の亂れざる為に所に依りて躾をなすこと

一、縫ひ方順序

(一)袖縫　(二)身頃　(三)裾綴　(四)脊綴、脇綴　(五)身八ッ口　(六)袖附　(七)衿附

(一)、袖縫は、男物襦袢同様に、濶口袖にして、寸法は上着より三分位短く篦印をなし、袖口を合せ、裏に返し、縫ひ躾をかけ表袖の裏に返す、寸法を定めて、袖幅を計り袖下表裏を縫ひ合せ、左右の袖の折を定めて八ッ口を縫ひ、表に返し、袖下を綴ぢ袖下及び袖口の所に一目おとしの躾をかけるなり。

(二)、身頃の縫ひ方

身頃は、篦印通り表裏脊縫を縫ひ、後幅を計り、脇縫をなす、脇縫の時、脇明下一寸の所に前身頃を五分摘みをして縫ふこと表裏同様なり、裾口を袘一分或は二分に定め、裾を表裏合せて縫ひ、表に返し五厘の「させ」をかけ、縫躾或は一目おとしの躾をかけるなり、袘二分より裾綿を用ふ可し。

(三)、裾綴は袷同様なり

(四)脊綴脇綴は、袷同様

(五)身八ッ口は、脇綴をして、前身頃表裏にて、後身頃身八ッ口を折り、中に挾みて拔き針をして、四ッ留をなし、其糸にて、前身頃身八ッ口を縫ひ、又後身八ッ口を縫ひ表に返し一目おとしの躾をかけることと上前下前同様なり。

(六)袖附は、袷同様なり。

(七)衿附は、男物同様に、衿附を三分位にあらく縫ひ、前幅を定め、衿丈を計り、下前より衿を附ける、衿附の始め終り、一寸位は返し針をなす、衿先の所、衿幅を一寸七八分衿明は一寸五分幅に定め、衿先縫ひ、縫込は、男物同様にして、衿絎けをなす、始め終りは極く丁寧になすべし。

但し男物女物共に地質に依りて表裏の割合に最も注意すべし

綿入縫ひ方に就ての注意

表裏の寸法を正しく縫ひ合せ、各部の形の亂れざる爲に所に依りて躾をなすこと

とあり、其時は極く丁寧に絹躾糸にて一目おとし、二目おとし、或は三ツ目おとしの躾をなす。

(イ)絎け方、綴方は、各部共に極く丁寧に縫ひ絎ける針目は(二分位)になす、殊に脊綴脇綴、衽綴、衿綴、裾綴、袖口綿綴は糸をゆるやかに衣服の形を亂さゞる樣になすこと肝要なり。

(ロ)袖口切懸け出し方は、篦附の時の如く幅を懸け出す可し、是は普通になすよりも多き樣なれども、是には種々なる理由ありて定めたるものなり袖口留より、一寸位は細き棲形の如くなし、袖山は一分五厘、或は二分の袘となるされば、よく仕立んとするには、第一袖口切のかけ出し、第二袖口綿の綴方、第三絎け方なり、第一のかけ出しの事、最も大切なれば、若し袖口切の幅のなきものは、袖口切の先に別切にても繼ぎて、五分かけ出をなす可し、何事も始が良しからざれば、完全なるもの出來ざるものなり、尚ほ縫ひ方の時に述ぶる如く充分練習なせば自然に習得せ

らる可し。

(ニ)裾綿と袖口綿の作り方

裾綿、袖口綿は、普通は何枚か綿を重ねてなすなれども、裾綿三分位のものなれば青梅綿を四寸位の幅に切り、斜に輕くふわ〳〵と。平均に巻きて入るゝなり、若し袵の廣くなる場合には、四寸位のものを一枚づゝ包むべし、其包み方は片方を一枚づらして、身頃と裾の所と自然に厚くなる樣に注意をなすこと肝要なり。

袖口綿は二寸幅に綿を切り、裾同樣に巻きて、不同の所を平均に伸して入るゝなり、此法最も良しければ熟練せられたし。

(ホ)**綿の入れ方**　綿の目方は仕立の目的に依り異るものなれども普通は青梅綿一包と絹綿五枚とす又絹のみの時は普通二十五匁三十匁目

綿は裏表の後身頃の間に、前身頃をさし込み、皺にならざる樣に疊み表を上に置き後身頃より綿を入れる裾は身丈より綿を五寸程長くなし裾綿を置き長くし

ある綿に包み、表の方に向け、包み身八ッ口の所は、綿を切り取り、兩脇は少々く廻る樣に綿を廣く出し置き、背の所と裾と同時に返すなれば、肩の裏表の間より兩手をさし入れ兩脇裾の袵を定めて持ちて引き出し、裏身頃を上に置き、平になし、上前の裏袖をはねて表の後袖より綿を平に入れ、裏袖を載せ、次に前袖前身頃と順に綿を平均に入るゝなり、裾は後身頃と同樣五寸計り身丈より長くなし置き、後より續けある裾綿を上に置き、長くなしたる綿にて包み、褄下に綿を薄く入れ、裏より表にくるみ、表身頃より袖の中に手を入れ、袖より引返し、裾の方を引返す、下前も同樣なり。

　　但し此の法は袖八ッ口を縫ひて綿を入るゝ法なり普通のものは人の知る所なれば略す

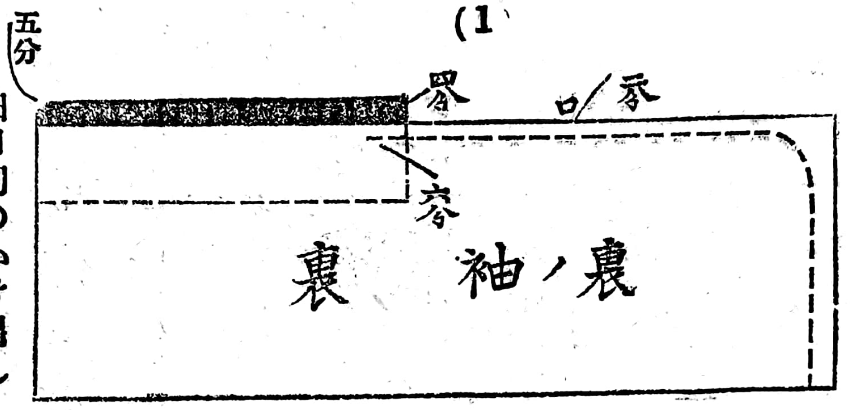
(ヘ)絎け方順序

(一)裾綴、(二)衿絎、(三)褄下絎け(四)立綴、(五)袖口絎け、普通は袖口を絎け、褄下を絎けるなれ

綿入袖口の縫ひ方

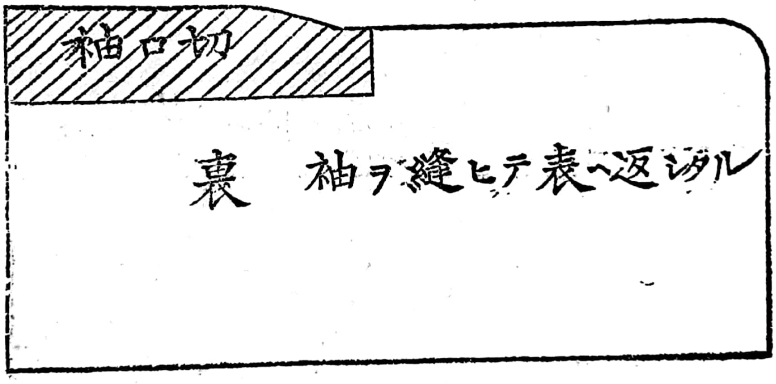
(1)

袖口切のかけ出したる圖

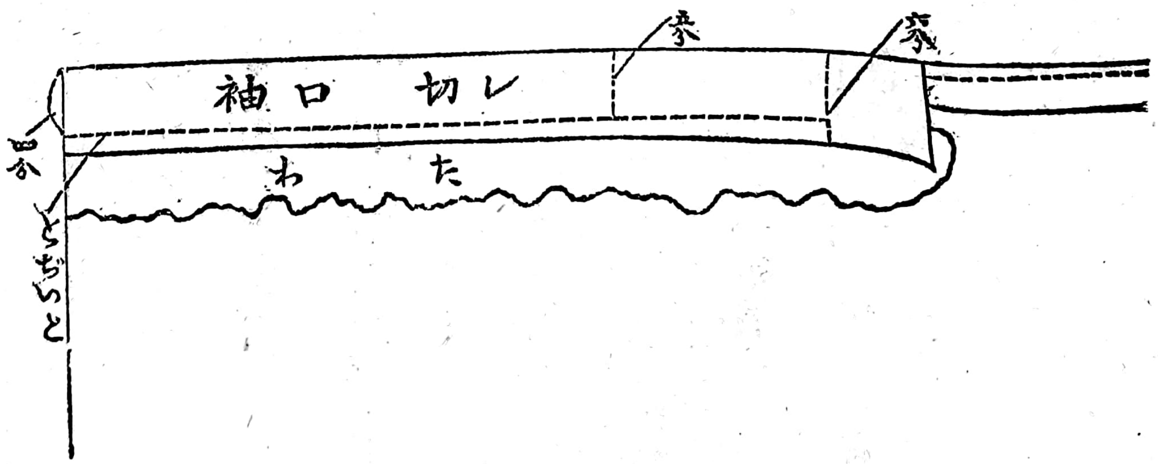


(1)の(イ)は袖口切より六分の縫代(ロ)は二分の縫代

(2)



綿入袖口の綿の含み方

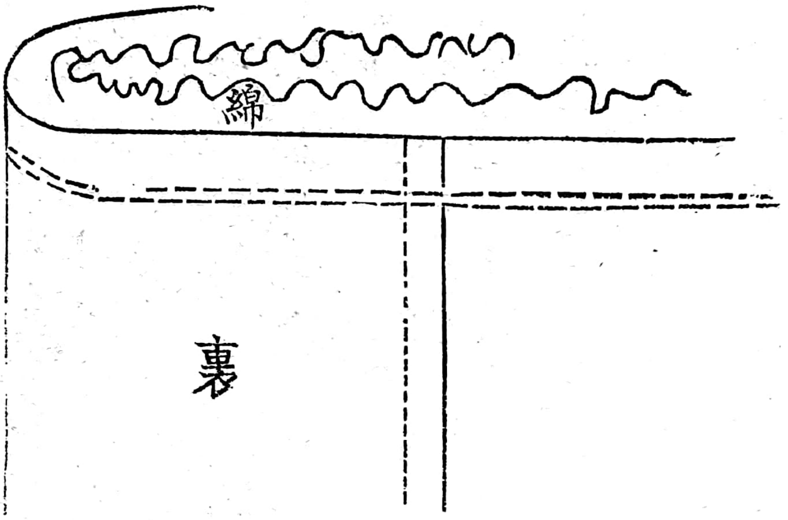


八つ口綿の綴方

（1）

綿入八つ口綿の含み方

綿は充分緩かに綴ぢ付くること

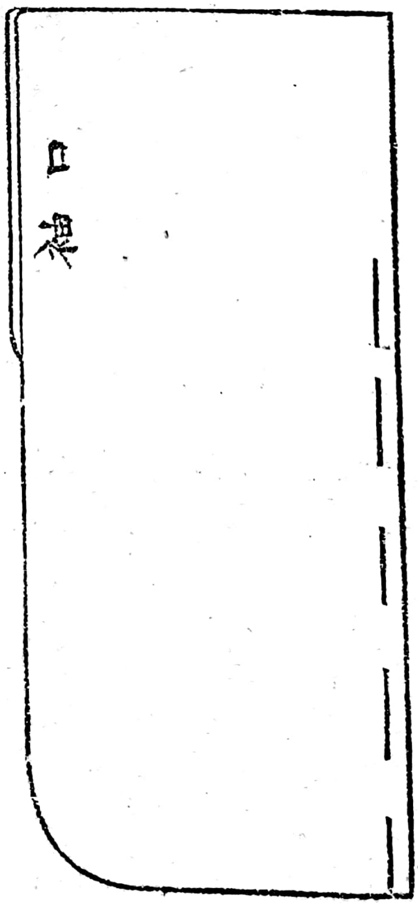


此綴は糸縫糸よりも細きものを用ふべし

（2）

表袖八つ口の出來上り

此綴はつらぬ様に正しく緩かに掛けること



ども、裾綴、衿綴を先になす事多年の經驗上良しければ、實地に付き研究すべし。

一つ身綿入濶口袖縫ひ方

一縫方順序

(一)袖縫(二)表身頃(三)裏身頃(四)裾合(五)袖附(六)衽綴(七)衿絎(八)衿下絎(九)立綴(十)袖口

(一)袖縫は、表袖を篦印通り、八つ口より縫ひ、表に返し、一目おとし或は二目おとし躾をかけ袖山、袖附、袖下の幅を計る。　裏袖には、袖口切を懸る事、篦印通り濶口なれば四分かけ出をなし、袖口切の懸け方は、袷同様にして、袖下を縫ひ躾を懸け袖山、袖附、袖下の幅を計る、八つ口は、表袖の方を見て、裏八つ口を縫ひ合す、表八つ口の方より、裏の八つ口一分だけ減じあれども、品に依りて表の引つれることあり、其場合には、裏袖にきせを懸けつめる可し、袖下縫ひ合の所三寸位の所は、特に表をゆるくせざれば、引返して見ぐるしきものとなり、夫より裏の方に綿を引つらぬ様に注意して、八つ口綿の綴方圖の如く縫ひ附け表に返し平躾をかけるなり。

(二)表身頃は、脇縫、衽附、衿附、縫ひ方單衣に述べたる通り。

(三)裏身頃は、胴裏の脇縫をなし、次に裾廻しの兩脇を縫ひ、胴と縫ひ合せて、胴の方に折を附け、縫躾をかける、衽胴裏と裏衽と縫ひ合せて、折を胴に附け縫躾をかけ表同樣に衽附をなす。

(四)裾合せは、袷と同樣なれども、褄の大きくなるものなり、(綿入褄は出來上り圖參照)褄先は躾をかけて後かくし躾を入れ然る後褄下躾をなす。

身八つ口は、袖八つ口の如く、綿を入れ綴をして表より平躾をなす。

(五)袖附は、袷同樣にして、後裏に疊み綿入れをなす、綿の入れ方前に述べたる通りになす可し。

(六)紕綴は、針の出し方袷同樣なれども、裾綿を左右の指先にてこなして、少々く綿の方ゆるむ加減によく、裾綿が裏に付く樣にもみこみながら綴るなり、其手附は、裾綴寫眞圖參照の上、必ず、實地に施し、充分研究せらるべし、此所は綿入れ縫方の内最

も注意すべき所なり。

(七)衿絎けは、裏相棲幅の所に綿をふくみ、衿附の留より三分奥を一針留めて、又五分上を一針綿綴をして、其糸を切りて衿を向に、はねて、衿の縫目を見て、平躾の如く、裏に針を少々くいづ出る樣に下前衿先迄綴し、糸を切りて衿幅を定め衿先に、薄く綿を入れて、縫ひ衿全體に綿の平均になる樣にして、三分位の針目に絎けるなり、始め終り衿肩廻しの所は、細針に絎る可し。

(八)衿下絎けは、表衽附より裏衽附を相棲上三寸位迄立綴をして表衽の幅に裏衽幅を合せて相印を附け、棲先により綿をふくませて、表棲先裏棲先き角を折り、上前は表衽衿下よく、絎け始め、折り角にて針を綿の奥にかけ絎け、始めの所に針を出し、夫より裏衽に綿をふくませ綿に針のかゝる樣に縫絎けをなす、下前は表棲角より始め表衽を見て絎けるなり。

(九)立綴は、兩脇綴をなす裏を見て、裾より八寸位なす。

(十)袖口は、濶口なれば五分を折り袖口綿をふくみ、其綿のふくみ方は左の拇指と食指にて綿を折の中に輕く入れて、程よくなしつゝ右手より綴をなす、何程袖口綿を注意して造りたりとも、此入れ方に依り、惡しく變ることあり、綴は袖下縫合せより一寸か九分の間を一針綿のみ抄ひ、次に一針抄ひ、又綿のみ抄ひ斯くすること幾度もなして、袖口山より一分手前にて、一針抄ひ山より、又一分下りて、一針抄ひて前の如く綴をして、糸を切り、絎け方表袖下裏袖下縫目を合せて、綿を深くかけざる樣に折より二厘位の所を一分針目に丁寧に絎け、其糸を切る袖下の中央一寸だけ綴をして糸を切るなり。

三つ身綿入角袖

一、縫方順序　一ッ身同樣なり

(一)袖縫は、表袖を篦印通りに八つ口より縫ひ角の所を綴表に返し一つ身同樣に躾をかけて幅を計る。　裏袖は、袖口切を懸け袖口の留めの所に四分袖山に五分の

懸けだしをなす、袖口懸け方は袷同樣なり、表袖同樣に八つ口より袖口迄縫ふ、袖口留の縫代を裁切より六分となし置く可し、躾のかけ方表同樣なり。　裏袖幅の計り方は、圖の如し、(イ)は表幅より七分多く、(ロ)は表と同寸、(ハ)は表より五厘減じ印を附け八つ口を縫ひ合す、八つ口の附ひ方は一つ身同樣なり。

(二)表身頃背縫、脇縫、衽附、衿附、單衣同樣なり。

(三)裏身頃は、胴裏の脊脇を縫ひ、次に裾廻し脊縫脇縫を縫ひて胴と合せ、胴の方に折りを付け、縫躾をなす、衽の縫ひ方一つ身同樣なり。

(四)裾合せは、脊縫あるのみにて他は一つ身同樣なり、身八つ口も同樣なり。

(五)袖附は、袷同樣綿の入れ方も、一つ身同樣なり。

(六)袵綴は、一つ身同樣なり、針數は袷同樣なり。

(七)袷の絎け方一つ身同樣なり。

(八)衿下の絎け方一つ身同樣なり。

(九)立綴は、脊縫兩脇の綴を八寸位なす。

(十)袖口の絎け方綿のふくみ方。

袖口、布の山を調べ印を附け置き先きに口明の所、六分の縫代になし置きたる所より、綿をふくみ、口明の留め際より、四分離れたる所に一針出し、次に三分か四分上りし所にて、五分折りて一針出し、次は一針は綿のみ抄ひて、又一針は抄ひ此の通りにして、袖口山印より一分手前に一針抄ひ山より先に、一分抄ひ又元の如く終りは始めの如くして、糸を切り絎け方をなす、次に袖口の伸び縮を調べて絎け方をなす。

袖口、絎け方寫眞圖の如く、綴は一つ身の通りにして、裏袖口と、表袖口留めの所を四枚針を一所に刺しゆるみ、縮みの工合を見て、左右の袖口共に、袖の前側より針をさすものなれども、前の表一枚を殘し始め、三枚(裏袖口二枚表袖口向側)とめ次に前の表を向側になし、四枚一度に四つ留をなし、糸を引しめ其糸にて前の表袖

の袖口を、留め際より出し、一度よく留たる糸を中に引込み置て、又其糸の出したる針穴より絎け始めるなり、始め終りは、裏袖口を少々つめて褄形なりにふきを出すなり、袖裏を見て、袖下を袂丸みの上迄、綴ぢ袖下の中央一寸程綴をなす。

四つ身綿入元祿袖縫ひ方

一、縫方順序　一ツ身同様なり

(一)袖縫表袖は、篦印通り、裏より縫ひ襞を取り、表に返し袖口及び袂丸みに躾をかけ裏袖の袖口かけは、三つ身同様になし、裏袖篦印通りに縫ひ躾をなす、八つ口の縫ひ方、一つ身同様なり、

(二)表身頃は、脊縫、脇縫、衽附、衿附、縫ひ方単衣縫ひ方同様なり。

(三)裏身頃は、縫ひ方、胴裏の脊脇を縫ひ、次に裾廻脊脇を縫ひて、胴と縫ひ合せて胴に折りを付け縫躾をかけ、前幅を定めて衽縫をなす。

(四)裾合せは、四つ身袷同様なり。

(五)袖附は、袷同様なり、綿の入れ方一つ身同様なり

(六)袵綴の法四つ身同様綿のこなし方、一つ身に述べたる通り。

(七)衿絎けは、一つ身同様なり。(八)衿下絎けは、一つ身同様なり。

(九)立綴、脊縫、脇綴は一尺位なす、其方法は一つ身同様なり

(十)袖口絎けは、三つ身角袖同様なり。

本裁女物綿入縫ひ方

一、縫方順序　一ッ身同様なり

(一)袖縫は、表袖を篦印の通りに、裏より袖下八つ口より袂丸みを縫ひ、袖口にて糸を留め表に返し、一つ身同様に躾をかけて、袖山、袖附、八つ口の袖幅を計る。
裏袖口のかけ出しは、三つ身同様、袖口の懸け方袷同様なり。
裏袖幅の計り方、三つ身に同じ、八つ口の縫ひ方一つ身に述べたる同様なり。

(二)表身頃は、縫ひ方単衣に同じ。

(三)裏身頃は、胴裏の脊脇を縫ひ、裾廻し脊脇を縫ひ、胴裏と縫ひ合せ、折を胴の方に附け、縫躾をかける、袵は三つ身の如く、胴裏袵と縫ひ合せをして、表同樣袵附をなす。

(四)裾合せは、袷と同じ身八つ口を一つ身に述べたる如く、綿を入れ綴をなすなり。

(五)袖附は、袷同樣にして、附けて後に綿入をなす、綿の入れ方注意に述べたる通りなり。

(六)袘綴針の數は、袷の時同樣なり、裾綿のこなし方、一つ身の所に述べたる通りになすべし。

(七)衿絎けは、衿先の綴を前に述べたる通りにして、衿附際より、裏を引出し、上前は表袵を一枚、次に表衿、次に裏衿次に裏袵と四枚を極く淺く一針貫き返し、四つ留をなし、其糸にて衿先を一分奥を縫ひ、裏衿先に薄く綿を入れて縫ひ附け、表に引返し、衿附際を二寸ばかり綴ぢ次に裏衿を起し、表衿附の際に指をかけ左の手にて加減をなして、表衿に針の出る樣に衿綴をなし、次に前の縫込を引伸し表衿に綿をふくめ、裏衿幅を二分減し折りを附け、絎け方袷同樣になす。

(八)衿下は、一つ身に述べたる同樣にして縫絎をなす。

(九)袖口絎けは、三つ身に述べたる通りに綴をして絎け方をなす。(袖口の留め方も三つ身の通り)(袖口綴の針數は袖山より兩側共六針のこと)

(十)立綴は、脊縫、脇縫、一尺五寸位となす可し。

本裁男物綿入縫ひ方

一、縫方順序

(一)袖縫(二)表身頃(三)裏身頃(四)袖附(五)裾合(六)袵綴(七)衿絎(八)衿下絎(九)立綴(十)袖口絎

(一)袖縫表袖は、篦印通り人形より袖口印迄縫ひて糸を留め、袂丸みの襞を取り、表に返し人形の所より袖口に躾をかけ袖幅を計り、次に裏袖も同樣人形より袖口印迄縫ふ袖口の縫代六分になすこと女物に同じ。

(二)表身頃脊縫、腰揚げ、袵附は、袷同樣なり。但し衿附けは女物綿入同樣なり。

(三)裏身頃は、肩山揚げ、脊縫、袵附をなし裏衿を附け、裾合をすること女物同樣なり。

(四)袖附は、縫ひ方女物に同じ縫ひ留め方袷同樣なり袖附折りは袷に同じ。

男物綿の入れ方。

表の脊より、綿入れ裾は女物同樣に身の丈より、五寸位長くして置き、裾綿を包むこと女物に同じ、裏身頃を上に載せて、裏前身頃より綿を入れ表身頃の間より引き出すこと普通の綿の入れ方なり。

(五)裾合は、女物同樣なり

(六)袵綴は、袷の時同樣の針數にして、一つ身に述べたる通りに綴をなす。

(七)衿絎けは、袷と同樣にす衿先の留め方等は女物と同樣にす衿下の絎け方は、女物に同じ。

(八)衿下絎けは、女物同樣なり。

(九)立綴は、脊縫、脇縫、裾より、一尺八寸ばかりなす可し。

(十)袖口絎けは、女物同樣なり。

第十章　羽織の篦附及び縫ひ方

羽織縫ひ方に付ての注意

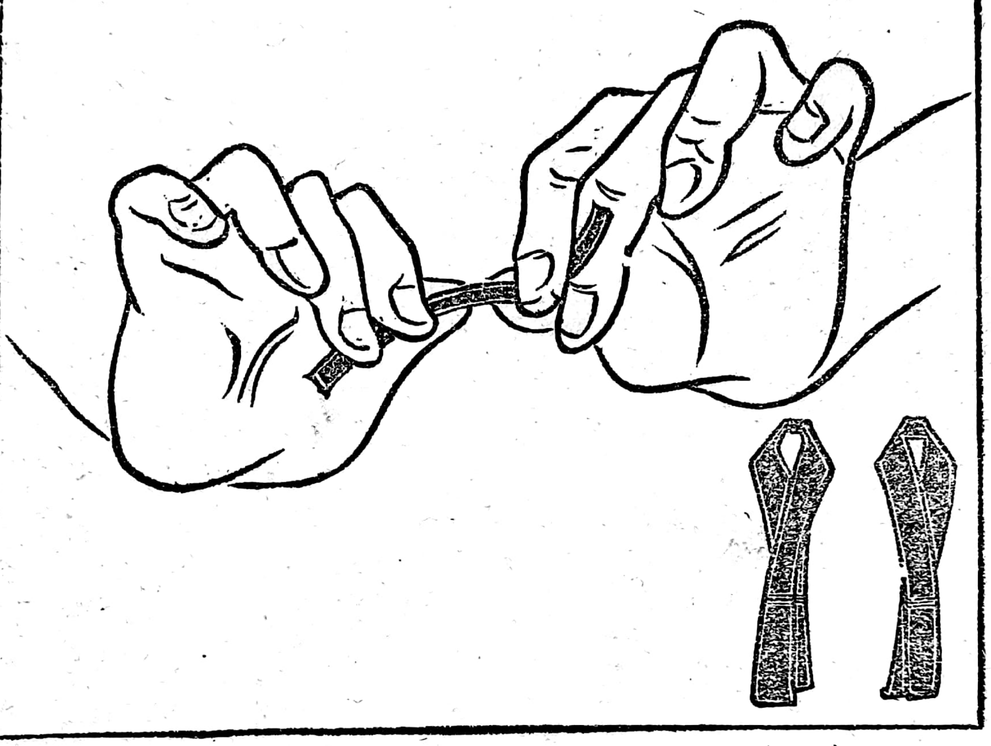
(イ)篦附をなす際に、着する人の身體を見て、衿明及び肩の繰越しを定むること必要なり。

(ロ)寸法表にある如く、長着に合せて寸法を定むるべし。

(ハ)衿附に注意すべし普通は衿の方を乳附上よりゆるむる等種々なる說あれども、第一に注意すべきは篦附の寸法と前身頃の衿附際の縫糸の加減。衿の折り方。衿心並に衿先きの縫ひ方。衿附の針の扱ひ。絎け方の加減にあり。

(ニ)前下りの縫ひ方、襠附より先きに綿入給ともに縫ふものあれども多年經驗上給は襠を先きに附けて、前下りを縫ふ方布の折合上最もよろしし其方法は縫ひ方に

羽織の乳の折方



述ぶるべし。

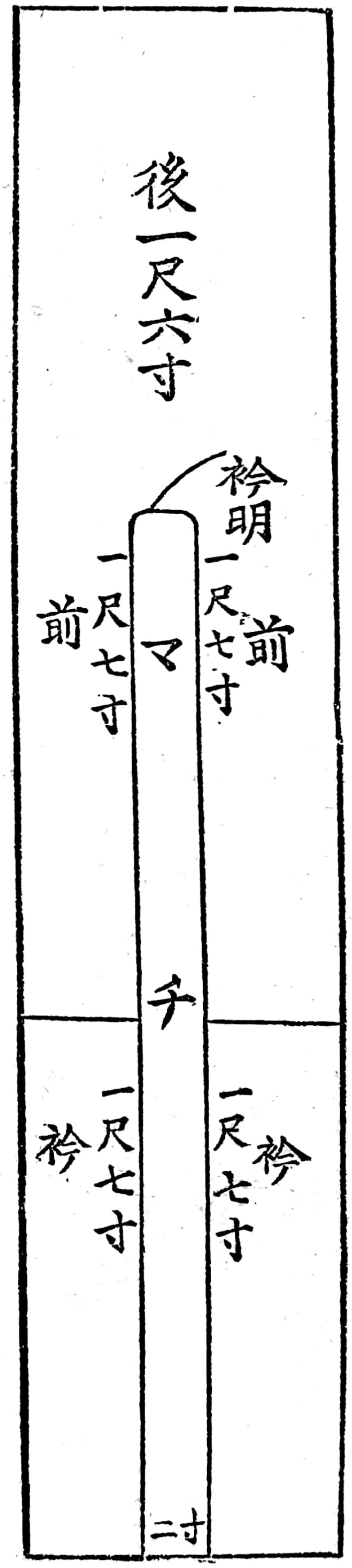
(ホ)袖無羽織は、脇明を絎けずして必ず縫ふべし、其方法は縫ひ方に於て述ぶる可し。

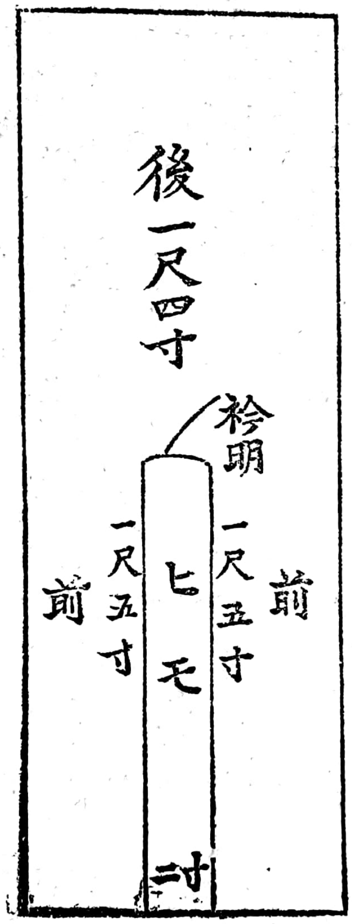
(ヘ)乳の造り方は圖にある如く、何品にても必ず絎けず、手にて折り用ふ可し。

(ト)單衣羽織は、裏に針目の見ゆるものなれば、針目を充分細かになる樣に注意すべし。

(チ)單衣羽織は、袷羽織と篦附法異なれば、圖に付特に注意すべし。

並幅にて一つ身袖無羽織の裁方（但し出來上り身丈一尺四寸前下り五分）





表用布　五　尺

裏用布　二尺九寸

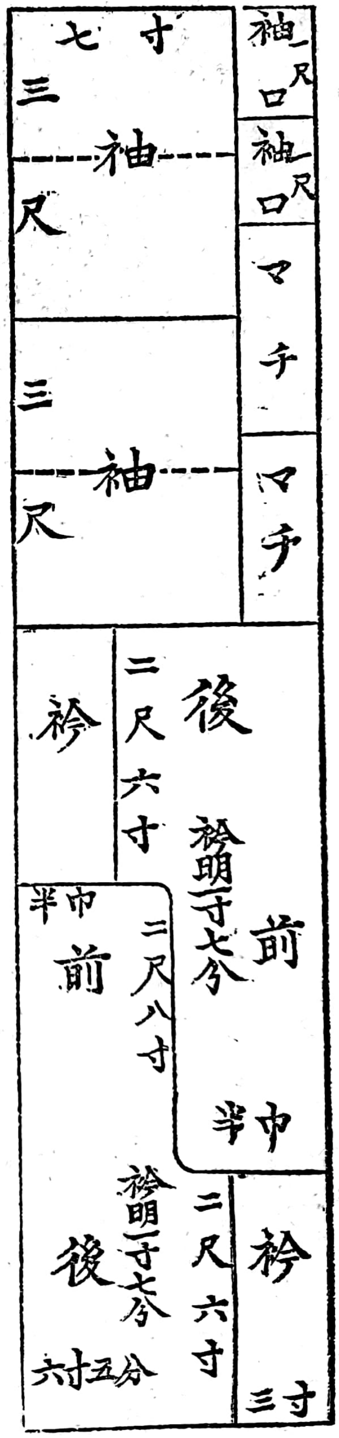
後身頃,前身頃,衿

16寸＋17寸＋17寸＝50寸……表用布

後身頃,前身頃

14寸＋15寸＝29寸……裏用布

並幅一丈四尺を以て三つ身羽織の裁方

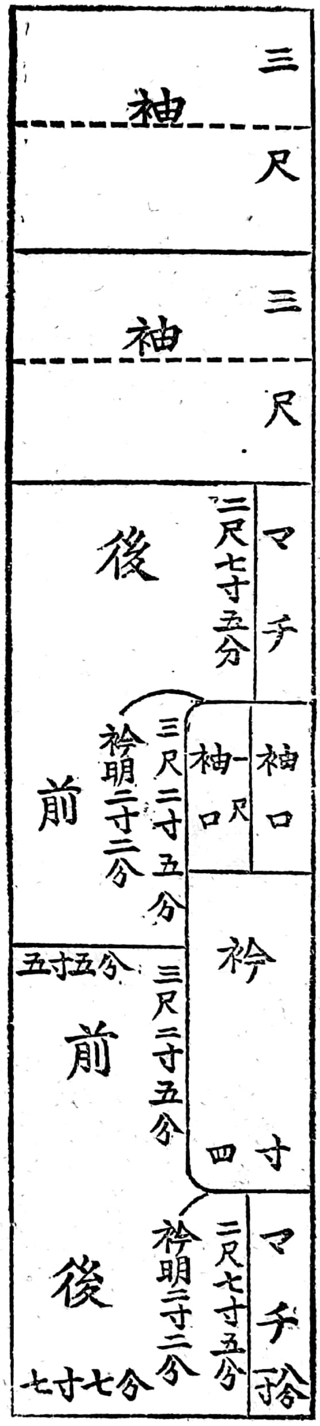


裁切寸法

一袖丈　一尺五寸
一袖幅　七寸
一後身頃丈　二尺六寸
一前身頃丈　二尺八寸
一袖口丈　一尺
一後幅　六寸五分
一前幅　半幅
一衿幅　三寸
一衿明　一寸七分

袖丈　袖
15寸×4=60寸
後身頃
26寸×2=52寸
前身頃
60寸+52寸+28寸=140寸……用布

並幅壹丈八尺四つ身羽織の裁方



袖丈　袖

$15_{寸} \times 4 = 60_{寸}$

後身頃　前身頃　身頃

$(27_{寸}5_{分} \times 2) + (32_{寸}5_{分} \times 2) = 120_{寸}$

$60_{寸} + 120_{寸} = 180_{寸}$・・・用布

裁切寸法

一袖丈　一尺五寸

一後丈　二尺七寸五分

一前丈　三尺二寸五分

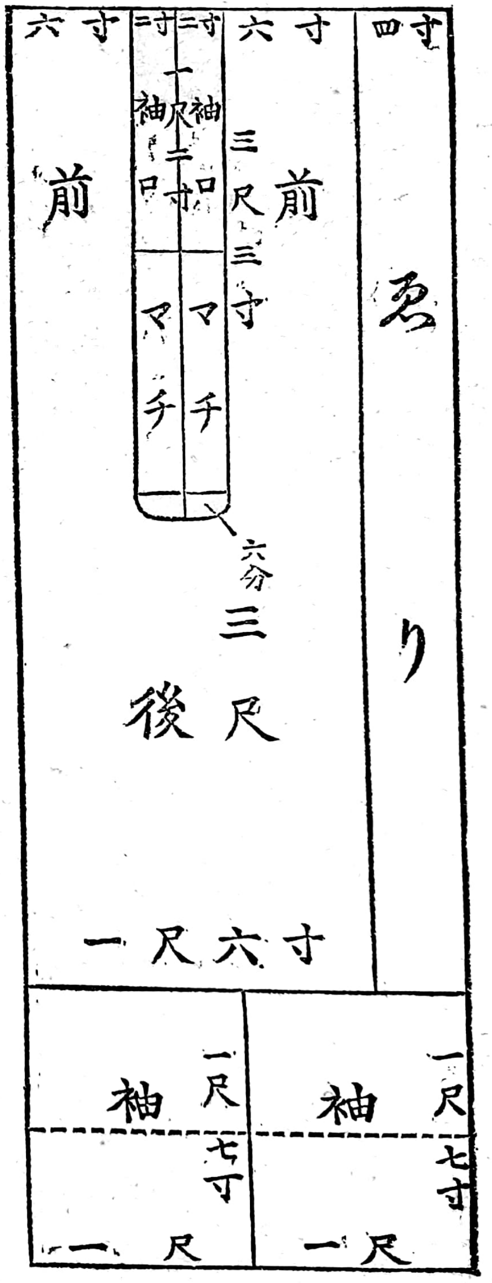
一後幅　七寸七分

一前幅　五寸五分

一衿幅　四寸

一衿明　二寸二分

二尺幅八尺にて元祿袖四つ身羽織裁方



裁切寸法

一袖丈　八寸五分	一後丈　三尺
一前丈　三尺三寸	一後幅　八寸
一前幅　六寸	一衿幅　四寸
一袖口幅　二寸	一襠幅　二寸
一衿明　二寸	一袖口丈　一尺二寸

後身頃、前身頃、身頃

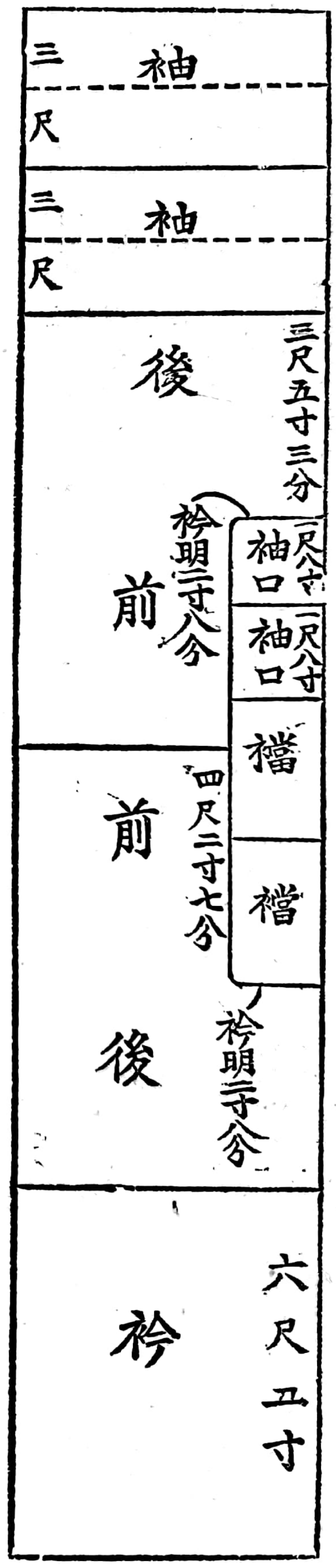
30寸＋33寸＝63寸

袖丈　袖

8寸5分×2＝17寸

63寸＋17寸＝80寸……用布

並二丈八尺にて男物羽織



裁切寸法

一袖丈　一尺五寸
一後丈　三尺五寸三分
一前丈　四尺二寸七分
一衿丈　六尺五寸
一衿明　二寸八分
一袖口丈　一尺八寸

（但し乳の切れは男女に係はらず前繰りの所にて横に六分切り落すなり）

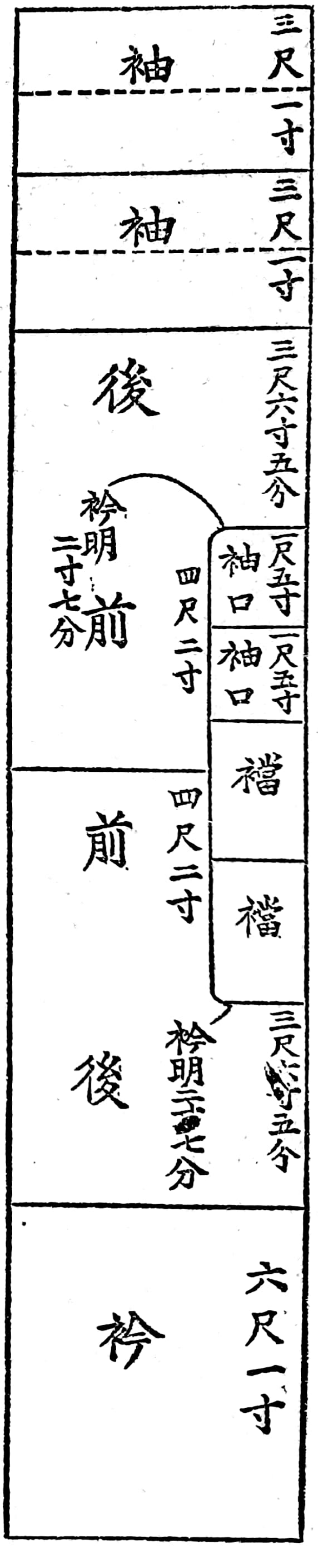
袖丈　袖
15寸×4=60寸

後丈　後身頃
35寸3分×2=70寸6分

前丈　前身頃
42寸7分×2=85寸4分

衿
60寸+70寸6分+85寸4分+65寸=280寸用布

並幅二丈八尺にて女物羽織の裁方



裁切寸法

一袖丈　一尺五寸五分
一後丈　三尺六寸五分
一前丈　四尺二寸
一衿丈　六尺一寸
一衿明　二寸七分
一袖口丈　一尺五寸

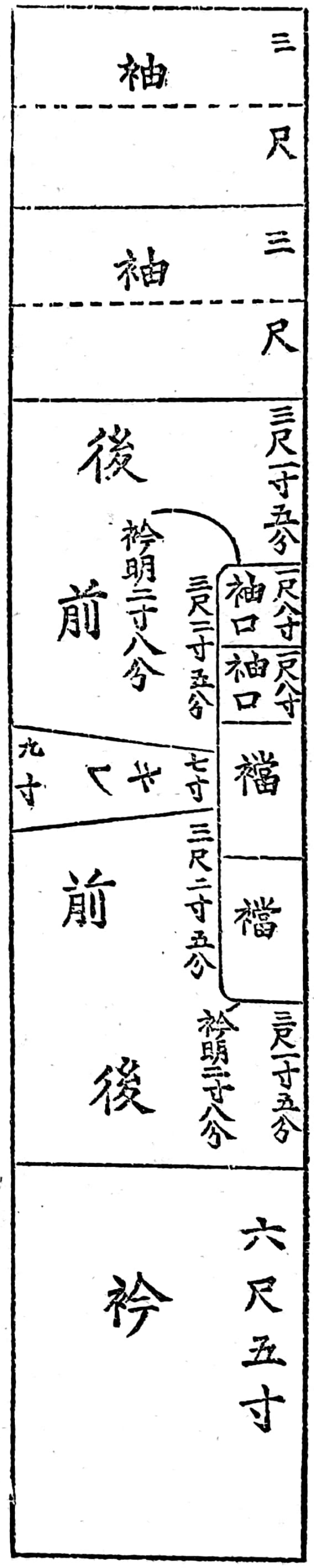
袖丈　袖
15寸5分×4＝62分

後丈　後身頃
36寸5分×2＝73寸

前丈　前身頃
42寸×2＝84寸

62寸＋73寸＋84寸＋61寸（衿）＝280寸‥‥用布

並幅二丈六尺にて男物單羽織の裁方

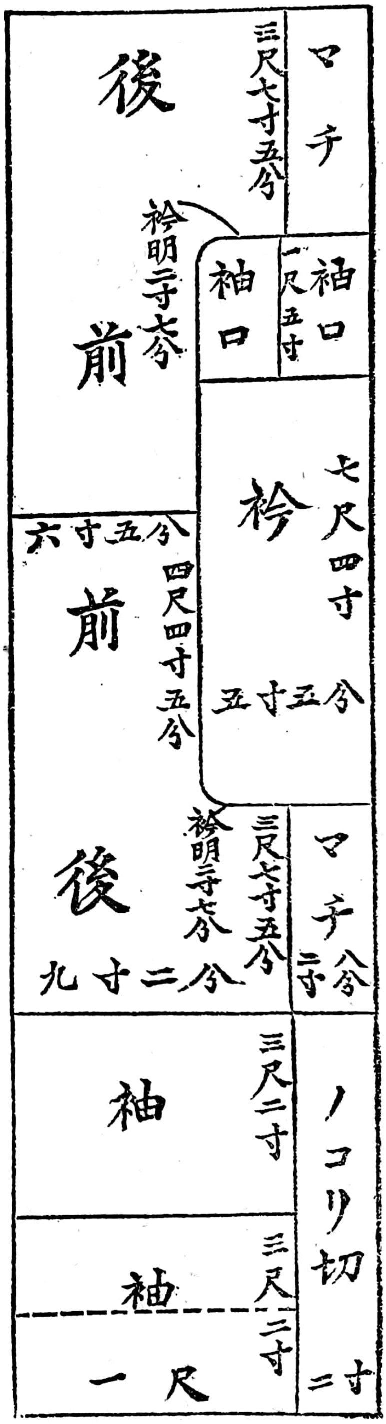


裁切寸法

一袖丈　一尺五寸
一後丈　三尺一寸五分
一前丈　三尺二寸五分
一衿丈　六尺五寸
一衿明　二寸八分
一袖口丈　一尺八寸

袖丈　袖
15寸×4=60寸
後丈　後身頃
31寸5分×2=63寸
前丈　前身頃
32寸5分×2=65寸
袖　後身頃　前身頃　衿
60寸+63寸+65寸+7寸+65=260∴用布

中幅(一尺二寸幅)二丈二尺八寸にて女物羽織の裁方

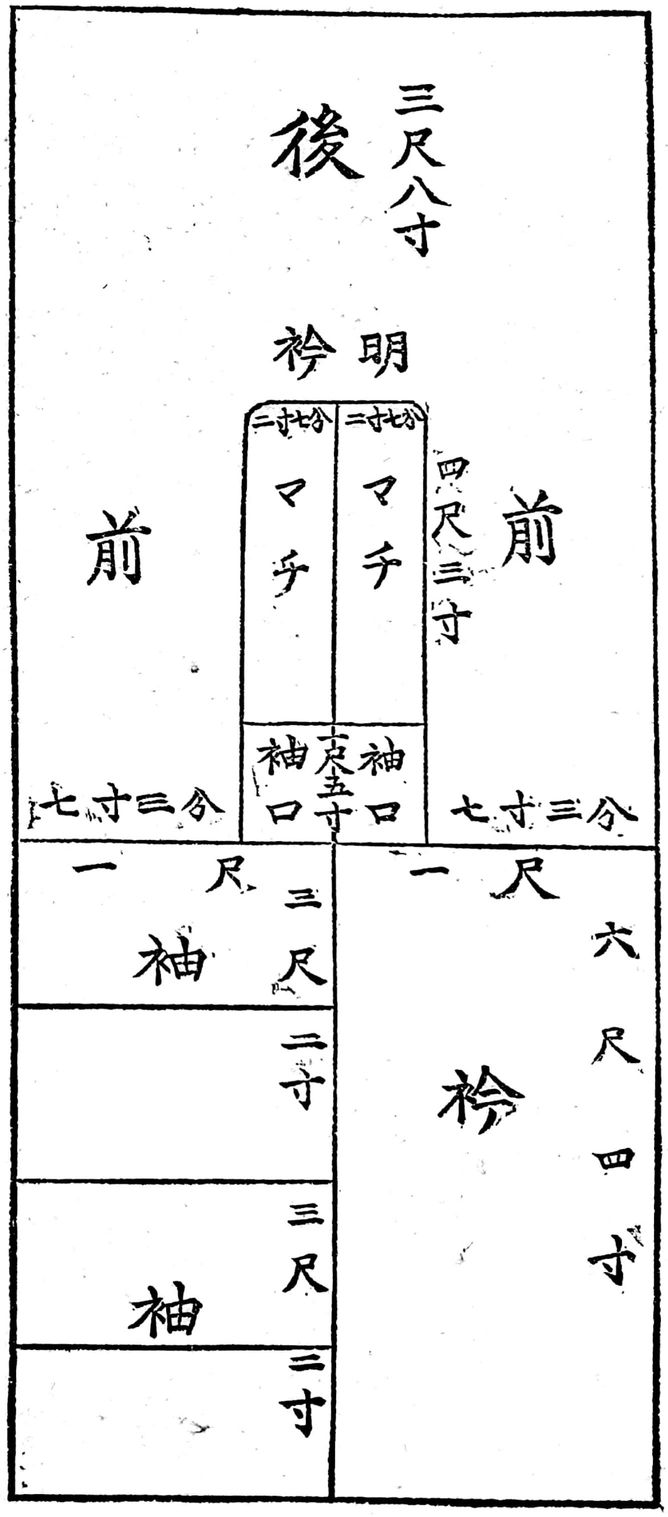


裁切寸法

一袖丈　一尺六寸　一袖幅　一尺
一後丈　三尺七寸五分
一前丈　四尺四寸五分
一衿丈　七尺四寸　一後幅　九寸二分
一前幅　六寸五分　一衿幅　五寸五分
一衿明　二寸七分　一袖口丈　一尺五寸
一襠幅　二寸八分

袖丈　袖
16寸×4=64寸
後丈　後身頃
37寸5分×2=75寸
前丈　前身頃
44寸5分×2=89寸
64寸+75寸+89寸=228寸……用布

大幅(二尺幅)一丈四尺五寸にて女物羽織の裁方



裁切寸法

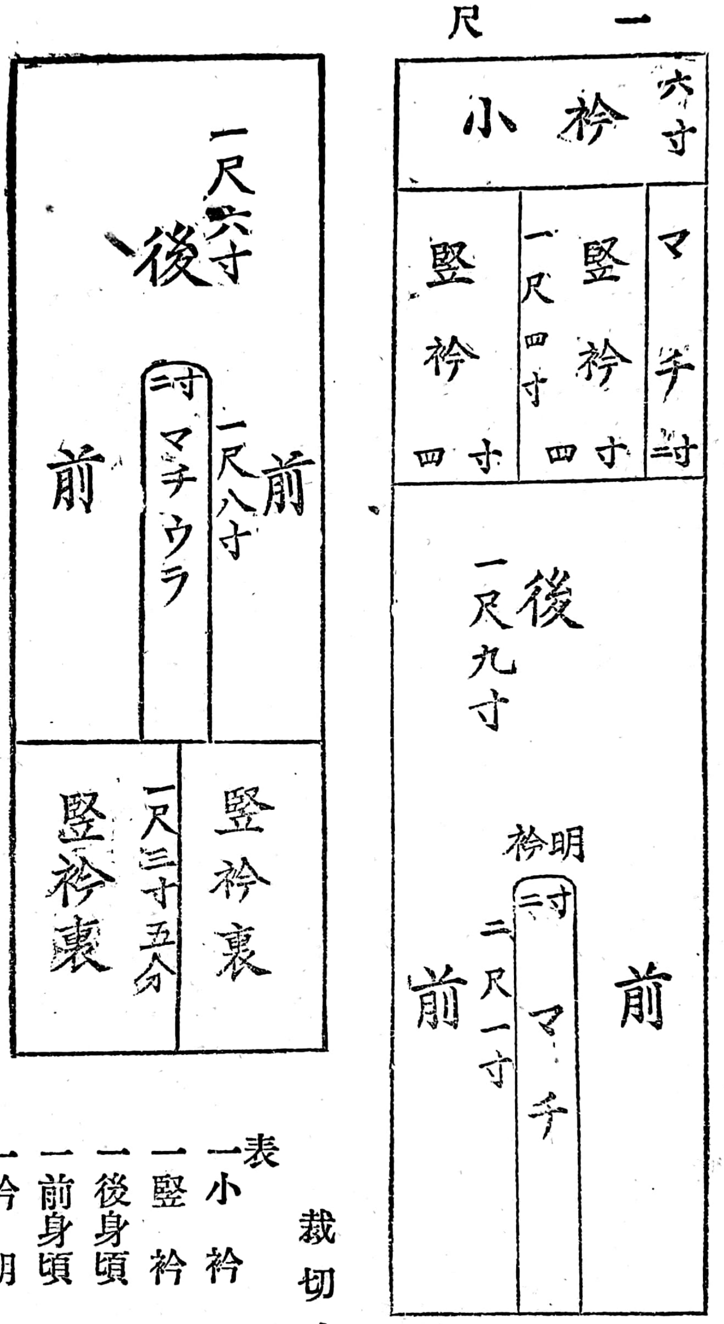
一袖丈　一尺六寸　　一袖幅　一尺

一後丈　三尺八寸　　一前丈　四尺三寸

一衿丈　六尺四寸　　一衿明　二寸七分

袖丈　袖
16寸×2＝64寸
後丈、前丈、身頃
38寸＋43寸＝81寸
87寸＋64寸＝145寸……用布

一尺幅六尺にて一つ身袖無被布の裁方

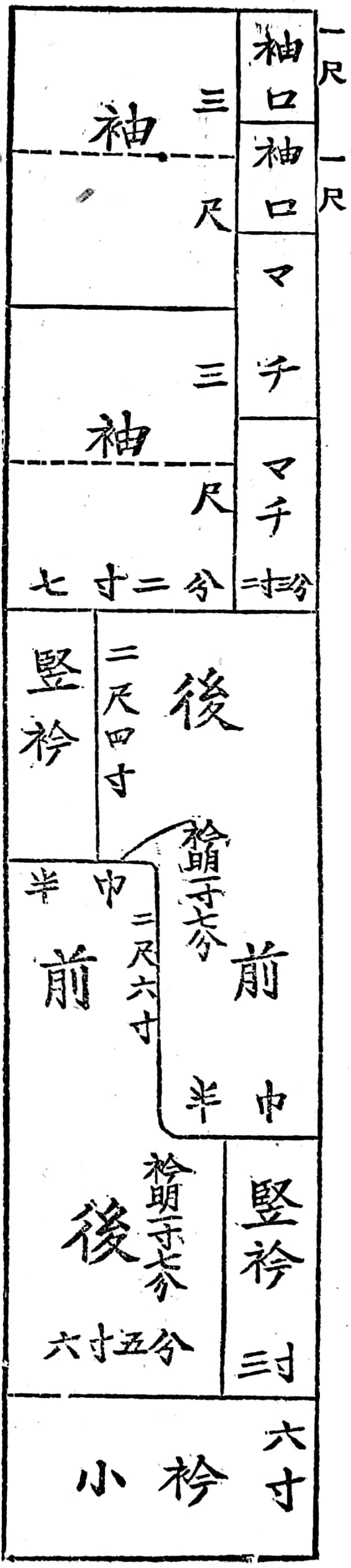


裁切寸法

表
一小衿 六寸
一竪衿 一尺四寸
一後身頃 一尺九寸
一前身頃 二尺一寸
一衿明 一寸
裏地
一後身頃 一尺六寸
一前身頃 一尺八寸
一竪衿裏 一尺三寸五分

小衿,竪衿,後身頃,前身頃,前身頃
6寸+14寸+19寸+21寸=60寸....表用布
後身頃,前身頃,竪衿裏
16寸+18寸+13寸5分=47寸5分....裏用布

並幅一丈四尺にて三つ身被布の裁方

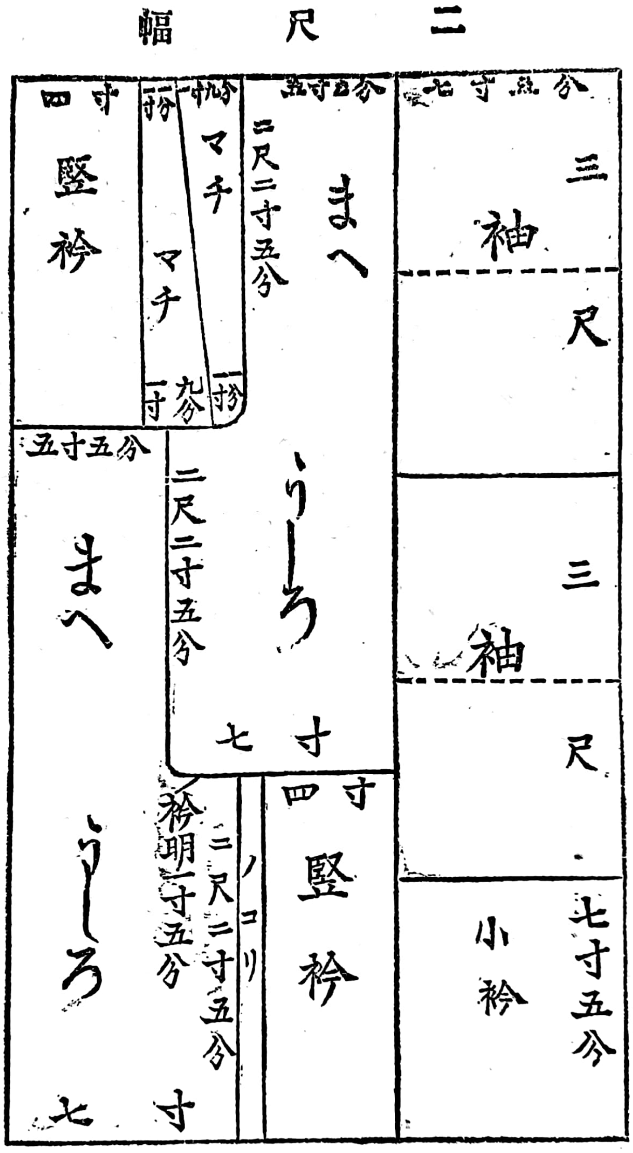


袖丈　袖
15寸×4=60寸
後丈　後身頃
24寸×2=48寸
袖、後身頃、前身頃、小衿
60寸+48寸+26寸+6寸=140寸……用布

裁切寸法

一袖丈　一尺五寸
一袖幅　七寸二分
一後丈　二尺四寸
一前丈　二尺六寸
一小衿丈　六寸
一後幅　六寸五分
一前幅　半幅
一竪衿幅　三寸
一衿明　一寸七分

片面物（二尺幅）六尺七寸五分の布にて三つ身被布の裁方

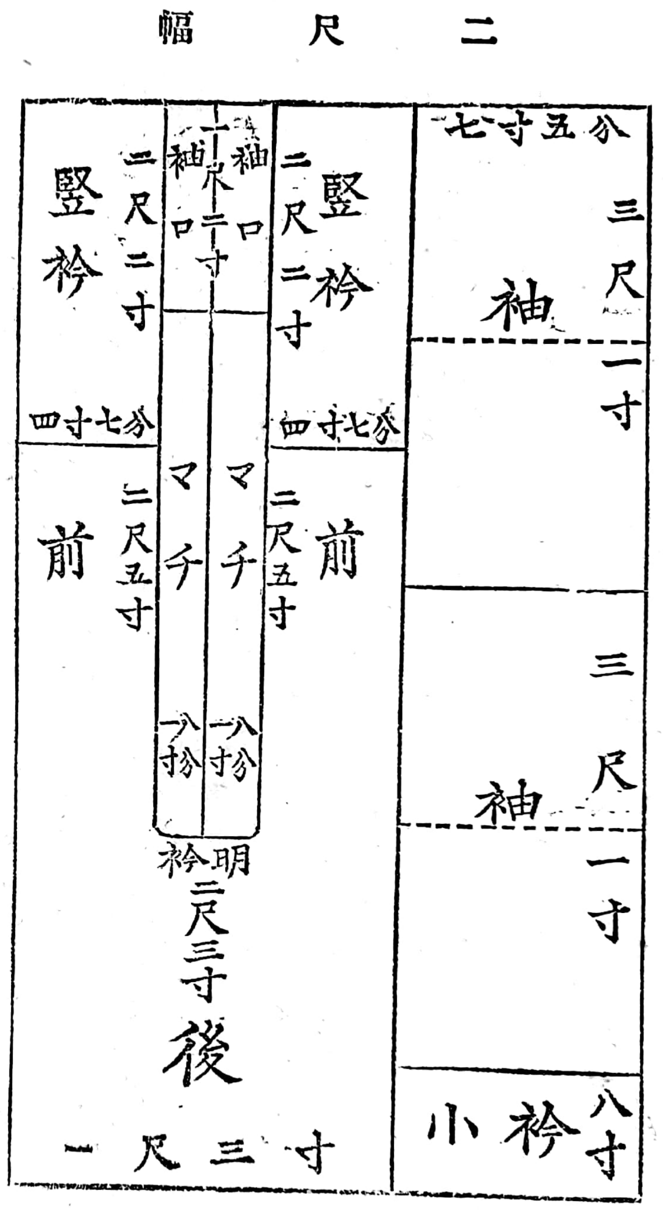


身丈
22寸5分×3＝67寸5分……用布

裁切寸法

一袖丈　一尺五寸
一袖幅　七寸五分
一身丈前後　二尺二寸五分
一小衿　七寸五分
一竪衿幅　四寸
　丈二尺二寸五分
一襠幅　下一寸九分
　上一寸一分
一衿明　一寸五分
一後幅　七寸
一前幅　五寸五分

(二尺幅)七尺の布にて三つ身被布の裁方

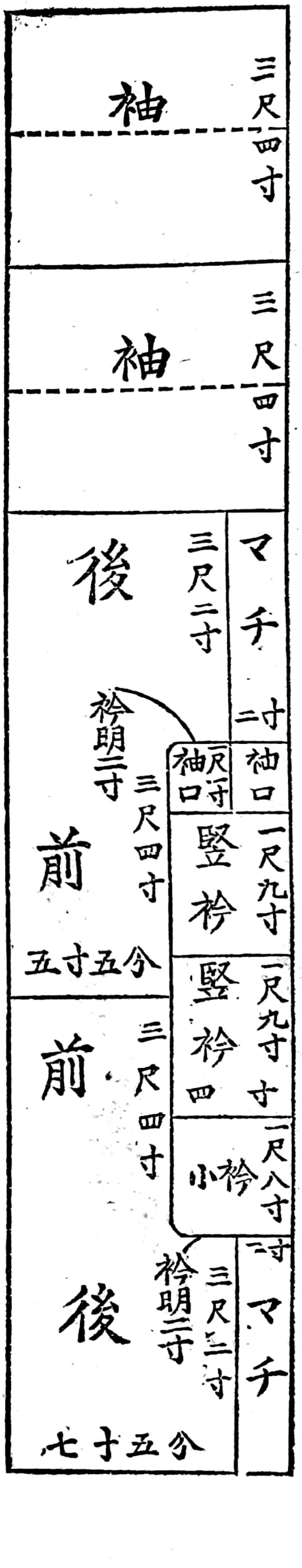


竪衿 前丈 後丈
22寸＋25寸＋23寸＝70寸用布

裁切寸法

一袖丈	一尺五寸五分
一袖幅	七寸五分
一後丈	二尺三寸
一前丈	二尺五寸
一竪衿丈	二尺二寸
一衿明	一寸八分
一袖口丈	一尺二寸
一小衿	八寸
一後幅	六寸五分
一前幅	四寸七分
一竪衿幅	同寸

並幅二丈にて四つ身被布裁方



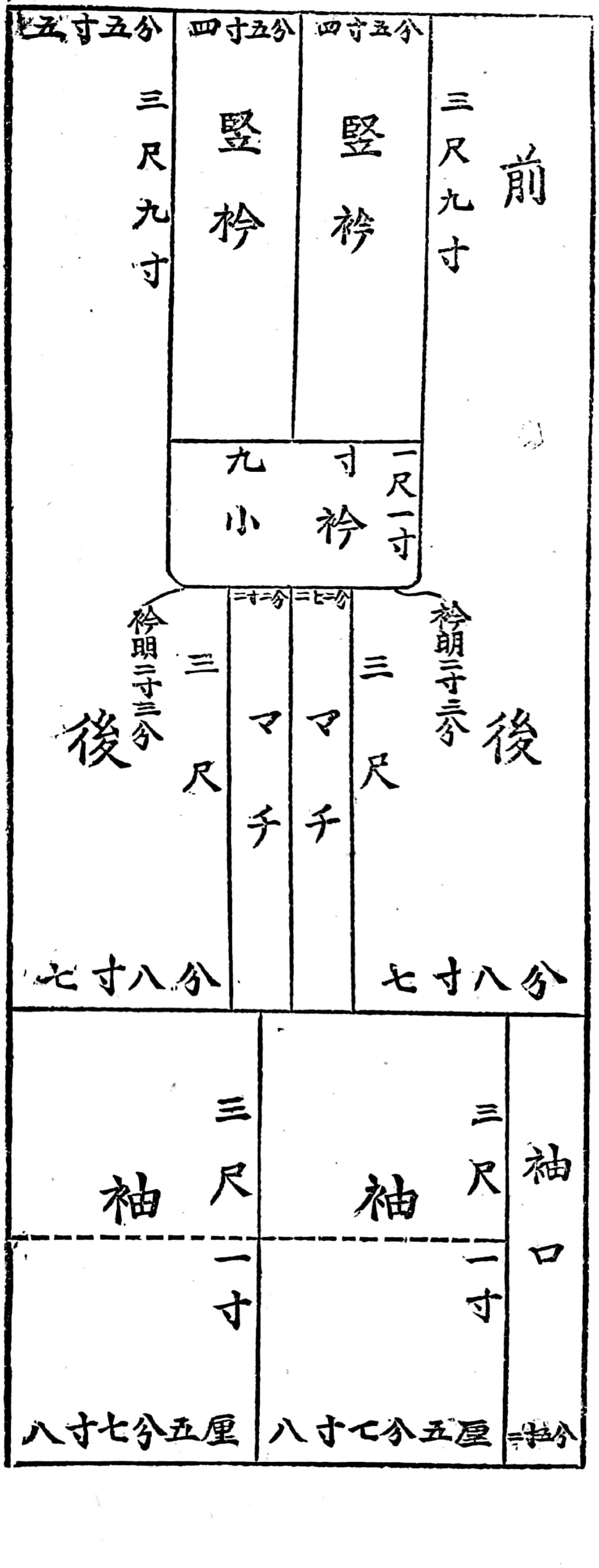
裁切寸法

一袖丈　一尺七寸
一後丈　三尺二寸
一前丈　三尺四寸
一後幅　七寸五分
一前幅　五寸五分
一竪衿丈　一尺九寸
一小衿　一尺八寸
一襠幅　二寸
一衿明　二寸
一袖口丈　一尺一寸

袖丈　袖
17寸×4=68寸
後丈　後身頃
32寸×2=64寸
前丈　前身頃
34寸×2=68寸
68寸+64寸+68寸=200寸……用布

大幅(二尺幅)壹丈にて四つ身被布裁方

二尺幅



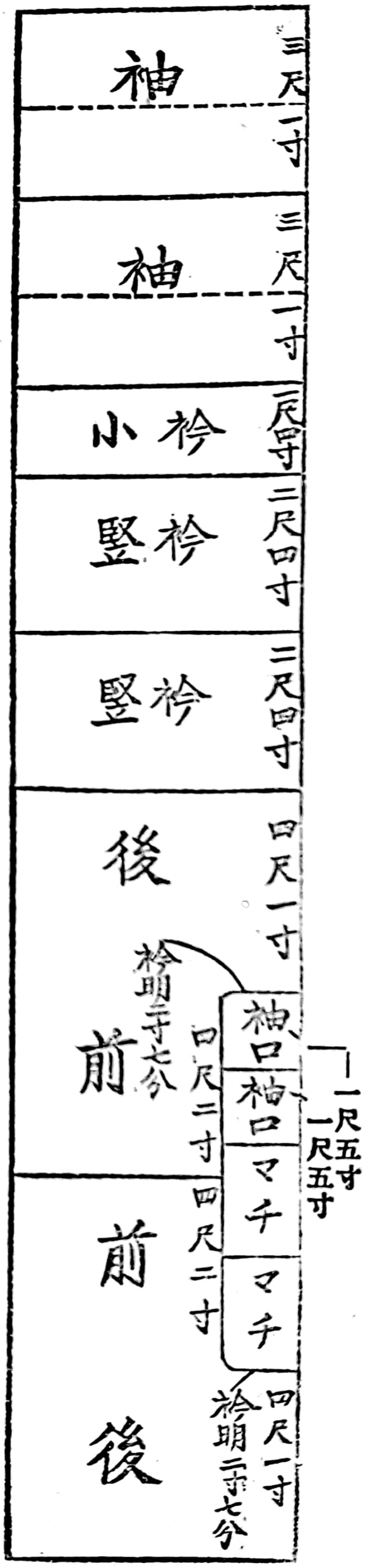
袖丈　袖
15寸5分×2＝31寸

袖　前丈　後丈
31寸＋39寸＋30寸＝100寸……用布

裁切寸法

一袖丈　一尺五寸五分　一後丈　三尺
一袖幅　八寸七分五厘　一前丈　三尺九寸
一後幅　七寸八分　一前幅　五寸五分
一衿明　二寸三分　一小衿丈　一尺一寸
一竪衿丈　二尺八寸

並幅二丈八尺にて女物被布裁方



裁切寸法

一袖丈　一尺五寸五分

一小衿　一尺四寸

一竪衿　二尺四寸

一後丈　四尺一寸

一前丈　四尺二寸

一衿明　二寸七分

一袖口丈　一尺五寸

袖丈　袖
15寸5分×4=62寸

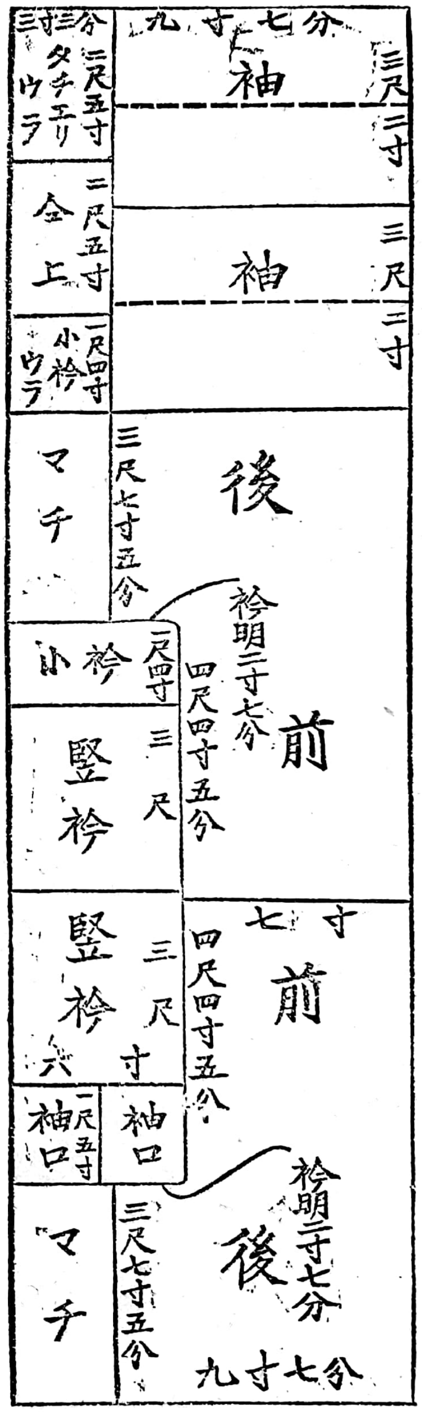
タテ衿
24寸×2=48寸

後丈　後身頃
41寸×2=82寸

前丈　前身頃
42寸×2=84寸

62寸+14寸+48寸+82寸+84寸=280寸 用布

中幅(一尺三寸幅)二丈二尺八寸にて女物被布の裁方

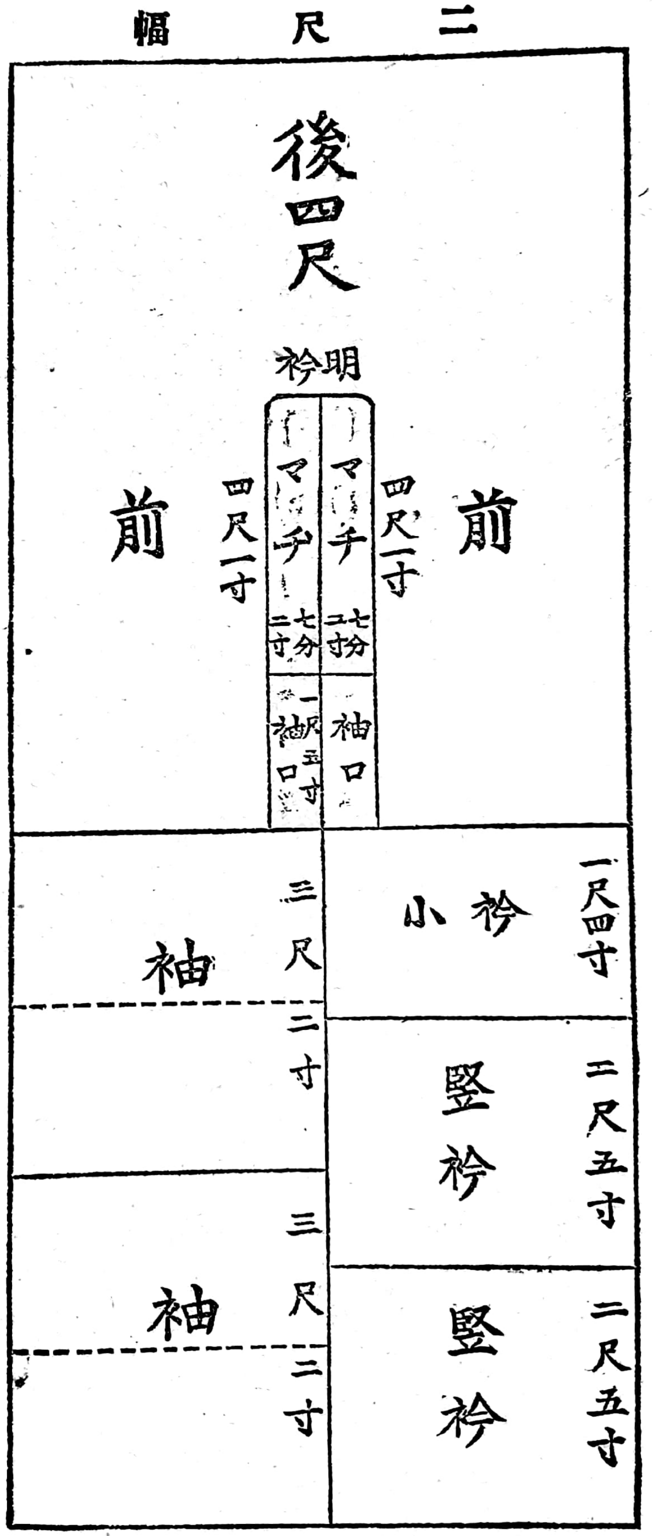


裁切寸法

一袖丈　一尺六寸
一後丈　三尺七寸五分
一前丈　四尺四寸五分
一後幅　九寸七分
一前幅　七寸
一竪衿幅　六寸
一襠幅　三寸三分
一衿明　二寸七分

袖丈　袖
16寸×4=64寸
後丈　後身頃
37寸5分×2=75寸
前丈　前身頃
44寸5寸×2=89寸
64寸+75寸+89寸=228寸……用布

大幅(二尺幅)壹丈四尺五寸にて女物被布裁方



裁切寸法

一袖丈　一尺六寸　　一後丈　四尺
一前丈　四尺一寸　　一小衿丈　一尺四寸
一竪衿丈　二尺五寸　　一衿明　二寸七分
一袖口丈　一尺五寸

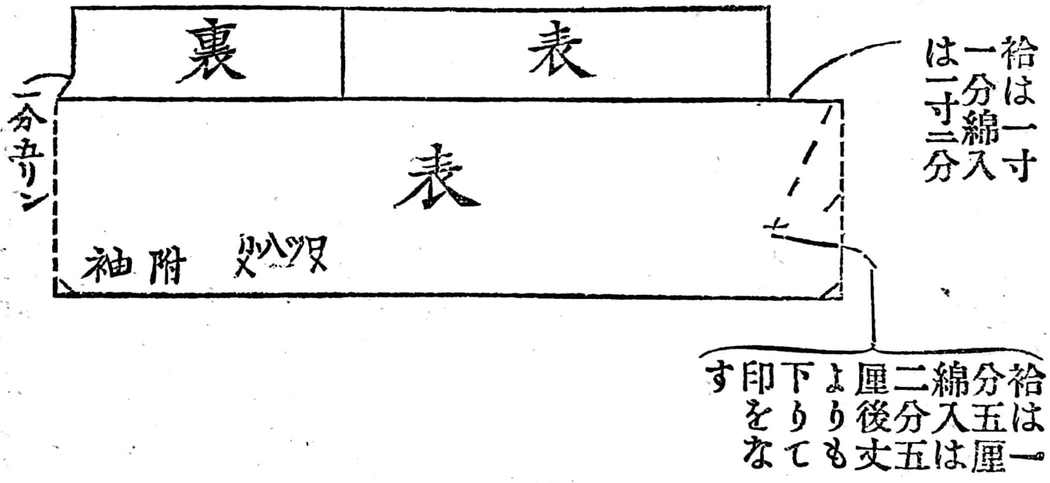
袖丈　袖
16寸×4=64寸
袖　後丈
64寸+40寸+41寸=145寸……用布

袷及び綿入羽織の篦附方

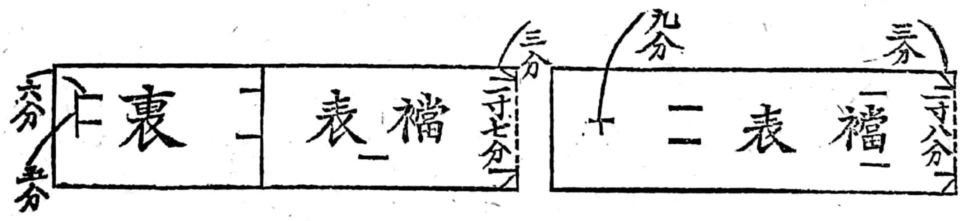
（1）

身丈に三分加へて折り返す

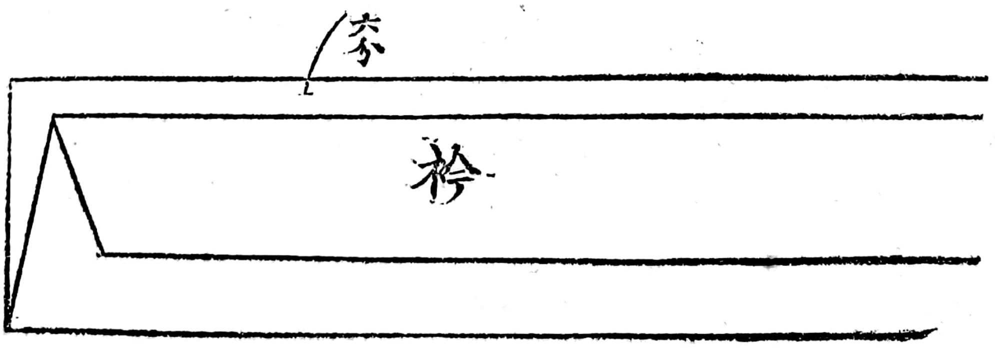
（2）



（3）

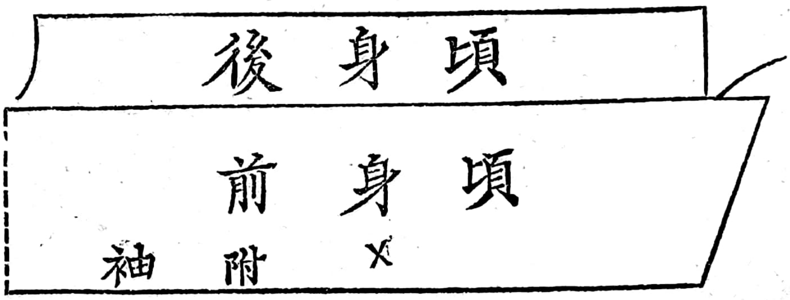


（4）



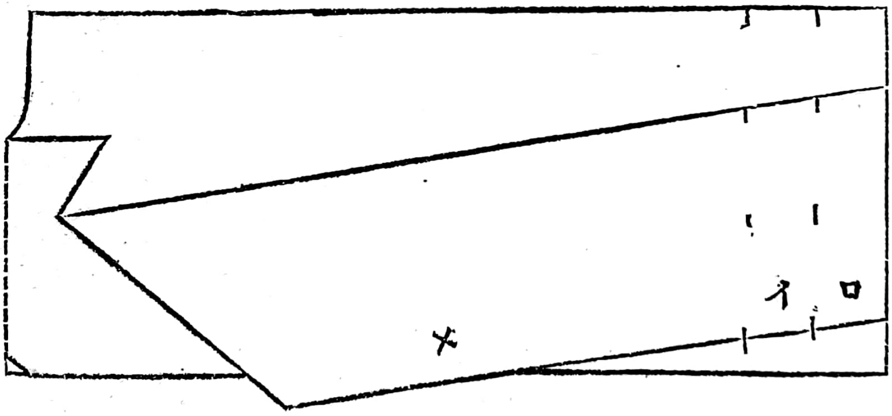
單衣羽織の篦附方

（1）



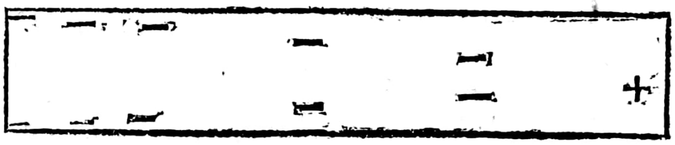
(1)は袖附

（2）



(2)は後前の身頃裾絎の篦
(ロ)の折込みは
(イ)よりも五りん淺くす

（3）



單衣羽織の襠にかぎり幅を襠の中央より定むるなり

(チ)衿幅の折り方は、男物なれば紋付にて、二寸縞物にて、一寸八分として、例へば二寸なれば、裏表にて四寸となるそれと五分縫代を加へて、四寸五分幅に折り篦附圖にある如く、縫込になる方を、六分引き折りを附け、輪の方より二分二厘位の所を、縫代として衿附をなす。衿心を裁つには鋏を用ゐず必ず庖丁にて正く衿幅より一分狹く裁ち切るべし。

但し女物子供衿の折り方も亦之に同じ寸法表の通り衿幅異なるのみなり。

一、羽織は本裁も小裁も縫ひ方に於ては、異なる點少くなければ、本裁縫ひ方より述ぶるべし。

本裁袷羽織男物縫ひ方

一、縫ひ方順序

(一)袖　(二)脊縫　(三)後襠　(四)前襠　(五)袵付　(六)衿附

(一)袖は、篦印の通りに、袖口切を裏袖にかけ、表袖と合せ、袖口下を四つ縫ひになすこと、長着袷の時同樣にし次に袖附の方三寸五分ばかり、裏表別に縫ひ夫より袂丸の所迄四つ縫になし袂丸みの襞を取り、表に返し躾をかけ、袖幅を計ること、長着に述べたる前の通り袖附の所表は幅一ぱいに縫ひ、裏は袖幅印の所迄縫ひ其餘りはひらき置くべし。

(二)脊縫は、先づ胴裏のはぎ合せをなして、折は上に返し、衿明の方より、四つ縫ひになす、若し胴裏切大幅の時は、脊縫はなきものなれば、其時は表の脊縫をして次に胴裏はぎをなし、表の脊の縫目を細かく一針抄ひ裏の脊を一針細かに抄ひ、引掛け結ぶ樣になし、一寸ばかりづゝ間を置きて、右の如くして脊縫を綴ぢ下の方は表裏の縫目を合せて、例の如く綴るなり、次に後幅、前幅、肩幅をも計るなり。

(三)後襠の附け方は、先づ表襠切に襠裏切をはぎ合せて、裏表を揃へ、中央を躾にて壓へ置きて、次に襠の後に附く方の、印の所の表裏の中より、針を出し、其針を後幅の

裾の山印の中央に貫き出し、右の中指に糸を卷き、糸を引きながら二三度貫き針をして据口一寸程は返し針になし、襠の上袖附の印迄四つ縫になし、表に返す故に襠は下より附け上るなり、左右共に其如くなしたれば、前の胴裏はぎをなす。

（四）前〇襠〇は、上より附け下り、裾口二寸ばかり返し針になし襠の裾山を五りん殘し置き、前身頃の裏を五厘引き上げ表にくるみ二三回針を貫き返し、前下りの山印を五りん裏より表に廻し、表の印の通りに、前下りを縫ひて、表に返し躾をかける（躾は平躾なり）

（五）袖〇附〇は、前に述べたる如く、袖を內側に袖山を肩山と合せ、待針を刺し、袖附印の所を身頃の方にて、表袖を狹み四つ留になし、前の長着袖付同樣に縫ふ、次に裏袖附は、身頃も袖も印通りに縫ひ折りは身頃に返す、袖の下袖幅迄縫ひ置きし所の殘は三角に折り袖附をなす。

（六）衿〇附〇は、始めに衿明より前の裾口迄よく幅と丈を揃へ、裁切より一分、奥の所を躾

糸にて程よく、糸のつらざる様に縫ひ、次に乳を附け(前身頃裁切より六分出して、衿を附けるなり、衿肩廻しの所は、極少々く衿の方ゆるき加減に、其他は平均にして、衿先より二寸位と乳付の所、一寸は返し針になす可し、此縫代は、二分二厘位になす事肝要なり。

衿付の始は、上前裾より縫始め、下前の裾にて終る縫ひ終りたれば、縫目に輕く折り鏝をかけ、衿先は一分五厘、奥を衿の表の方少々くゆるくなし、衿の附際より縫ひ始め、衿山の輪の方を一分縫ひ殘す可し、此の衿幅を縫ふ時に先迄縫ふ時は、角の返り惡しきものなり、衿心の幅は、衿幅よりも一分引きて裁庖刀にて正しく切り衿心の方少々くゆるき加減に入れて、衿先の所二針ばかり輕く綴て、衿絎けをなす衿絎は始め終り(二寸)衿肩廻しは特別に細かく絎ける可し、絎け終りなば、衿を表の方に折り附け、衿附け縫目より、三分奥を平躾をかけて置く可し。

但し女物子供物は袖の縫ひ方長着と同じく身頃は八つ口の寸

法の異なるのみにて他の所は同じなれば略す。

男物綿入羽織の縫ひ方

一、縫方順序

(一)袖　(二)脊縫　(三)後襠　(四)前襠　(五)袖附　(六)綿入　(七)衿附　(八)袖口絎け　(九)立綴

(一)袖縫は、長着綿入同様に表は、八つ口の方より縫ひ、始め袖口にて糸留をして、丸みの襞を取り表に返し、躾をかけ、裏袖は、袖口切を掛けて袖幅印より縫ひ始め袖口にて終る。

(二)脊縫は胴裏のはぎ合せをなし、脊筋の表より縫ひ始め、裏の衿明迄縫ふ胴裏が大幅物にて、脊縫のなき時は、表の脊縫を始めに縫ひ胴裏はぎをなすこと給に同じ、次に後幅肩幅前幅を計りて、前胴裏はぎをなす。

(三)後襠を附くるには、身頃を見て、右の襠は、表身頃の袖附印と、表襠の上の印に合せ、裏の袖附印と裏襠の上の印迄縫ひ、左は右の反對に附るなり、襠の裾口一寸ばか

りは、返し針になすべし。

(四)前下りは、裾山印を表に一分繰越し表の下り印の通りに、前幅の裁目より前巾印の所迄縫ひ折は裏に返し、折より二分あがりし所に、六分の間にかくし、躾をなして、前襠を附ること後襠に同じ。

(五)袖附は、袷と同様なれば、縫ひ方を略す。

(六)綿の入れ方は、長着の綿入同様に表の脊より綿を入れ、裾の所三寸ばかり身丈より長くなし置き裾の所は、少々綿を厚くなし、表の方より裏の方に綿を折り返し裏身頃を上に乘せ、前身頃に綿を入れ、表前身頃を下り折り返す、前身頃衿付になる所は少し、綿を薄くなし置くこと大切なり。

(七)衿附けの方法は、袷羽織同様なれば略す。

(八)袖口絎けは、長着綿入れと同様なれば略す。

(九)立綴は、脊縫は裾より一尺位、裏を見て綴ぢ、前襠は全部綴ぢ、後襠は裾より三寸位

綴をなす可し。

但し女物、子供物は袷同様に袖の縫ひ方長着同様身頃の縫ひ方は八つ口のあるのみなり各種の寸法表にある通りに箆附を注意して縫ひ方をなす可し。

一ツ身袖無羽織縫ひ方

一ツ身袖無羽織は、箆印通りに後身頃前身頃の胴はぎをなし躾をかけ前下りを縫ひ、かくし躾をかけ後襠、前襠を縫ひ四つ留を成し脇明を縫ふ。

脇明の縫ひ方は、襠の上裏表を身頃にて挾みて、四つ留をして、右は裏の前身頃より、左は表身頃より縫ひ、縫ひ初め縫ひ終りに四つ留をして表より平躾をかけ、脇明に綿をふくむなり、其方法は袖八つ口の綿ふくみに同じ、後身頃を出し、綿を入れて衿附をなす衿の附け方本裁羽織に同じ、(襠上は内側より縫ふ)

但し衿は衿附の方に心を縫ひ附け衿心を衿幅よりも三分せま

く中に折りて衿切の方一枚だけ絎け附るなり。

文物被布袷縫ひ方

一縫◎ひ◎方◎順◎序◎　(一)袖縫　(二)脊縫　(三)後襠　(四)前襠　(五)袖附　(六)立衿　(七)小衿

(一)より(五)袖附迄は、羽織と同様なり。

立衿下りと、小衿付印の間を裏より表裏揃へて縫ひ、表へ返し躾をかけ、立衿の裾を表は印通り、裏は立衿附の際を一分あげ、輪の所よりなぞへに小針に縫ひ裾より、立衿下り印迄、四つ縫をなし、引返す、立衿印通り中に折込みて絎るなり小衿は始めに小衿の形の通りに、心の布を裁切置き、表衿に心のたれちゞみのなき様に小衿の形のまわりを細かに、躾糸にて縫ひ附け、裏衿を表衿より二分幅を減じて心の裁切を二分の縫代にして、衿山を縫ひ襞を取り、裏の方に折を附け、六分置き位にかくし躾を入れて表に返しそれより裏身頃の方より小衿を附けるなり、其時は衿肩廻にて羽織よりも被布の方少しゆるき加減になし、衿の附始めと終り

は一寸位返し針になす可し、折りは衿の方に附け、裏に丁寧に絎るなり。

但し小衿の折りを身頃に附け身頃に絎け附けることもあれども衿の縫ひ込に鋏を入れざれば衿の返り惡しき故に後の爲にならざれば注意せらる可し。

子供物一つ身、三つ身、四つ身、は寸法の異なるのみにて縫ひ方本裁に同じ。

本裁女物綿入被布の縫ひ方

(一)袖縫　(二)脊縫　(三)後襠　(四)前襠　(五)袖附　迄は、綿入羽織に同じ立衿の裾を表は印通り裏は二分表立衿印よりあげて、袷の通りに縫ひ、裏よりかくし、躾をかけて表立衿上の印より、裏の方裾より三寸位迄縫ひ置き、綿を入れてなす、裾並に立衿の輪の所は、綿を少々厚き方に入るゝ可し、次に綿入れをして、直に立衿の裏側を立衿下りの印を合せて、裾三寸縫ひ置きたる所より、縫ひ立衿上を綿入長着の衿先き同様に、衿を身頃にて挾み、極めて淺く四つ留をして、立衿の裏の方に綿を

縫附け表に返し、小衿附と立衿附の間裏の方に綿をふくめ絎るなり、衿附の始め終りは斜に折りて羽織の如く躾をかけるなり。

(イ)小衿の造り方、及び小衿の附け方袷同様なり。

(ロ)立綴は、立衿と前襠、後襠(三寸)脊縫は裾より一尺綴ぢるなり。

(ハ)子供一つ身、三つ身、四つ身縫ひ方本裁に同じ。

但し小衿の襞は袖袂丸み襞の取り方に同じ

(ニ)一つ身被布脇明縫ひは袖無羽織に同じ

立衿の縫ひ方、本裁被布縫ひ方、同様寸法は寸法表の通りに篦付をなす可し。

男物單衣羽織の縫ひ方

一、縫ひ方順序　(一)袖縫　(二)脊縫　(三)前襠　(四)衿附　(五)後襠　(六)裾絎け　(七)袖附

(一)袖縫は、袖下を袋縫にして、次に袖口切を袖口明の印迄縫ひ附け、袖口下を袷袖口留と同様に留めて、袖口切の兩端は裁切の儘にして、袖口留をなし其糸にて袂迄

縫ひ糸留めをして切り、又更に、八つ口の方より縫ひ始め、袂丸みを縫ひて糸を切る斯くの如く殊更に八つ口より縫ふは無用の手數の樣に思はるれども袂丸を縫ふに、自然に格好よく出來るものなれば、角袖は袖口より縫ひてもよろしけれど丸袖は、是非此法により縫ふ可し。

(二)○脊縫は、普通單衣物同樣なり、然し羽織は特別に、小針に丁寧に、二度縫ひをなす可し夫より後幅前幅を計るなり。

(三)○前襠は、襠の上を三つ折りにして、絎け置き、前身頃を見て、上より附け下り折を身頃に返し、襠の縫込を、上より下迄二つ折になし、前身頃の縫込へ絎け附けて、前身頃の裾を印通りに、三つ折にして、衿附の所迄躾にて壓へ置き、乳切を附る乳の附方は返し針にて留め置く可し。

(四)○衿附は、袷羽織の時に折りたる通り、衿布をまた竪に二つ折にして、衿山衿肩乳附裾の所迄にて二ケ所位裏表に合印を附け、上前の裾より前身頃を衿にてくるみ

衿附表を見て、縫ふ裾の折込の所と乳附の所は返し針になす、衿肩明の下迄縫ひ上りなば、衿肩明の所の向側、即ち衿の裏になる方をはなして、衿附をなし、下前の衿肩明の下の所より、又元の如く、前身頃を衿にてくるみ、裾迄附け下り、衿先を縫ひ、衿先の縫込を衿附の縫目へ返し針にて綴ぢ附け、衿心を入れて、五六寸毎に輕く綴ぢ附け衿肩明より引き返し、衿肩明の所を極く細き針に絎け附け衿に躾をかけるなり。

(五)後襠を上より附け下り襠の縫ひ込を二つ折となし、後身頃の縫ひ込みへ絎け附けること、前身頃に同じ。

(六)裾絎けは、印通り三つ折になし、躾にて壓へて、表に細かく糸を出し三分位に絎けるべし。

(七)袖附は、袷羽織に同じ、袖の縫込を身頃に綴る可からず。

注意

一篦附は圖に示せる如く正しくなす可し。

一襠の篦附も、袷羽織と異なる點あれは、圖の通りになすべし。

一單衣羽織の衿附け方は、袋附(鐵砲附と云ふ)をなすべし。

第十一章　帶の縫ひ方及び仕上げ

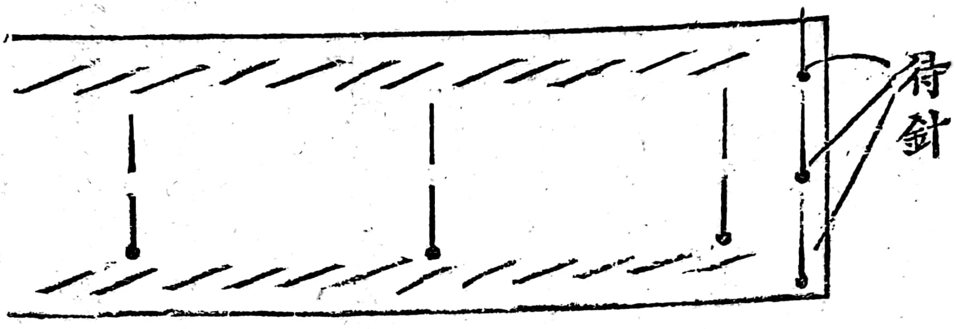
女帶縫ひ方に就て注意

(イ)地伸を最もよくなす可し、地伸に述べたる通りに、第一法にて出來ざるものは第二法を施して布の伸縮を直すこと肝要なり。

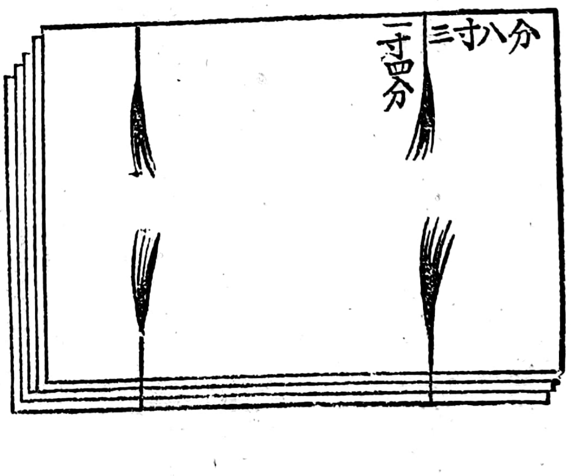
(ロ)待ち針は、帶幅の中央に二三尺毎に刺し、兩端と織緣の三分を、圖の如く綴ぢをなすべし。

(ハ)幅印は、始め三寸置き位に附け、又其間を通し篦をして縫ふ、此時の篦は細くなす

女帶綴躾かけ方



女帶の出來上り



べし。

(ニ)針の扱ひ方は、丸帯は全體返し針、片側帯にても、貴重なるものは、總て返し針となすべし、但し普通の品は、端より一尺位返し針をして、後は二分三針位に縫ふものなり。

(ホ)兩端縫ひ方は、圖の如く角より壹寸位手前より朱珍丸帯なれば三厘位斜に縫ふべし、其他の帯も二厘位先づ篦印外を縫ふ様にせざれば、角の所表に返し、決して四角にならざるものなれば、實地に附て研究せられたし。

一心の入れ加減は帯幅より丸帯にて二厘五毛片側にて五厘減ず可し、心の入れ方に最も注意せざれば、縫ひ方何程よくとも、完全なるもの出來ざれば、縫ひ方に述ぶる如く、丁寧にすることを忘る可らす、二枚心の時は心の切を織緣より一寸位奥を綴ぢ置くべし、心は必ず裁庖刀にて切ることを練習すべし。

丸帯の縫ひ方

繻珍丸帶は布の伸縮を地伸にて述べたる通りにして、地質を整へ表を中にして竪に二つ折になし、兩端織出しの所をよく曲らざる樣に揃へて待ち針を二三尺毎に刺し兩端と緣と三方躾にて綴ぢをして、待針を取り帶幅印を三寸毎に附け是を通し箆をなし、片端より返し針に縫ひ、帶丈中央を一尺位あげ又片端迄返針をして縫ひ糸を切り兩端を平になし、又通し箆をなして、返し針にて縫ふ帶幅輪の方一分程縫ひ殘し糸を留むること肝要なり。

縫ひ折りの附け方は兩端の縫目に折りを附は、帶のかけの方を右に持ち折りを手前に附け是に鏝をかけ折りを正しく定めるなり、帶の縫目は決してきせをかける可からず。

心の入れ方は、帶幅より二厘五毛減じて兩緣と兩端を裁庖刀にて、裁揃へ帶切を下に置き、右の端より帶切と心の均合を取り、帶切のゆるまぬ樣に注意して、三尺ばかりづゝ、帶幅の中央に待針を刺し順次にきめて片端に殘りし心を帶切に合

せて、裁切り心を帯の縫込に、三分位の針目に綴ぢ附けて、待ち針を取り心の兩側に絹綿を引き、兩端より中央に縫ひ殘しある所迄巻き、片方へ手を入れ、中より引き出し、又片方を引き出す可し、斯くせざる時は心の皺になる事あり、次に縫ひ殘したる所の縫ひ込に心を綴ぢて細かく絎けるなり。

片側帯の縫ひ方

普通に片側帯は、繻珍と博多の如き、地質の硬きものと、縮緬羽二重の如き柔かなるものと合す時は先づ帯の片端を織出しの方を、布目を正しく裁揃へ、硬き地質の方を下に置き、柔かき地質の方を上に乘せ、片端を揃へ、其中央兩縁に待針を刺し、三尺位の所の中央に、一針待ち針を刺し、其所を手にて持ち、上より下げて、見て加減を取り、其よろしき加減を以て帯全體に待針を刺し然る後一方の縁を綴ぢて通し、箆をして返針にて縫ひ、縮緬なれば、先きに縫ひし方を向側に置き、其縫目め所に厚き物尺位のものを一本置き、少し縮緬の方張り加減に、片縁の躾けをか

けて後に帶幅を定め一尺ばかり、殘して縫ひ次に兩端を通箆をなし、返し針にて縫ひ硬き地質の方に折を附け兩縁に同じく折りを附て心の幅を定め裁切り後に帶切の上に載せて、帶切と心の均合を取り、待ち針を刺し片方を躾糸にて綴ぢ待ち針を去り、心の中側に絹綿を引き、殘りの片縁を躾にて綴ぢ、心に絹綿を引きて、兩端より巻き縫ひ殘したる所より引返し縫ひ殘したる所の縫込に心を綴ぢ附け細かに絎るなり、出來上りなば兩端にふくさ躾をかけるなり。

仕揚げの法、出來上りし帶をよく引き合せて、女帶は八つ折にして、圖の如く四箇所に綴ぢをして壓をかけて後に使用すべし。

注意

一帶の縫方は粗末にすれば使用し難きものなり前に述べたる通りに必ず心を入れて縫はれなば如何なる品も自然に出來得るものなり

一兩側地合の堅き時は兩縁共に綴ぢ置きて片縁より縫ひ始めてよろし

一心に絹綿を始めに引きて置く時は綴糸に絹綿のからみ附て綴ぢる時に困難なる故に綴ぢて後に絹綿を引くこと肝要なり

第十二章　洗濯及び張り物の方法

洗濯の方法

洗濯の方法は種々ありて、殊に薬品を用ひてなす、方法數多あれども、茲には普通の洗濯法にて、最も容易く行ひ得る方法を述ぶ可し。

○洗濯は、布地を丁寧に取扱ふことゝよく垢を去ることを肝要とす、先つ盥に水を入れ是を向日水として洗濯すべき布を浸し、一時間ばかり經て後、水面に垢のきらく浮き上る位の時に、兩手掌に布を平に載せ布と布とにて靜かに、さらくとこするべし決して心なく、揉み洗ふ可からず、氣短に垢を落さんとして、布を揉

む時は地質を損ずるのみにて垢は落ぬものなり、向日水の造り難き時は溫湯を代用するもよし、殘りなく垢を落して他の器に引揚げ、次に淸水にて、幾度も淸潔になる迄、洗滌くべし洗ひ揚げても、決してしぼるべからず。

浴衣地の洗濯なりとも、決して搾る可からず。

張り物の方法

（イ）板張の仕方　「海蘿」をよく沸騰する迄煮て布目の細かなる袋に入れ、三回ばかり氣長に漉し、糊粕のなくなりし時に、洗濯して乾きたる布の裏より刷毛にて糊を引き、是を小口より巻きて板にも糊を引き其巻きたる布を解きながら、板に布の表を附けて、刷毛にて、布目の曲がらぬ様に、靜に張り附くるものなり、又張板は、最も大切にすべきものなれば、使用後は丁寧に拭ひ日光のあたらぬ所に置き大切に始末をなす可し。

（ロ）簇張　洗濯をなしたる布を反物の如く、重ねはぎをなし兩端に他の布一二寸輪

にして縫ひ附けて是に一寸角丈は、布幅より二寸ばかり長き棒をさし、棒の兩端に紐を附け、是を(棒か柱)に確と結び附け兩方に反物を引はり、布の裏より刷毛にて、水を引き、次に表布よりしんしを一寸五分位の間をあけて、布目を正しくさして、布の裏より糊をむらにならざる樣に引て乾かし、殆んど乾きし時、兩緣に少々刷毛にて、水を引きしんしの目の跡をけすものなり。

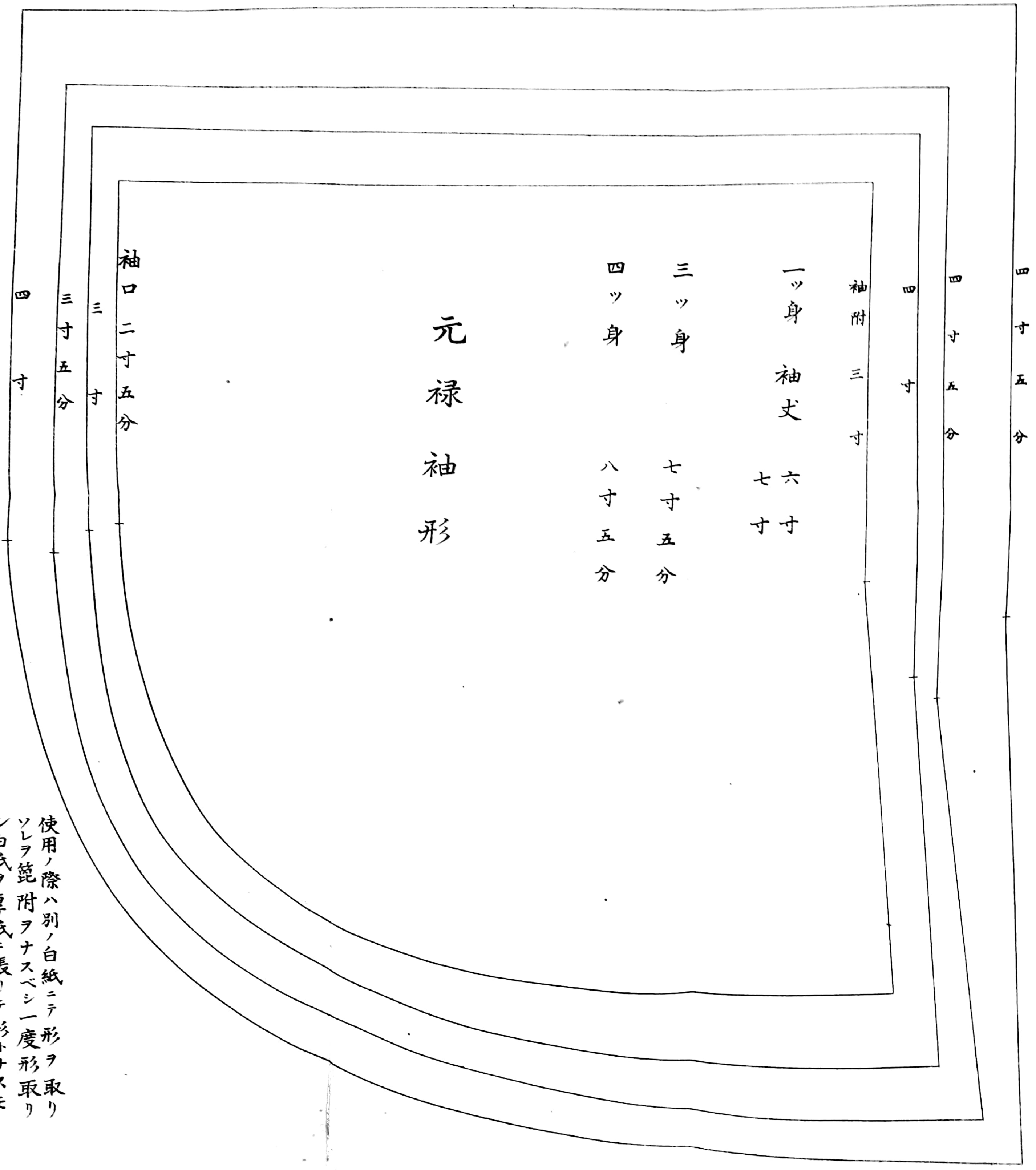
(ハ)つ゜る゜し゜張゜　洗濯をしたる布を袖は、袖身頃は片身頃づゝ輪にして縫ひ、是に糊を附け竿に貫き、下の輪の方に、眞直なる棒をさし、是に重りを下け引張りて乾かしたるものに霧をふき幅と丈を平になし、棒に卷き二三時間經て後平の所に置き乾かす可し。

つ゜る゜し゜張は、木綿物に多く用ふ、殊にちゞみ絹地にては、明石縮等此法によりてなすものなり。

(ニ)糊゜の゜分゜量゜　ふのり三匁目水一升の割合絹物二反張り得らる可し、木綿なれば一

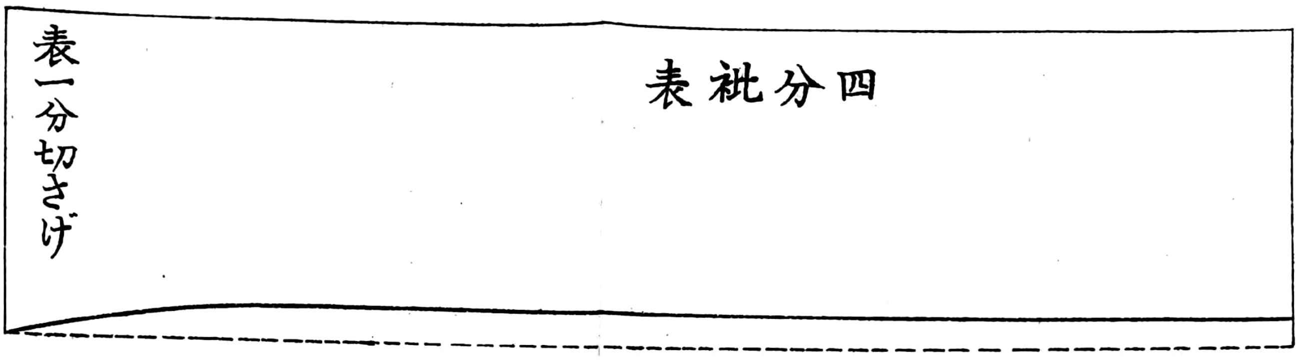
反半とす。
木綿物は、ひめ糊にてよろし、又白地の物は主にひめのりくずなど最もよろし、木綿縮はふのりにてなす可し。
(ホ) 張物に使用する刷毛の寸法　幅五寸毛の厚さ一寸(曲尺)
(ヘ) 張物仕揚の方法　縫目を解き裏より「アイロン」火熨斗をかけるなり。
又糊の強きものは、皮の巻棒に、輕く巻き廻しながら臺の上にてたゝく可し。
木綿物は、たゝき臺の上にて、槌にて布地全體をよくたゝく可し。

裁縫之極意 終

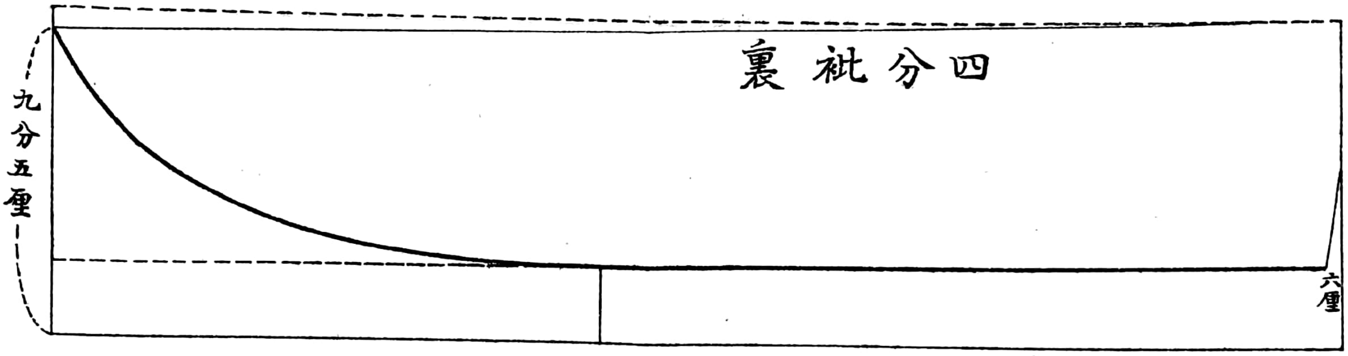


使用ノ際ハ別ノ白紙ニテ形ヲ取リソレヲ篦附ヲナスベシ一度形取リシ白紙ヲ厚紙ニ張リテ形トナスモ良シ

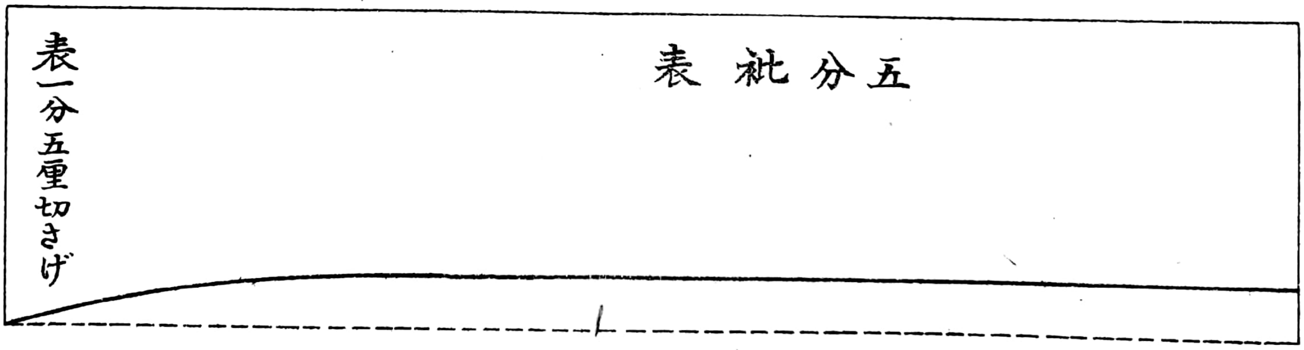
第六



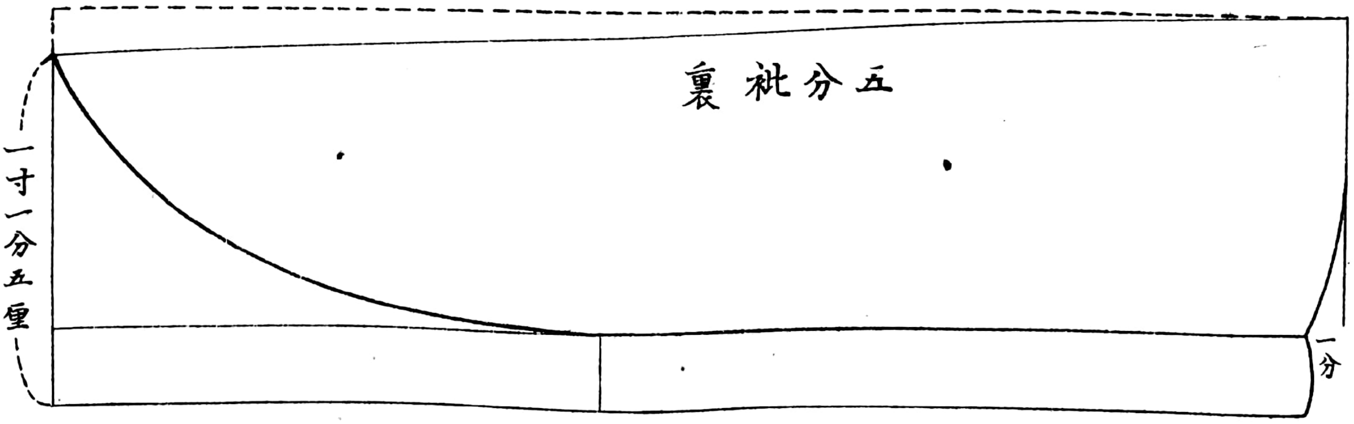
仝



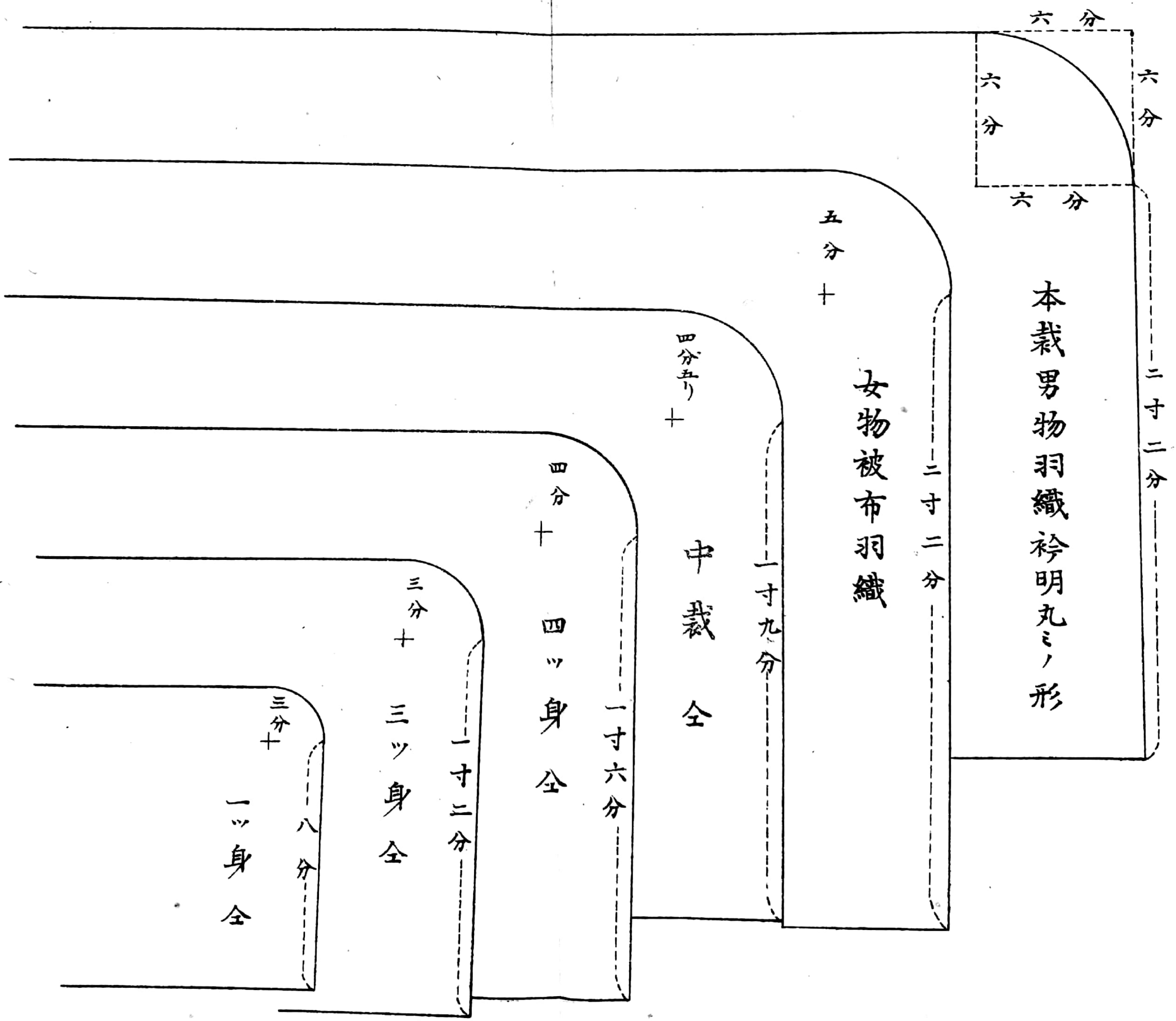
第七



仝



此ノ形ハ實物寸法ナレハ使用ノ際
別ノ紙ニ寫シ取リ形トセラルベシ



おくがき

武田太郎吉先生の裁縫の道に精しくその技術の世にすぐれておはすることは下田歌子先生故乃木大將の推擧によりて特に學習院女學部の裁縫科を掌り給へるによりてもこれをおしはかり得べし。先生の裁縫術には一家獨特の妙訣ありて何人も遠く及びがたしとするところなり。されども先生謙讓にして名聞を好み給はず、人の乞ひて其の祕訣を公開せられんことを勸むるものあれど、たえてうべなひ給ふことなかりき。今や先生よはひすでに高くしてまた嗣なし。先生萬年の後その奧儀を世に傳ふるものなくばまことに惜しむべき限にあらずや。われら後學のともがら、いたくこれを憂へ、切に先生に乞ひてその口述をうけ、凡そ裁縫に關する百般の事項に亘りて規範とすべき方法を網羅しまた先生一家の秘訣奧儀をもらさすとりをさめ以て此書を成せり。われらもとより文辭にならはず、かゝる業を企てしはわれながら鳴呼の限なれど、これによりて世にならびなき先生の技術の一端をだに百代に傳ふるを得ば、その幸豈にわがともがらのみならむや。志す所を記して跋となす。

大正二年十二月

學習院助教授　井原しげ子
學習院助教授　稻垣美津子
武田裁縫講習所講師　河北つや子

長野縣小縣郡

大正二年十二月二十五日印刷
大正三年一月一日發行
大正三年三月七日再版發行
大正三年三月二十日三版發行
大正三年五月二十五日四版發行
大正三年六月十日五版發行
大正三年十一月十日六版發行
大正四年七月一日七版發行

不許複製

裁縫之極意

定價 並製壹圓八拾錢 特製貳圓參拾錢

著作者 武田太郎吉

發行者 東京市神田區西小川町二丁目三番地 竹内伊四郎

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 山下注連雄

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場

發行所 東京市神田區西小川町二ノ三 明治出版社 電話本局 五四四〇番 三七八〇番 振替東京 三九三四四番

大正九
八年度

長野縣下高井郡
信陽村大庭三一
二五二
井上とよ子